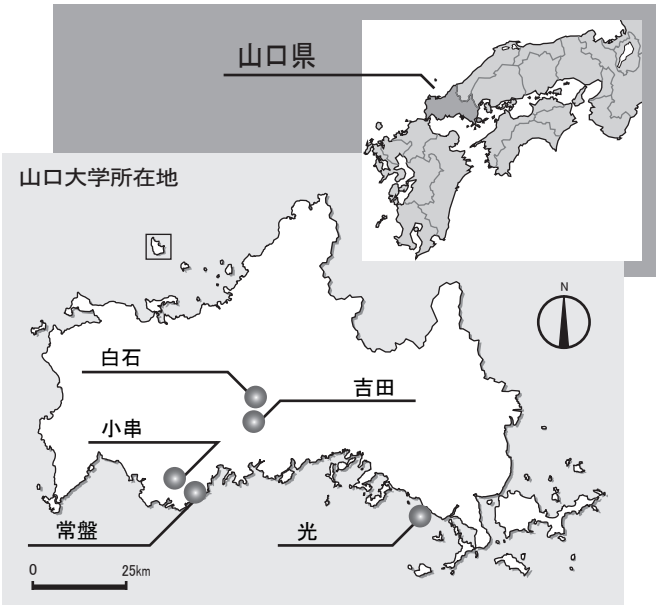
山口大学埋蔵文化財資料館年報
－平成25年度－

2018

山口大学埋蔵文化財資料館

山口大学埋蔵文化財資料館年報

平成25年度　山口大学埋蔵文化財資料館活動報告
平成25年度　山口大学構内遺跡発掘調査概報



2018

山口大学埋蔵文化財資料館

序

山口大学埋蔵文化財資料館は、吉田構内をはじめ小串・常盤・白石・光地区に所在する山口大学構内遺跡における埋蔵文化財の発掘・保護を基幹業務としています。同時に、学術資料の管理と発信を主要業務とする大学情報機構所属の一組織として、これら埋蔵文化財の調査成果や学術的価値を広く社会に告知するため、資料展示や年報および広報誌発行、社会教育活動など、情報発信活動にも積極的に取り組んでおります。

さて、平成25(2013)年度は、埋蔵文化財保護業務に関しては、本発掘調査2件、予備発掘調査1件、立会調査14件を吉田構内、白石構内、光構内で実施しました。特に吉田構内で実施した獣医学国際教育研究センター棟新営工事に伴う本発掘調査では、縄文～弥生時代の自然河川が検出され、第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査では、弥生～古墳時代の自然河川・溝・落ち込みなどが検出されたほか、竹製網代編み製品が出土するなど、山口県の考古学研究における基礎資料を得る事になりました。

その他の取り組みとして、昨年度からの継続事業として、「山口県大学ML(ミュージアム・ライブラリー）連携事業」を実施し、昨年度に引き続き山口大学所蔵学術資産継承検討委員会の事業成果展「宝山の一角」を当館の共催で開催しました。これらの継続的な取り組みによって、本学の新たな教育研究空間が創出することを期待しています。

本書には、当館が同年に実施した構内遺跡の調査成果をはじめ、収蔵資料の展示活動や社会連携活動、館員の研究活動を収録しております。本書が山口大学および学外研究機関、地域社会において幅広く活用されることを願います。

当館は、埋蔵文化財保護体制をはじめ、出土品や調査記録の整理・保管場所の不足が年々深刻化するなど多くの課題を抱えていますが、学内ばかりでなく地域に開かれた学術研究・教育の場として、活用していただくよう、全力を尽くして取り組む所存です。これまで当館の調査・研究活動にご支援、ご協力を頂いた関係機関、関係各位に心から厚く御礼申し上げますとともに、今後とも変わらぬご理解、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

平成30年3月

山口大学埋蔵文化財資料館長

根ヶ山　徹

例言

１．本書は、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」と呼称）が平成25年度に実施した、山口大学構内の遺跡発掘調査成果報告と、同年度に資料館が実施した社会教育等の活動報告を記したものである。

２．構内遺跡発掘調査に関しては、現地での調査は資料館員である田畑直彦（大学情報機構埋蔵文化財資料館助教）・横山成己（大学情報機構埋蔵文化財資料館助教）・川島尚宗（大学情報機構埋蔵文化財資料館助教※平成25年11月１日より）・石丸恵利子（事務局情報環境部学術情報課教務補佐員※平成25年４月１日より12月１日まで）が担当した。
また、現地での調査に際しては、有限会社久富工務店に協力を依頼した。

３．出土資料の整理は、平成26年度から平成28年度にかけて、田畑・横山・川島・乃美友香（事務局情報環境部学術情報課技術補佐員）・山田圭子（事務局情報環境部学術情報課教務補佐員※平成27年４月１日より平成30年３月31日まで）が担当した。

４．発掘調査における現地での実測は田畑・横山・川島・石丸が、写真撮影は田畑・横山が行った。出土遺物に関しては、実測・写真撮影を田畑・横山・川島・山田が行った。製図・整図は田畑・横山・川島・山田が行った。

５．発掘調査に伴う事務は、事務局情報環境部学術情報課総務係が統括した。

６．発掘調査の諸記録類と出土資料は資料館で適正に保管している。

７．本文の執筆分担は目次に記した。

８．本書の編集は田畑・横山・川島が行った。

凡例

１．山口大学の吉田・白石・小串・常盤・光構内は、いずれもが文化財保護法（法律第214号）で示される「周知の埋蔵文化財包蔵地」内に位置する。各構内の位置する遺跡名は以下の通りである。

吉田構内～吉田遺跡　　白石構内～白石遺跡　　小串構内～山口大学医学部構内遺跡

常盤構内～山口大学工学部構内遺跡　　光構内～御手洗遺跡・月待山遺跡

２．吉田構内における調査区および層位・遺構の位置は、 日本測地系に基づいた国土座標を基準として北から南へ1～24、西から東へA～Zの番号を付して50m方眼に区画した、構内地区割のA－24区南西隅を起点（構内座標x＝0，y＝0）とする構内座標値で表示している。なお、平面直角座標系第Ⅲ系における座標値（X，Y）と構内座標値（x，y）とは下記の計算式で変換される。

x＝X＋206，000

y＝Y＋64，750

３．平成25年度に実施した予備発掘調査に関しては、以下の略号により資料整理を行っている。

獣医学国際教育研究センター棟新営工事に伴う本発掘調査……YD2013-1

第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査……YD2013-2

教育学部附属山口中学校武道場新営工事に伴う予備発掘調査 ……SI2013-1

教育学部附属山口中学校武道場新営に伴う外構及び渡り廊下取設工事に伴う立会調査

……SI2013-2

教育学部附属光小学校仮設校舎設置工事に伴う立会調査……MTR2013-1

教育学部附属光小学校校舎改修その他工事に伴う立会調査……MTR2013-2

４．各遺構は下記の記号で表記することがある。

竪穴住居……SB	掘立柱建物……SH	土壙……SK
溝……SD	柱穴・ピット……Pit・SP	落ち込み……SX

５．本書で使用した方位は、吉田構内では国土座標を基準とした真北、他の構内では磁北を示す。

６．標高数値は海抜標高を示す。

７．土層および土器の色調記号は、農林省農林水産技術会事務局監修『新版標準土色帖』（1976）に準拠した。

８．遺物の実測図は、下記のように分類した。

断面黒塗り……須恵器、陶器、磁器

断面白抜き……縄文土器、弥生土器、土師器、土師質土器、瓦質土器、石器、木器、金属器

本文目次

第1章　平成25年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告……（横山）…… 1
第1節　資料館における展示・情報公開活動
1　第35回企画展『遺跡調査に見る山口大学の原風景2 地方豪族と官衙の出現』を開催　……（横山）…… 2
2　山口県大学ML連携展『博物館が繋ぐもの～遺跡を未来へ～』を開催 ……（横山）…… 3
3　第2回山口大学学術資産継承事業成果展『宝山の一角』を共催にて開催…（横山）…… 4
5　平成25年度刊行物……（横山）…… 5
第2節　資料館における社会教育活動
1　第13回公開授業「古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう8－」を開催……（田畑）…… 6

第2章　平成25年度山口大学構内遺跡の調査
第1節　平成25年度に実施した遺跡調査の概要……（横山）…… 9
第2節　吉田構内（吉田遺跡）の調査
1　獣医学国際教育研究センター棟新営工事に伴う本発掘調査……（横山）……13
2　第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査……（横山）……27
3　第1武道場耐震改修その他工事に伴う立会調査……（横山）……67
4　農場本館研究・実験室改修工事に伴う立会調査……（横山）……68
5　農学部本館他電気接地改修工事に伴う立会調査……（横山）……69
6　椹野寮新営工事に伴う立会調査……（横山）……70
7　陸上競技場外灯設置工事に伴う立会調査……（横山）……72
8　自転車置き場設置工事に伴う立会調査……（横山）……73
9　基幹・環境整備（太陽光発電設備）工事に伴う立会調査……（横山）……74
10　交通標識設置工事に伴う立会調査……（横山）……75
11　学術情報資産の集約管理システム設備工事に伴う立会調査……（田畑）……76
第3節　白石構内（白石遺跡）の調査
1　教育学部附属山口中学校武道場新営工事に伴う予備発掘調査……（田畑）……77
2　教育学部附属山口中学校武道場新営に伴う外構及び渡り廊下取設工事に伴う立会調査…（田畑・川島）…87
第4節　光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査
1　教育学部附属光小学校仮設校舎設置工事に伴う立会調査……（田畑）…… 104
2　教育学部附属光小学校校舎改修その他工事に伴う立会調査・教育学部附属光小学校校舎機械設備改修その他工事に伴う立会調査・教育学部附属光小学校校舎電気設備改修その他工事に伴う立会調査……（田畑）…… 108
付節1　平成25年度　山口大学構内遺跡調査要項…… 111
付節2　山口大学構内の主な調査…… 114

付篇1　吉田遺跡出土の網代編み製品と植物遺体の樹種同定……（横山・吉田生物研究所）…… 138
付篇2　吉田遺跡出土の「千字文」音義木簡略報……（横山）…… 143
付篇3　山口県宇部市月崎遺跡出土資料について……（川島）…… 150

挿図目次

第1章第1節　平成25年度に実施した遺跡調査の概要

図1 山口大学吉田・白石構内位置図 ……10
図2 小串・常盤構内位置図 ……12
図3 光構内位置図 ……12

第1章第2節　吉田構内（吉田遺跡）の調査

図4 調査区位置図 ……13
図5 調査区平面図 ……15
図6 調査区南・西・北壁土層断面図 ……16
図7 ＮＲ１アゼ土層断面図 ……17
図8 ＳＸ１平面図・断面図 ……18
図9 出土土器実測図 ……22
図10 既往調査との位置関係……25
図11 調査区位置図……27
図12 調査区平面図／断面図……31・32
図13 北西部遺構群平面図……34
図14 北西部遺構群（ＮＲ１・ＳＤ３・ＳＸ４）
断面図……35
図15 遺構断面図……39
図16 北西部遺構群平面図……42
図17 南東部遺構群（ＳＤ１・２）土層断面図
……43
図18 ＳＸ１・２平面図・断面図……44
図19 ＳＸ３平面図・断面図……45
図20 出土遺物（土器）実測図①……53
図21 出土遺物（土器）実測図②……54
図22 出土遺物（土器）実測図③……55
図23 出土遺物（石器）実測図①……55
図24 出土遺物（石器）実測図②……56
図25 出土遺物（石器）実測図③……57
図26 第２体育館新営に伴う発掘調査区
平面図・断面図……65・66
図27 調査区位置図……67
図28 土層断面柱状図……67
図29 調査区位置図……68
図30 土層断面柱状図……68
図31 調査区位置図……69
図32 土層断面柱状図……69
図33 調査区位置図……70
図34 Ａ・Ｂ地点土層断面柱状図……70
図35 Ｃ～Ｆ地点土層断面柱状図……71
図36 土層断面柱状図……72
図37 調査区位置図……72
図38 調査区位置図……73
図39 土層断面柱状図……73
図40 調査区位置図……74
図41 Ａ・Ｂ地点土層断面柱状図……74
図42 調査区位置図……75
図43 Ａ～Ｆ地区土層断面柱状図……75
図44 調査区位置図……76
図45 調査区位置図……77
図46 調査区平面図……79
図47 調査区土層断面図1 ……80
図48 調査区土層断面図2 ……81
図49 出土遺物実測図（土器）……84
図50 出土遺物実測図（木製品）……84
図51 調査区位置図……87
図52 調査区詳細図……88
図53 調査区土層断面図……90
図54 11～13地点出土遺物実測図（土器）……95
図55 15～19地点出土遺物実測図（土器）……96

第2章第4節　光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査

図56 調査区位置図 ……104
図57 調査区詳細図 ……105
図58 出土遺物実測図(土器) ……107
図58 調査区位置図 ……108
図60 調査区詳細図 ……109

第1章付節2　山口大学の主な調査

図61 山口大学吉田構内地区割
および主な調査区位置図……131・132
図62 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）
調査区位置図……133
図63 山口大学白石構内（中学校）
調査区位置図……134
図64 山口大学小串構内調査区位置図 ……135

図65 山口大学常盤構内調査区位置図 ……136
図66 山口大学光構内調査区位置図 ……137
付篇１ 吉田遺跡出土の網代編み製品と植物遺体の樹種同定
図67 ＳＸ３における鑑定資料の位置 ……138
付篇２ 吉田遺跡出土「千字文」音義木簡略報
図68 調査区位置図 ……145
図69 動物医療センターリニアック棟新営その他工事に伴う立会調査区平面図・断面図 …146
付篇３ 月崎遺跡出土資料について
図70 月崎遺跡周辺縄文時代遺跡分布図 ……150
図71 月崎遺跡トレンチ配置図 ……152
図72 月崎遺跡出土遺物実測図（１） ……154
図73 月崎遺跡出土遺物実測図（２） ……155
図74 山口県縄文時代遺跡分布図 ……162

写真目次

第1章第1節 資料館における展示・情報公開活動
写真1 第35回企画展ポスター ……2
写真2 展示見学の模様 ……2
写真3 ミュージアムトークの模様 ……3
写真4 ワークショップの模様 ……3
写真5 前期展ミュージアムトークの模様 ……4
写真6 後期展ミュージアムトークの模様 ……4
写真7 平成25年度埋蔵文化財資料館刊行物 …5
第1章第2節 資料館における社会教育活動
写真8 苗の説明 ……7
写真9 田植え ……7
写真10 稲と雑草の状況 ……7
写真11 除草 ……7
写真12 土器づくり ……7
写真13 泥窯づくり1 ……7
写真14 泥窯づくり2 ……7
写真15 焼成した土器 ……7
写真16 水田の様子 ……8
写真17 収穫 ……8
写真18 参加者の皆さん ……8
写真19 館長挨拶 ……8
写真20 火起こし ……8
写真21 脱穀・籾すり ……8
写真22 箸こぎ ……8
写真23 食事風景 ……8
第1章第1節 平成25年度に実施した遺跡調査の概要
写真24 吉田構内航空写真……10
写真25 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）航空写真……10
写真26 白石構内（教育学部附属山口中学校）航空写真……10
写真27 小串構内航空写真……12
写真28 常盤構内航空写真……12
写真29 光構内航空写真……12
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査
写真30 調査地遠景……13
写真31 調査前近景……13
写真32 遺構面検出状況……19
写真33 完掘状況……19
写真34 重機掘削風景……20
写真35 作業風景……20
写真36 遺構面検出状況……20
写真37 ＮＲ１遺物出土状況……20
写真38 ＮＲ１遺物出土状況……20
写真39 ＳＸ１半裁状況……20
写真40 調査区南壁東側土層断面……21
写真41 調査区南壁西側土層断面……21
写真42 調査区西壁南側土層断面……21
写真43 調査区西壁北側土層断面……21
写真44 調査区北壁西側土層断面……21
写真45 調査区北壁東側土層断面……21
写真46 NR1北東-南西アゼ南東面土層断面 …21
写真47 NR1南東-北西アゼ北東面土層断面 …21
写真48 出土遺物（土器）①……22
写真49 出土遺物（土器）②……23
写真50 調査地遠景……27
写真51 調査前近景……27
写真52 遺物包含層上面検出状況……29

写真53 遺構検出状況……29
写真54 ＳＤ１・２検出状況……29
写真55 ＮＲ１・ＳＤ４検出状況……29
写真56 北西部遺構群 北-南・東-西アゼ土層断面……36
写真57 北-南アゼ南部東面土層断面 ……36
写真58 東-西アゼ東部北面土層断面 ……36
写真59 北西-南東アゼ南西面土層断面 ……36
写真60 北西-南東アゼＳＸ４土層断面 ……36
写真61 北西部遺構群完掘状況……37
写真62 ＮＲ１右岸完掘状況……37
写真63 ＮＲ１河底遺物出土状況……37
写真64 ＮＲ１右岸杭・矢板密集地点……37
写真65 ＮＲ１右岸杭・矢板密集地点……37
写真66 ＳＸ４完掘状況……38
写真67 ＳＸ４完掘状況……38
写真68 ＳＸ４底面植物遺存体検出状況 …38
写真69 ＳＫ１断面 ……38
写真70 ＳＫ２半裁状況……38
写真71 ＳＤ２ａ遺物出土状況……46
写真72 ＳＤ２土層断面……46
写真73 ＳＸ１……46
写真74 ＳＸ２……46
写真75 ＳＤ２完掘状況……46
写真76 ＳＸ３掘削状況……47
写真77 ＳＸ３竹皮製網代編み製品検出状況…47
写真78 ＳＸ３網代編み製品・枝葉層検出状況……47
写真79 ＳＸ３網代編み製品・枝葉層検出状況……47
写真80 ＳＸ３柵状施設・イネ科植物層検出状況……47
写真81 ＳＸ３柵状施設・網代編み製品検出状況……48
写真82 網代編み製品左側近接……48
写真83 網代編み製品右側近接……48
写真84 ＳＸ３柵状施設……48
写真85 柵状施設裏側枝葉層……48
写真86 遺構完掘状況……49
写真87 調査区南東部……49
写真88 調査区北東壁（ＳＤ１・ＳＤ２ａ）土層断面……50
写真89 調査区北東壁（ＳＤ２ｂ）土層断面……50
写真90 調査区北東壁（ＮＲ１）土層断面……50
写真91 調査区北東壁（ＳＤ４）土層断面……50
写真92 調査区南西壁（ＳＤ１）土層断面……50
写真93 調査区南西壁（ＳＤ２）土層断面……50
写真94 調査区南西壁（ＳＤ３）土層断面……50
写真95 調査区南西壁（ＮＲ１）土層断面……50
写真96 出土遺物（土器）①……57
写真97 出土遺物（土器）②……58
写真98 出土遺物（土器）③……59
写真99 出土遺物（土器）④……60
写真100 出土遺物（石器）① ……60
写真101 出土遺物（石器）② ……61
写真102 第２体育館新営に伴う発掘調査区全景 ……65・66
写真103 調査区東壁土層断面 ……67
写真104 調査区東壁土層断面 ……68
写真105 調査区南端部 ……69
写真106 Ａ地点北東壁土層断面 ……70
写真107 Ｂ地点南東壁土層断面 ……70
写真108 Ｃ地点南西壁土層断面 ……71
写真109 Ｄ地点北東壁土層断面 ……71
写真110 Ｅ地点北東壁土層断面 ……71
写真111 Ｆ地点南壁土層断面 ……71
写真112 工事掘削風景 ……72
写真113 調査区西壁土層断面 ……73
写真114 Ａ地点掘削状況 ……74
写真115 Ｂ地点掘削状況 ……74
写真116 Ｂ地区東壁土層断面 ……75
写真117 調査区全景 ……76
写真118 調査区土層断面 ……76

第2章第3節 白石構内（白石遺跡）の調査

写真119 Ａ調査区調査前全景 ……77
写真120 Ｂ・Ｃ調査区調査前全景 ……77
写真121 Ａ～Ｃ調査区全景 ……82
写真122 Ａ調査区北部南西壁土層断面 ……82

写真123 Ａ調査区南部南西壁土層断面 ……82
写真124 Ｂ調査区南部・Ｃ調査区全景 ……82
写真125 Ｂ調査区南西壁土層断面 ……82
写真126 Ｂ調査区北西壁土層断面 ……83
写真127 Ｃ調査区北部北東壁土層断面 ……83
写真128 Ｃ調査区南部北東壁土層断面 ……83
写真129 Ｃ調査区野壺 ……83
写真130 出土遺物（土器）① ……84
写真131 出土遺物（土器）② ……85
写真132 １～５地点全景 ……87
写真133 ５～７地点全景 ……87
写真134 １地点南西壁土層断面 ……91
写真135 ４地点南西壁土層断面 ……91
写真136 ５地点南東甕土層断面 ……91
写真137 ６地点南東壁土層断面 ……91
写真138 ７地点南東壁土層断面 ……91
写真139 ８地点北西壁土層断面 ……91
写真140 ９地点北西壁土層断面 ……91
写真141 10地点北東壁土層断面 ……91
写真142 11～22地点全景 ……92
写真143 11地点南東壁土層断面 ……92
写真144 12地点南東壁土層断面 ……92
写真145 13地点溝状遺構検出状況 ……92
写真146 14地点北東壁土層断面 ……92
写真147 15地点北西壁土層断面 ……92
写真148 16地点北西壁土層断面 ……92
写真149 17地点北西壁土層断面 ……92
写真150 18地点南西壁土層断面 ……93
写真151 19地点南東壁土層断面 ……93
写真152 20地点南東壁土層断面 ……93
写真153 21地点南西壁土層断面 ……93
写真154 22地点南東壁土層断面 ……93
写真155 23地点全景 ……93
写真156 24地点北東壁土層断面 ……93
写真157 25地点南東壁土層断面 ……93
写真158 出土遺物① ……97
写真159 出土遺物② ……98
写真160 出土遺物③ ……99
写真161 出土遺物④……100
写真162 出土遺物⑤……101

第2章第4節 光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査

写真163 仮設校舎……104
写真164 ２地点……104
写真165 21－1地点南西壁土層断面 ……106
写真166 21－2地点南西壁土層断面 ……106
写真167 21－3地点北西壁土層断面 ……106
写真168 21－4地点北西壁土層断面 ……106
写真169 21－5地点南東壁土層断面 ……106
写真170 21－6地点南東壁土層断面 ……106
写真171 21－7地点南東壁土層断面 ……106
写真172 21－8地点南東壁土層断面 ……106
写真173 出土遺物（土器）……107
写真174 １－１地点南東壁土層断面 ……108
写真175 １地点全景……110
写真176 ３地点北東壁土層断面 ……110
写真177 ７地点全景……110
写真178 ７－２地点南東壁土層断面……110
写真179 ８地点北東壁土層断面……110
写真180 ９－１地点南西壁……110
写真181 10－１地点北東壁土層断面……110
写真182 10－２地点南西壁土層断面……110

付篇１ 吉田遺跡出土の網代編み製品と植物遺体の樹種同定

写真183 試料２サンプリングポイント……139
写真184 試料４サンプリングポイント……139
写真185 試料１・試料５出土状況……139
写真186 試料４出土状況……139
写真187 試料２・試料３出土状況……139
写真188 試料１取り上げ作業風景……139
写真189 試料顕微鏡画像……140
写真190 試料画像①……141
写真191 試料画像②……142

付篇２ 吉田遺跡出土「千字文」音義木簡略報

写真192 本発掘調査区南端部完掘状況……147
写真193 本発掘調査区南端部木製品出土状況……147
写真194 平成20年度調査区木製品出土状況…147
写真195 平成27年度立会調査区作業着手状況……147

写真196 平成27年度立会調査区作業状況……147
写真197 平成27年度立会調査南壁土層断面…147
写真198 平成27年度出土「千字文」音義木簡
……149
写真199 月崎遺跡出土遺物①……156
写真200 月崎遺跡出土遺物②……157
写真201 月崎遺跡出土遺物③……158
写真202 月崎遺跡出土遺物④……159

付篇３ 月崎遺跡出土資料について

表目次

第1章第1節 資料館における展示・情報公開活動
表1 埋蔵文化財資料館利用者の推移……1
第1章第1節 平成25年度に実施した遺跡調査の概要
表２ 平成25年度山口大学構内遺跡調査一覧表
……9
表３ 出土遺物（土製品）観察表……83
第1章第2節 吉田構内（吉田遺跡）の調査
表４ 出土遺物（土器）観察表……22
表５ 出土遺物（土器）観察表……62
表６ 出土遺物（石器）観察表……63
表７ 出土遺物（土器）観察表……86
表８ 出土遺物（木製品）観察表 ……86
第2章第3節 白石構内（白石遺跡）の調査
表９ 出土遺物（土器）観察表 ……102
第2章第4節 光構内（御手洗遺跡・月待山遺跡）の調査
表10 出土遺物（土器）観察表 ……107
第2章付節2 山口大学の主な調査
表11 山口大学構内の主な調査一覧表 ……114
付篇１ 吉田遺跡出土の網代編み製品と植物遺体の樹種同定
表12 吉田遺跡出土木製品同定表 ……139
表13 植物遺体同定結果 ……141
付篇３ 月崎遺跡出土資料について
表14 出土遺物（土器）観察表 ……160
表15 出土遺物（石器）観察表 ……160

第1章　平成25年度山口大学埋蔵文化財資料館の活動報告

当館は、昭和53年(1978)設置以降、山口大学構内が所在する遺跡の調査・研究を行うとともに、収蔵資料の展示・公開、また埋蔵文化財・考古学にかかわる教育活動を行っている。具体的には、展示・情報公開活動として、当館展示室において年度内に3回前後の企画展示を行うこと、各種メディアを用いて遺跡及び収蔵資料の情報を公開すること、教育活動としては年度内に1回の市民対象公開授業を開催すること、そして出張展示やワークショップの開催、講演会等への講師派遣など、学内外の要望に応じた地域連携・生涯学習支援活動を実施することである。

平成25年度は、展示・情報公開活動として、第35回となる企画展『遺跡に見る山口大学の原風景2～古代官衙と地方豪族の誕生～』を開催した。また、県内の大学博物館・図書館が各大学の学術資料や研究成果を展示にて公開する「山口県大学ML（ミュージアム・ライブラリー）連携事業」を継続実施した。その他、当該年度より本学委員会である山口大学所蔵学術資産継承検討委員会の事業成果展『宝山の一角』共催館として、展示室の提供と展示構築・広報支援などを行った。情報公開としては、平成22年度分の年報と広報誌『てらこや埋文』、『平成25年度山口県大学ML連携事業報告書』を刊行した。また、引き続き見島ジーコンボ古墳群の出土資料再調査として第137号墳を対象に実施したが、調査報告書は次年度に持ち越した。社会教育活動に関しては、例年通り農学部附属農場との共催により、第13回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう8－』を開催した。

当年度は、総入館者数は2,037名で前年度比190％の増加、当館初の2千名に達した（表1・2）。山口県大学ML連携特別展開催期間の入館者が少ないが、これは総合図書館増築工事で当館前の道路が封鎖された影響である。次頁より平成25年度の展示・情報公開活動、社会教育活動の概要を報告する。

表1　埋蔵文化財資料館利用者の推移

年度	平成7	平成8	平成9	平成10	平成11	平成12	平成13	平成14	平成15	平成16	平成17	平成18	平成19	平成20	平成21	平成22	平成23	平成24	平成25
利用者総数	355	267	191	200	516	142	555	573	913	669	808	1,157	1,228	776	1,333	1,718	1,473	1,072	2,037

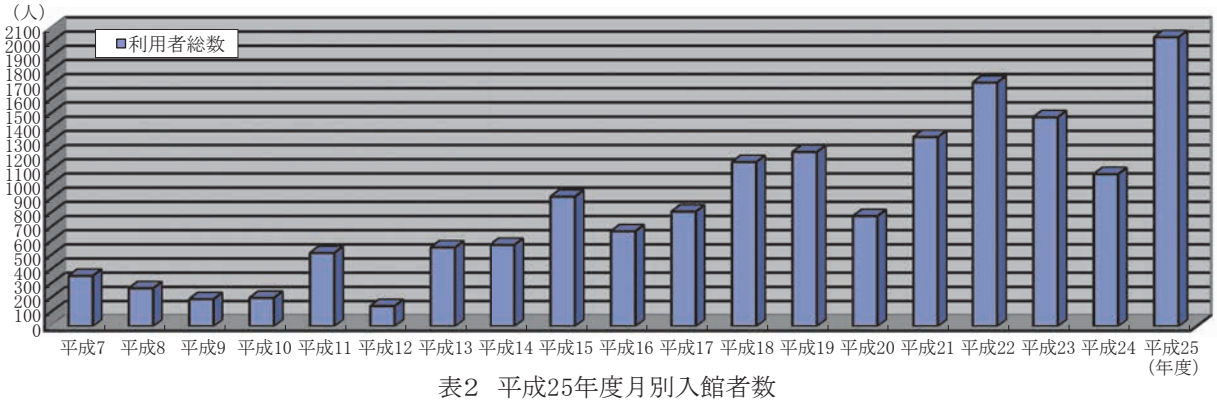
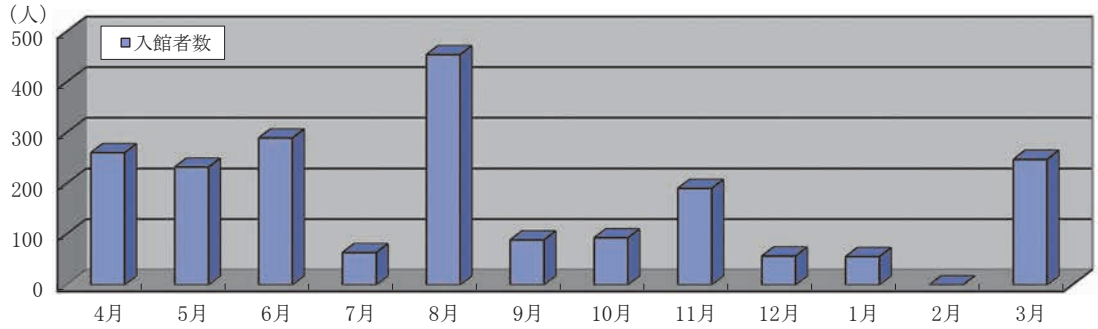


表2　平成25年度月別入館者数

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
入館者数	261	233	290	64	455	89	93	191	57	56	休館	248



第1節　資料館における展示・情報公開活動

1．第35回企画展『遺跡調査に見る山口大学の原風景2～古代官衙と地方豪族の誕生～』を開催

平成24年度に開催した企画展では、『遺跡調査に見る山口大学の原風景1　中世　集落　誕生』と題して、本学の吉田地区統合移転前に展開していた農業集落と田園風景が室町時代に遡り成立することを、当館の発掘調査成果から解説した。当企画展では、シリーズの第2弾として、中世農村集落成立以前、古墳時代から古代にかけての吉田遺跡に焦点を当てた。

本シリーズは、時代を遡る構成としている。前回は、①現在の山口大学吉田キャンパスの景観　②統合移転前（昭和）の農村風景　③江戸時代中期の絵図に描かれた吉田村と発掘調査成果　④吉田キャンパスにて確認される室町時代農村集落　⑤貿易陶磁など遺物が多量に出土するものの遺構が確認されない鎌倉時代　の順に展示を構築した。

今回は、前回⑤に関連して鎌倉時代に地頭または保司の居館が吉田キャンパス内に存在した可能性を指摘し、その背景として⑥古代（奈良～平安時代）にはキャンパス東－南部丘陵地に官衙が存在していたことを、検出遺構（大型掘立柱建物や総柱建物群）と出土遺物（「官」「主」など墨書土器や円面硯、石製・銅製銙帯、鋳造関連資料など）から解説した。さらに官衙成立の背景として⑦古墳時代中期以降、同じく吉田の丘陵地に集落が営まれ周辺地に古墳が築造されること、特に官衙遺構群が確認される地区の南に隣接する飼料園にて円筒埴輪片が採取されていることから、この地域を支配した豪族の古墳が存在したと推定され、その末裔が官人として律令国家体制に組み込まれた可能性を解説した。

開催期間中、701名の方々に観覧いただいたが、観覧者からはアンケートの回答にて「吉田の地が奈良の昔から開けていることに驚いた」「大学の中に遺跡があるなんてすごい！知っていたら受験していた…と思う」などの声が寄せられた。

本来であれば構内遺跡の通史的資料展示を常設すべきであろうが、約35㎡の狭小な展示スペースではそれも叶わず、企画展示として公開しても本シリーズのように時代を区切って実施せざるを得ない。常設展示は施設の目的や役割を可視化するもので、博物館として「必須の空間」に位置付けられるが、現行施設では資料収蔵もままならぬ状態にある。国立大学を取り巻く環境は年々厳しさを増しているものの、粘り強く施設の拡充・更新を働きかけたい。

写真1　第 35 回企画展ポスター

写真2　展示見学の模様

2. 山口県大学ML連携特別展　共通テーマ「再生」

平成22年度に実施した『大学博物館連携第一弾 EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館[註1]』は、翌年度に両大学の図書館を加えた事業に発展を遂げ、県内4大学を巡る山口大学ML連携企画巡回展『風化させない記憶への一歩～自然とともに～』として結実した[註2]。

平成25年度はさらなる大学間博物館・図書館連携を図るため、山口県大学図書館協議会に加盟する大学図書館等に事業参加を呼びかけ、一定期間テーマを共通とした学術資料展示を開催することとなった。その結果、9大学12館が参加し、新たな山口県大学ML連携事業が展開されることとなった。その後会議等により、主催組織として山口県大学ML連携事業事務局を設置すること、テーマを「再生」とすること、開催期間を平成25年10月から翌年1月までとすること、事業ロゴマークを作成すること、スタンプラリーを開催し、達成者にオリジナルグッズをプレゼントすること等事業の詳細が定められていった。

当館では、筆者が事業事務局を務めることとなったため、石丸恵利子教務補佐員が展示を担当した。タイトルを『博物館が繋ぐもの～遺跡を未来へ～』と定め、テーマ別に以下のように展示を構築した。「過去の再生」では県内出土滑石製品を用いて製作から廃棄、再利用の状況を、「現在の再生」では木製品と金属器の保存処理と土器の復元を解説した。さらに「過去へ＆未来への再生」では遺跡調査時の画像と現在の景観を対比させることにより、遺跡を未来へ残すことの意義を観覧者に問いかけた。

会期中304名の観覧者を迎え入れた。前述の理由から入館者は伸び悩んだが、展示を構築することにより中世における県内滑石製品分布状況が確認できるなど、学術研究面で大きな成果が上がるとともに、学内外へ埋蔵文化財保護の重要性、大学博物館の必要性を強く訴えかけることができたと感じる。

【註】

1）横山成己（2014）「大学博物館連携第1弾『EXCHANGE! 山口大学埋蔵文化財資料館×梅光学院大学博物館』を開催」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成22年度－』，山口

2）横山成己（2015）「山口県大学ML連携企画巡回展『風化させない記憶への一歩～自然とともに～』山口大学会場を開催」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成23年度－』，山口　横山成己（2016）「山口県大学ML連携企画巡回展『風化させない記憶への一歩～自然とともに～』梅光学院大学会場・徳山大学会場・山口福祉文化大学会場を巡回」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』，山口

写真3　ミュージアムトークの模様

写真4　ワークショップの模様

3．平成25年度山口大学所蔵学術資産継承事業成果展「宝山の一角」を共催にて開催

平成24年度より、山口大学所蔵学術資産継承検討委員会（以下「委員会」と記す）が主催する事業成果展『宝山の一角』共催館として、展示空間の提供と展示設営協力、会期中の管理運営を行っている。

平成25年度は、昨年度同様前期（平成26年3月1日～4月24日）、後期（平成26年5月12日～6月27日）の2部構成となり、前期は当館所蔵の考古資料「筈倉古墳（山口市秋穂所在）出土品」、工学部所蔵の鉱物・岩石標本「山口県の鉱物」、教育学部所蔵の美術資料「西山陽平作品（立体）」、図書館所蔵の文書「伊藤助太夫宛坂本龍馬書簡（『精魂余芳帖』のうち）」「明治六年以降の政治に関する木戸孝允覚書（『松菊公書翰』のうち）」の実物公開を行った。さらに「万国惣図」「小郡宰判全図（幕末期）」「明治六年地券大絵図（地目地番入上中郷村地図）」のデジタル画像公開も実施した。

後期は人文学部所蔵の考古資料「（伝）長福寺裏山古墳群（岡山県笠岡市所在）出土 鉄鉗」、理学部所蔵の鉱物標本「ゴンドワナ資料（南極・ヒマラヤ等の岩石資料）」、教育学部所蔵の美術資料「西村陽平作品（平面）」、共同獣医学部所蔵の交連骨格標本「馬の仲間の骨格」、図書館所蔵の典籍「元亨療馬集」「新刊京本通俗演義全像百家公案全傳」の実物公開を行った。

昨年に引き続き前期展が山口商工会議所主催の「山口お宝展」への参加も兼ねていたこともあり、学外からの来館者にも恵まれ、入館者数は1,043名に達した。観覧者からは「これからも山大にある様々な資料や技術などを地域にオープンにして欲しい」「継続して2～3回と同じテーマで展示を続けて、山大が所有する財産を公開して欲しい」など、事業の継続を求める声が多数寄せられた。

博物館の4大機能は、①資料収集、②整理保管、③調査研究、④教育普及とされる。本学は未だ大学博物館を有していないものの、大学であることから④を除く機能は本来的に有していなければならない。しかし、本学所蔵博物資料においては各資料を専門とする教員の退職、文書典籍資料においては図書館職員の専門能力の欠如を要因として、②③の機能が著しく低下している現状にある。そのような状況下で委員会は設立され、諸活動を実施しているものと理解しているが、博物館施設を運営する身として僭越ながら申し上げれば、任期ある委員で構成される委員会が「未来永劫」を要する各種資料の継承を立案、実行することは困難である。各部局への専門教職員の配置は言うに及ばないが、資料の危機管理とともに長期的継承計画を担う大学博物館の設置をそろそろ検討すべき時期ではなかろうか。

写真5　前期展ミュージアムトークの模様

写真6　後期展ミュージアムトークの模様

4．平成25年度刊行物

1.『山口大学埋蔵分解資料館年報－平成22年度－』を刊行

平成25年度は、平成22年度に実施した構内遺跡発掘調査概報と資料館活動報告を所収した年報を刊行した。発掘調査関係としては、予備発掘調査3件（吉田2・小串1）、工事立会14件（吉田11・白石1・小串1・光1）の成果が掲載されている。平成22年度は第2期中期計画の初年度であることが原因か、平成20～21年度に比して開発工事数が激減した。本発掘調査が必要な案件もなく、比較的小規模かつ短期の予備発掘調査で対応可能であった。

館の活動報告としては、展示・公開活動として4件の企画展示等事業と、2件の社会教育活動、当該年度刊行物3冊を報告している。その他、田畑直彦による「周防・長門における弥生時代前期から古墳時代前期前半の土器編年をめぐる研究史と今後の課題」と題する論文を付篇として所収している。

2. 山口大学埋蔵文化財資料館通信　第24号『てらこや埋文』を刊行

平成18年(2005)より刊行を開始した広報誌である。当初は季刊として年度4回の刊行であったが、平成23年度以降年度末に「春夏秋冬特大号」と称しての刊行が続いたため、季刊の名称を取り下げることとなった。第25号では、巻頭頁からには3頁にかけて平成25年度の当館の埋蔵文化財保護活動を、3頁から4頁には展示活動、5頁には公開授業の模様、6頁には「資料館この一品」として光市東之庄神田遺跡出土石棒の紹介を、7頁には当館技術職員の連載である内業業務紹介を掲載した。

当館は実施年度の3年後に年報を発行していることから、本冊子は速報性のある刊行物として重要な役割を果たしている。季刊への復活は困難であるが、年度末の刊行を継続したい。

3. 山口県大学ML（Museum・Library)連携事業報告　平成25年度展示テーマ『再生』を刊行

平成22年度より実施している山口県大学ML連携の事業報告書は、事務局員である筆者が編集し、当館が発行している。平成25年度は、前記したとおり9大学12館が参加し、一定期間テーマを共通とした学術資料展示を各館にて開催することとなった。報告書には、開催の経緯と体制（巻頭頁）、各館報告（2～7頁）、年間を通した事務局の活動記録と次年度の活動予定（最終頁）を掲載した。

事業報告書であるため、一般の方は入手困難と思われるが、公立図書館には送付しており、閲覧可能である。その他、山口県大学ML連携事業公式web（http://www.oai.yamaguchi-u.ac.jp/ml/）においてデジタル公開も行っているので、興味のある方はご一読いただきたい。

写真7　平成 25 年度埋蔵文化財資料館刊行物

第2節　資料館における社会貢献活動

第13回公開授業『古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－８』を開催

はじめに

当館では、平成13年度より、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、公開授業を開催している。

第13回となる平成25年度の公開授業は、昨年度に引き続き、日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容である。今回も埋蔵文化財資料館と山口大学農学部との共催で、吉田構内の山口大学農学部附属農場で延べ4回行い、小学生以下1名、小学生7名、教育学部学生5名、一般18名、合計31名（付き添いの方含む）の皆様に参加していただいた。今回栽培したのは昨年と同じ「紅吉兆」（糯米）である。

６月15日（土）－田植え－

当日は朝まで雨が降っていたが、幸い開始時間には雨があがり、参加者は農学部附属農場・技術専門職員の長砂さんに代かきをしていただいた水田に田植えを行った。田植えがはじめての方も多く、水田がぬかるむため足をとられて大変だったが、協力して無事に終了することができた。

７月20日（土）－稲の観察と除草・土器づくり－

当日は朝から快晴に恵まれた。参加者は技術専門職員の長砂さんから水田に生える雑草（コナギ）についての説明を受け、稲とヒエの違いなどを学習し、除草を行った。その後、実習室に戻って土器づくりに挑戦した。短時間だったが、参加者それぞれが古代に思いを馳せた個性的な土器ができた。

10月20日（日）－土器焼成・収穫－

参加者はまず、前回つくった土器を「覆い焼き」で焼成するため、泥窯づくりに挑戦した。この後は収穫であるが、7月28日の大雨で南隣の水田西側の斜面が崩壊したため、水田に大量の水が流れ込んだ。また、その後、猪が水田にたびたび侵入し、稲が倒れる被害があった。それでも残った稲は最終的に長さ約100㎝にまで成長した。収穫は模造した石庖丁などを使い、穂摘みで行った。しかし、水田がぬかるんでいたため、収穫は一部にとどめ、残りの収穫は農学部附属農場にお願いした。翌日の午後、土器の大半は割れることなく焼成することができた。

11月16日（土）－脱穀・籾すり、赤米を食べる－

参加者は午前中に箸こぎ、臼と杵による籾すり、てみとザルによる選別と千歯こき、精米機による作業を体験した。午後からは赤米の試食を行った。今回も土器による炊飯と蒸米を行い、炊飯は成功したが、昨年同様、火力不足のためか時間内にお米を蒸すことはできなかった。炊飯した赤米は歯ごたえがあるものの美味しく甘みがあった。おかずには朴葉焼き、豚汁、あさりのすまし汁をつくったが、これらも美味しく好評であった。このほか、参加者は火おこしにも挑戦し、多くの方が点火に成功した。

公開授業を終えて

今回の公開授業は農学部附属農場で6回目の開催となった。水田が大雨の被害を受けたほか、猪が水田に進入するなど、思いがけない出来事があったが、無事に終了することができた。

参加者からは「赤米はとても美味しかったです。（小学生）」、「火おこしができてうれしかった（小学生）」、「とても面白く貴重な体験ができました（一般）」などの声が寄せられ、好評であった。平成25年度も、参加者には米作りの歴史や大変さを実際の体験を通して学んでいただくことができ、公開授業の目的を達成することができたと感じている。館員一同心より御礼申し上げたい。

写真8　苗の説明（6月15日）

写真9　田植え（6月15日）

写真10　稲と雑草の状況（7月20日）

写真11　除草（7月20日）

写真12 土器づくり（7月20日）

写真13　泥窯づくり1（10月20日）

写真14　泥窯づくり2（10月20日）

写真15　焼成した土器（10月21日）

写真16　水田の様子（10月５日）

写真17　収穫（10月20日）

写真18　参加者の皆さん（10月20日）

写真19　館長挨拶（11月16日）

写真20　火起こし（11月16日）

写真21　脱穀・籾すり（11月16日）

写真22　箸こぎ（11月16日）

写真23　食事風景（11月16日）

第2章　平成25年度山口大学構内遺跡の調査

第1節　平成25年度に実施した遺跡調査の概要

山口大学の関連諸施設は、山口市（吉田・白石構内）、宇部市（小串・常盤構内）、光市（光構内）の県内各市に分散しているが、各構内は「周知の埋蔵文化財包蔵地」内、つまり遺跡の上に立地している。各構内の様相を概観すると、吉田構内は縄文時代後・晩期から江戸時代にかけての全時代を網羅する複合集落遺跡として県内でも著名である吉田遺跡内に、白石構内は弥生時代から古墳時代を中心とした集落遺跡である白石遺跡内に、小串・常盤構内は旧石器時代から江戸時代にかけての遺物が出土する山口大学医学部構内遺跡内・山口大学工学部構内遺跡内に、光構内は縄文時代から江戸時代にかけての集落遺跡・遺物散布地である御手洗遺跡と月待山遺跡内にまたがって位置している。

このような環境の下、山口大学埋蔵文化財資料館は山口大学構内に埋存する貴重な埋蔵文化財を保護・調査・研究・活用する施設として、昭和54年(1979)に職員が配置されて以来、その重責を担い続けている。当館の平成25年度時の調査体制は以下の通りである。

まず、各構内において地下掘削を伴う工事が立案・計画された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において事業計画の確認を行った後、文化財保護法の諸手続の下、山口大学各構内が位置する地方公共団体（山口県および各市）の指導により、埋蔵文化財保護の立場から本発掘・予備発掘・立会の3種の方法で調査を厳密に行っている。「周知の埋蔵文化財包蔵地」外に位置する大学関連施設（職員宿舎等）敷地内で地下掘削を伴う工事が実施される場合においても、埋蔵文化財の新規発見の可能性を考慮して、出来うる限り工事掘削時に資料館員が確認調査を行っている。これらの調査に対する当館の平成25年度の職員配置は、年度当初専任教員2名で11月より3名に増員、教務補佐員1名で12月2日より欠員、事務補佐員1名である。

上記の調査の結果で埋蔵文化財が確認された場合には、埋蔵文化財資料館専門委員会において、

表3　平成25年度山口大学構内遺跡調査一覧表

調査区分	調査名	構内地区	構内地区割	面積（㎡）	調査期間	本書掲載頁
本発掘	獣医学国際教育研究センター棟新営工事	吉田	P-17	608	8月5日～10月7日	13-26
	第1武道場耐震改修その他工事	吉田	F・G-16 G-17	692	10月10日～12月27日	27-66
予備発掘	教育学部附属山口中学校武道場新営工事	白石		235.8	6月3日～6月18日	77-86
立会	第1武道場耐震改修その他工事	吉田	H-15	1	1月30日	67
	農場本館研究・実験室改修工事	吉田	S-13	4	2月5日	68
	農学部本館他電気接地改修工事	吉田	R・S-13	1	3月11日	69
	椹野寮新営工事	吉田	O-20　N・O-21 O・P-22	35	8月21日、9月2・21日 11月14日、12月24日 2月19～28日	70-71
	陸上競技場外灯設置工事	吉田	E-19・20 F-19 G・H-18	56	11月26日	72
	自転車置き場設置工事	吉田	G・H-15	90	2月7日	73
	基幹・環境整備（太陽光発電設備）工事	吉田	L・M-18　L-18	20	2月19日	74
	交通標識設置工事	吉田	J-15　L-11～13 O-18	6	3月24日	75
	学術情報資産の集約管理システム設備工事	吉田	K-14	22.8	12月24日	76
	教育学部附属山口中学校武道場新営に伴う外構及び渡り廊下取設工事	白石		77.6	2月17～20日 3月6・10・11日	87-105
	教育学部附属光小学校仮設校舎設置工事	光		57	7月12・13・15～17日	106-110
	教育学部附属光小学校校舎改修その他工事 教育学部附属光小学校校舎機械設備改修その他工事 教育学部附属光小学校校舎電気設備改修その他工事	光		412	11月27日 4月7日 2月12・20・21・24日 12月2・12・13・16日	111-114

遺跡のさらなる現状変更を避けるべく、工事計画、工事設計の変更等で現状保存が可能であるかどうかについて厳密な協議を行い、保存方法を選定している。また、調査成果については地方公共団体への報告後、内業整理等を経て可能な限り迅速に発掘調査概報（年報）を刊行している。

上記の調査体制の下、平成25年度に当館が実施した大学構内における埋蔵文化財の調査は、表3の通り、本発掘調査2件、予備発掘調査1件、立会調査14件の計17件であった。

吉田構内（本部、人文・教育・経済・理・農の各学部：山口市吉田1677-1、教育学部附属養護学校：同吉田3003所在）

例年通り、平成25年度の埋蔵文化財調査も吉田構内に集中し、その件数は本発掘調査2件、立会調査9件を数える。

獣医学国際教育研究センター棟新営工事に伴う発掘調査では、連合獣医学研究棟東側の駐車場敷地にて本発掘調査を実施した。その結果、当該地は大規模に削平を受けているものの、連合獣医学研

写真24 吉田構内航空写真（南東から）

写真25 白石構内（教育学部附属山口幼稚園・小学校）
航空写真（東から）

写真26 白石構内（教育学部附属山口中学校）
航空写真（南から）

図１ 山口大学吉田・白石構内位置図

究棟敷地にて確認されていた縄文時代自然河川の右岸部が遺存していることが判明した。当調査によって、河川の規模が復元されることとなり、不明瞭である吉田遺跡の縄文時代の様相の一端が明らかとなった。

構内西部の沖積低地に当たる陸上競技場敷地において、第1武道場耐震改修その他工事に伴い、新たに体育器具庫が建設することとなり、本発掘調査を実施した。調査地は、弥生時代の大溝2条が確認された第2体育館敷地の南西に隣接するため、その延長部の検出が予想されたが、調査の結果大溝1が井堰状遺構を有する自然河川であること、自然河川からの導水のため溝が接続されていること、溝2の延長部に性格不明土壙状遺構が複数存在することなどが確認された。また、いずれも埋没時期が古墳時代前期であることが判明し、調査区の南東150mに営まれた弥生時代から古墳時代にかけての集落の廃絶時期と一致することが明らかとなった。遺物としては、日常生活用水の取水施設である可能性が指摘される遺構から、柵状施設とともに複数の竹製網代編み製品が出土したことが特記される。以上の調査成果により、遺構の保存が検討されたが、計画建物は災害時の緊急避難場所等の機能も兼ねたものであったため、設計変更および計画地変更が困難であったことから、やむなく記録保存を行うこととなった。

立会調査では、埋蔵文化財に支障が生じた工事は少なかったものの、椹野寮新営工事に伴う設備関連工事の立会調査にて、既設の椹野寮1号棟の西側にて竪穴住居跡の可能性がある落ち込みを確認した。従来、椹野寮敷地は北東の牧草地が位置する丘陵のカット面で、遺構は遺存しないと推定されていたが、その西端部においては遺構が埋存する可能性が高まった。

白石構内（教育学部附属山口幼稚園：山口市白石三丁目1-2、同山口小学校：白石三丁目1-1、同山口中学校：白石一丁目9-1所在）

予備発掘調査1件、立会調査1件を実施した。教育学部附属山口中学校武道場新営に伴う予備発掘調査では、遺物包含層と水流堆積層を確認したが、その他に顕著な埋蔵文化財が確認されなかったため、本発掘調査は実施しなかった。

教育学部附属山口中学校武道場新営に伴う外構工事（防球ネット、フットサルコート、汚水管・集水枡）および渡り廊下取設工事に伴う立会調査では、中学校校舎南西地点において、遺物包含層ないし河川埋土を確認し、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器や、縄文時代晩期と考えられる深鉢胴部片1点が出土した。これらの遺物は調査区の北西に位置するプール敷地周辺からの流れ込みと推測されることから、周域での今後の開発計画等に注意を促す結果となった。

小串構内（医学部、同付属病院：宇部市南小串1丁目1-1）

土地の掘削を伴う工事計画は立案されなかった。

常盤構内（工学部：宇部市常盤台2丁目16-1、尾山宿舎：同上野中町2658-3所在）

土地の掘削を伴う工事計画は立案されなかった。

光構内（教育学部附属光小学校、同光中学校：光市室積8丁目4番1号）

立会調査4件を実施した。教育学部附属光小学校仮設校舎接地工事に伴う立会調査では、2層の遺構面を確認し、古墳時代と見られる土壙6基を検出した。出土遺物は少量であったが、土師器甕または甑の把手が出土している。教育学部附属光小学校校舎改修その他工事に関連する3件の立会調査では、顕著な埋蔵文化財は確認されなかった。

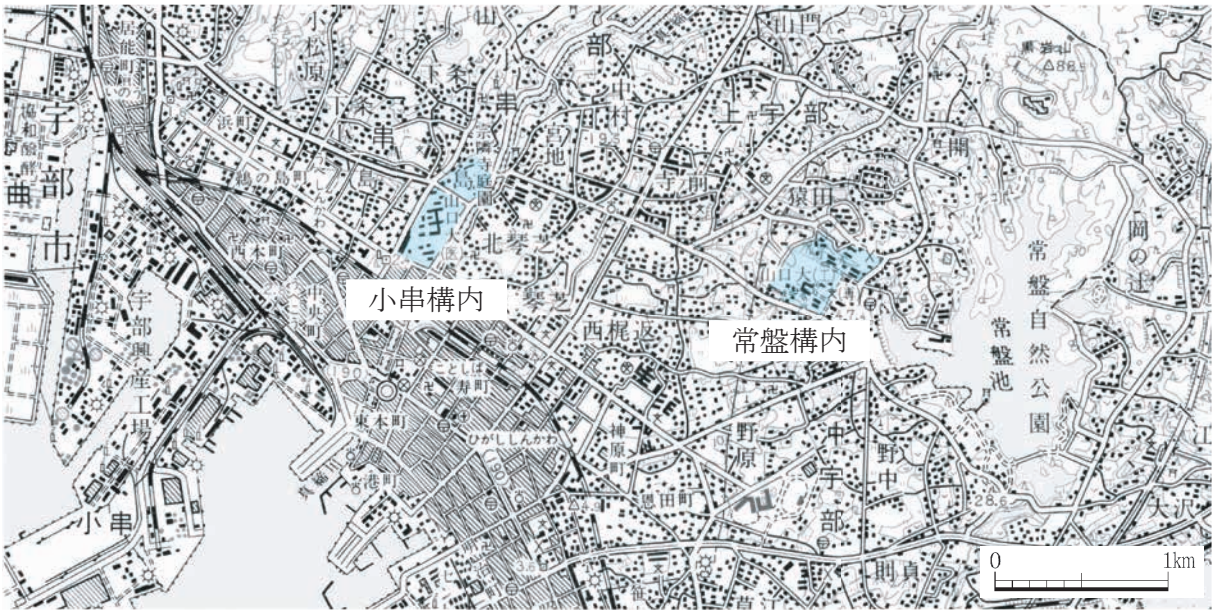


図2 小串・常盤構内位置図

写真27 小串構内航空写真（南東から）

写真28 常盤構内航空写真（南から）

写真29 光構内航空写真（北東から）

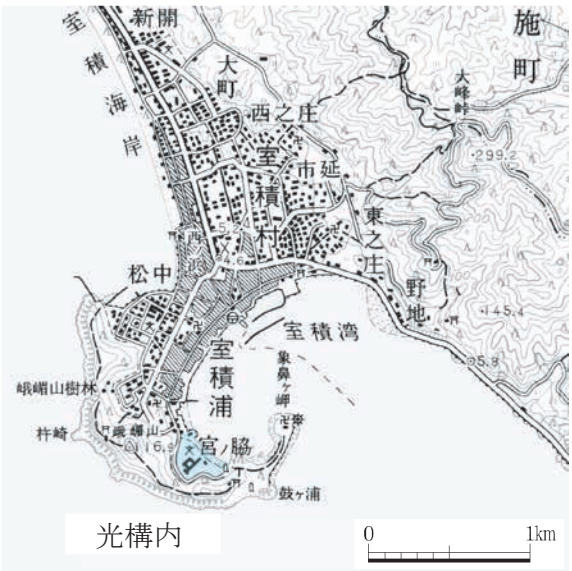


図3 光構内位置図

第2節　吉田構内（吉田遺跡）の調査

1．獣医学国際教育研究センター新営工事に伴う本発掘調査

調査地区　吉田構内P-17区

調査面積　608㎡

調査期間　平成25年8月5日～10月7日

調査担当　横山成己　石丸恵利子

調査結果

（1）調査の経緯（図4、写真30・31）

吉田構内連合獣医学研究棟東側駐車場敷地において、獣医学国際教育研究センター棟の新営工事が計画された。

周辺地での既往の調査成果を見ると、平成3年度から平成4年度にかけて計画地の西隣にて実施した連合獣医学研究棟新営に伴う試掘[註1]・事前調査[註2]では、縄文時代の遺物を包含する河川の右岸部が検出されており、平成23年度に計画地の北隣にて実施した特高受変電設備棟新営に伴う本発掘調査では、平安時代後期から鎌倉時代の遺物を包含する南東－北西方向に走る河川が検出されている。

このことから、工事予定地内に埋没河川が存在する可能性が極めて高いと予想されたため、本発掘調査を実施し、埋蔵文化財の確認を行う運びとなった（平成24年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会にて承認）。調査においては、新営建物基礎の外周を覆う範囲を対象に、東西28.9m、南北21.05mの608.345㎡の調査区を設定した。

【註】

1）河村吉行（1993）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う試掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸＩ』，山口

2）豆谷和之（1994）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅡ』，山口

3）横山成己（2015）「特高受変電設備棟新営工事に伴う本発掘調査・立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成23年度－』，山口

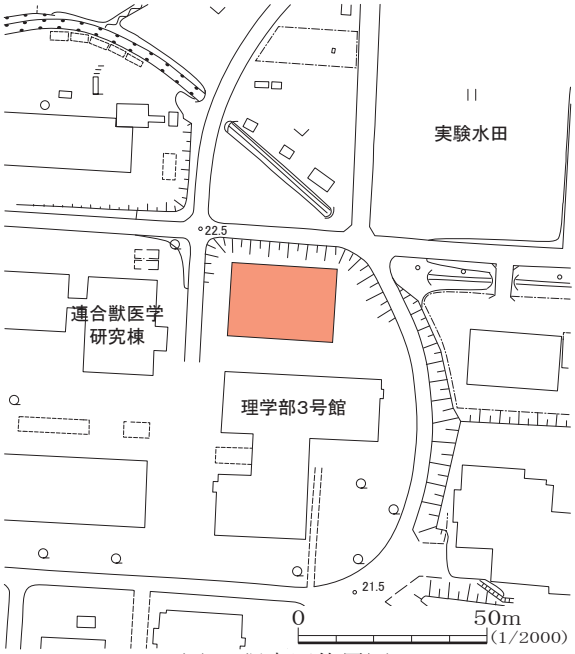


図4　調査区位置図

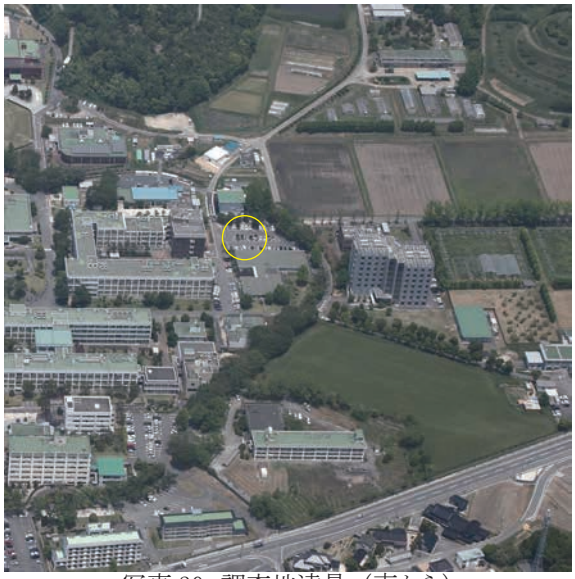


写真 30　調査地遠景（南から）

写真 31　調査前近景（西から）

（2）調査の経過（写真34・35）

調査は平成25年8月５日から10月７日にかけて実施した。8月５日に駐車場アスファルトの除去を行い、8月7日～12日に重機掘削、夏期休業（8月14日～18日）をはさみ8月19日～9月20日まで遺構検出および人力掘削、9月24日～10月1日にかけて写真撮影・実測等記録作業を行った。埋め戻しは10月2日～7日にかけて実施し、調査を終了した。

（3）基本層序（図6、写真40～45）

調査区内の基本層所は、全域において①アスファルト ②砕石・造成土 ③地山であった。特に調査区東部においてはアスファルト（厚5㎝）、砕石（厚10㎝）直下が地山であり、旧来の地形が大規模に削平されていることが判明した。造成土は調査区西部に厚く盛られており、西壁付近では0.9mの厚みを有している。当該地は本学吉田地区統合移転前、そして移転開始直後には正門から東門に抜ける農道が存在していたことが古写真から判明しているが、調査区西部においては自然堆積層上面にU字溝や軽量ブロックによる焼却炉が検出されていることから、統合移転時・移転直後に削平を行い、何らかの施設を設けていたことが判明した。

検出された地山は砂礫層、シルト層に大別されるが、開発予定地全域は元来丘陵末端であり、丘陵部からの流出土が谷地を徐々に埋めていったものと推測される。地山上面検出後に壁面に沿って断ち割りを行い、堆積層序とともに各層における埋蔵文化財の包含の有無を確認した。その結果、広域に及び確認された黄褐色～赤褐色系のシルト層には土器等の遺物が含まれないと判断されるに至ったため、この層を基盤層とし、遺構の検出を行うこととなった。

（4）遺構（図5・7・8、写真32・33・36～39）

自然河川（NR1）

調査の結果、調査区北西部において明黄褐色シルト層を切り込む北東－南西に走る自然河川(NR1)の左岸部を検出した。検出長11.2m、幅は最大で7.4m、深さは最深部で0.65mを測る。埋土は締まりが強く、シルト層と砂礫層の複雑な堆積となっている。

河川埋土からは縄文時代のものと見られる土器片が出土している。何れも小片であり、摩耗も著しく詳細な所属時期を特定することはできないものも多いが、多くは晩期のものと思われる。包含量に関しては、上位の灰白色シルト・砂礫砂礫～明黄褐色砂礫層にやや多く、下位に至るほど減少するが、総じてその量は希薄であった。遺物の取り上げについては、土層観察用北東－南西アゼ（図7）で河川埋土7～11を1層、12～18を2層、19～28を3層として行った。なお、遺物の埋蔵が希薄であること、後述する性格不明土壙状遺構が河川埋土を掘り込んでいることから、掘削は半裁に留め調査を終了した。

性格不明土壙状遺構（SX1）

調査区北西端部において、河川埋土上面から掘り込まれた土壙状遺構1基(SX1)を検出した。平面形態は長径約1.6m×短径約1.2mの楕円形であり、深さは0.35mを測る。底面はほぼフラットで、平面形態は直径約1mの円形を呈す。埋土断面の観察からは、柱根跡や明確な柱の抜き取り痕跡は見られず、遺構の性格は不明である。

埋土からは、縄文土器片、弥生土器片、土師器片のほか、古代の須恵器坏口縁部片が出土している。中世以降の明確な遺物が見られないことから、遺構の所属時期は古代である可能性が高い。

当調査では、上記の以外に遺構は確認されなかった。当地に対しては、大学造成時に大規模な削平

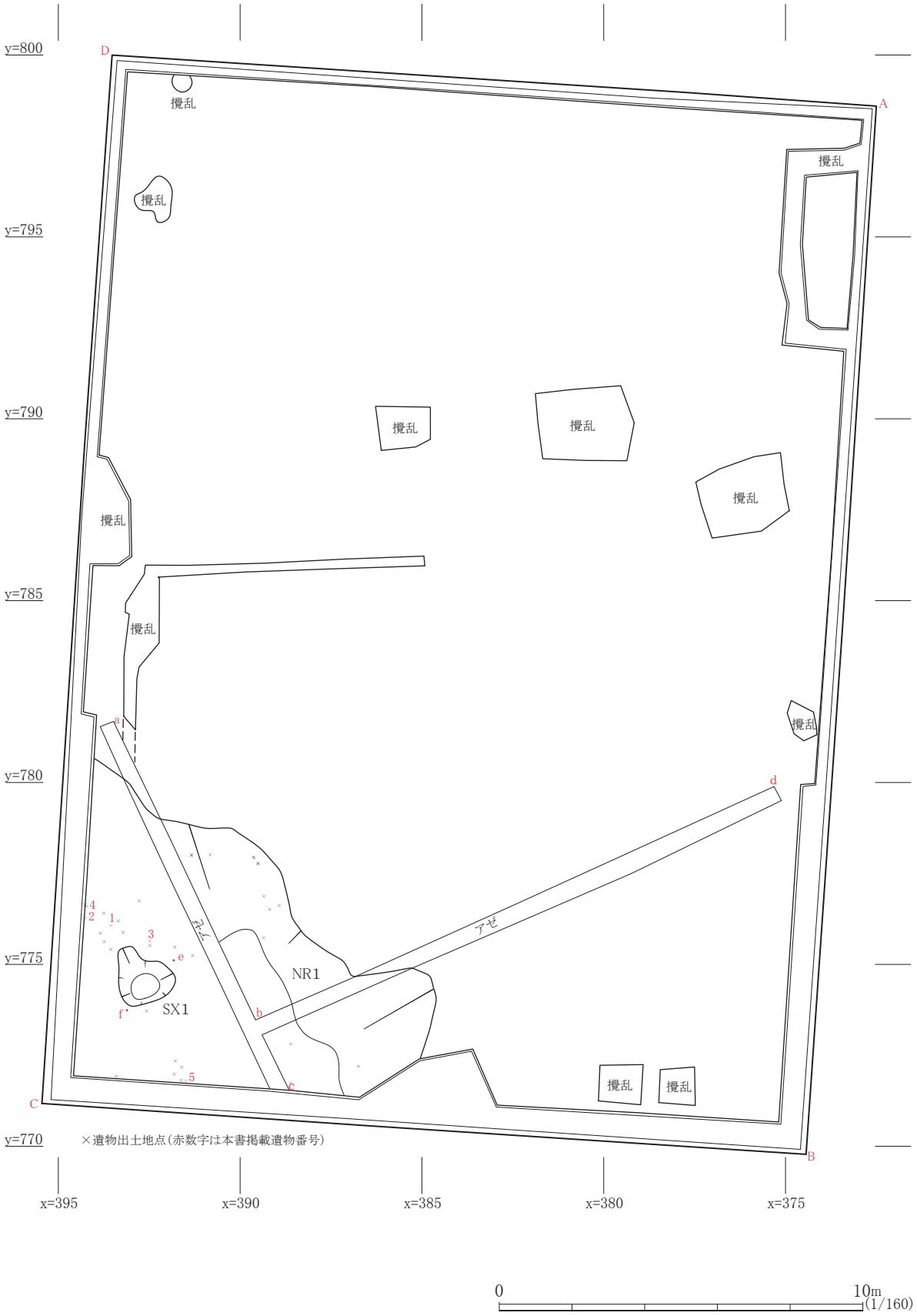
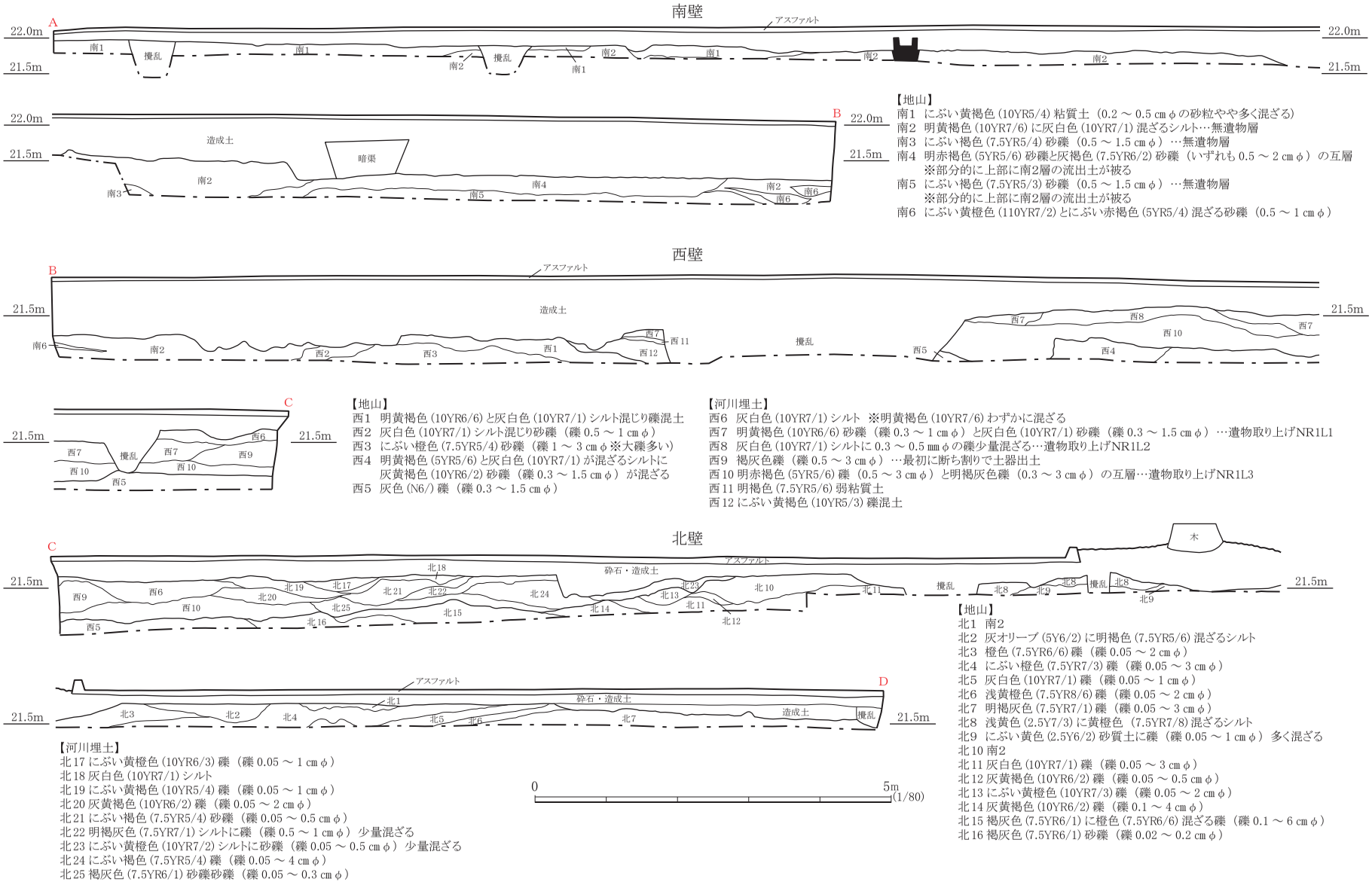

y=800
y=795
y=790
y=785
y=780
y=775
y=770
x=395
x=390
x=385
x=380
x=375
A
B
C
D
a
b
c
d
e
f
1
2
3
4
5
撹乱
NR1
SX1
×遺物出土地点（赤数字は本書掲載遺物番号）
0
10m
(1/160)

図5　調査区平面図



【地山】
南1　にぶい黄褐色（10YR5/4）粘質土（0.2 ～ 0.5 ㎝φの砂粒やや多く混ざる）
南2　明黄褐色（10YR7/6）に灰白色（10YR7/1）混ざるシルト…無遺物層
南3　にぶい褐色（7.5YR5/4）砂礫（0.5 ～ 1.5 ㎝φ）…無遺物層
南4　明赤褐色（5YR5/6）砂礫と灰褐色（7.5YR6/2）砂礫（いずれも 0.5 ～ 2 ㎝φ）の互層
※部分的に上部に南2層の流出土が被る
南5　にぶい褐色（7.5YR5/3）砂礫（0.5 ～ 1.5 ㎝φ）…無遺物層
※部分的に上部に南2層の流出土が被る
南6　にぶい黄橙色（110YR7/2）とにぶい赤褐色（5YR5/4）混ざる砂礫（0.5 ～ 1 ㎝φ）

【地山】
西1　明黄褐色（10YR6/6）と灰白色（10YR7/1）シルト混じり礫混土
西2　灰白色（10YR7/1）シルト混じり砂礫（礫 0.5 ～ 1 ㎝φ）
西3　にぶい橙色（7.5YR5/4）砂礫（礫 1 ～ 3 ㎝φ※大礫多い）
西4　明黄褐色（5YR5/6）と灰白色（10YR7/1）が混ざるシルトに
灰黄褐色（10YR6/2）砂礫（礫 0.3 ～ 1.5 ㎝φ）が混ざる
西5　灰色（N6/）礫（礫 0.3 ～ 1.5 ㎝φ）

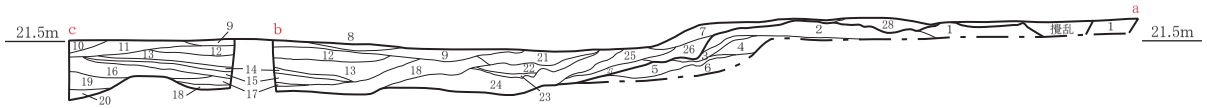
【河川埋土】
西6　灰白色（10YR7/1）シルト　※明黄褐色（10YR7/6）わずかに混ざる
西7　明黄褐色（10YR6/6）砂礫（礫 0.3 ～ 1 ㎝φ）と灰白色（10YR7/1）砂礫（礫 0.3 ～ 1.5 ㎝φ）…遺物取り上げNR1L1
西8　灰白色（10YR7/1）シルトに 0.3 ～ 0.5 ㎜φの礫少量混ざる…遺物取り上げNR1L2
西9　褐灰色礫（礫 0.5 ～ 3 ㎝φ）…最初に断ち割りで土器出土
西 10 明赤褐色（5YR5/6）礫（0.5 ～ 3 ㎝φ）と明褐灰色礫（0.3 ～ 3 ㎝φ）の互層…遺物取り上げNR1L3
西 11 明褐色（7.5YR5/6）弱粘質土
西 12 にぶい黄褐色（10YR5/3）礫混土

【地山】
北1　南2
北2　灰オリーブ（5Y6/2）に明褐色（7.5YR5/6）混ざるシルト
北3　橙色（7.5YR6/6）礫（礫 0.05 ～ 2 ㎝φ）
北4　にぶい橙色（7.5YR7/3）礫（礫 0.05 ～ 3 ㎝φ）
北5　灰白色（10YR7/1）礫（礫 0.05 ～ 1 ㎝φ）
北6　浅黄橙色（7.5YR8/6）礫（礫 0.05 ～ 2 ㎝φ）
北7　明褐灰色（7.5YR7/1）礫（礫 0.05 ～ 3 ㎝φ）
北8　浅黄色（2.5Y7/3）に黄橙色（7.5YR7/8）混ざるシルト
北9　にぶい黄色（2.5Y6/2）砂質土に礫（礫 0.05 ～ 1 ㎝φ）多く混ざる
北 10 南2
北 11 灰白色（10YR7/1）礫（礫 0.05 ～ 3 ㎝φ）
北 12 灰黄褐色（10YR6/2）礫（礫 0.05 ～ 0.5 ㎝φ）
北 13 にぶい黄橙色（10YR7/3）礫（礫 0.05 ～ 2 ㎝φ）
北 14 灰黄褐色（10YR6/2）礫（礫 0.1 ～ 4 ㎝φ）
北 15 褐灰色（7.5YR6/1）に橙色（7.5YR6/6）混ざる礫（礫 0.1 ～ 6 ㎝φ）
北 16 褐灰色（7.5YR6/1）砂礫（礫 0.02 ～ 0.2 ㎝φ）

【河川埋土】
北 17 にぶい黄橙色（10YR6/3）礫（礫 0.05 ～ 1 ㎝φ）
北 18 灰白色（10YR7/1）シルト
北 19 にぶい黄褐色（10YR5/4）礫（礫 0.05 ～ 1 ㎝φ）
北 20 灰黄褐色（10YR6/2）礫（礫 0.05 ～ 2 ㎝φ）
北 21 にぶい褐色（7.5YR5/4）砂礫（礫 0.05 ～ 0.5 ㎝φ）
北 22 明褐灰色（7.5YR7/1）シルトに礫（礫 0.5 ～ 1 ㎝φ）少量混ざる
北 23 にぶい黄橙色（10YR7/2）シルトに砂礫（礫 0.05 ～ 0.5 ㎝φ）少量混ざる
北 24 にぶい褐色（7.5YR5/4）礫（礫 0.05 ～ 4 ㎝φ）
北 25 褐灰色（7.5YR6/1）砂礫砂礫（礫 0.05 ～ 0.3 ㎝φ）

図6　調査区南・西・北壁土層断面図

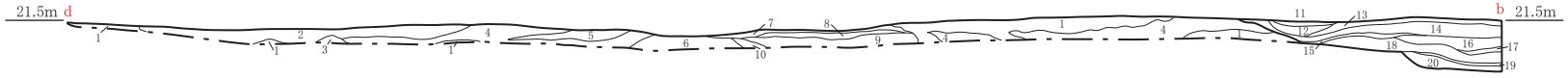
北東－南西アゼ



【河川埋土】
7 灰白色（5Y7/2）シルト
8 にぶい黄橙色（10YR7/3）礫（礫 0.05 ～ 3 cm φ）
9 橙色（7.5Y6/6）礫（礫 0.05 ～ 3 cm φ）
10 西壁7
11 灰白色（10YR7/1）礫（礫 0.05 ～ 2 cm φ）
12 灰黄褐色（10YR6/2）礫（礫 0.05 ～ 2 cm φ）
13 にぶい黄橙色（10YR6/3）礫（礫 0.05 ～ 1.5 cm φ）
14 明赤褐色（5YR5/6）礫（礫 0.3 ～ 2.5 cm φ）
15 明褐灰色（7.5YR7/1）礫（礫 0.1 ～ 4 cm φ）
16 明褐色（7.5YR5/6）礫（礫 0.1 ～ 1.5 cm φ）
17 褐灰色（10YR6/1）礫（礫 0.05 ～ 5 cm φ）
18 にぶい黄橙色（10YR7/2）礫（礫 0.02 ～ 1 cm φ）
19 明褐灰色（5YR7/1）礫（礫 0.2 ～ 2 cm φ）
20 灰オリーブ色（5Y6/2）砂礫（礫 0.05 ～ 0.3 cm φ）
21 灰白色（5Y7/1）シルト
22 にぶい黄橙色（10YR6/3）礫（礫 0.05 ～ 1 cm φ）
23 灰白色（5Y7/1）砂礫（礫 0.02 ～ 0.1 cm φ）
24 灰オリーブ色（5Y6/2）シルト
25 灰黄色（2.5Y7/2）礫（礫 0.02 ～ 1 cm φ）
26 灰白色（10Y7/1）シルト
27 灰色（N7/）シルト
28 北 23

【地山】
1 南2
2 にぶい黄褐色（10YR6/4）礫（礫 0.05 ～ 3 cm φ）
3 にぶい黄褐色（10YR7/2）砂礫（礫 0.05 ～ 0.2 cm φ）
4 橙色（7.5YR6/6）礫（礫 0.05 ～ 1.5 cm φ）
5 灰白色（10YR7/1）砂礫（礫 0.05 ～ 0.5 cm φ）
6 灰白色（2.5Y7/1）礫（礫 0.05 ～ 5 cm φ）

南東－北西アゼ



【地山】
1 南 2
2 南 6
3 にぶい黄橙色（10YR6/3）砂
4 浅黄色（2.5Y7/4）砂礫（礫 0.1 ～ 1 cm φ）
5 にぶい黄橙色（10YR7/2）砂
6 橙色（7.5YR6/6）礫（礫 0.05 ～ 2 cm φ）
7 灰白色（2.5Y8/1）シルト
8 明黄褐色（10YR7/6）礫（礫 0.2 ～ 2.5 cm φ）
9 にぶい黄橙色（10YR7/2）礫（礫 0.02 ～ 3 cm φ）
10 灰白色（10YR7/1）砂礫（礫 0.02 ～ 0.5 cm φ）

【河川埋土】
11 灰白色（5Y8/1）シルト
12 浅黄色（2.5Y7/3）砂礫（礫 0.02 ～ 0.5 cm φ）
13 北東－南西アゼ 8
14 北東－南西アゼ 11
15 灰黄色（2.5YR7/2）シルト
16 北東－南西アゼ 12
17 北東－南西アゼ 13
18 北東－南西アゼ 14
19 北東－南西アゼ 16
20 北東－南西アゼ 17

0 5m (1/80)

図7 NR1アゼ土層断面図

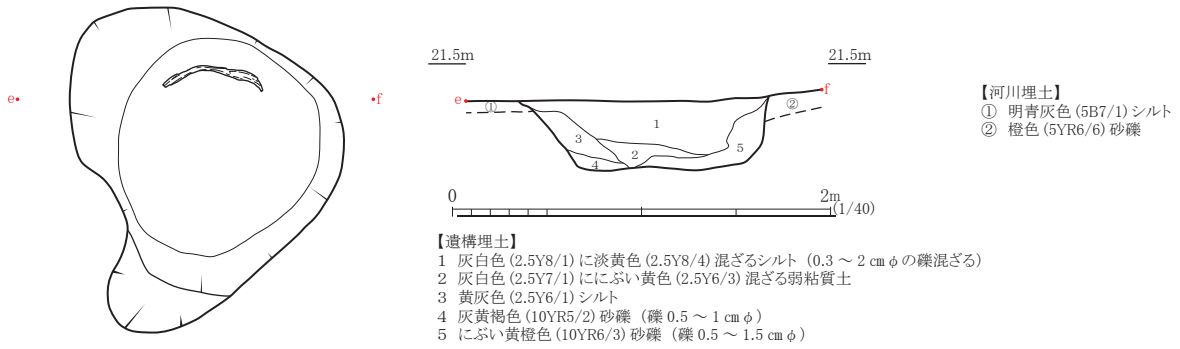


図8　SX1平面図・断面図

が行われたと推定されることから、これらの自然河川や遺構は、元来はより高位から掘り込まれていたものと考えられる。

（5）遺物（図9、表4、写真48・49）

図化可能な遺物は、いずれも土器である。

1～5は自然河川（NR1）出土の縄文土器で、1～4が第2層、5が第3層からの出土である。連合獣医学研究棟新営に伴う発掘調査にて検出された自然河川からは、多数の縄文土器が出土している[註1]。わずかに縄文時代前・中期の土器も見られるものの、大多数は縄文時代晩期に所属する土器であった。実測不能であった小片を含め、本調査にて出土した土器は器面が摩滅しており、遺存状態が不良なものばかりであったものの、やはり縄文時代晩期の深鉢・浅鉢形土器と見られる。**1**は器壁の薄い上げ底状の底部で、立ち上がりが緩やかなことから浅鉢型土器底部の可能性がある。**2**は大きく外反する深鉢の口縁部片。端部は鈍く面を取る。内外面に条痕が見られる。**3**は直立する深鉢口縁部片で、外面に条痕が残る。内面はナデ。**4**は胴部片。内面は風化により観察不能。外面は横方向の条痕が残る。**5**は深鉢の口縁部片か。やや外方につまみ出した擬口縁部で折損したと見られ、元来は屈曲しつつ上方に伸びる口縁が付くものと思われる。内外面ともに風化により調整不明。

6・7は自然河川埋土を掘り込むSX1から出土した。**6**は弥生土器壺の肩部片と見られる。外面に3条の沈線が残る。外面ナデ、内面は風化により観察不能。**7**は須恵器坏。口縁部の小片であり、口径は復元不能である。内外面とも回転ナデ調整が施される。SX1埋土からの出土遺物はいずれも細片であり、縄文土器と見られる破片も存在するが、中世以降に下る明確な遺物が存在しないことから、遺構の所属時期は古代と推定される。

8は調査区東壁沿いの側溝にて攪乱埋土より出土した須恵器坏口縁部片。内外面とも回転ナデ調整が施され、復元口径は14.8㎝を測る。**9**も攪乱埋土からの出土で、須恵器高台付坏の底部片である。幅広で短い高台が底部外端のやや内側に付く。高台の内端はわずかに肥厚する。

10は重機掘削時に造成土より出土した土師質土器大甕の口縁部片。外面は剥離しているものの、器壁は約2.5㎝と分厚い。口縁内端をわずかに肥厚させており、内面は横方向のハケ調整後ナデ調整が施されている。

【註】

1）豆谷和之（1994）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅡ』，山口

写真 32　遺構面検出状況（西から）

写真 33　完掘状況（西から）

写真 34　重機掘削風景（南東から）

写真 35　作業風景（北東から）

写真 36　遺構面検出状況（南東から）

写真 37　NR1遺物出土状況（南西から）

写真 38　NR1遺物出土状況（西から）

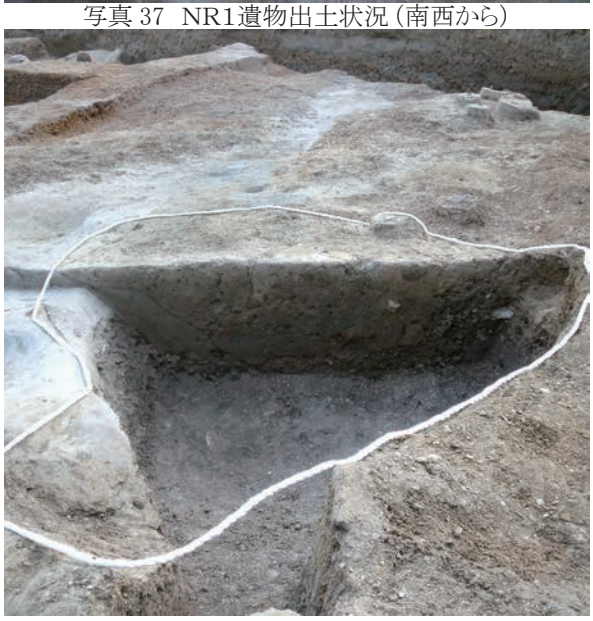


写真 39　SX1半裁状況（北西から）

写真40　調査区南壁東側土層断面（北東から）

写真41　調査区南壁西側土層断面（北東から）

写真42　調査区西壁南側土層断面（南東から）

写真43　調査区西壁北側土層断面（南東から）

写真44　調査区北壁西側土層断面（南西から）

写真45　調査区北壁東側土層断面（南西から）

写真46　NR1北東-南西アゼ南東面土層断面（南東から）

写真47　NR1南東-北西アゼ北東面土層断面（北東から）

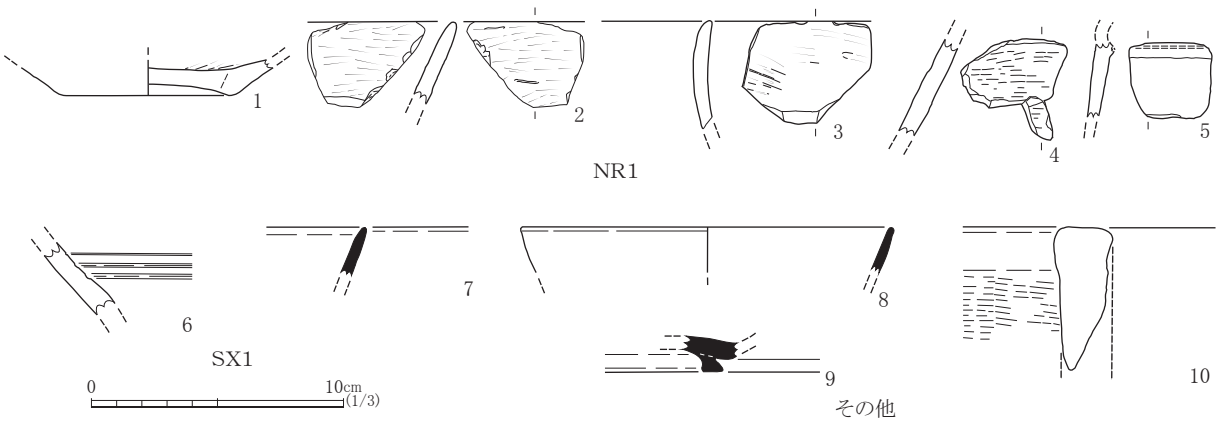


図9　出土土器実測図

表4 出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量（cm）①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	NR1 2層	縄文土器　鉢	底部	②6.6③1.4	①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰白色(2.5Y8/2)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石をやや多く含む	
2	NR1 2層	縄文土器　深鉢	口縁部	③3.3	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
3	NR1 2層	縄文土器　深鉢	口縁部	③4.2	①灰黄褐色(10YR5/2)・にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	やや粗：0.5～2mmの石英・長石を多量に含む	
4	NR1 2層	縄文土器　深鉢	胴部	③3.8	①黒色(7.5YR2/1) ②黒褐色(7.5YR3/1)	やや粗：0.5～2mmの石英・長石をやや多く含む	
5	NR1 3層	縄文土器　深鉢	口縁部	③3.0	①にぶい黄褐色(10YR5/4) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石をやや多く含む	
6	SX1	弥生土器　壺か	肩部	③3.1	①黒褐色(10YR3/1) ②灰黄色(2.5Y7/2)	やや粗：0.5mmの石英・長石を少量含む	
7	SX1	須恵器　坏	口縁部	③2.0	①灰白色(5Y7/1) ②灰白色(5Y7/1)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石を少量含む	
8	調査区東壁側溝	須恵器　坏	口縁部	①(14.8)③1.8	①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰色(N6/)	密：0.5mmの石英・長石をやや多く含む	
9	攪乱埋土	須恵器　高台付坏	底部	③1.4	①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)	密：0.5mmの石英・長石を少量含む	
10	造成土中	土師質土器　甕	口縁部	③5.7	①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②灰褐色(7.5YR6/2)	密：0.5～1.5mmの石英・長石を少量含む	

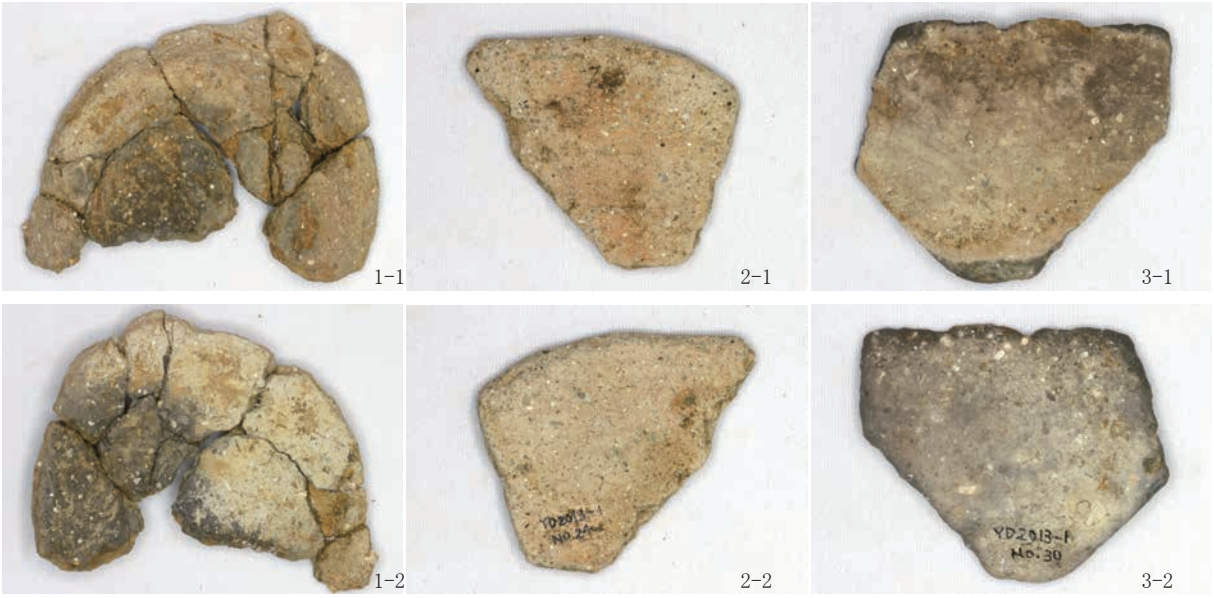


写真 48　出土遺物（土器）①

4-1

5-1

6-1

4-2

5-2

6-2

7-1

8-1

9-1

7-2

8-2

9-2

10-1

10-2

写真 49　出土遺物（土器）②

（6）小結（図10）

獣医学国際教育研究センターは、平成3・4年度に調査を実施し、縄文時代の埋没河川を検出した農学部連合獣医学科棟敷地の東に隣接して計画されたことから、予備発掘調査を経ずして予定地全域を対象に本発掘調査を実施することとなった。

当地は、既往の調査により古代官衙関連遺構が密に確認されている、構内南東部の南東から北西に伸びる丘陵（吉田構内動物医療センター、共同獣医学部解剖実習棟、総合病性鑑定研究施設、総合研究棟敷地）の末端部に当たると推定され、その地形は本学吉田地区統合移転前の航空写真に棚田としてわずかに認めることができるが、統合移転最初期の現理学部3号館建設の際に大きく削平を受けたようで、遺構が遺存するのは旧地形での低地となる調査区北東端部のみであった。検出された遺構としては、自然河川1条（NR1）と性格不明の土壙状遺構1基（SX1）がある。

自然河川跡は、河底の高低差から北東－南西に走るようであり、希薄ながらも縄文時代晩期土器を埋土に包含することから、農学部連合獣医学科棟敷地にて確認された河川と同一のものと考えられ、河川幅は20～30mに復元される。当河川は、農学部連合獣医学科棟調査区内で西南に屈曲することから、昭和62年度に実施した現メディア基盤センター棟敷地の調査にて検出された縄文時代河川跡[註1]と同一のものである可能性が高いと推定されたが[註2]、以降両地点間において河川跡を確認できていない。既往の調査により、吉田構内においては、東や南の山間部を起源とする複数の谷筋や流路が複雑に入り混じっていることが判明しつつあるが、両河川に関する同一性の判断は保留すべきと考える。なお、今回検出した河川埋土中には、弥生土器の可能性がある小片も含まれることから、河川の機能時期については注意が必要である。

また当調査では、河川埋土に包含される縄文土器が極めて希薄であった。農学部連合獣医学科棟調査区で検出した河川では、土器の分布状況から右岸の岬状突出部を中心に水場としての使用が推定されている。縄文時代晩期の集落は、河川右岸の低地側に展開していた可能性が指摘されるが、これも将来の調査に期待したい。

河川埋土を掘り込んでいる土壙状遺構（SX1）は、長径約1.6m×短径約1.2mの楕円形であり、深さは0.35mを測る。明確な柱根腐蝕痕や柱抜き取り痕は観察されず、形状や規模、埋没河川上にあることなどから井戸の可能性も考慮されたが、明確な根拠を得るに至らなかった。出土遺物は土器の細片に限られるものの、古代に所属する須恵器が含まれていることから、所属時期の上限の一端ををうかがい知ることができる。

この他、平成23年度に調査区の北隣接地にて実施した特高受変電設備棟新営工事に伴う発掘調査では、出土遺物から平安時代後期から鎌倉時代にかけて機能していたと推定される、南東から北西に走る自然河川が確認された[註3]。この河川は、調査区南東端部での河底が標高21.0mであったことから、当調査区においてその上流部が検出されるものと想定していたが、調査区北部域、標高21.5mの地山面でその痕跡を確認することができなかった。両調査区の隔たりは約12mであり、この距離での急激な河底の上昇は想定し難いことから、当河川は特高受変電設備棟敷地から東に屈曲して上流に至るものと思われる。

以上が当発掘調査のまとめである。確認された遺構は少数であったが、元来丘陵末端部であったこの地に遺構が希薄であったとは考え難い。本学吉田地区統合移転工事最初期である昭和41年（1966）には当地が削平されていることが諸記録から判明している。統合移転に際しては、昭和42年（1967）に山口大学吉田遺跡調査団を結成し、埋蔵文化財保護活動を開始したとの記録が残るものの、当館設立以前

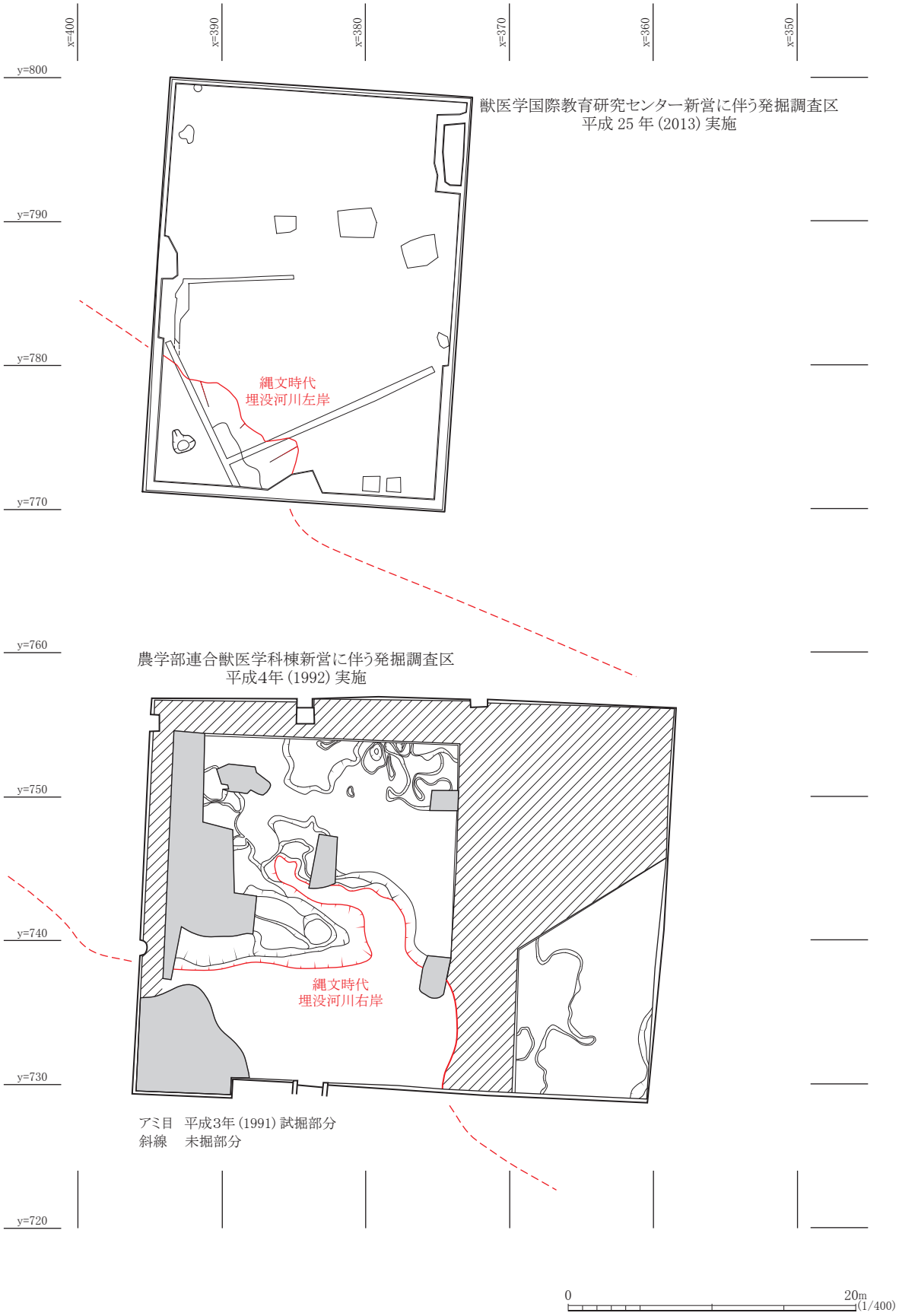


図 10　既往調査との位置関係

は学部校舎等大規模施設新営時に十分な埋蔵文化財保護措置を施していない。本学としては負の歴史と言えるが、今後人類の共有財産たる埋蔵文化財を護り続ける上での反省を含めて、当調査では重要な成果を得たと考えたい。

【註】

1）河村吉行（1988）「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』，山口

2）豆谷和之（1994）「吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ＸⅡ』，山口

3）横山成己（2015）「特高受変電設備棟新営に伴う本発掘調査・立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成23年度－』，山口

2．第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査

調査地区　吉田構内F-16、G-16・17区

調査面積　692㎡

調査期間　平成25年10月10日～12月27日

調査担当　横山成己　川島尚宗　石丸恵利子

調査結果

（1）調査の経緯（図11、写真50・51）

吉田構内第1武道場耐震改修その他工事に伴い、陸上競技場北東側に位置する2棟の体育器具庫が解体され、新たに体育器具庫が建設されることとなった。既往の埋蔵文化財調査により、周辺地には弥生時代から古墳時代にかけての遺構・遺物が密に分布していることが確認されている。現在遺構が地下に埋め戻し保存されている「遺跡保存公園」においては、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての竪穴住居跡が21棟[註1]、現国際総合科学部棟新営工事に伴う発掘調査では、同じく弥生時代中期から後期にかけての竪穴住居跡が4棟[註2]、さらにラグビー場防球ネット新営工事に伴う発掘調査では弥生時代終末期から古墳時代初頭の竪穴住居跡が1棟、弥生時代中期から後期にかけての大溝1条[註3]が検出されている。

また開発予定地の東に隣接する第2体育館新営に伴う発掘調査では、弥生時代の大溝3条が検出され[註4]、さらに既設の東南端の体育器具庫新営に伴う試掘調査では、調査区の北端と中央で時期不明の河川が2条確認されている[註5]ことから、当該地に何らかの埋蔵文化財が埋存することは確定的と考えられた。

当事業計画に関しては、平成24年度末の段階で工事内容が不明確であり、埋蔵文化財保護対応は当館館長の裁量に委ねられていたいたが、既設の2棟の体育器具庫は設置に際し事前の発掘調査を実施しておらず、新営される体育器具庫は地下のほぼ全域に巨大なピットが設けられる予定であったため、本発掘調査を実施し、埋蔵文化財の遺存状況を確認することが承認された。

図 11　調査区位置図

写真 50　調査地遠景（南から）

写真 51　調査前近景（北西から）

【註】

1）河村吉行（1988）「山口大学吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和59年度）」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』,山口

河村吉行（1990）「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（昭和60・61年度）」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅷ』,山口

河村吉行（1991）「吉田構内遺跡保存地区の発掘調査（総括）」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』,山口

2）河村吉行（1982）「教育学部構内H-19区の発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』,山口

3）磯部貴文・河村吉行（1985）「吉田構内ラグビー場防球ネット設置に伴う調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口

4）村田裕一・中村仁美（2000）「吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』,山口

5）豆谷和之（2000）「吉田体育器具庫及び便所新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』,山口

（2）調査の経過（写真52）

調査は獣医学国際教育研究センター棟の新営に伴う本発掘調査終了直後の10月10日より着手した。10月15日に重機掘削を終え、10月31日に遺構面を検出したところ、調査区長軸に直交して幅約30mの黒褐色土が存在することが確認されたため、解体した体育器具庫の布掘り基礎部を利用してトレンチ調査を実施し、土層断面により黒褐色土の性格および深度を確認することとなった。その結果、幅約30mにわたり複数の河川と溝が並列して存在し、深いものでは深度が1.2mに及ぶことが確認された。

11月13日までに遺構を覆う遺物包含層を除去し、遺構検出を行った後、遺構掘削を進めた。当初の調査計画は11月半ばが終了予定であったが、人力掘削の土量が予想を遥かに超え、またトレンチ調査時に溝底面に杭列等を確認し、木製品の良好な遺存が想定されたことなどから、関係部局との調整により、12月後半まで調査を延長することとなった。

遺構掘削は12月19日をもって終了し、12月20日までに木製品の取り上げを終え、12月24日に完掘写真を撮影、12月25日から27日にかけて各種記録作業を実施し、調査を終了した。

（3）基本層序（図12、写真88～95）

調査区における基本層序は、中部から北西部にかけては①表土・真砂（5～15㎝）、②旧耕土（5～14㎝）、③旧床土（2～18㎝）、④地山であるが、北西端部は棚田状に落ち込んでおり、表土下に造成土が置かれている。調査区南東部は①表土（10～15㎝）、②遺構基盤層となっている。表土下の遺構基盤層は風化岩盤層であり、大きく削平を受けていることが分かる。なお、中北部の遺構基盤層である、明黄色・オリーブ色等のシルト層や砂礫層は、いわゆる地山ではなく、縄文時代の土器を包含している。

（4）遺構（図12、写真53～55）

大きく削平を受けている調査区南東部には遺構は遺存していない。検出した遺構は全て調査区中～北西部にかけてであり、自然河川1条（NR1）、溝6条（SD1a・b、SD2a・b、SD3、SD4）、溝底部の性

写真 52　遺物包含層上面検出状況（南から）

写真 53　遺構検出状況（南東から）

写真 54　SD1・2検出状況（南西から）

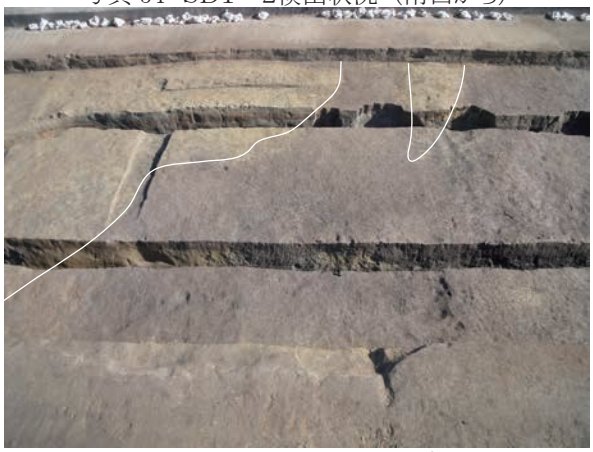


写真 55　NR1・SD4検出状況（南西から）

格不明土壙状遺構4基（SX1～4）、土壙3基（SK1～3）を数える。

遺構の先後関係に関する概要を先に述べる。SD3はNR1左岸からの導水のための溝であり、両者が同時期に存在したことが分かる。SD2a・bはNR1の南東に隣接する。平面的に2条の溝に見えるが、埋土の観察では同時期に機能しており、大溝の両縁部を深く掘りくぼめたものと解釈できる。SD3との関係については、重複部が近代の水田床土により破壊されているため（図11の西壁7層）、切り合いを確認することができなかった。水田床土がこの部分だけ深く掘り下げられ、暗渠が設けられているのは、SD2a・bおよびSX3、SD3が地下に存在することに起因すると思われる。SD1a・bはSD2a・b南東に隣接し、一部重複する。既設の排水枡とヒューム管、水道管に大きく破壊されているが、SD2aを切り込んで形成されている。SD1aはSD1bの掘り直しである。SD4はNR1の北に隣接し、一部重複する。NR1が埋没した跡の溝であるが、調査区西側では明確な掘り込みが見られない。

溝内部の性格不明土壙状遺構4基は、SX1がSD2a、SX2および3がSD2b、SX4がNR1とSD3の接続部に設けられている。

SK1は、NR1の右岸に接する土壙である。NR1の埋土最上層下に検出されたため、NR1完全埋没前のものである。SK2は、NR1の右岸近く、SD4の埋土下より検出されている。SK3はNR1埋土掘削時にプランを確認することができず、土層観察用アゼの断面観察時にその存在を確認したため、その規模は不明である。NR1がほぼ埋没した時点で掘り込まれた土壙であり、埋土上部にはNR1埋土最上層が堆積することから、SK1と同時期の可能性もある。以下に、各遺構の特徴を記するが、種別順ではなく遺構の位置（北西から南東）の順に報告する。

自然河川（NR1）（図13・14、写真56～65）

NR1は緩やかに北に湾曲しながら西流しており、調査区東側で幅約12.4m、西側で幅約6.6mを測る。深さは0.8～1.2mほどで、上流に当たる調査区東壁側で標高16.1m、下流側にあたる西壁側で16.0mを測る。

埋土は、下層（L5）が水流堆積である黒色砂礫または黒色の粘土層で、中層（L2～4）は黒褐色・オリーブ黒色の砂を含む粘質土、上層（L1）は暗オリーブ色の粘質土となっている（写真56～60）。中層下位から下層にかけては自然木や杭、矢板などが流れ込んでいるものの、その量は顕著でない（写真61～63）。

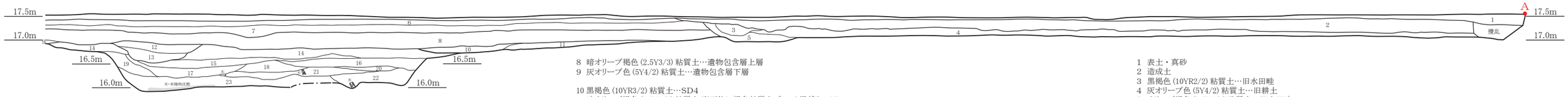
調査区西壁付近の右岸側河底部に、杭と矢板が密集して打たれている地点を確認した（図11「杭・矢板密集地点」、写真64・65）。矢板は水流方向に対して面を平行させているものが多いことが気にかかるが、調査区外であるため断定はできないものの、左岸に向かって伸びているようで、井堰の可能性が指摘される。その他の川底部にも数箇所に杭が打たれていることを確認したが、規則性は見られなかった。

埋土中の遺物は希薄で、下層には少数ながら弥生時代前期の土器が含まれることから、弥生時代前期以降に機能した河川であることが分かる。遺物の希薄さは、総合図書館3号館敷地にて確認された多量の遺物を包含する弥生時代以降の自然河川[註1]と対照的である。この相違は、集落との距離に関係すると思われるが、総合図書館の河川がゴミの廃棄場所として使用されているのに対し、当調査にて検出された河川は、弥生時代集落の農業用・日常生活用として活用され、人為的に管理されていた結果と推定される。埋土中～上層の遺物は、古墳時代前期が下限となっており、古墳時代前期をあまり下らない時期に完全埋没したと見なされる。

溝3（SD3）・性格不明土壙状遺構4（SX4）（図13・14・16、写真66～70・94・95）

SD3はNR1の左岸に接続し、南方向に走る溝であり、NR1との接続部底面に掘り込まれた楕円形の

西壁

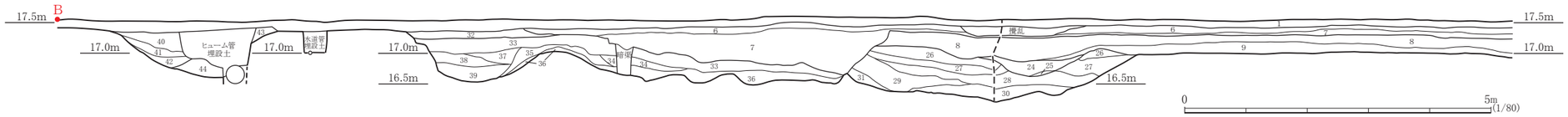


8 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土…遺物包含層上層
9 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土…遺物包含層下層

10 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土…SD4
11 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土 ※下位に褐色粘質土ブロック混ざる…SD4

1 表土・真砂
2 造成土
3 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土…旧水田畦
4 灰オリーブ色 (5Y4/2) 粘質土…旧耕土
5 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土…旧水田畦
6 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 砂質土…旧耕土
7 オリーブ褐色 (2.5Y4/4) 砂質土…旧床土

12 黒褐色 (2.5Y2/3) 粘質土 ※褐色土ブロック混ざる…NR1最終流路か
13 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂 ※砂 0.1 ～1㎝φ…NR1最終流路か
14 暗オリーブ色 (2.5Y3/3) 弱粘質土 ※0.3 ～ 0.7 ㎝の砂粒混ざる…NR1L1
15 黒褐色 (10YR2/2) 強粘質土 ※0.5 ～ 0.8 ㎝の砂粒少量混ざる…NR1L2
16 黒褐色 (10YR2/3) 粘質土 ※0.4 ～1㎝の砂粒多く混ざる…NR1L3
17 オリーブ黒色 (2.5Y3/3) 弱粘質土 ※シルト質…NR4L3
18 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土 ※0.6 ～1㎝φの砂粒少量混ざる…NR1L3
19 明灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土…NR1L3
20 オリーブ黒色 (5Y3/1) 粘質土 ※灰オリーブ色の粘土ブロックが混ざる…NR1L4
21 黒褐色 (2.5Y3/1) 砂礫 ※砂 0.5 ～2㎝φ…NR1L4
22 オリーブ黒色 (5Y3/1) 強粘質土…NR1L5
23 黒色 (5Y2/1) 砂礫 ※砂礫 0.5 ～ 1.5 ㎝φ 下部に木片が堆積…NR1L5

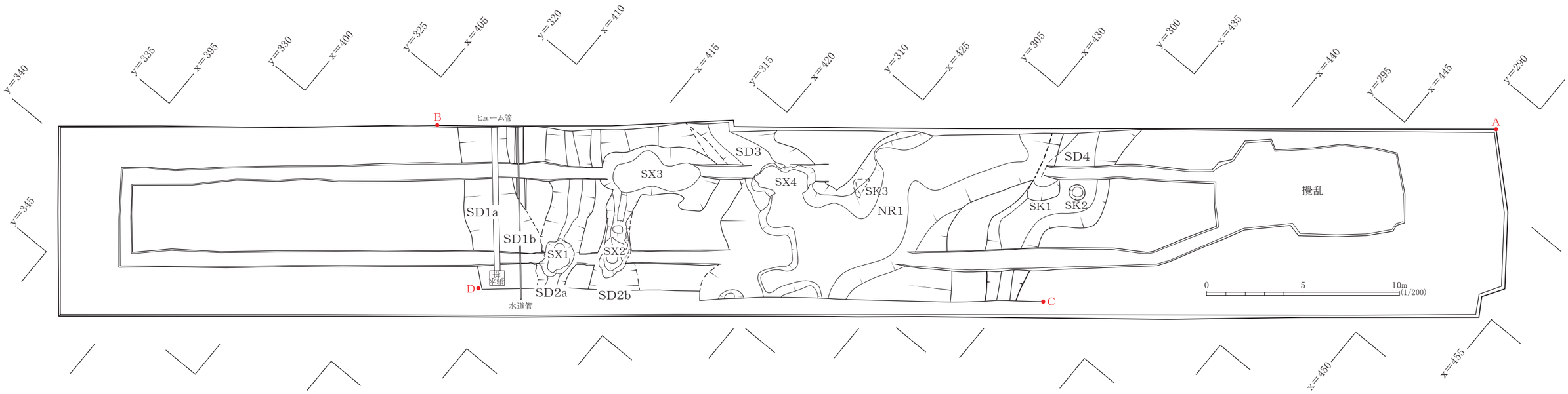


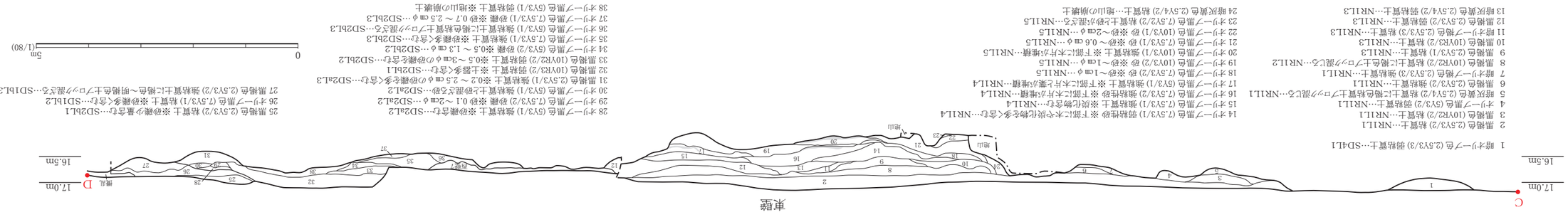
40 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 砂質土 ※1～4㎝の褐色土ブロック混ざる…SD1aL1
41 オリーブ黒色 (5YR3/1) シルト…SD1aL2
42 オリーブ黒色 (5Y2/2) 砂質土…SD1aL3
43 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 弱粘質土…SD1bL1
44 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土 ※1～ 1.5 ㎝φの赤褐色土ブロック混ざる…SD1bL3

32 黒褐色 (2.5Y3/2) 弱粘質土…包含層上層 (8) と同一層か

33 黒褐色 (2.5Y3/2) 砂混じり粘質土 ※砂 0.3 ～ 0.5 ㎝φ…SD2L1
34 黒色 (10YR2/1) 粘質土…SD2L2
35 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土…SD2L2
36 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 ※0.3 ～1㎝φの砂多く混ざる…SD2L3
37 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土…SD2aL2
38 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土…SD2aL2
39 黒色 (10YR2/1) 粘質土…SD2aL3

24 オリーブ黒色 (5Y3/2) 粘質土…SD3最終流路か
25 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂 ※砂 0.1 ～ 0.5 ㎝φ…SD3最終流路か
26 暗オリーブ色 (2.5Y3/3) 弱粘質土 ※0.3 ～ 0.7 ㎝の砂粒混ざる…SD3L1
27 黒褐色 (10YR2/2) 強粘質土 ※0.5 ～ 0.8 ㎝の砂粒少量混ざる…SD3L2
28 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土 ※炭化物少量混ざる…SD3L3
29 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 強粘質土…SD3L4
30 オリーブ黒色 (5Y3/1) 砂 ※砂 0.2 ～ 0.8 ㎝φ…SD3L4
31 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 ※赤褐色・褐色の粘質土ブロック混ざる…SD3L4





1 暗オリーブ色 (2.5Y3/3) 弱粘質土…SD4L1

2 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土…NR1L1
3 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土…NR1L1
4 オリーブ黒色 (5Y3/2) 弱粘質土…NR1L1
5 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土に褐色粘質土ブロック混じる…NR1L1
6 黒褐色 (2.5Y3/2) 強粘質土…NR1L1
7 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 強粘質土…NR1L1
8 黒褐色 (10YR2/2) 粘質土に褐色土ブロック混じる…NR1L2
9 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘質土…NR1L2
10 黒褐色 (10YR3/2) 粘質土…NR1L3
11 暗オリーブ褐色 (2.5Y3/3) 粘質土…NR1L3
12 黒褐色 (2.5Y3/2) 弱粘質土…NR1L3
13 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 弱粘質土…NR1L3

14 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 弱粘性砂 ※下部に木々炭化物多く含む…NR1L4
15 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 強粘質土 ※炭化物含む…NR1L4
16 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 強粘性砂 ※下部に木片が堆積…NR1L4
17 オリーブ黒色 (5Y3/1) 強粘質土 ※下部に木片と藻が堆積…NR1L4
18 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 砂 ※砂～1㎝φ…NR1L5
19 オリーブ黒色 (10Y3/2) 砂 ※砂～1㎝φ…NR1L5
20 オリーブ黒色 (10Y3/1) 強粘質土 ※下部に木片が堆積…NR1L5
21 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 砂 ※砂～0.6㎝φ…NR1L5
22 オリーブ黒色 (10Y3/1) 砂 砂～2㎝φ…NR1L5
23 オリーブ黒色 (7.5Y2/2) 粘質土砂が混ざる…NR1L5
24 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質土…地山の崩壊土

25 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土 ※砂礫少量含む…SD2bL1
26 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 粘質土 ※砂礫多く含む…SD1bL2
27 黒褐色 (2.5Y3/2) 強粘質土に褐色～明褐色土ブロック混ざる…SD1bL3

28 オリーブ黒色 (5Y3/1) 強粘質土 ※砂礫含む…SD2aL2
29 オリーブ黒色 (7.5Y3/2) 砂礫 ※砂 0.1 ～2㎝φ…SD2aL2
30 オリーブ黒色 (5Y3/1) 強粘質土と砂混ざる砂…SD2aL2
31 黒褐色 (2.5Y3/1) 強粘質土 ※0.2 ～ 2.5 ㎝φの砂礫を多く含む…SD2aL3
32 黒褐色 (10YR3/2) 弱粘質土 ※土器多く含む…SD2bL1
33 黒褐色 (10YR2/2) 弱粘質土 ※0.5 ～3㎝φの砂礫を含む…SD2bL2
34 オリーブ黒色 (5Y3/2) 砂礫 ※0.5 ～ 1.3 ㎝φ…SD2bL2
35 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 強粘質土 ※砂礫多く含む…SD2bL3
36 オリーブ黒色 (5Y3/1) 強粘質土に褐色粘質土ブロック混ざる…SD2bL3
37 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) 砂礫 ※砂 0.7 ～ 2.5 ㎝φ…SD2bL3
38 オリーブ黒色 (5Y3/1) 弱粘質土 ※地山の崩壊土

図 12 調査区平面図／断面図

土壙状遺構がSX4である。

SD3は近代の上部からの掘り込みにより左肩部を破壊されているが、幅約3.5m、深さ約0.7mを測る。調査区西壁での溝底の標高は16.2mで、NR1から緩やかに降下している。土層断面観察により、NR1の下層（L5）はSD3に流れ込んでおらず、中層以上が同一層として堆積していることが分かる（図14中）。なお、検出範囲は短区間であるものの、NR1河底に見られる自然木などはSD3に流入していない。埋土中の土器も希薄で、わずかに多重沈線が施された弥生土器甕胴部片と、蓋裾部片が見られるのみである。

SX4は南東－北西方向の楕円形の土壙状遺構で、SD3の走方向に対し長軸がほぼ直交する。規模は長さ3.35m、幅0.8m、深さ0.3mを測る。底面には円形に杭が打ち込まれており、南東側に枝葉やイネ科の茎と見られる植物遺存体が層状に堆積している（写真68）。埋土はオリーブ黒色砂礫または粘質土で、NR1下層とほぼ同一である。埋土中に遺物は含まれていなかった。

溝4（SD4）（図12、写真61）

前述したが、SD4はNR1が完全埋没した後の溝である。東から西に走っており、上流となる調査区東壁側で幅1.6mを測るが、西に至るほど幅が広まり、肩部も不明確になる。調査区西壁側で幅約4mを測る。深さは最深部で0.25mを測る。

埋土中の遺物は希薄で、実測可能な土器は弥生土器甕口縁部のみである。NR1の埋没時期から流入と見られ、遺構の所属時期に関しては、上限を古墳時代前期以降と記するにとどめる。

土壙1（SK1）（図13・15、写真69）

SK1は、NR1右岸に位置する土壙で、SD4埋土およびNR1上層の下位に検出された。南西半部を既設体育器具庫基礎に破壊されているため、全体の形状は不明であるものの、基礎掘りの対面断面には及んでいないことから、平面形は隅丸三角形状であったと推測される。残存最大幅は1.85m、底面までの深さは約0.6mで、底面ほぼ中央に径0.2m、深さ0.17mの掘り込みが設けられている。埋土は黒色またはオリーブ色系統の粘質土で、ブロックが多く混ざる。遺構の性格に関しては、河川横でもあることから小動物捕獲用の落とし穴などが考えられるが、確証はない。埋土中に遺物は含まれていないことから、所属時期についても弥生時代以降で古墳時代前期以前と記するにとどめる。

土壙2（SK2）（図13・15、写真70）

SK2はSK1の北西約0.5mに隣接し、SD4埋土下に検出された。平面形は長軸0.85m×短軸0.8mの正円に近い楕円形で、深さは0.6mを測る。底面は平坦で、径0.6mの円形を呈す。検出時に、土壙中央部に径0.4mの柱根状痕跡（浅い黄色砂質土）を確認していたが、遺構底面まで続かないことが判明した。埋土は均質な黒褐色粘質土であり、遺物は確認されなかった。SD4は古墳時代前期以降のものであるが時期不明であるため、当遺構の時期も特定できない。

土壙3（SK3）（図13・14）

前述のように、SK3はNR1埋土掘削時にプランが確認できず破壊し、土層観察用のアゼによりその存在を確認した遺構である。遺構はNR1埋土上層（L1）下位の中層（L2）から掘り込まれており、残存規模は長さ1m、深さ0.55mを測る（図14中・下）。埋土は暗褐色～黒色の粘質土で、底面に枝葉層が認められた。NR1完全埋没直前の遺構であり、層位的に古墳時代前期に所属時期を求められるが、NR1埋土と分離しての遺構掘削は、土層観察用アゼ部分でしか行えておらず、遺物を確認することはできなかった。

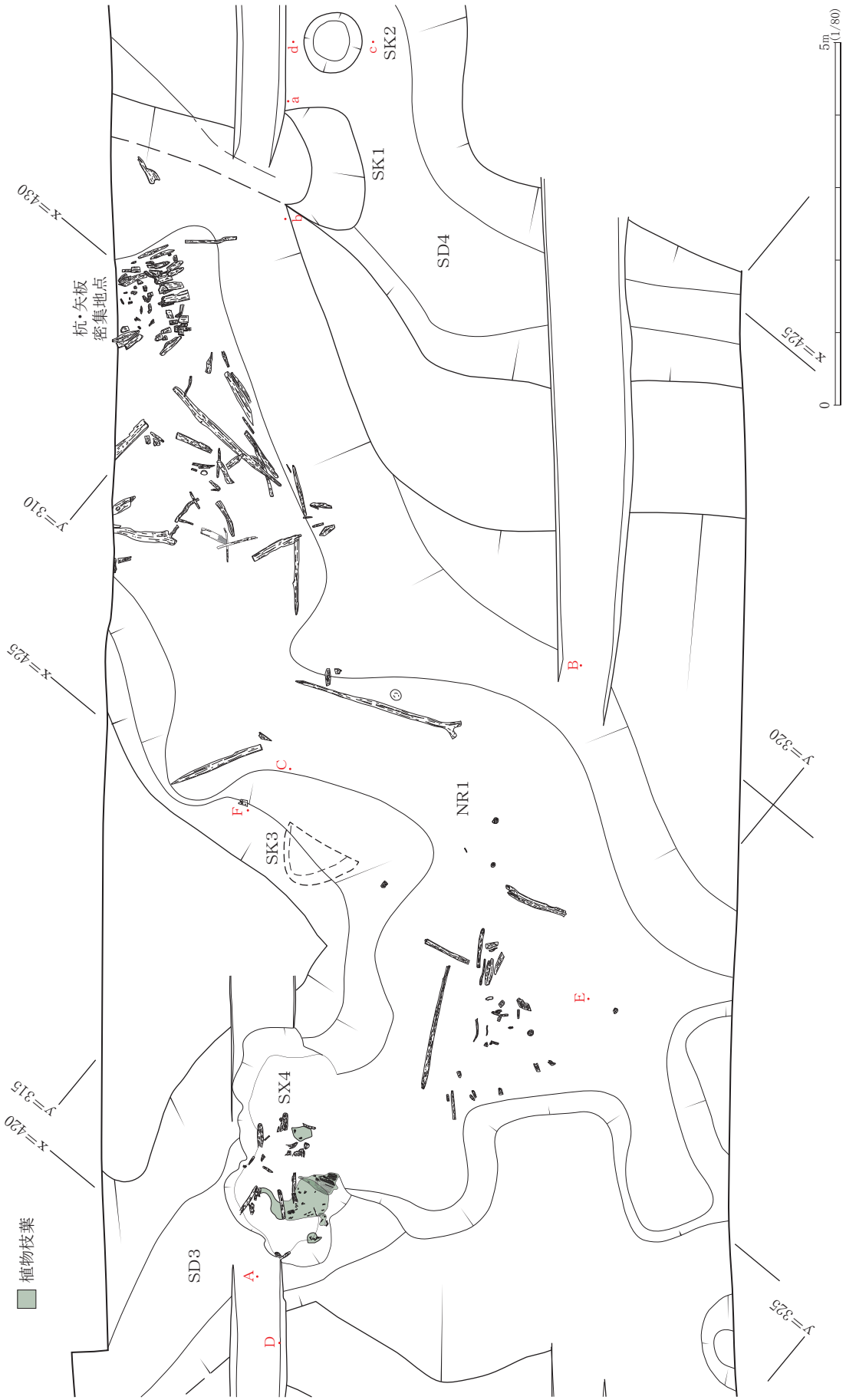
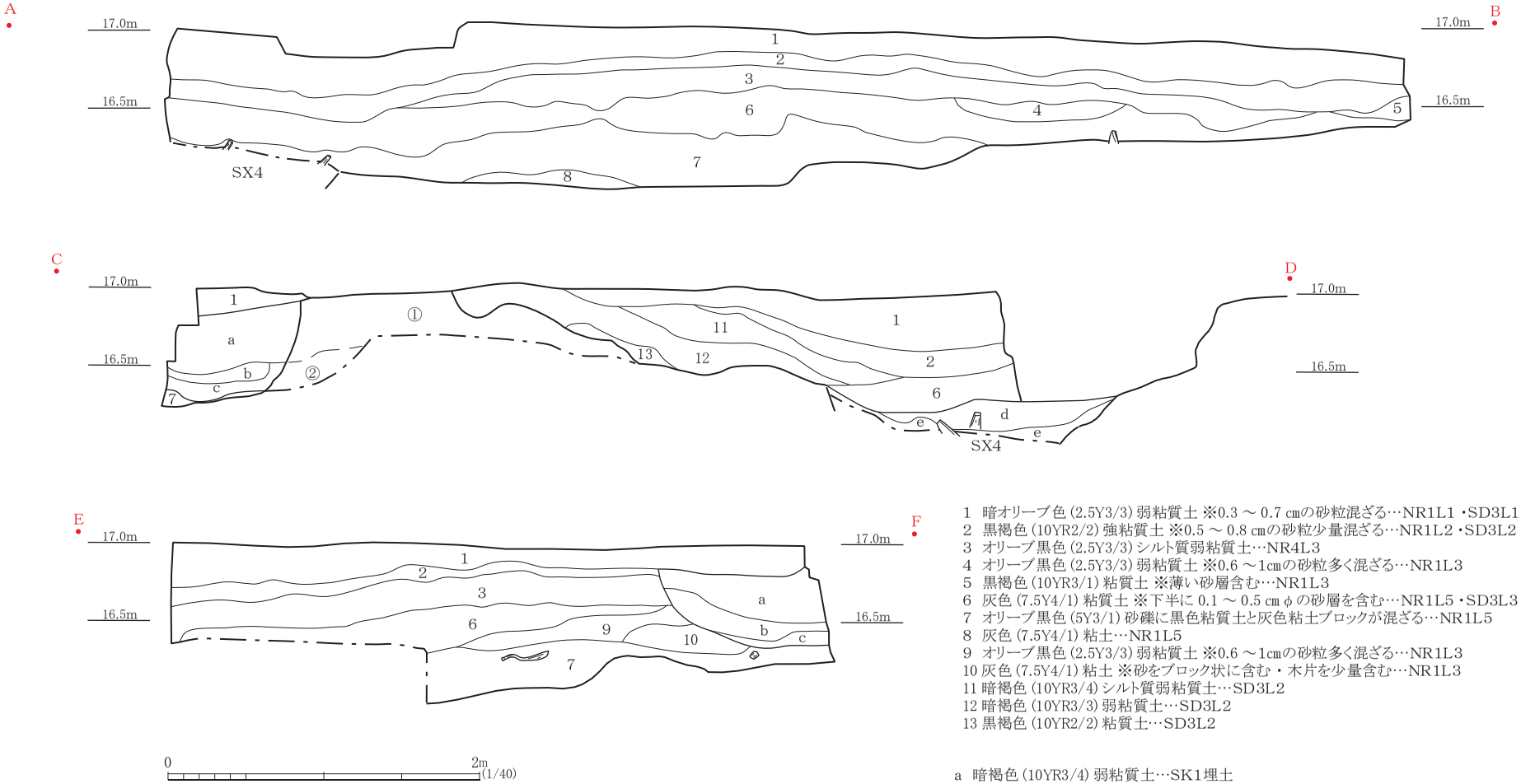


図13　北西部遺構群平面図



1 暗オリーブ色（2.5Y3/3）弱粘質土 ※0.3 ～ 0.7 ㎝の砂粒混ざる…NR1L1・SD3L1
2 黒褐色（10YR2/2）強粘質土 ※0.5 ～ 0.8 ㎝の砂粒少量混ざる…NR1L2・SD3L2
3 オリーブ黒色（2.5Y3/3）シルト質弱粘質土…NR4L3
4 オリーブ黒色（2.5Y3/3）弱粘質土 ※0.6 ～1㎝の砂粒多く混ざる…NR1L3
5 黒褐色（10YR3/1）粘質土 ※薄い砂層含む…NR1L3
6 灰色（7.5Y4/1）粘質土 ※下半に 0.1 ～ 0.5 ㎝ φ の砂層を含む…NR1L5・SD3L3
7 オリーブ黒色（5Y3/1）砂礫に黒色粘質土と灰色粘土ブロックが混ざる…NR1L5
8 灰色（7.5Y4/1）粘土…NR1L5
9 オリーブ黒色（2.5Y3/3）弱粘質土 ※0.6 ～1㎝の砂粒多く混ざる…NR1L3
10 灰色（7.5Y4/1）粘土 ※砂をブロック状に含む・木片を少量含む…NR1L3
11 暗褐色（10YR3/4）シルト質弱粘質土…SD3L2
12 暗褐色（10YR3/3）弱粘質土…SD3L2
13 黒褐色（10YR2/2）粘質土…SD3L2

a 暗褐色（10YR3/4）弱粘質土…SK1埋土
b 黒褐色（10YR3/1）粘質土 ※褐色粘質土ブロック混ざる…SK1埋土
c 黒色（10YR2/1）強粘質土…SK1埋土

d オリーブ黒色（5Y3/1）砂礫 ※砂礫 0.1 ～3㎝ φ …SD3SX4埋土
e オリーブ黒色（10Y3/1）強粘質土 ※砂がブロック状に混ざる…SD3SX4埋土

① オリーブ色（5Y5/4）シルト…地山
② オリーブ黒色（5Y3/1）シルト…地山

図14 北西部遺構群（NR1・SD3・SX4）断面図

写真 56　北西部遺構群 北－南・東－西アゼ土層断面（北東から）

写真 57　北－南アゼ南部東面土層断面（東から）

写真 58　東－西アゼ東部北面土層断面（北から）

写真 59　北西－南東アゼ南西面土層断面（西から）

写真 60　北西－南東アゼSX4土層断面（西から）

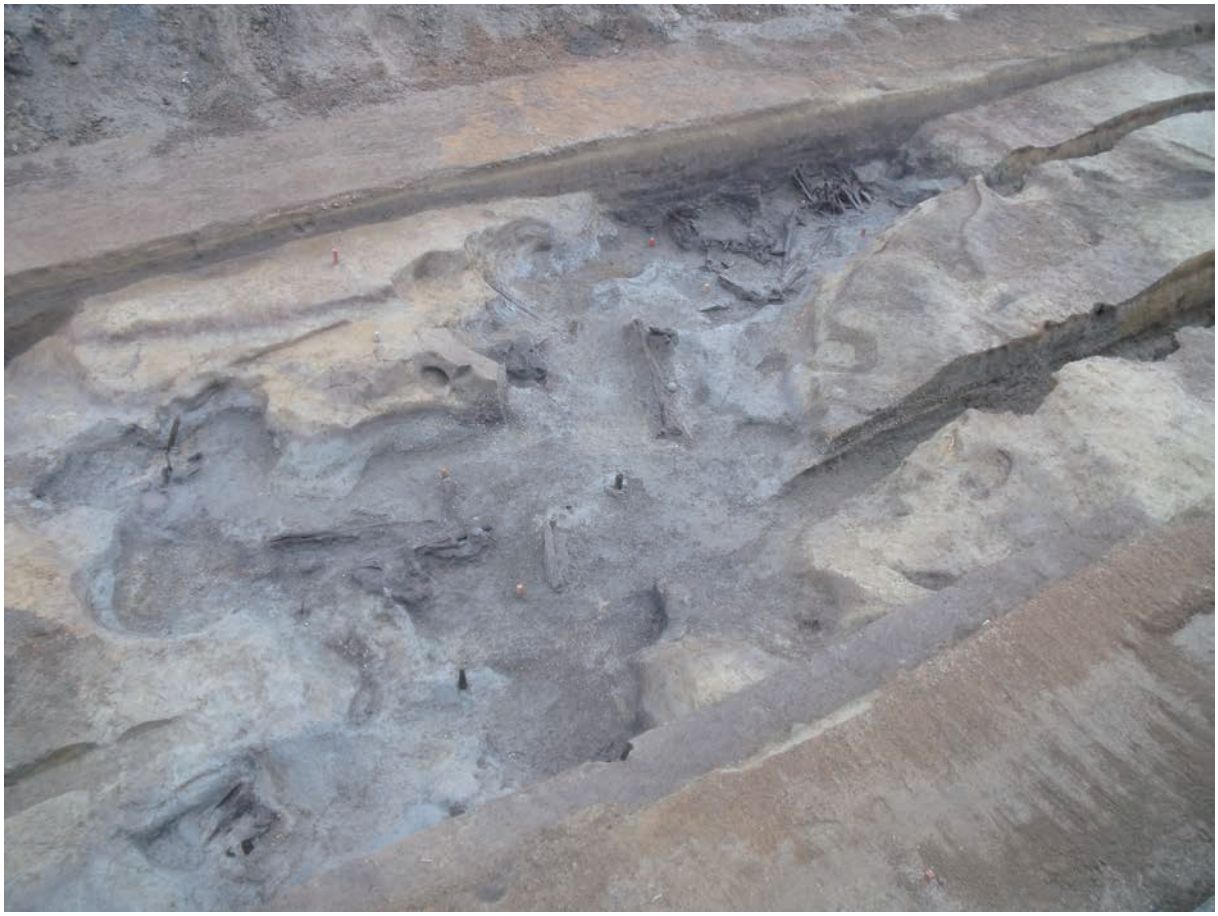


写真 61　北西部遺構群完掘状況（東から）

写真 62　NR1右岸完掘状況（東から）

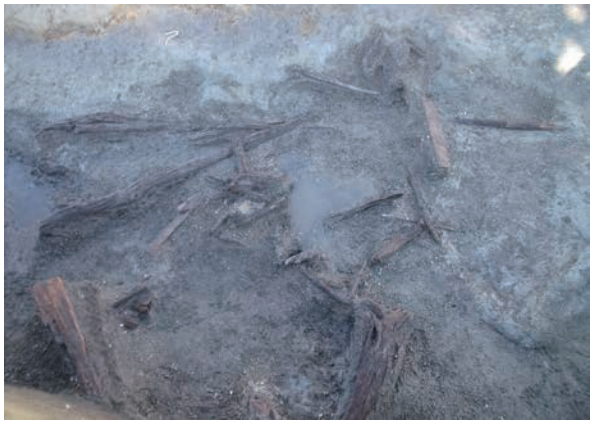


写真 63　NR1河底遺物出土状況（南西から）

写真 64　NR1右岸杭・矢板密集地点（北東から）

写真 65　NR1右岸杭・矢板密集地点（上から）

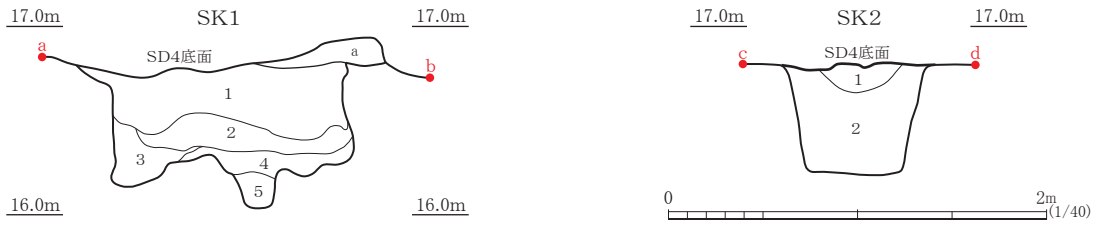
写真 66　SX4完掘状況（南東から）

写真 67　SX4完掘状況（西から）

写真 68　SX4底面植物遺存体検出状況（南西から）

写真 69　SK1断面（北東から）

写真 70　SK2半裁状況（北西から）



【SK1】
1. 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）弱粘質土に褐色土ブロック多く混ざる
2. 黒色（2.5Y2/1）粘質土に暗オリーブ色土のブロックや層を含む
3. 黒褐色（2.5Y3/2）強粘質土と砂が互層をなす
4. オリーブ灰色（5GY5/1）シルトに暗褐色粘質土ブロックが混ざる
5. 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂と暗褐色粘質土の混合層

【SK2】
1. 浅い黄色（2.5Y7/3）砂質土
2. 黒褐色（2.5Y3/1）粘質土

【NR1】
a. 暗オリーブ色（2.5Y3/3）弱粘質土…NR1L1

図 15 遺構断面図

溝2（SD2a・b）・性格不明土壙状遺構1～3（SX1～3）（図16～19、写真71～85・88・89・93）

SD2a・bはNR1の南西約4mに隣接し、調査区内を北東－南西に走る溝である。平行する2条は埋土下層において同時に埋没していることが分かるが、土層断面を見ると、再掘削の様子がうかがわれることから、一定期間の使用が想定される（図17）。SD2aの左岸部とSD2bの右岸部に比して溝間の地山が低いことから、SD2a・bと表記しているものの、当遺構は溝の両側縁を掘り下げた幅6～8mの大溝と考えられる。なお、SD2a北東部はSD1により切り込まれており、SD2b埋土上部は近代の耕作により大きく破壊されている。前述のように、この近代の耕作によりSD3との切り合い関係が不明となっている。

埋土に遺物は希薄で、弥生土器と土師器が少量出土している。遺物を見る限りでは、弥生時代後期より埋没を開始し、古墳時代前期頃には完全埋没したと推定される。

SX1はSD2aの東側溝底に掘り込まれた土壙状の遺構である（図18）。平面形は長軸約2m、短軸約1.5mの楕円形を呈し、深さは約0.3mを測る（図17）。遺構底面と傾斜部には杭や矢板が乱雑に打ち込まれており、遺構の左傾斜部に密集する（写真73・75）。また、SX1の南西側（溝下流側）両側縁にも杭の抜き取り跡が多数見られる。

遺構底面の標高は16.2mを測り、検出後は調査期間を通して湧水が見られた。埋土は均質な黒褐色弱粘質土で、杭・矢板以外の遺物は含まれていなかった。

SX2はSD2bの東側溝底に掘り込まれた土壙状の遺構であり、SX1に並列している。平面形は長軸3.1m、短軸1.3mの長楕円形を呈する。深さは0.5mを測る。掘り方はSX1とやや異なり、長軸北東側は2段掘り状に、南西側は階段状に掘り込みを行っている。底面はSX1に比して小さく、径0.55mの円形を呈している（図18）。こちらも杭と矢板が打ち込まれていたが、遺構の北東掘り込み部から遺構の両側縁に列状に並んでおり、SX1とは相違を見せている（写真74・75）。

遺構底面の標高は15.8mを測り、SX1同様調査期間を通して湧水が見られた。 埋土は均質な黒色強粘質土で、こちらも杭・矢板以外の遺物は確認できなかった。

両者の機能に関しては、木製農工具などの未製品を水漬け状態で保管するための環状矢板杭列[註2]に類するものとも思われるが、前述の通り杭・矢板以外の木製品が全く見られないことから断定できない。また、NR1とSD3の接続部分に設けられた形態的に類似するSX3や、当調査区に隣接する第2体育館新営に伴う発掘調査にて検出された、大溝2と大溝3接続部分に設けられ、植物の枝葉など植物が遺存する土壙状遺構[註3]とは、設置位置や埋土内の堆積物において相違が見られる。両調査区での状況を考えると、同様の施設が周域に埋存している可能性は極めて高いと思われることから、今後の調査に期待し

たい。

SX3はSD2bの南西側に掘り込まれた土壙状の遺構で、SX1・2とは異なり溝に対して直交して設けられている。平面形は長軸6.2m×短軸2.6mの長楕円形を呈しており、深さは最深部で0.95mを測る（図17）。SD2bを通過した水は、SX3東南端部に流入し、オーバーフローした水が南西方向に流出する構造となっている。SX1・2同様、調査期間を通じで遺構底面からの湧水を見た。

この遺構で注目される点は、遺構のほぼ中央部に遺構長軸に直交する方向で、木製の柵状施設が設けられていたことである（写真78・80）。柵状施設は、9本の杭の上部に1本の横木が添えられた状態で確認されており、規模は横木幅1.1m、縦杭長約0.8mを測る。横木と縦杭は連結されていなかったが、植物等で緊縛されていた可能性を残す。北東方向にやや横倒しの状態で検出されており、縦杭の上面下位には網代編み製品が貼り付けられていた（図19右、写真81～84）。また、柵状施設の下面には枝葉がおよそ10㎝の厚みで敷き詰められていた（写真85）。

さらに、この柵状施設をはさみ南東と北西部には堆積物に大きな相違が見られる。SD2bから水が流入する南東部には、北端部に矢板が複数打ち込まれており、遺構内部には幾層にも枝葉層が重なり、これらの枝葉層に網代編み製品が重なる状態で複数検出された（写真76～68・80）。一方で北西部には顕著な枝葉層は見られず、北端部に自然木の集中箇所が見られるのみであった（写真79）。網代編み製品は、樹種鑑定の結果いずれもイネ科タケ亜科であることが判明した。枝葉層については、1層を対象に数枚のサンプリングを行い、樹種鑑定を実施したが、アカガシ、トチノキ、ゴヨウツツジ、メギ、ゴヨウツツジ、メギ、ニワトコ？、ノグルミ？、ハイノキ属？、ブナ属？など多様な樹種が確認された（本書付篇1参照）。枝葉層や網代編み製品については、SD2a・b、SX1・2には何ら痕跡が見られないことから、SX3に人為的に入れられた可能性が高い。

当遺構の機能に関しては、浅学のため他に類例を見出せていないが、中央の柵状施設や枝葉・網代編み製品の存在から、木器未製品の保管施設である可能性は低いと考えている。水の動きを復元すると、SD2bを辿った水が南東部に落ち込み、枝葉・網代編み製品層を経て柵状施設を通過し、遺構北西部の空間に溜まることとなる。これらの状況を考えるに、飲用を含む生活用水の取水施設であった可能性が高いのではなかろうか。

山口県の弥生時代集落遺跡では、これまで明確な井戸は確認されておらず、当県の弥生時代の大きな特徴の一つとなっている。これは、3方を海に囲まれ、小河川に恵まれている[註5]という地理的環境によると推定される。以前より漠然と「河川の水を活用していた」と推測していたが、これが生活用水の取水施設であれば、初の具体的な事例となる。埋蔵文化財調査にて自然河川や大溝が検出された場合、しばしば部分的なトレンチ調査のみ実施される状況を見かけるが、今後全面的な掘削調査の実施が増えれば、類似例が増加すると思われる。SX1・2同様、今後の調査に期待したい。

溝1（SD1a・b）（図12・16・17、写真55・86・87・92）

SD2bの南東に隣接する北東－南西方向に走る溝で、SD1bの掘り直しがSD1aである。SD1bは調査区東側でSD2bを切り込んでいる。2条の溝の重複部分は、排水枡・ヒューム管および水道管取設により大きく破壊を受けていたため、平面的にSD1aを検出することは困難であった（図12西壁断面図・図16、写真55）。規模としては、SD1aは幅2.2m以上で深さ約0.5m、SD1bは1.8m以上で深さ約0.7mを測る。上部は後世の削平を受けていることから、元来の規模はさらに大きくなる。両者の埋土は類似しており、黒オリーブ・黒褐色系統の粘質土・砂質土である。

埋土中の遺物は極めて希薄で、土師器小片が多い。ある程度時期の分かるものとしては、SD1a埋土

中層から近世の粗陶器が1点出土したに過ぎない。規模や埋土の類似性から、両者はともに近世の用水路と推測される。

遺物包含層（図12、写真88～95）

遺物包含層は、調査区北西部の棚田が1段下がる地点から、調査区南東部のSD2にかけて、幅約30mの範囲で確認された。調査区北西部は棚田を設ける際に、調査区南東部は元来微高地であった地点を大学造成時に削平した際に消滅したと考えられる。

暗オリーブ褐色粘質土である遺物包含層は、0.2～0.4mと厚く堆積しており、NR1左岸とSD2右岸の間は下位にもう1層（灰オリーブ色粘質土）が厚さ約0.2mで堆積している。確認時に前者を遺物包含層上層、後者を遺物包含層下層と名付けたが、人力掘削の効率化のため、層位的な掘削を行うことができなかった。

包含される遺物は、弥生時代から中世にかけてのものであり、包含層の形成時期をうかがい知ることができる一方で、量的には希薄であった。この事実は、弥生時代以降当地周辺が集落域ではなく農耕地として利用されていたことを物語っている。

【註】

1）横山成己（2016）「図書館改修工事及び環境整備（図書館周辺道路迂回）工事に伴う本発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』，山口

2）佐藤浩司（2017）「豊前地域の木製農具」，第183回九州古文化研究会・第2回弥生時代研究部会資料

3）村田裕一・中村仁美（2000）「吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』,山口

4）井戸として可能性が高いものに、吉永遺跡（下関市豊浦町）Ⅴ地区のSK3115が挙げられる。長径0.84m、短径0.74mの円形土壙で、深さ約1.2m地点で湧水のため掘削が断念されている遺構である。

向上昭彦ほか（2003）『吉永遺跡（Ⅴ地区）』山口県埋蔵文化財センター調査報告第38集，（財）山口県埋蔵文化財センター（編），山口

5）平成28年4月30日現在、二級河川数・河川延長は北海道（467、4,287.9km）に次ぐ全国2位（434、2,211.7km）である（総務省統計局公表）。

（5）遺物（図20～25、写真96～101、表5・6）

【土器】

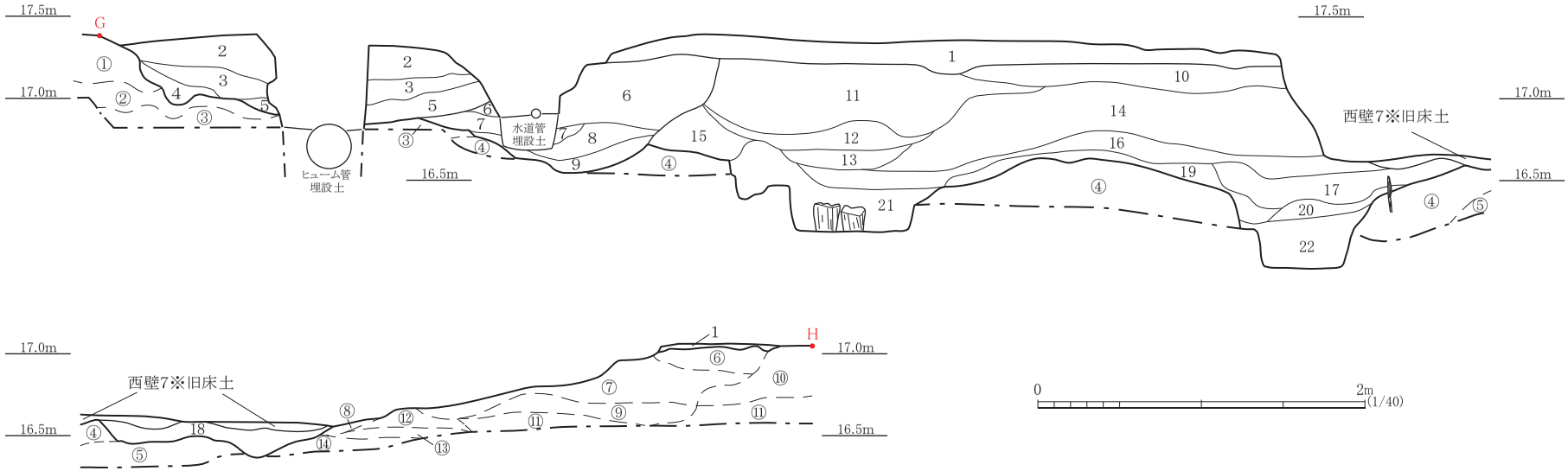
ここでは層位・遺構ごとに概要を記す。

遺物包含層（図20の1～12、写真96・97）

1～4は弥生土器。**1**は甕の口縁部片。「く」の字状に短く屈曲させ、口縁端部を丸く収める。体部内外面はハケ後ナデが施される。2・3は底部片。**2**は厚手平底の底部片で、直立気味に体部が立ち上がる。底部復元径は8.0cmを測る。底部内外面は指押さえおよびナデにて調整され、体部外面はハケ調整後ナデが施される。**3**も平底の底部片であるが、外方に大きく開いて体部が立ち上がることから、壺底部と見られる。小片のため底部径の復元不能。調整は2と同様である。4は高坏の脚柱部片。残存長5.8cm、脚柱径5.4cmを測る。内面調整は指押さえおよびナデ、外面は風化が著しく観察不能である。

5・6は古墳時代に所属する。**5**は須恵器壺の底－体部片。残高6.4cm、底部復元径10.4cm、残存体部復元径22.3cmを測る。体部は内外面とも回転ナデが施されているが、外面底部付近はヘラ削りが施されている。**6**は土師器甕。頸部を「く」の字状に屈曲させ、口縁端部は鈍く面を取る。復元口径14.7cm、残

図16　北西部遺構群平面図



1 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）粘質土…遺物包含層

2 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土 ※2cmの灰色土ブロック混ざる…SD1aL1
3 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂質土 ※白色シルトを薄い層状に含む…SD1aL2
4 オリーブ黒色（5Y3/2）砂質土 ※2層に似たブロック多く混ざる…SD1aL3
5 黒褐色（10YR3/2）シルト質粘質土…SD1aL3
6 黒褐色（10YR3/2）弱粘質土…SD1bL1
7 暗オリーブ褐色（2.5YR3/2）砂質土…SD1bL2
8 オリーブ黒色（5Y3/2）シルト ※粘質土ブロック混ざる…SD1bL2
9 黒褐色（2.5Y3/1）強粘質土…SD1bL3
10 暗灰黄色（2.5Y4/2）砂質土…SD2L1
11 黒褐色（10YR2/3）砂混じり粘質土 ※砂 0.3 ～ 1.5 cm φ…SD2L1
12 黄灰色（2.5Y4/1）弱粘質土 ※下半に砂を多く含む…SD2aL1
13 黒褐色（10YR3/1）弱粘質土…SD2aL2
14 黒褐色（10YR3/2）砂質土 ※砂 0.5 ～ 0.7 cm…SD2L2
15 黒褐色（10YR3/2）弱粘質土 ※幅2～3cmの砂層を含む…SD2L2
16 黒褐色（10YR3/1）弱粘質土…SD2L3
17 黒色（10YR1.7/1）強粘質土…SD2L3
18 黒褐色（2.5YR3/2）粘質土 ※オリーブ褐色の粘土ブロック混ざる…SD2L3
19 黒褐色（10YR3/2）粘質土 ※0.5 ～ 0.7 cmの砂粒多く混ざる…SD2L3
20 黒褐色（10YR3/1）粘土混じり砂礫…SD2L3
21 黒褐色（10YR3/1）弱粘質土…SD2SX1a埋土
22 黒色（10YR1.7/1）強粘質土…SD2SXb埋土

①黄褐色（2.5Y5/4）シルト
②黒色（2.5Y2/1）シルト
③暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト
④灰色（5Y4/1）シルト ※帯状黒色層を含む
⑤灰色（7.5Y4/1）砂礫
⑥黄褐色（2.5Y5/3）シルト
⑦灰オリーブ色（5Y4/2）砂礫
⑧灰オリーブ色（5Y5/2）砂礫
⑨黄褐色（10YR5/6）砂礫
⑩黄褐色（2.5Y5/4）シルト
⑪灰オリーブ（5Y5/2）砂礫
⑫オリーブ褐色（2.5YR4/6）シルト ※粘土ブロック含む
⑬灰黄褐色（10YR4/2）シルト ※酸化マンガン含む
⑭灰オリーブ（5Y4/2）シルト ※酸化マンガン含む

図17 南東部遺構群（SD1・2）土層断面図

図18 SX1・2平面図・断面図

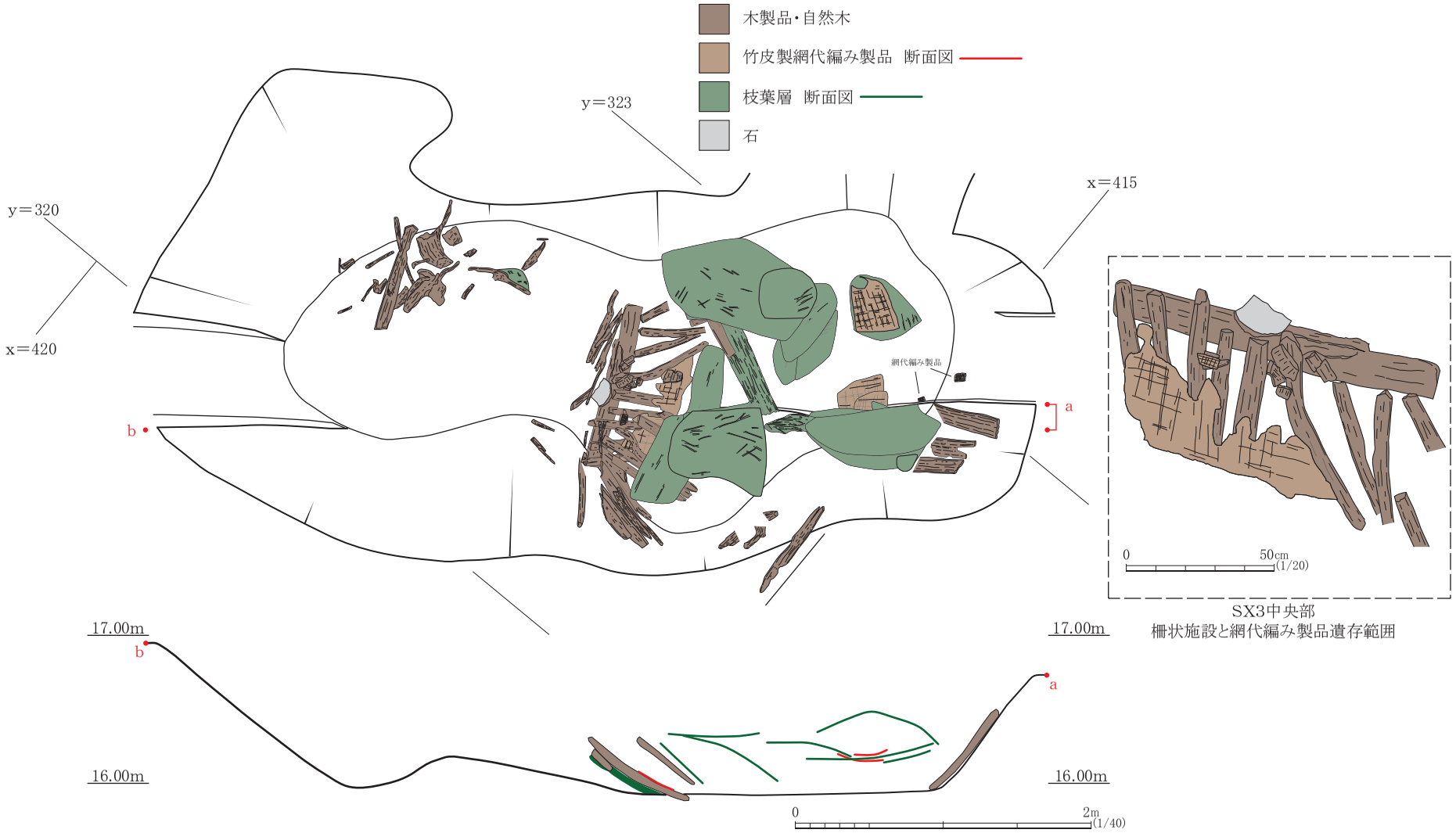


図19　SX3平面図・断面図

写真 71　SD2a遺物出土状況（北東から）

写真 72　SD2土層断面（北から）

写真 73　SX1（南西から）

写真 74　SX2（南西から）

写真 75　SD2完掘状況（北東から）

写真 76　SX3掘削状況（南から）

写真 77　SX3竹製網代編み製品検出状況（南から）

写真 78　SX3網代編み製品・枝葉層検出状況（南東から）

写真 79　SX3網代編み製品・枝葉層検出状況（北西から）

写真 80　SX3柵状施設・イネ科植物層検出状況（南東から）

写真 81　SX3柵状施設・網代編み製品検出状況（南から）

写真 82　網代編み製品左側近接（南東から）

写真 83　網代編み製品右側近接（南東から）

写真 84　SX3柵状施設（西から）

写真 85　柵状施設裏側枝葉層（北西から）

写真 86　遺構完掘状況（南東から）

写真 87　調査区南東部（西から）

写真 88　調査区北東壁（SD1・SD2a）土層断面（南西から）

写真 89　調査区北東壁（SD2b）土層断面（南西から）

写真 90　調査区北東壁（NR1）土層断面（南西から）

写真 91　調査区北東壁（SD4）土層断面（南西から）

写真 92　調査区南西壁（SD1）土層断面（北東から）

写真 93　調査区南西壁（SD2）土層断面（北東から）

写真 94　調査区南西壁（SD3）土層断面（北東から）

写真 95　調査区南西壁（NR1）土層断面（東から）

存体部復元径20.8㎝、口縁下残長10.8㎝を測る。口縁外面および内面は横ナデが施され、体部外面は縦ハケ後にナデが施されている。

7～11は古代に所属する。7は都城系土師器の皿である。復元口径16.5㎝、復元底部径5.0㎝、器高2.5㎝を測る。器壁は底部で6.5㎜とやや厚めである。内外面とも摩滅が激しく、明確なミガキおよび暗文は観察できない。8は須恵器坏蓋口縁部片。口縁をほぼ直角に下垂させ、端部を丸く収める。内外面ともに回転ナデ調整。小片のため口径復元不能である。9は須恵器坏口縁－体部片。小片のため口径復元不能。直線的に体部から口縁に開き、口縁端部を丸く収める。内外面とも回転ナデ調整。10は須恵器高台付坏の底－体部片。高台外端復元径8.0㎝、残高2.3㎝を測る。底部外端に断面方形の小ぶりな高台がやや外方に張り出して付く。体部は外方にやや開き気味に立ち上がる。体部内外面回転ナデ調整、底部内面はナデ、外面はヘラ切り後ナデ調整を施す。11は須恵器高坏の裾部片か。小片のため裾部径復元不能である。端部を鳥嘴状に外方につまみ出し、外端に沈線を1条巡らせる。内外面とも回転ナデ調整。

中世に所属する土器で、図化可能品は1点である。12は瓦質土器鍋の口縁－体部片。小片のため口径復元不能。口縁をわずかに外反させ、外端部を肥厚させる。口縁は内外面とも横ナデ、体部外面は指押さえ後ナデ、内面は横ハケが施される。炭素の吸着があまく、内外面とも灰白色を呈する。

NR1（図20・21の13～37、写真97・98）

13～16は埋土L2出土。いずれも弥生土器である。13は弱く外反する甕口縁部片。内外面とも横ナデが施される。14は壺肩部片。頸部直下の部位と見られ、外面に無軸の羽状文が施される。15も壺の肩部片であり、14同様に無軸の羽状文が施される。内面はハケ後ナデ、外面はナデ後部分的にヘラミガキが施されている。16も壺の肩部片。器壁が8㎜と厚いことから、中－大型品と見られる。外面に2条の沈線が残る。

17～19は埋土L3出土。17は弥生土器底部。平底で底部径8.0㎝、残高2.6㎝を測る。18は土師器甕の口縁部片であるが、小片のため口径復元不能。口縁は緩やかに外反し、端部を丸く収めている。外面は縦ハケ、内面はハケを丁寧にナデ消している。19も土師器甕。口縁部は欠失しており、体部上半と下半は接合しないが、出土状況から同一個体であることが間違いないため、図上復元を行った。やや下膨れの卵形体部に小ぶりな平底が付き、頸部は大きく外反する。底部径5.0㎝、復元体部径20.5㎝、復元残高23.4㎝を測る。体部外面は中－下位に横方向、上位に斜め方向の叩きが施される。内面は中位に横方向、下位と上位に縦方向のハケで器面調整されるが、上位はナデ消しが図られている。所属時期は、古墳時代前期初頭と見られる。

20～25は埋土L4出土。20は遺物出土時にNR1L4か、L4下位の地山（遺構基盤層）の一つとなっている砂礫層のどちらに所属するか判断が付かなかった資料であるが、本稿ではL4出土品として取り扱かっておく。縄文時代晩期の刻目突帯文土器深鉢口縁部片で、口唇と突帯に刻目を施す。全面に煤が付着する。21は弥生土器甕の口縁部片。外端に刻目を施しており、煤の付着が見られる。外面は斜め、内面は横方向のハケが見られる。20・21とも小片のため口径復元不能。22は弥生土器甕の体部片。外面は沈線が1条残り、縦ハケが施されている。器壁が1㎝と厚く、中－大型の甕と見られる。23は弥生土器壺の口縁部片である。大きく外方に開く口縁で、端部を尖り気味に丸く収める。24は弥生土器壺の肩部片。幅太の沈線が1条巡らされており、外面は横方向のヘラミガキが丁寧に施されている。器壁が1㎝と厚いことから、中－大型の壺と見られる。25も弥生土器壺の肩部片。外面に2条の沈線が残る。内外面ともにナデ調整。

26～34は埋土最下層であるL5出土。いずれも弥生土器壺で、体部内外面はいずれもナデ後にヘラミガキが施されている。**26**は壺の口縁部片。頸部に段を有し、短く外反する口縁は端部に鈍く面を取っている。内外面ともヘラミガキが丁寧に施されている。復元口径14.0㎝、口縁下の残高2.2㎝を測る。**27**は壺の底－体部片である。やや上げ底状の底部から体部が大きく膨らむ。底部径8.0㎝、残存体部径21.5㎝、残高7.2㎝を測る。体部内外面とも丁寧にヘラミガキが施されている。**28**も壺の底部片。復元底部径8.6㎝、残高1.9㎝を測る。平底で、体部は直立気味に立ち上がるようである。他の弥生土器と異なり、胎土に角閃石を多く含む。搬入品であろうか。**29**は壺の体部片。26と同一個体の可能性がある。**30**は壺の肩部片。沈線が2条巡らされる。**31**も壺の肩部片であるが、31に比して器壁が薄い。上下2箇所に2条の微弱な沈線が巡らされている。**32・33・34**も壺肩部片で、32は縦方向に3条、33は縦方向に5条の沈線が施されており、34には木葉文が施文されている。

35～37はNR1埋土の土層観察用アゼ解体時に出土した。いずれも弥生土器である。所属層位は37が埋土L1～2であることは確実であるが、他は不明である。**35**は壺の頸部片。特徴から26・29と同一個体の可能性がある。**36**は壺腹部片。微弱な2条の沈線が巡らされており、器壁の薄さからも31と同一個体である可能性が高い。**37**は厚手平底の底部である。底部径8.2㎝、残高2.9㎝を測る。

埋土最下層出土土器は弥生時代前期に所属すると見られ、図化不能であった小片を含め、そのいずれもが壺であることは注目に値する。弥生時代前期における当地周辺での土器の使用状況を反映している可能性が高く、歴史環境を復元する上で重要な資料となる。

SD1a（図21の38、写真98）

埋土L2出土である。38は粗陶器甕の体部片。外面は叩き後ナデ、内面当て具痕もナデ消しが図られている。

SD2（図21・22の39～45、写真98・99）

39～43は埋土最上層であるL1出土。39・40は弥生時代後期に所属する甕で、**39**は砲弾形の体部に大ぶりな平底が付く。復元底部径6.8㎝、復元残存体部径22.4㎝、残高15.7㎝を測る。体部外面には縦ハケが、内面には縦方向のケズリが施されている。**40**は底部が欠失している。腹部のやや膨らむ体部を有し、頸部が強く屈曲し口縁が大きく開く。復元口径19.6㎝、復元体部最大径20.8㎝、口縁下残高20.7㎝を測る。外面は口縁以下縦ハケによる器面調整が行われ、内面は口縁が横ハケ後ナデ、体部下位は縦方向のケズリ、中位以上はナデが施される。**41**は弥生土器甕の底－体部片。厚手の平底から体部が緩やかに湾曲しながら立ち上がる。底部および体部とも二次焼成により器面が荒れている。底部径4.8㎝、残高4.2㎝を測る。**42**は土師器甕の口縁部片。外反する口縁の端部を丸く収める。内外面のハケはナデ消しが図られている。復元口径16.2㎝。**43**は土師器の小型甕。煮炊きに使用されたようで、二次焼成を受けており、底部は爆ぜ、体部には煤が付着している。歪みが著しく、底部で接地すると口縁が大きく斜めに傾く。復元口径10.8㎝、復元最大体部径16㎝、残高15.7㎝を測る。口縁部外面はナデ、内面は横ハケ後ナデが施される。体部外面はハケ後部分的にナデ、内面は上位は横方向のケズリ、下位はハケ後ナデ消しが行われている。古墳時代前期の所属と見られる。

44は埋土下層であるL3出土の直口壺。器壁が9㎜と厚く、強く張る肩部から口縁が直立気味に立ち上がる。口縁端部は明瞭に面を取る。口縁は内外面とも横方向のヘラミガキが施される。復元口径11.4㎝、残高6.0㎝。

45は土層観察用アゼ解体時の出土で、所属層位不明。弥生土器鉢の口縁－体部片で、口縁は外反する。体部は内外面とも横方向のヘラミガキが施される。小片のため口径復元不能。

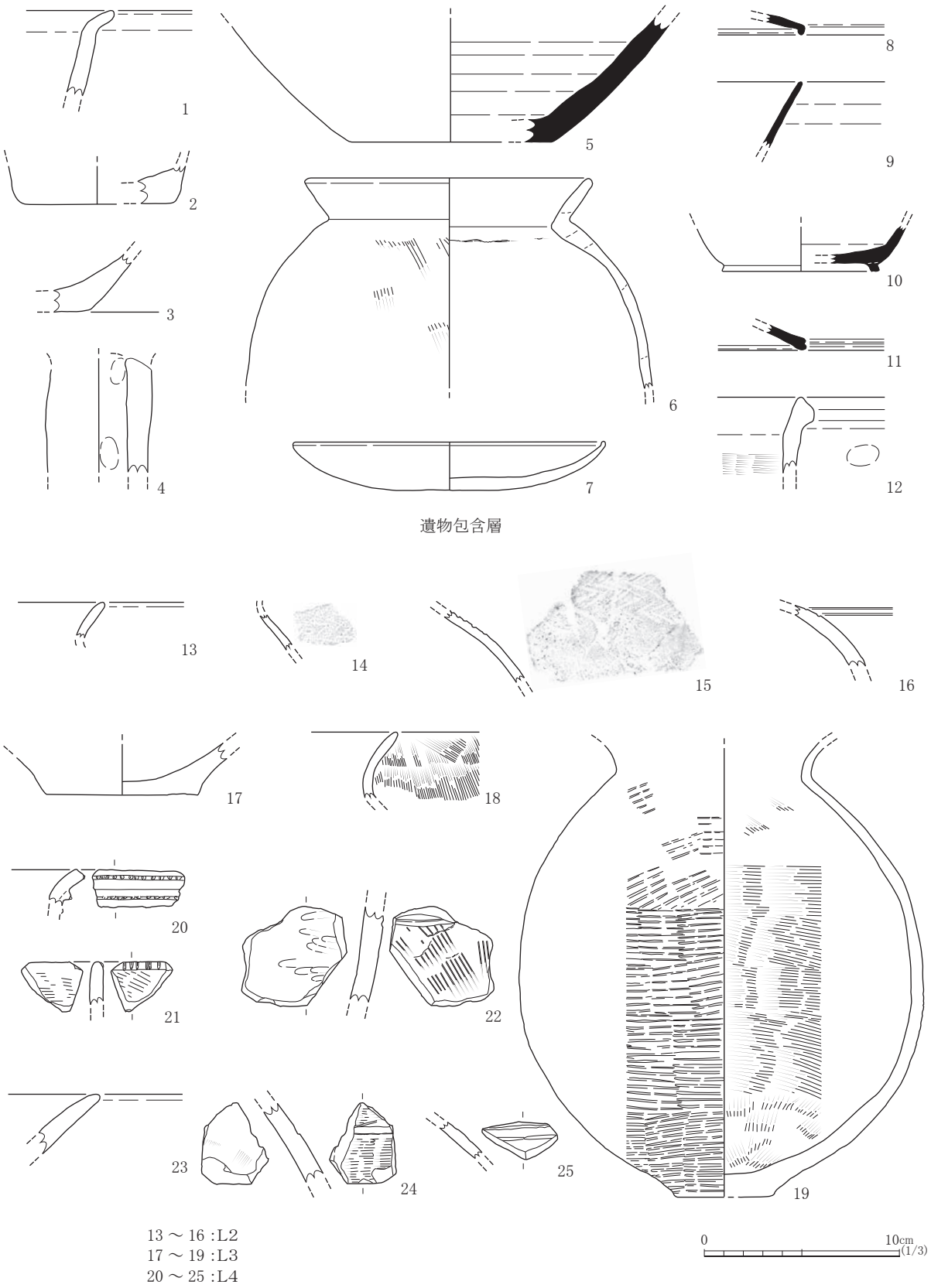
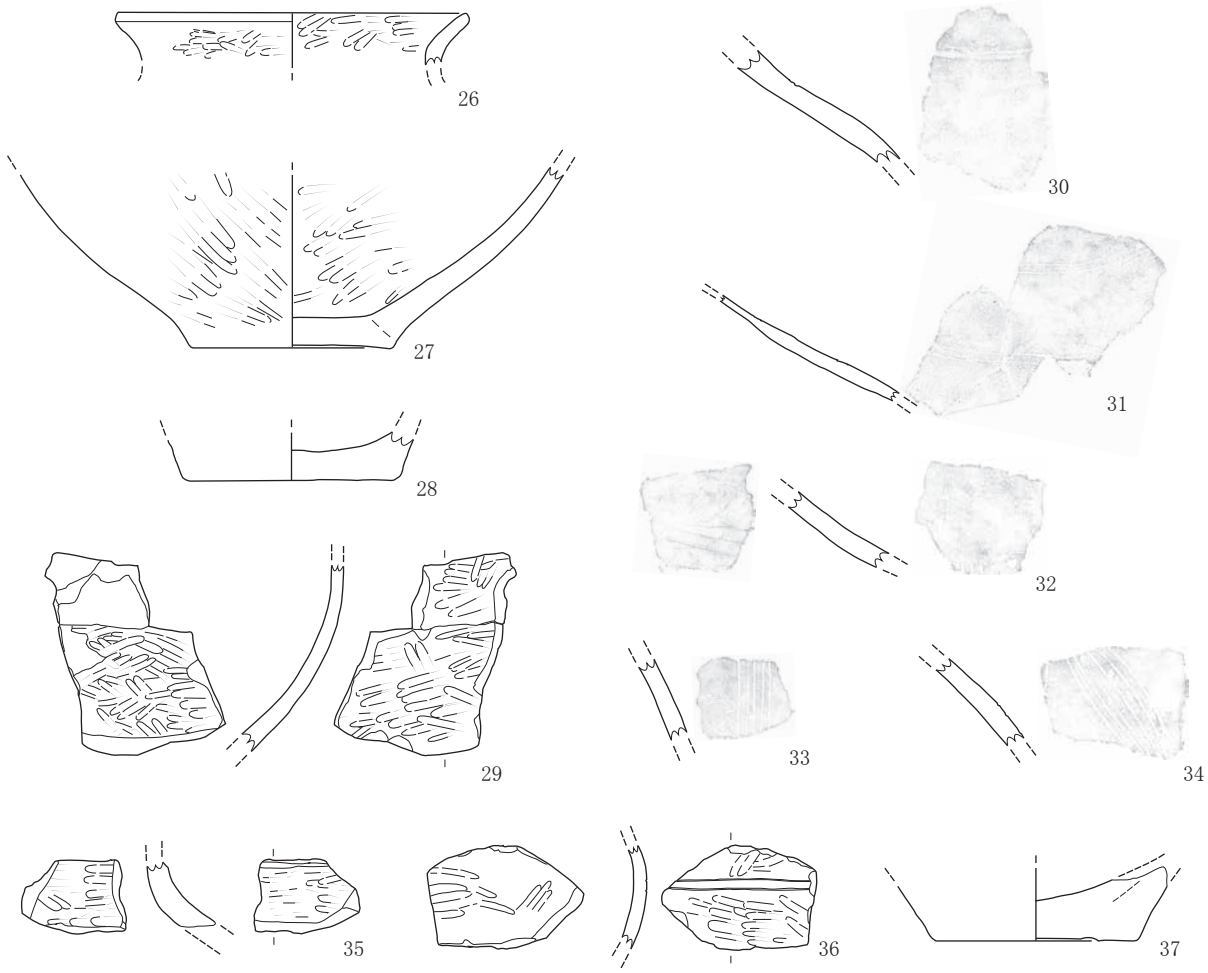
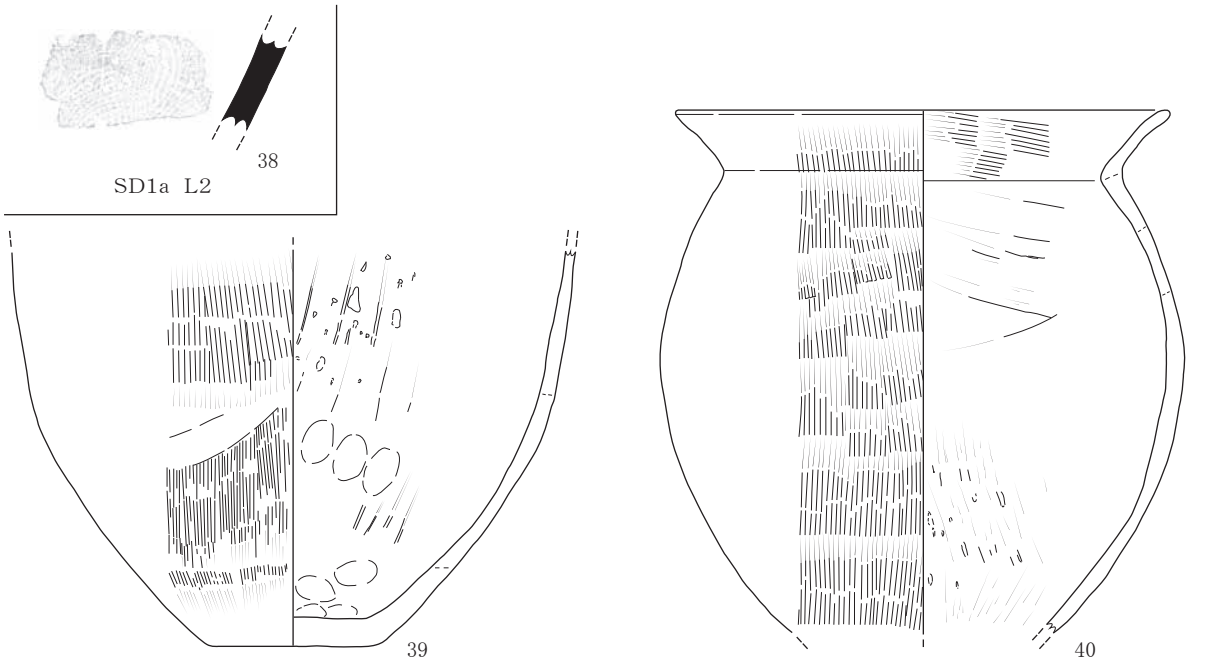


図 20　出土遺物（土器）実測図①



26 ～ 34 :L5
35 ～ 37 : アゼ中 ※37 はL1～2

NR1（自然河川）



39・40 :L1

SD2

0 10cm (1/3)

図 21 出土遺物（土器）実測図②

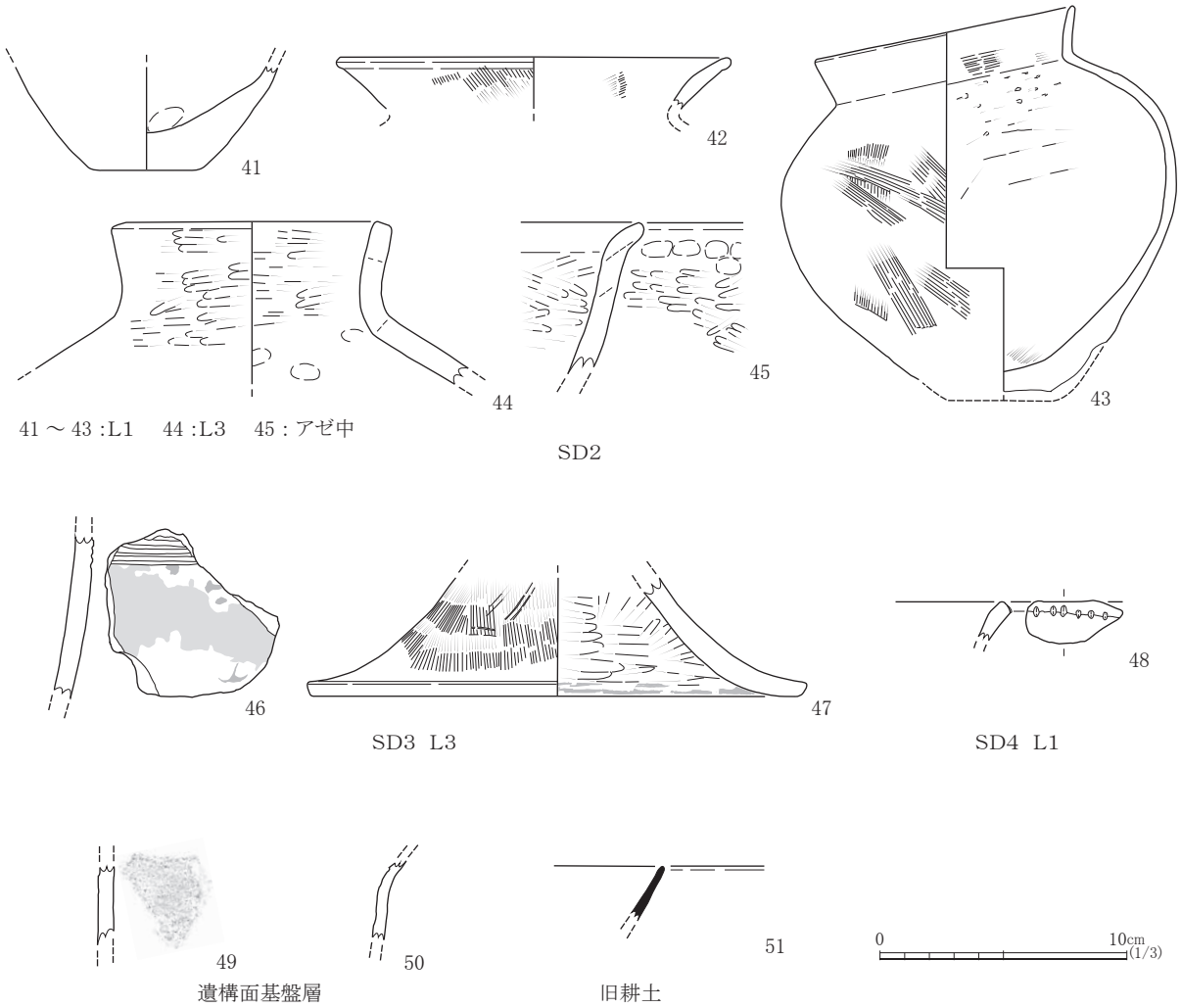


図 22　出土遺物（土器）実測図③

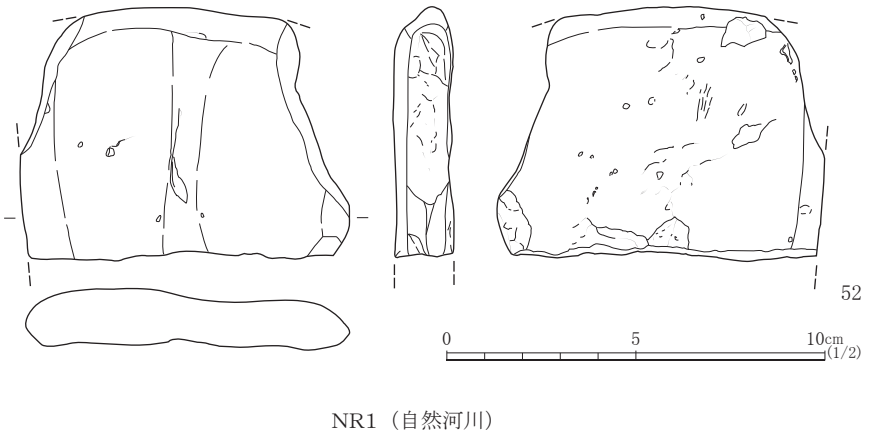
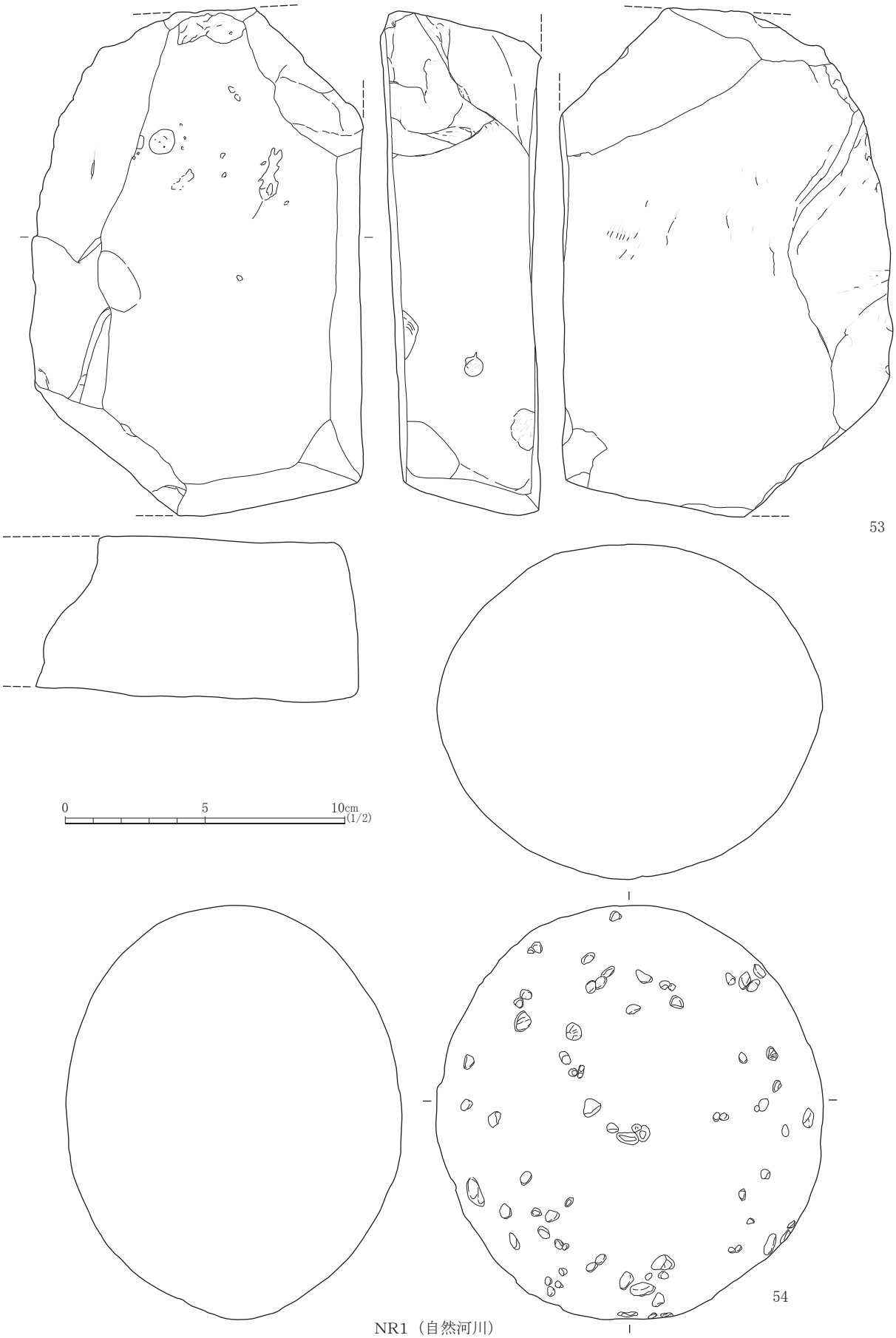


図 23　出土遺物（石器）実測図①



NR1（自然河川）

図 24　出土遺物（石器）実測図②

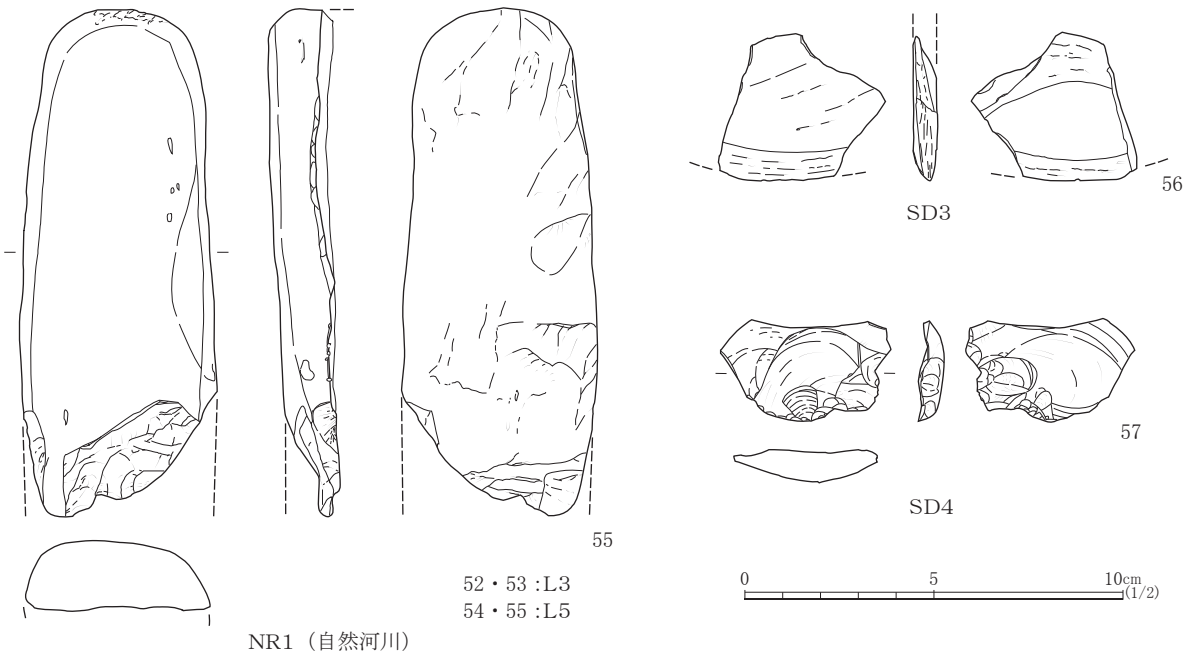


図 25　出土遺物（石器）実測図③

写真 96　出土遺物（土器）①

写真 97　出土遺物（土器）②

27-1

27-2

31

31-1

31-2

32

33

34

35

36

27

38-1

38-2

39-1

39-2

写真 98　出土遺物（土器）③

40-1

43-1

44

40-2

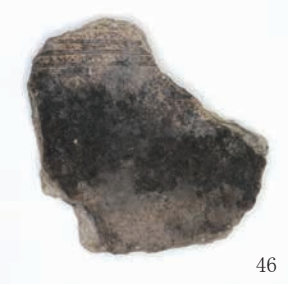
43-2

47

41

42

45


46

48

49

50

51

写真 99　出土遺物（土器）④

53-1

53-2

写真 100　出土遺物（石器）①

写真 101　出土遺物（石器）②

SD3（図22の46・47、写真99）

46・47とも埋土下層であるL3出土。**46**は弥生土器甕の体部片。4条の沈線が残り、外面には煤が多量に付着している。47は土製蓋の裾部片。天井部は欠失しているが、大きく外反しながら端部に至る。端部内面には黒色の炭化物もしくは煤が付着する。外面は縦ハケ、内面は横方向のヘラミガキが施される。復元裾部径20.2㎝、残高4.8㎝を測る。

SD4（図22の48、写真99）

48は埋土上層であるL1出土。弥生土器甕口縁部の小片で、口縁外端には刻目が施されている。

遺構面基盤層（図22の49・50、写真99）

明黄色または緑灰色シルト層からの出土である。**49・50**ともに縄文土器深鉢の小片と見られ、49の外面には条痕が残る。

旧耕土（図22の51、写真99）

51は古代の須恵器坏口縁部片。口縁は大きく外方に開き、端部は丸く収めている。

【石器】

NR1（図23・24・25の55、写真100・101）

52・53は埋土L3出土の砥石。52は片面に比熱痕が残る。ともに石英斑岩製。54・55は最下層である埋土L5出土。**54**は河底より自然木とともに出土した（図13中央）。敲石の可能性があるが、風化により表面が剥離し、明確な使用痕が見られない。花崗閃緑岩製。**55**は磨製石斧の半損品と見られる。刃部は

表5 出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	遺構層位	器種	部位	法量（cm）①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
1	遺物包含層	弥生土器 甕	口縁部	③4.4	①灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(10YR8/2)	やや粗：1～7mmの石英・長石をやや多く含む	
2	遺物包含層	弥生土器 壺/甕	底部	②(8.0)③1.9	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
3	遺物包含層	弥生土器 壺/甕	底部	③2.9	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密：1～4mmの石英・長石をやや多く含む	
4	遺物包含層	弥生土器 高坏	脚部	③5.8	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	粗：0.5～5mmの石英・長石を多量に含む	
5	遺物包含層	須恵器 壺	底部	②(10.4)③6.4	①灰色(7.5Y6/1) ②灰白色(7.5Y7/1)	やや粗：0.5～1.5mmの石英・長石を少量含む	
6	遺物包含層	土師器 甕	口縁部～胴部	①(14.7)③10.8	①灰白色(10YR8/2)・灰黄褐色(10YR6/2) ②黄灰色（2.5YR7/2）	密：0.5～4mmの石英・長石をやや多く含む	
7	遺物包含層	土師器 皿	口縁部～底部	①(16.0)②(5.0)③2.5	①②明赤褐色(5YR5/6)・にぶい黄橙色(10YR6/4)	密：0.5～4mmの石英・長石をやや多く含む	
8	遺物包含層	須恵器 坏蓋	口縁部	③1.0	①灰白色(N8/) ②灰白色(N8/)	精緻：砂粒含まない	
9	遺物包含層	須恵器 坏	口縁部	③3.4	①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	精緻：0.5～1㎜の石英・長石を少量含む	
10	遺物包含層	須恵器 高台付坏	底部	②(8.0)③2.3	①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密：0.5mmの石英・長石を少量含む	
11	遺物包含層	須恵器 高坏	裾部	③1.3	①灰色(7.5Y6/1) ②灰黄色(2.5Y6/2)	やや粗：0.5mmの石英・長石を少量含む	
12	遺物包含層	瓦質土器 足鍋	口縁部	③3.9	①灰白色(N7/) ②灰白色(5Y7/2)	密：1～2mmの石英を少量含む	
13	NR1 L2	弥生土器 甕	口縁部	③1.8	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
14	NR1 L2	弥生時代 壺	肩部	③1.7	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	密：0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
15	NR1 L2	弥生土器 壺	肩部	③3.7	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや粗：0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
16	NR1 L2	弥生土器 壺	肩部	③3.1	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	密：0.5～2mmの石英・長石を多量、赤色土粒を少量含む	
17	NR1 L3	弥生土器 壺/甕	底部	②8.0③2.6	①褐灰色(5YR5/1) ②灰白色(2.5Y8/1)	密：0.5～2mmの石英・長石を多量に含む	
18	NR1 L3	土師器 甕	口縁部	③3.4	①黒色(10YR2/1) ②灰黄褐色(10YR6/2)	密：0.5～1mmの石英・長石を少量含む	
19	NR1 L3	土師器 甕	口縁部～底部	②5.0③23.4	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰黄褐色(10YR6/2)	密：0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
20	NR1 L4	縄文土器 深鉢	口縁部	③2.1	①黒色(2.5Y2/1) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	やや粗：0.5～1.5mmの石英・長石をやや多く含む	
21	NR1 L4	弥生土器 甕	口縁部	③2.2	①にぶい褐色(7.5YR6/3)・黒褐色(7.5YR3/1) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや粗：0.5～1.5mmの石英・長石をやや多く含む	
22	NR1 L4	弥生時代 甕	胴部	③5.0	①灰黄褐色(10YR4/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	粗：0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
23	NR1 L4	弥生土器 壺	口縁部	③3.1	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	密：0.5～1mmの石英・長石を少量含む	
24	NR1 L4	弥生土器 壺	肩部	③4.1	①灰黄褐色(10YR6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	粗：0.5～1mmの石英・長石をやや多く含む	
25	NR1 L4	弥生土器 壺	肩部	③1.9	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②褐灰色(10YR4/1)	密：0.5～1mmの石英・長石をやや多く含む	
26	NR1 L5	弥生土器 壺	口縁部	①(14.0)③2.2	①灰黄褐色(10YR5/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	密：0.5～1.5mmの石英・長石を少量含む	
27	NR1 L5	弥生土器 壺	底部	②8.0③7.2	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②浅黄色(2.5Y7/3)	密：0.5～1.5mmの石英・長石をやや多く含む	
28	NR1 L5	弥生土器 壺	底部	②(8.6)③1.9	①灰白色(10YR7/1) ②灰白色(2.5Y8/1)	やや粗：0.5～2.5mmの石英・長石・角閃石をやや多く含む	
29	NR1 L5	弥生土器 壺	胴部	③7.9	①灰黄褐色(10YR6/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)	粗：0.5～1.5mmの石英・長石を少量に含む	
30	NR1 L5	弥生土器 壺	肩部	③4.5	①暗赤灰色(2.3YR3/1) ②灰黄褐色(10YR5/2)	やや粗：0.5～4mmの石英・長石をやや多く含む	
31	NR1 L5	弥生土器 壺	肩部	③3.4	①灰黄褐色(10YR5/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	密：0.5～1mmの石英・長石を少量含む	
32	NR1 L5	弥生土器 壺	肩部	③3.1	①にぶい褐色(7.5YR6/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石少量含む	

遺物番号	遺構層位	器種	部位	法量（cm）①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
33	NR1 L5	弥生土器 壺	胴部	③3.2	①褐色(7.5YR4/3) ②灰褐色(7.5YR4/2)	やや粗：0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
33	NR1 L5	弥生土器 壺	胴部	③3.2	①褐色(7.5YR4/3) ②灰褐色(7.5YR4/2)	やや粗：0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
34	NR1 L5	弥生土器 壺	肩部	③3.4	①褐灰色(7.5YR5/1) ②にぶい褐色(7.5YR6/3)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石を少量含む	木葉文
35	NR1 アゼ中	弥生土器 壺	肩部	③2.5	①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②にぶい橙色(7.5YR6/4)	粗：0.5～1mmの石英・長石をやや多く、赤色土粒を少量含む	
36	NR1 アゼ中	弥生土器 壺	胴部	③4.1	①灰黄褐色(10YR5/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/3)	密：0.5～1.5mmの石英・長石を少量含む	
37	NR1 アゼ中 L1～2	弥生土器 壺/甕	底部	②8.2③2.9	①浅黄色(2.5Y7/4)灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(2.5Y7/1)	密：0.5～2mmの石英・長石を多量に含む	
38	SD1a L2	近世陶器 甕	胴部	③3.7	①灰白色(10YR8/2) ②灰白色(10YR8/1)	密：1～1.5mmの石英・長石を少量含む	
39	SD2 L1	弥生土器 甕	胴部～底部	②(6.8)③15.7	①にぶい黄橙色(10YR7/2) ②灰黄褐色(10YR5/2)	密：0.5～4mmの石英・長石を多量に含む	
40	SD2 L1	弥生土器 甕	口縁部～胴部	①(19.6)③20.7	①明褐灰色(7.5YR7/2) ②灰黄褐色(10YR6/2)	やや密：1～3mmの石英・長石をやや多く含む	
41	SD2 L1	弥生土器 甕	底部	②4.8③4.2	①にぶい褐色(7.5YR5/3)・にぶい橙色(5YR7/4) ②灰黄色(2.5Y7/2)	密：0.5～3mmの石英・長石を少量含む	
42	SD2 L1	土師器 甕	口縁部	①(16.0)③2.1	①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/3)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石・赤色土粒をやや多く含む	
43	SD2 L2	土師器 甕	口縁部～底部	①(10.8)②(4.4)③15.7	①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/3)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石、1～2㎜の赤色土粒をやや多く含む	
44	SD2 L3	弥生土器 壺	口縁部～肩部	①(11.4)③6.0	①明赤褐色(2.5YR5/6)②にぶい赤褐色(2.5YR5/4)・にぶい褐色(7.5YR5/3)	やや粗：0.5～1mmの石英・長石を少量含む	
45	SD2 アゼ中	弥生土器 鉢	口縁部	③6.1	①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)	密：0.5～2mmの石英・長石をやや多く含む	
46	SD3 L3	弥生土器 甕	胴部	③6.5	①褐灰色(7.5YR5/2) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	やや粗：0.5～1.5mmの石英・長石をやや多く含む	
47	SD3 L3	弥生土器 蓋	口縁部	①(20.2)③4.8	①②にぶい黄橙色(10YR6/3)・灰黄褐色(10YR4/2)	粗：0.5～2mmの石英・長石を少量含む	
48	SD4 L1	弥生土器 甕	口縁部	③1.6	①にぶい黄褐色(10YR5/3)・黒色(10YR2/1) ②にぶい褐色(7.5YR5/3)	やや粗：0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
49	遺構面基盤層	縄文土器 鉢か	胴部	③3.2	①灰黄褐色(10YR6/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	密：0.5～1mmの石英・長石を多量に含む	
50	遺構面基盤層	縄文土器 浅鉢か	肩部	③3.2	①灰黄褐色(10YR6/2) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	やや粗：0.5～1.5mmの石英・長石を多量に含む	
51	旧耕土	須恵器 坏	口縁部	③2.2	①灰色(N6/) ②灰色(N6/)	密：0.5mmの石英・長石を少量含む	

表6 出土遺物（石器）観察表

法量（ ）は残存値

遺物番号	遺構層位	器種	法量（cm）①長さ②幅③厚④重量(g)	石材	備考
52	NR1 L3	砥石	①(6.7) ②(8.6) ③1.5 ④(136.06)	石英斑岩	
53	NR1 L3	砥石	①18.2 ②(11.6) ③5.6 ④(1806.9)	石英斑岩	
54	NR1 L5	不明石器	①14.8 ②13.8 ③12.0 ④3450	花崗閃緑岩	
55	NR1 L5	太型蛤刃石斧	①(13.4) ②5.1 ③1.5 ④(200.21)	緑色片岩	
56	SD3	石包丁	①(3.9) ②(3.9) ③(0.6) ④(12.42)	片岩か	
57	SD4	剥片	①4.5 ②2.5 ③0.8 ④8.21	黒曜石	姫島産

欠損している。残長13.4㎝、最大幅5.1㎝を測る。緑色片岩製。

SD3（図25の56、写真101）

56は石包丁の破損品と見られる。刃部は両刃で、背は欠失している。残長・幅とも3.9㎝、最大厚0.6㎝を測る。片岩製か。

SD4（図25の57、写真101）

57は姫島産黒曜石の剥片。最大長4.5㎝、最大幅2.5㎝、最大厚0.8㎝を測り、重量8.21gを量る。

（6）小結（図26）

当調査では、弥生時代前期から古墳時代前期にかけて機能した自然河川と、潅漑用と見られる複数の溝などを確認した。各遺構の性格についてはすでに記した通りであるが、性格不明土壙状遺構（SX1～4）の機能については今後の更なる検討が必要である。

NR1とSD2・3の埋没時期は古墳時代前期で、これは調査区の南東150mに営まれた弥生時代から古墳時代にかけての集落（遺跡保存公園や現国際総合科学部校舎周域）の廃絶時期と一致する。検出された河川と溝の利用者がこの集落の人々であったことは間違いなく、人が去ったことで河川も放置され、埋没したと理解される。今回の発見により、弥生時代の農耕地が調査区の西南方向、陸上競技場に展開する可能性が極めて高くなったが、最後に第2体育館新営に伴う発掘調査にて検出された遺構[註1]との関係を確認しておく。

第2体育館大溝1は北－南西方向に走っており、弥生時代後期中に埋没したとされる。筆者は大溝1は自然河川で、これが大きく方向を西に向けNR1に繋がると推定している。

第2体育館大溝2は北東－南西方向に走っており、大溝1に後出するもので、弥生時代後期が上限とされる。溝の規模や形状、出土遺物の所属時期からこれがSD2に繋がるとして間違いない。そうすると、SD2はSD3を切り込んで形成されたことになる。大溝2の埋没は試掘調査で出土した須恵器を根拠に古代以降と推測されているが、本発掘調査では弥生土器しか出土していない。筆者は、SD2埋土上層の遺物から、この溝の埋没も古墳時代前期と考えている。

また、第2体育館大溝2と大溝3との接続部に設けられた大溝3下層土坑状遺構にも注意が必要である。同様の遺構がNR1とSD3との接続部に見られる（SX4）。吉田遺跡に近隣する小路遺跡においても、自然河川に取り付く弥生時代の溝に、不明確ながら土壙状の落ち込みが見られる[註2]ことから、弥生時代の河川や用水路の接続・分岐等の際に設けられる通有施設であった可能性も指摘できる。

第2体育館小溝7は大溝1に先行することから、SD4には繋がらない。小溝5または小溝9の延長部がSD4であろう。

当調査においては、先史時代の水利に関する貴重な資料を得ることができた。一方で、開発の掘削深度が現地表下1.5mであったこと、設計変更が困難な建屋であったことから、記録保存の名の下に遺構を全破壊させたことも事実である。本学としてこれを重く受け止め、今後万全な埋蔵文化財保護対応を目指していきたい。

【註】

1）村田裕一・中村仁美（2000）「吉田構内第2屋内運動場新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅣ』,山口

2）縄田潔・管波正人（1988）『小路遺跡』山口市埋蔵文化財調査報告第27集,山口市教育委員会社会教育課文化財センター（編）, 山口

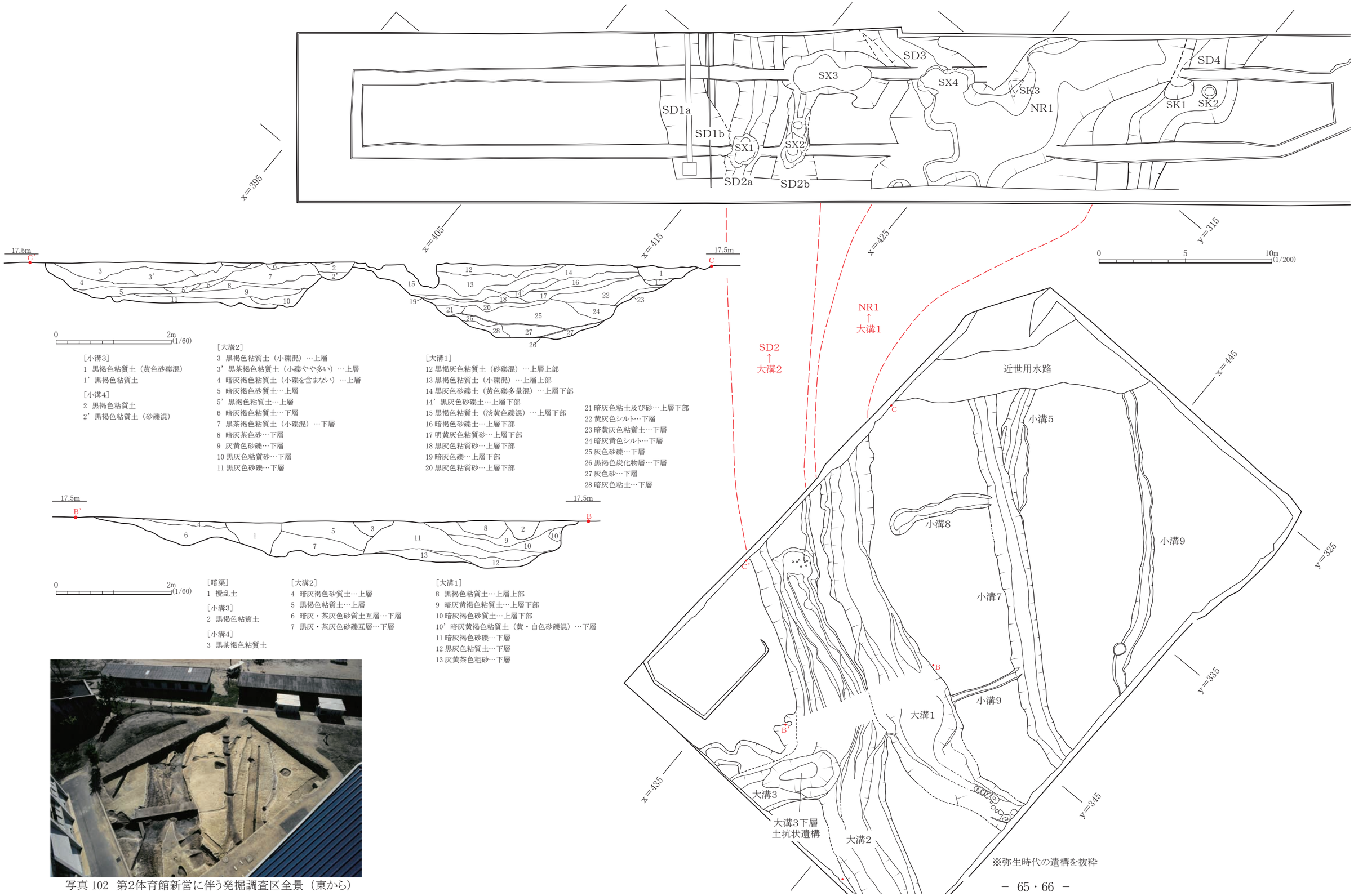


写真 102　第2体育館新営に伴う発掘調査区全景（東から）

図 26　第2体育館新営に伴う発掘調査区平面図・断面図

3．第1武道場耐震改修その他工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内H-15区

調査面積　1.5㎡

調査期間　平成26年1月30日

調査担当　横山成己

調査結果

第1武道場耐震改修その他工事（体育器具庫更新工事）に伴う本発掘調査が平成25年12月27日に終了したことを受け、翌年1月より第1体育館および第1武道場周囲の設備関連工事が急ピッチで進められることとなった。

吉田構内第1体育館は本学吉田地区統合移転最初期である昭和41年（1966）竣工、第1武道場は昭和44年（1970）竣工であるため埋蔵文化財保護を目的とする発掘調査が実施されておらず、長らく周囲の地下の状況が不明確であったものの、平成元年度（1989）に実施した立会調査[註1]により、第1武道場周囲の造成土の厚みがある程度判明している。設備関連工事は、ほぼ全ての掘削が造成土内に止まることが予想されたが、掘削深度の深い集水枡設置地点1箇所については造成土の厚みを越える掘削となる可能性が生じたため、立会調査を実施する運びとなった。

調査地は、第1体育館西側の集水枡設置地点である（図27）。掘削は現地表下90㎝に及んだが、造成土内に止まった（図28、写真103）。

本書にて報告した、第2体育館および体育器具庫敷地に流入する自然河川や溝は、第1体育館と第1武道場敷地にその上流が求められる。既設建物の建設工事により、これらの遺構は消滅した可能性が高いが、弥生時代の農耕地を含む集落構造を復元する上で重要な地域であることに変わりはない。小規模工事の場合においても、丁寧な埋蔵文化財保護対応が必要である。

【註】

1）河村吉行（1991）「第二武道場排水溝新営に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』，山口

図 27　調査区位置図

写真 103　調査区東壁土層断面（西から）

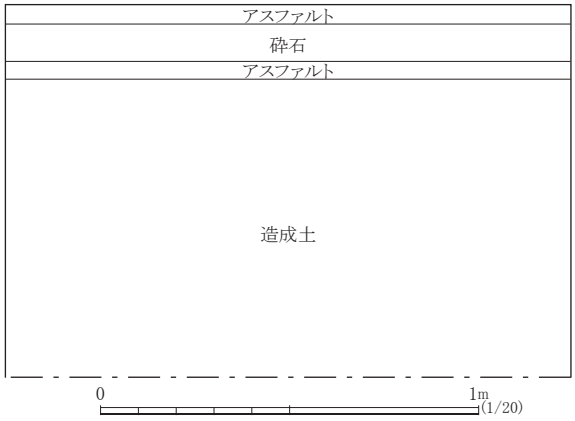


図 28　土層断面柱状図

4. 農場本館研究・実験室改修工事に伴う立会調査

図 29　調査区位置図

写真 104　調査区東壁土層断面（北西から）

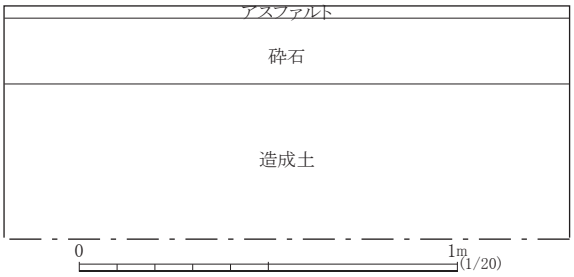


図 30　土層断面柱状図

調査地区　吉田構内S-13区

調査面積　6㎡

調査期間　平成26年2月5日

調査担当　横山成己

調査結果

農学部付属農場本館建物は、昭和42年（1967）に竣工しているが、昭和41年（1966）に小野忠熙氏により実施された吉田遺跡第Ⅳ地区牛舎新営に伴う発掘調査で10月に撮影されたと思われる写真に、建設中の農場本館建物が映り込んでいる。小野氏により埋蔵文化財保護対応が図られた記録が残っていないため、未調査で工事は進められたようであり、建物地下の様相は不明となっている。今回の工事計画では、本館建物北側に新たに検水枡と管路が設けられる事となったため（図29）、工事立会を実施することとなった。

工事では、現地表下60㎝まで掘削が行われたが、現地表より下3㎝がアスファルト、20㎝までが砕石、60㎝までが造成土であった（図30、写真104）。

農場本館建物は、東に近接する丘陵傾斜地を削平して建設された可能性が高い。既往の立会調査では、造成土直下に岩盤風化層が露出する事から、削平深度は相当に深く、建物周囲に遺構が遺存する可能性は極めて低いと推定される。

その一方で、牛舎新営に伴う発掘調査では、複数の竪穴住居跡や溝、ピット等が確認されており[註1]、削平深度が浅かった場所には、埋蔵文化財が遺存する可能性が残されている。今後も周辺地域での地下の掘削を伴う工事計画に対しては、慎重な埋蔵文化財保護対応が必要となる。

【註】

1）山口大学吉田遺跡調査団（1976）『山口大学構内　吉田遺跡発掘調査概報』,小野忠熙（編）,山口

5. 農学部本館他電気接地改修工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内R・S-13区

調査面積　10㎡

調査期間　平成26年3月11日

調査担当　横山成己

調査結果

吉田構内8箇所（大学会館・共通教育本館棟・メディア基盤センター・経済学部C棟・人文学部研究棟・理学部2号館・実験動物施設・農場本館）において、電気接地改修工事が計画された。このうち7箇所については、建物内または建物近接地であることから埋蔵文化財保護対応は不要であったが、農場本館では建物の西側に離れた地点にて新たに配線が設けられることとなったため、工事立会を実施する運びとなった（図31）。

配線部は総延長20mの距離で深度45㎝の掘削が行われたが、全域が造成土内に止まった（図32、写真105）。また、配線南端部の接地極埋設部分については75㎝の掘削が行われたが、地山は確認されなかった。

農学部附属農場本館西隣と南方80mの位置には実験水田が設けられており、耕作土から古代を中心とする遺物が多数採取されている[註1]。このことから、農場本館周域に古代の集落が形成されていたと推定されるものの、未だ明確な遺構を検出するに至っていない。吉田構内南東端部（動物医療センター周域）に確認される古代官衙との関連を考察する上でも重要な地域であることから、小規模工事であっても継続的に調査を実施していく所存である。

【註】

1）田畑直彦（2004）「吉田構内農学部附属農場の分布調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年ⅩⅥ・ⅩⅦ』,山口

図 31　調査区位置図

写真 105　調査区南端部（南から）

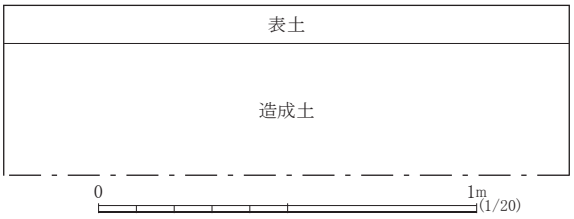


図 32　土層断面柱状図

6. 椹野寮新営工事に伴う立会調査

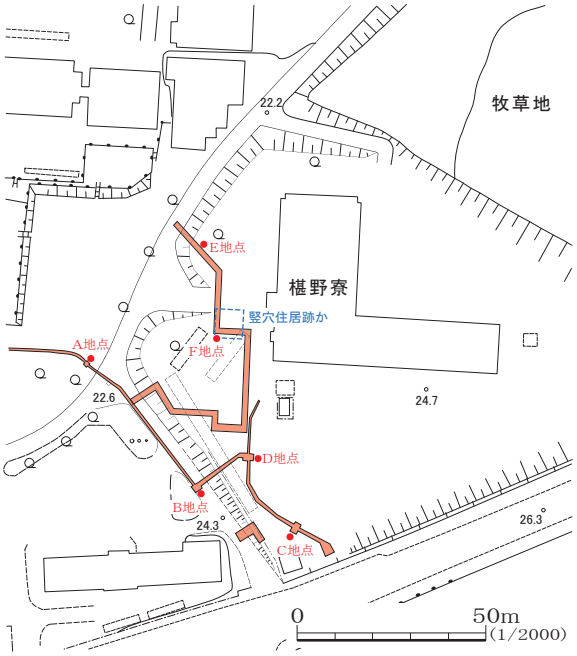


図 33　調査区位置図

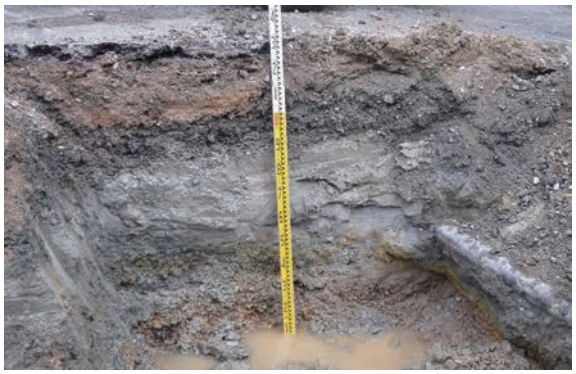


写真 106　A地点北東壁土層断面（南西から）

写真 107　B地点南東壁土層断面（北西から）

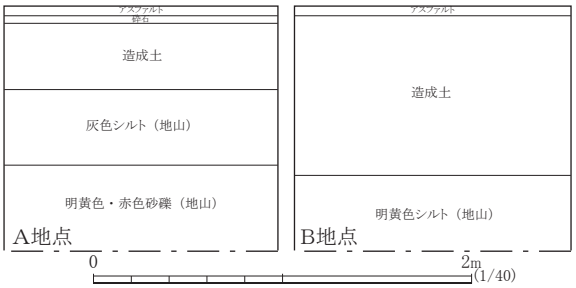


図 34　A・B地点土層断面柱状図

調査地区　吉田構内O－20区、N・O－21区
O・P-22区

調査面積　35㎡

調査期間　平成25年8月28日、9月2・12日
11月14日、12月24日、平成26年2月19・21・24・26～28日

調査担当　横山成己

調査結果

平成24年度、吉田構内南東部丘陵地において椹野寮（女子寮2号棟）新営に伴う発掘調査を実施した。その結果、建設予定地は棚田構築のため大きく削平を受けていることが判明したが[註1]、北に隣接する既設の女子寮1号棟は昭和41年（1966）に埋蔵文化財調査が実施されることなく建設されたため、女子寮敷地全体の地下の様相は不明確となっていた。平成25年度に至り、機械設備工事等が実施される際に、女子寮敷地西－南西地点において掘削深度の深い管埋設工事が計画されたため、工事立会を実施する運びとなった（図33）。

A・B地点は、女子寮が立地する丘陵縁辺部を大学造成時にカットしたと推測される地点である。A地点では現地表下1mに灰色シルトの地山が、B地点では現地表下0.9mに明黄色シルトの地山が検出されている（図34、写真106・107）。

C地点は女子寮敷地南端部で、現地表下0.8mにて旧耕土が検出され、その下位の青灰色シルトの地山を検出面として、溝状遺構が確認された（図35、写真108）。埋土の土質から見て、平成24年度調査でも検出された水田区画に伴う溝と見られる。

D地点では、現地表下0.9mに旧耕土が検出され、その下位の灰黄色シルトの地山を切り込む褐色砂礫層を確認した（図35、写真109）。遺物が確認されなかったため形成時期は不明であるが、自然河川と推測される。

E地点は女子寮敷地北西端部に当たる。現地表下1.7mに旧耕土および旧床土を検出し、現地表下1.86mで明黄色シルトの地山を検出面とするピット

を確認した（図35、写真110）。ピットは幅約50㎝、深さ7㎝で、埋土は灰色粘質土である。

F地点は女子寮1号棟西側管路で、現地表下1.4mに旧耕土および旧床土（合わせて層厚30㎝）、下位に層厚10㎝の褐灰色弱粘質土層（古代の須恵器が混ざる遺物包含層）、地山である明黄色シルトを検出した。地山を掘り込む形で大型の遺構を確認したが（図35、写真111）、工事掘削深度が深く、管路の幅も狭小であったため、安全上調査に時間をかけることができなかった。

以上の調査成果から、椹野寮敷地西部には遺構が埋存している可能性が高く、注意が必要である。

【註】

1）横山成己（2016）「椹野寮新営工事に伴う予備発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』,山口

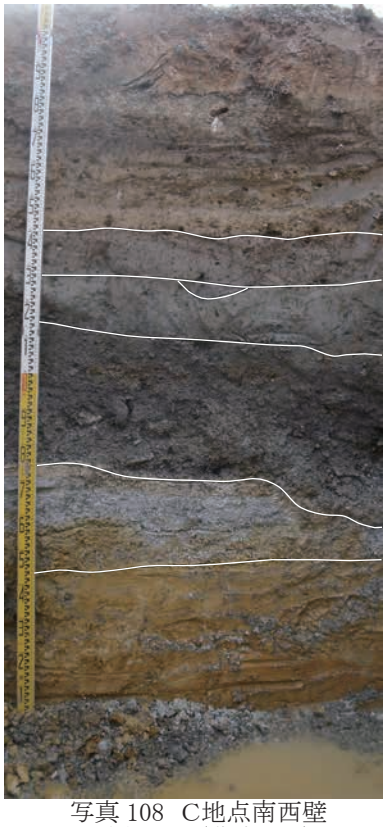


写真 108　C地点南西壁土層断面（北東から）

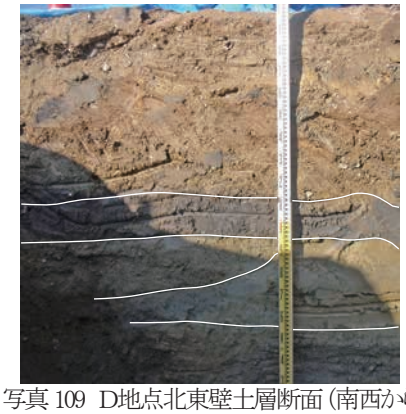


写真 109　D地点北東壁土層断面（南西から）

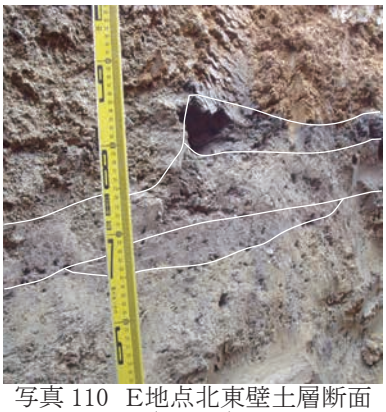


写真 110　E地点北東壁土層断面（西から）

写真 111　F地点南壁土層断面（北から）

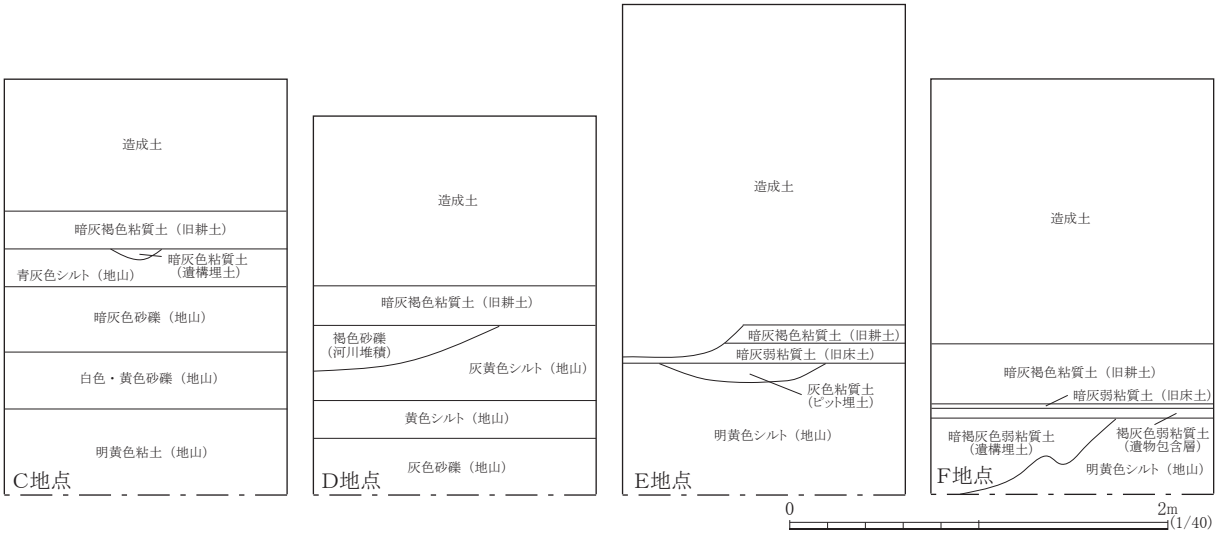


図 35　C～F地点土層断面柱状図

7. 陸上競技場外灯設置工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内E－20、F－19、G－18・19、H－18区

調査面積　56㎡

調査担当　横山成己

調査期間　平成25年11月26日

調査結果　吉田構内西部の陸上競技場とラグビー場の間には、遊歩道が存在する。この遊歩道は主に教育学部教職員が附属特別支援学校に行来する際、または附属特別支援学校教員および生徒が大学構内を訪問する際に使用されているが、これまで照明が存在しなかったことから、安全面に問題がある歩道であった。平成25年度後期にいたり、急遽外灯の設置工事が計画された（図37）。

写真 112　工事掘削風景（北東から）

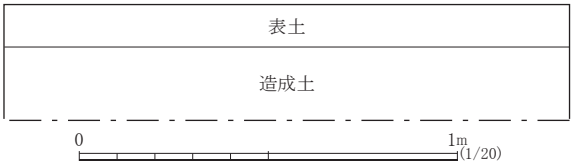


図 36　土層断面柱状図

工事は、遊歩道の南東側を総延長175m、深さ0.3mの規模で掘削する計画であった。当遊歩道敷地では、平成7年度に基幹環境整備（ATMネットワークケーブル布設）に伴う立会調査が実施されているものの、正式な調査報告を刊行していないこともあり、慎重を期して工事立会を実施した。

調査の結果、全域で現地表下約10㎝が表土、以下約20㎝が造成土であることが確認され、遺物包含層や地山は検出されなかった（図36、写真112）。

主に運動場として用いられている吉田構内西部は沖積平地であり、遺跡保存公園から国際総合科学部・教育学部校舎の立地する微高地に弥生時代から古墳時代にかけての集落が、陸上競技場のある低地には自然河川および用水路が確認されている。今後とも慎重な埋蔵文化財保護対応が必要と言える。

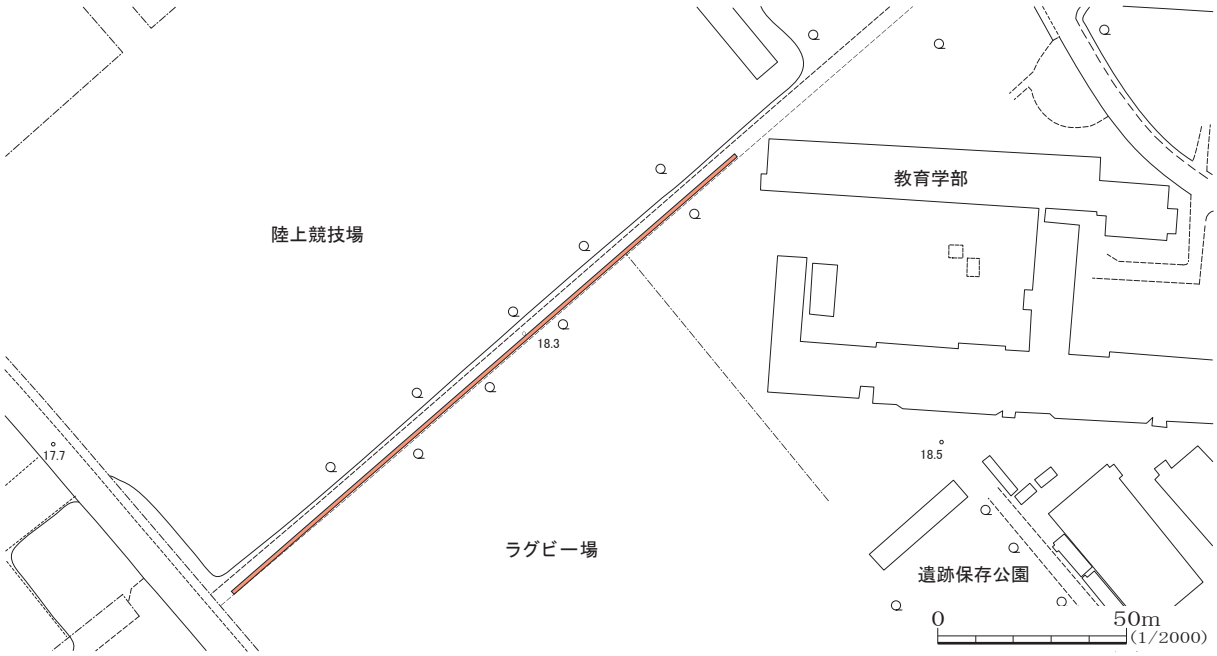


図 37　調査区位置図

8．自転車置き場設置工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内G・H-15区

調査面積　90㎡

調査期間　平成26年2月7日

調査担当　横山成己

調査結果

第1武道場耐震改修その他工事が実施されることに伴い、第2武道場南側に自転車置き場が新設されることとなった（図38）。第2武道場は昭和48年（1973）に竣工しており、埋蔵文化財調査が未実施であったため、建物周辺の地下の様相は不明瞭であったが、平成15年度に武道場の東隣接地にて実施された基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査において、現地表下約1.3mの深度で河川堆積土と推察されるシルトおよび粗砂層が確認されていることから、当工事においても立会調査を実施する運びとなった。[註1]

計画された自転車置き場はベタ基礎であったことから、部分的に深掘りされる箇所を対象に調査を行った。降雨中の調査となり、調査区の壁面精査は困難であったが、調査区西端部において①現地表下60㎝の造成土、②層厚15㎝旧耕土、③層厚50㎝の暗灰黄色シルト（地山）、④層厚15㎝以上の褐色シルト（地山）を確認した（図39、写真113）。

③④層は当年度に実施した第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査において確認された地山と類似していることから、第2武道場周域にも弥生時代から古墳時代前期にかけての河川や用水路が存在した可能性を否定できない。吉田構内では開発工事等が比較的少ない地域ではあるが、今後とも地下の情報収集に努めたい。

【註】

1）田畑直彦（2005）「基幹環境整備（外灯新設）工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成15年度－』,山口

図 38　調査区位置図

写真 113　調査区西壁土層断面（東から）

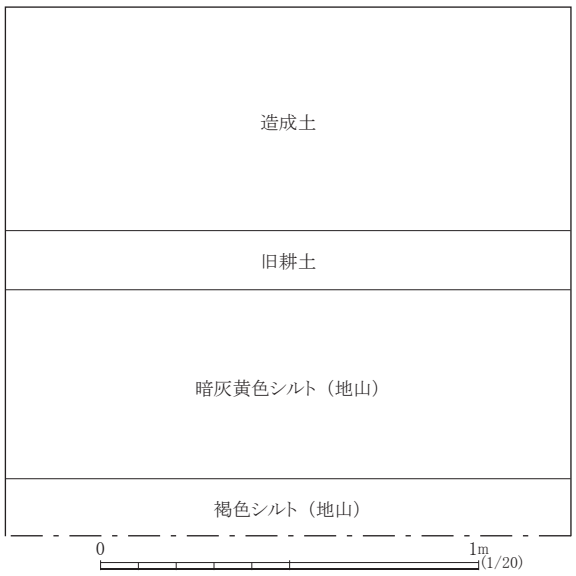


図 39　土層断面柱状図

9．基幹・環境整備（太陽光発電設備）に伴う立会調査

図 40　調査区位置図

写真 114　A地点掘削状況（北から）

写真 115　B地点掘削状況（南西から）

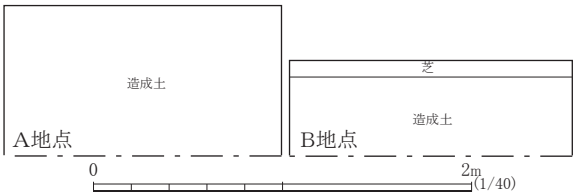


図 41　A・B地点土層断面柱状図

調査地区　吉田構内L・M－18、L－18

調査面積　10㎡

調査期間　平成26年2月19日

調査担当　横山成己

調査結果

吉田構内9箇所において、太陽光発電設備工事が計画された。このうち、理学部1号館、理学部3号館、人文・理学部管理棟、共用棟A、教育学部C棟、農学部・共同獣医学部本館、大学会館は建物の余掘り内または既設管沿いに計画されたため、埋蔵文化財に支障が生じるものではなかったが、総合図書館2号館、経済学部A棟の2箇所については、土地の新規掘削となる可能性が高いことから、立会調査を実施する運びとなった（図40）。

総合図書館2号館北側構内巡回道路沿い調査区（A地点）では、最深で80㎝の掘削が行われたが、造成土内にとどまった。経済学部A棟南側中庭調査区（B地点）では、最深で50㎝の掘削が行われたが、こちらも造成土内にとどまった（図40・41、写真114・115）。

両者のうち、総合図書館北部は遺跡保存地区に南面しており、既往の調査により多量の埋蔵文化財が包蔵されていることが判明している[註1～3]。当工事では埋蔵文化財に支障は生じなかったが、今後とも慎重な対応が求められる。

【註】

1）豆谷和之（1993）「吉田遺跡第Ⅰ地区A区の調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅠ』，山口

2）田畑直彦（2016）「吉田遺跡第Ⅰ地区A区の未報告図面について」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅩⅠ』，山口

3）横山成己（2016）「図書館改修工事及び環境整備（図書館周辺道路迂回）工事に伴う本発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』，山口

10. 交通標識設置工事に伴う立会調査

調査地区　吉田構内J－15、L-11・12・13、M－11、O－18区

調査面積　6㎡

調査期間　平成26年3月24日

調査担当　横山成己

調査結果

吉田構内6箇所に、交通標識を設置する工事が計画された（図42）。掘削規模はいずれも平面1m×1m、深さ0.6mと狭小であったが、平成20年度に本部2号館北側駐車場敷地にて現地表下0.6～0.8mで遺構面が確認されており、山口大学就職支援施設（O－HARA）西方の社会・国際連携ゾーンにて、現地表下0.25～0.6mで遺構面が確認されている[註1]ことから、慎重を期し立会調査を実施したが、掘削は何れも造成土内にとどまった（図43、写真116）。

【註】

1）田畑直彦（2012）「新教育棟設備関連工事に伴う本発掘調査」，横山成己（2012）「正門導線改善工事に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』，山口

写真 116　B地区東壁土層断面（南西から）

図 42　調査区位置図

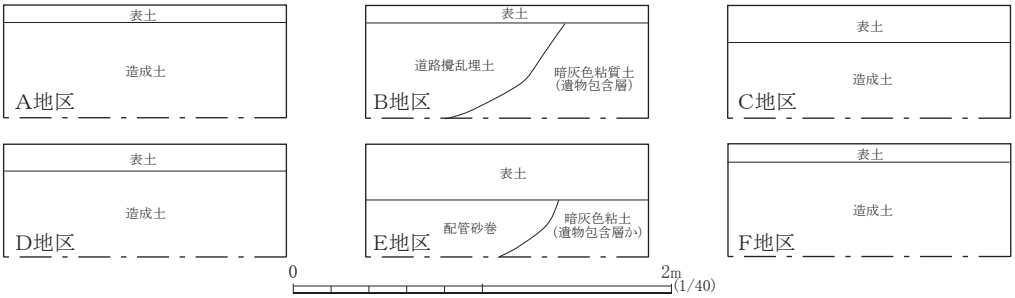


図 43　A～F地区土層断面柱状図

5. 学術情報資産の集約管理システム設備工事に伴う立会調査

図 44　調査区位置図

写真 117　調査区全景（南西から）

写真 118　調査区土層断面（南から）

調査地区　吉田構内K-14区

調査面積　約22.8㎡

調査期間　平成25年12月24日

調査担当　田畑直彦

調査結果

吉田構内の車庫北側において、学術情報資産の集約管理システム設備工事に伴い発電機を設置することになり、平面形7.6m×3mの範囲を現地表下40㎝まで掘削する工事が計画された。調査区周辺においては、平成元年度に本部車庫給水管改修に伴う立会調査[註1]が実施されている。同調査では現地表下約65㎝まで掘削が行われ、造成土のみが検出されたが、造成土には黒色の粘質土ブロックが含まれており、弥生土器片が出土した。今回の掘削工事においても遺物の出土が予想されたため、立会調査を実施した。

調査の結果、現地表下12㎝までが表土で、以下12～40㎝が造成土であり、埋蔵文化財に支障はなかった。しかし、造成土には遺物包含層ないし遺構埋土由来と考えられる黒褐色（10YR3/1）シルトが含まれていた。また、造成土中より弥生土器もしくは土師器と考えられる土器片1点が出土した。

調査区周辺の地下の状況には不明な点が多いため、引き続き注意が必要である。

【註】

1）河村吉行（1991）「本部車庫給水管改修に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅸ』),山口

1．教育学部附属山口中学校武道場新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区　白石構内

調査面積　約235.8㎡（A調査区68.2㎡、B調査区86.8㎡、C調査区80.8㎡）

調査期間　平成25年6月3～18日

調査担当　田畑直彦・石丸恵利子

調査結果

（1）調査の経緯（図45、写真119・120）

平成24年度からの中学校における武道の必修化に伴い、教育学部附属山口中学校で武道場新営工事が計画された。工事計画は校庭の南部に平面規模約16m×34mの範囲に建物を新営するもので、トイレ設置箇所で現地表下140㎝、その他の箇所で100～110㎝の掘削が計画された。上記の工事計画について、平成21年度第13回埋蔵文化財資料館専門委員会（3月23日開催）で審議した結果、工事予定地周辺では調査実績が少なく、地下の状況が不明確であることから、工事に先立って予備発掘調査を実施することになった。この段階で工事は未定であったが、平成25年度の工事決定を受けて、予備発掘調査を実施した。

調査にあたっては、予定地内にA～Cの調査区を設定した。B・C調査区は連続している。

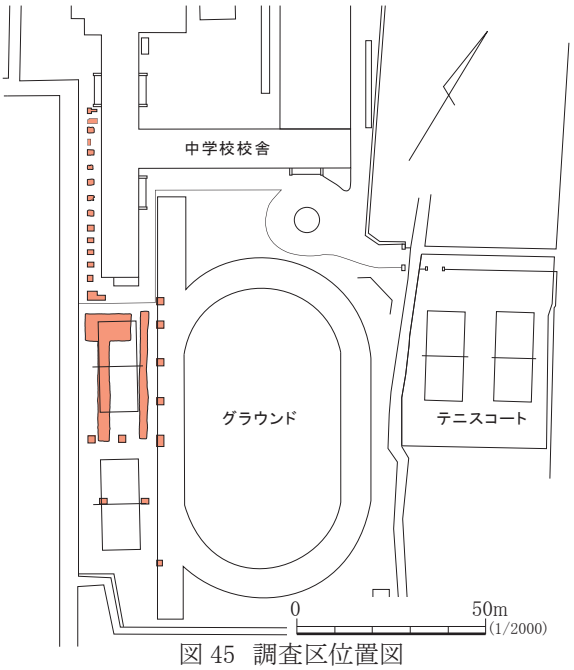


図 45　調査区位置図

写真 119　A調査区調査前全景（南から）

写真 120　B・C調査区調査前全景（南から）

（2）基本層序（図47・48、写真122～129）

基本層序は、下記の通りである。

第1層：表土（層厚約5～7㎝）
第2層：造成土（層厚約70～100㎝）
第3層：旧水田耕土（層厚約6～16㎝）
第4層：旧水田床土（層厚約2～8㎝）
第5層：遺物包含層（層厚約65㎝以上）
第6層：谷埋土（層厚40㎝以上）

学校敷地となる以前は水田（第3・4層）であり、その直下に第5、6層が続けて堆積している。両層は中世の遺物を含む。第6層は砂・礫層主体であり、水流による堆積層である。A調査区南部とB・C調査区全面で確認され、南側に落ち込むことから、埋没谷の堆積土と考えられる。第5層も谷埋土の可能性が高いが、今回の調査では谷の肩部を確認できず、分布範囲等に不明な点があるため、本報告では区別した。

（3）層序・遺構（図46・写真121～129）

a. Ａ調査区

現地表の標高は約28.3mである。調査区北部では、現地表下100～120㎝まで掘削を行ったが、底面は第2層であった。調査区南部では、現地表下約85㎝、標高約27.5mまでが第1・2層で、以下約27.5～27.3mで第3層、約27.3～27.2mで第4層、約27.2～27.05mで第5層を確認した。第5層の検出標高は約27.2mで、層厚は15㎝以上である。造成土から弥生土器・土師器片が出土した。

b. Ｂ調査区

現地表の標高は28.2～28.3mである。第1・2層は層厚がおよそ100㎝であったため、2段掘りとし、一部を除き、下段の断面図で報告を行う。現地下約90～100㎝、標高約27.4～27.2mまでが第1・2層である。以下標高約27.4～27.2mで第3層、約27.2～27.0mで第4層、約27.2～26.7mで第5層、約26.7～26.6mで第6層を検出した。第5層の層厚は28～47㎝で、第5－3・6層からは、須恵器、瓦質土器片が少量出土した。また上面で旧水田暗渠1条を検出した。第6層は層厚10㎝以上で、湧水が顕著であった。

c. Ｃ調査区

現地表の標高は28.2～28.3mである。第1～4層の層序はB調査区と同様である。B調査区同様、2段掘りとし、下段の断面図で報告を行う。調査区南部では第4－4層上面で旧耕土に伴う野壺（肥だめ）を1基検出した。また、調査区北西部で一部を深く掘り下げたところ、第5－7層を標高約26.8mで検出し、層厚は最大で22㎝であった。第5－2・3層からは、土師器、瓦質土器片が出土した。標高約26.6～26.4mでは第6層を検出した。同層は湧水が顕著で、木製椀片1点と土器片が少量出土した。調査区南西部も一部を深く掘り下げたところ、標高約27.1～26.9mで第5－2・5層とb層を検出した。b層は第5－5層を切っていることから、河川堆積土と考えられる。第6層は層厚40㎝以上である。湧水が顕著で、遺物は出土しなかった。安全管理上、これ以上の掘削は行っていない。

（4）遺物（図49・50、写真130・131）

【土器】

B調査区第5－3・6－1層出土土器

1は土師器皿口縁部である。2は土師器皿底部で外底面に糸切痕がある。3は瓦質土器甕の口縁部か。外面はヨコミガキが顕著で、接合面で剥離する。

B調査区第5－3層出土土器

4は土師器皿である。摩滅するが、外底面に糸切痕がある。5は須恵器甕の胴部である。外面に平行タタキ、内面に当て具痕がある。6は土師器皿。7は瓦質土器擂鉢の口縁部、8は同胴部で内面に卸目6条を施す。9は瓦質土器甕の胴部で、外面に格子目タタキ、内面にヨコハケを施す。

C調査区第5－2・5－3層出土土器

10は瓦質土器擂鉢の口縁部で、内面の大半が剥離している。

C調査区下段・上段清掃時出土土器

11～13は下段清掃時出土土器。多くは第5－2・3層からの出土と考えられる。11は弥生土器甕の口縁部。後期～終末期か。口縁部に2段の刺突文を施す。12は須恵器高台付坏。13は瓦質土器擂鉢口縁部。14～16は上段清掃時出土土器。14は弥生時代終末～古墳時代初頭の山陰系甕の口縁部。15は14と同一個体の胴部で外面に波状文、内面にケズリを施す。16は土師器皿の口縁部～底部。

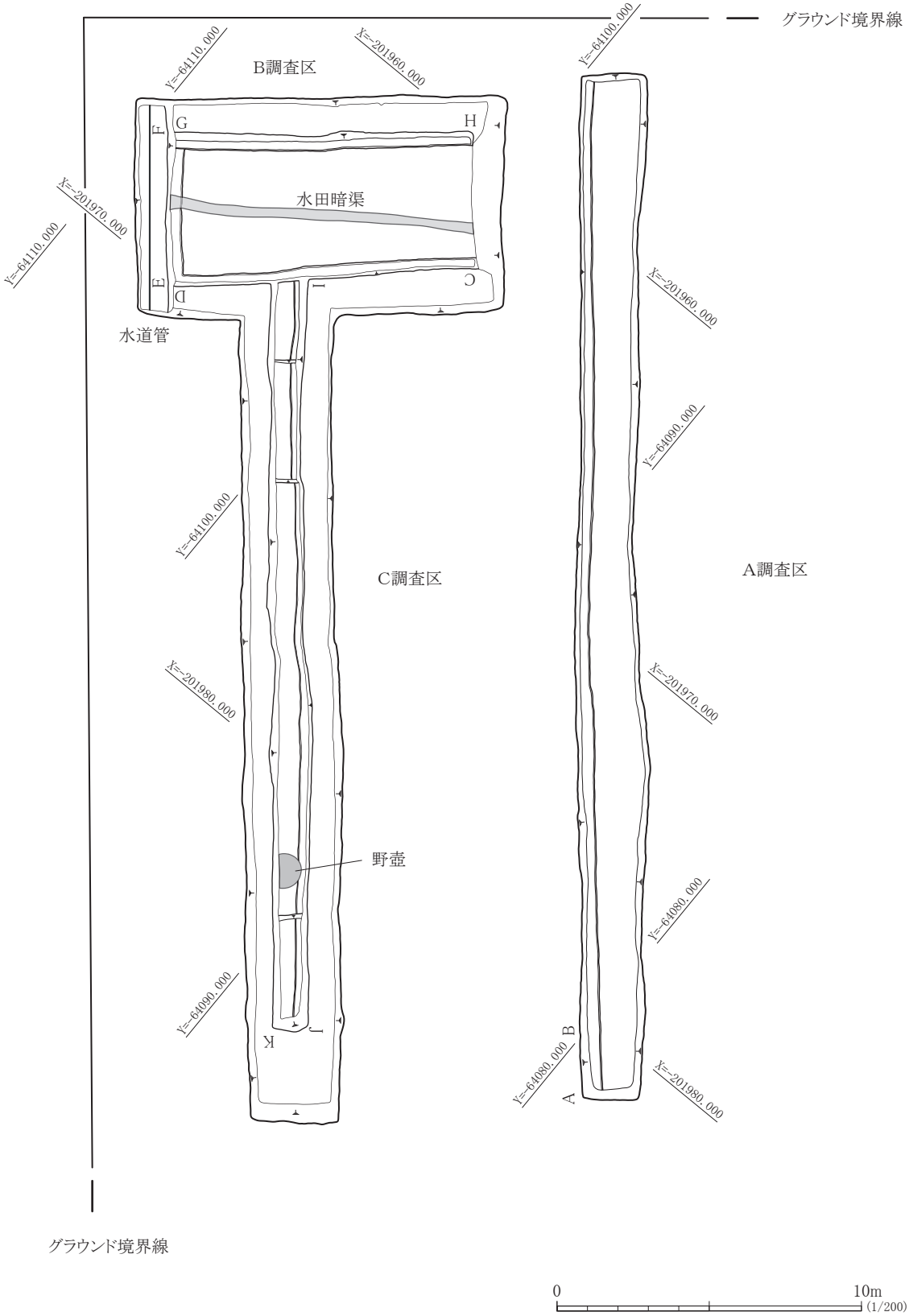
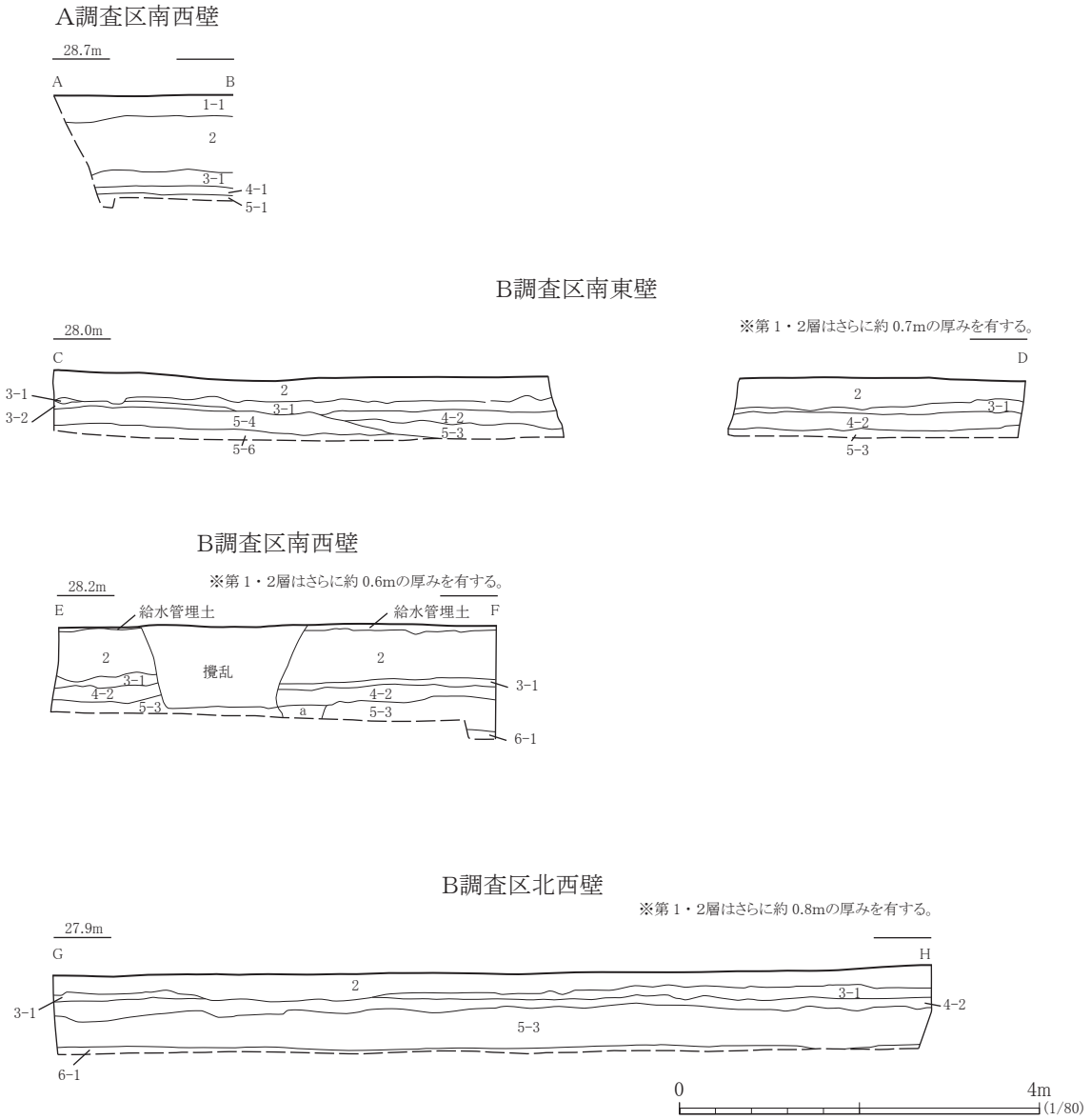

グラウンド境界線
B調査区
Y=-64110.000
X=-201960.000
Y=-64100.000
G
H
F
E
D
C
I
J
K
L
水田暗渠
X=-201970.000
Y=-64110.000
水道管
X=-201960.000
Y=-64090.000
Y=-64100.000
C調査区
A調査区
X=-201980.000
X=-201970.000
野壺
Y=-64080.000
Y=-64090.000
Y=-64080.000
B
A
X=-201980.000
グラウンド境界線
0
10m
(1/200)

図 46　調査区平面図

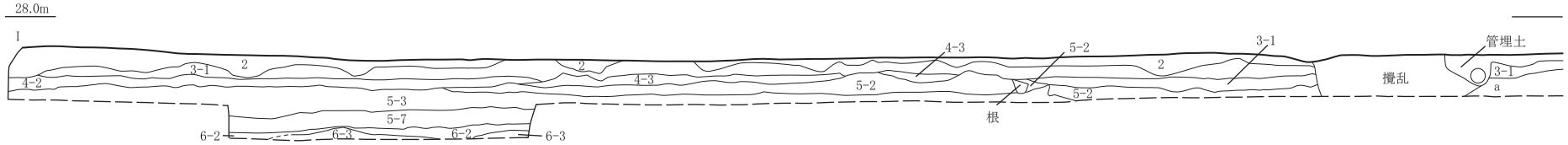


1-1　表土　マサ土・コークス・浅黄色（2.5Y7/4）粗砂
2　造成土　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト、黄褐色（2.5Y5/6）シルト、黒褐色（2.5Y3/1）シルト、オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルトをブロック状に含む。0.5～5㎝大礫含む
3-1　旧耕土　オリーブ灰色（10Y4/2）シルト　0.5～3㎝大礫含む
3-2　旧耕土　緑灰色（5G5/1）シルト
4-1　旧床土　黄灰色（2.5Y5/1）シルト　0.5～3㎝大礫含む
4-2　旧床土　灰オリーブ色（5Y5/2）シルト　0.5～3㎝大礫少量含む
5-1　遺物包含層　オリーブ灰色（10Y6/2）シルト、明黄褐色（10YR6/6）礫・粗砂を含む
5-3　遺物包含層　灰色（7.5Y5/1・6/1）シルト　0.5～3㎝大礫少量含む
5-4　遺物包含層　灰色（7.5Y4/1）シルト　0.5～3㎝大礫少量含む
5-6　遺物包含層　暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）シルト　0.5～3㎝大礫少量含む
6-1　谷埋土　灰オリーブ色（7.5Y5/2）粗砂
a　暗渠埋土　5-2に4-2をブロック状に含む

図 47　調査区土層断面図1

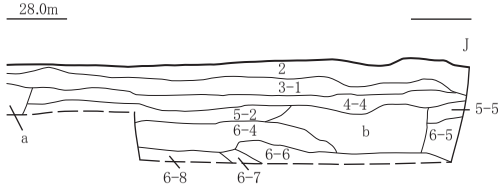
C調査区北東壁

※第１・２層はさらに約 0.6 ～ 0.8mの厚みを有する。

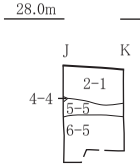


C調査区南東壁

※第１・２層はさらに約 0.7 ～ 0.8mの厚みを有する。



※第１・２層はさらに約 0.7mの厚みを有する。



2　造成土　オリーブ灰色（2.5GY6/1）シルト　黄褐色（2.5Y5/6）シルト、黒褐色（2.5Y3/1）シルト、オリーブ褐色（2.5Y4/4）シルトをブロック状に含む。～５cm大礫含む
3-1　旧耕土　オリーブ灰色（10Y4/2）シルト　～３cm大礫含む
4-2　旧床土　灰オリーブ色（5Y5/2）シルト　～３cm大礫少量含む
4-3　旧床土　灰オリーブ色（7.5Y6/2）シルト　～３cm大礫少量含む
4-4　旧床土　灰オリーブ色（5Y4/2）シルト　～３cm大礫少量含む
5-2　遺物包含層　灰色（7.5Y5/1）シルト　～３cm大礫少量含む
5-3　遺物包含層　灰色（7.5Y6/1）シルト　～３cm大礫少量含む
5-5　遺物包含層　5－2と同じ
5-7　遺物包含層　灰色（7.5Y6/1）シルト　5-3より礫を多く含む
6-2　谷埋土　灰オリーブ色（7.5Y5/2）細砂　青灰色（5B4/1）シルト、
6-3　谷埋土　オリーブ褐色（2.5Y4/3）礫　～４cm大礫主体
黄灰色（2.5Y4/1）シルトをラミナ状に含む 部分的に6-2を含む
6-4　谷埋土　灰色（7.5Y5/1）細砂　粗砂を多く含む
6-5　谷埋土　6-4と同じ
6-6　谷埋土　灰色（10Y4/1）粗砂
6-7　谷埋土　明オリーブ灰色（2.5GY7/1）細砂　0.5～１cm大礫を少量含む
6-8　谷埋土　灰色（5Y4/1）シルト　～３cm大礫少量含む
a 野壷埋土　灰色（7.5Y4/1）シルトに灰オリーブ色（7.5Y5/2）細砂、３～５cm大礫をブロック状に含む
b 河川堆積土　灰オリーブ色（7.5Y5/2）粗砂　～15cm大礫含む

図48　調査区土層断面図2

写真121　A～C調査区全景（北西から）

写真122　A調査区北部南西壁土層断面（北東から）

写真123　A調査区南部南西壁土層断面（東から）

写真124　B調査区南部・C調査区全景（西から）

写真125　B調査区南西壁土層断面（東から）

写真126　B調査区北西壁土層断面（南から）

写真127　C調査区北部北東壁土層断面(南から)

写真128　C調査区南部北東壁土層断面（南から）

写真129　C調査区野壺(北西から)

【木製品】

17はC調査区北西部の第6－2層から出土した木製椀で高台を欠損する。内外面に漆を塗布する。乾燥による漆の剥離を避けるため、最低限の実測にとどめた。

（5）小結

今回調査区の北側に位置する、教育学部附属山口中学校校舎等改修その他工事に伴う予備発掘調査区[註1]では、標高約27.8mで弥生～古墳時代の遺構が検出されている。一方、調査区南端部に隣接する、汚水排水管布設工事に伴う試掘調査第4トレンチ[註2]では、標高約26.9mで暗緑灰色粘土、同層下位では暗オリーブ灰色細砂、暗灰色粗砂が確認されている。また、教育学部附属山口中学校新営植物移植工事に伴う立会調査区[註3]では、現地表下約130㎝の地点で旧耕土とみられる①暗灰色弱粘質土（層厚10㎝）、その下位に旧床土とみられる②黄灰色弱粘質土（層厚10㎝）、遺物包含層とみられる③暗灰褐色弱粘質土（層厚10㎝以上）が検出され、③層は昭和61年度に検出された暗緑灰色粘土と同一層で、埋没河川（谷）の埋土である可能性が指摘されている。

今回の調査の結果、A調査区北西部では、現地表下約90㎝、標高約27.4mにおいても造成土しか検出されなかった。また、A調査区南東部・B・C調査区では遺物包含層、B・C調査区では流水堆積による砂・砂礫層が確認された。C調査区北西部では現地表下約1.8mまで掘削を行ったが、谷埋土が続いており地山を検出することができなかった。以上から、旧地形は南側に落ち込んでおり、中学校校舎付近から南側には埋没谷が存在する可能性が高い。遺物包含層も谷埋土ととらえれば、同層出土遺物は中世（15～16世紀頃）が主体であることから、この頃までに埋没したと考えられる。

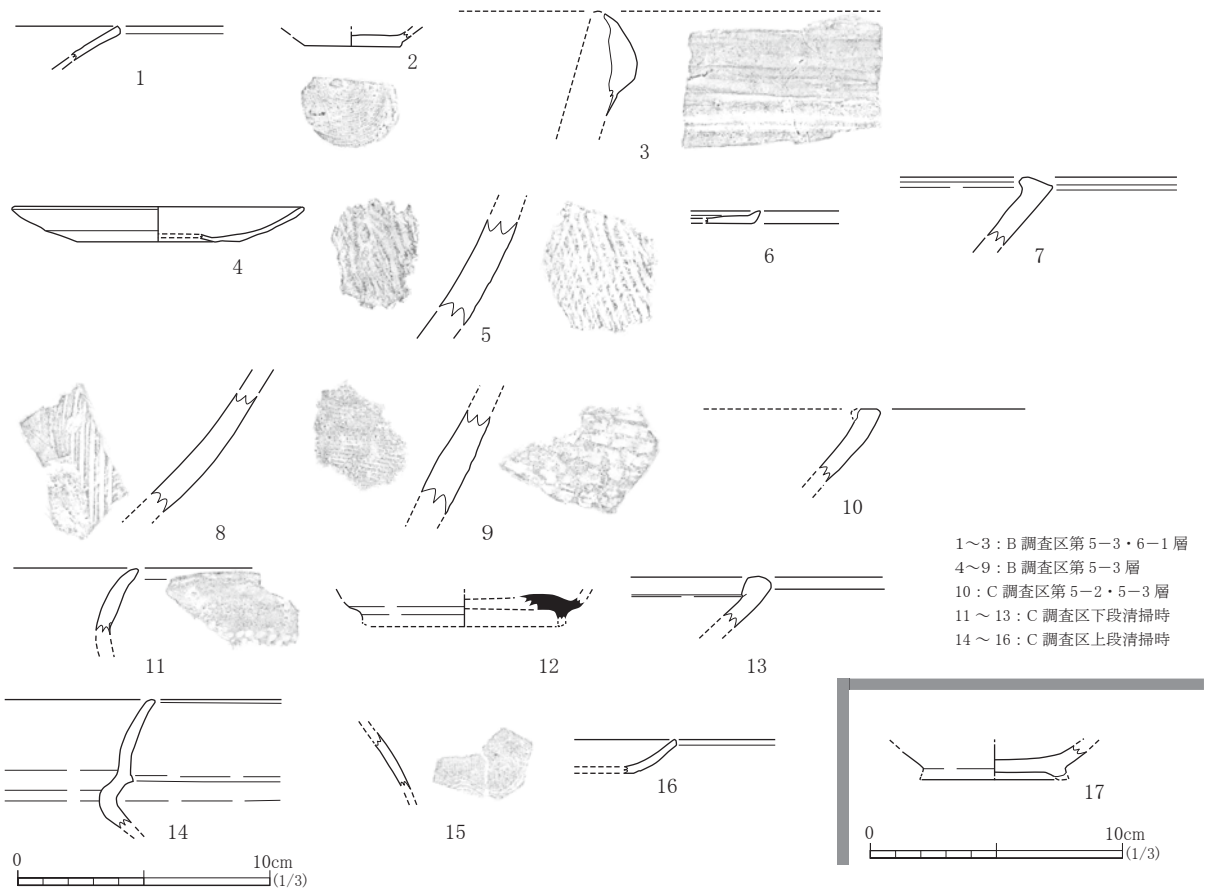


図 47　出土遺物実測図（土器）

図 48　出土遺物実測図（木製品）

写真 130　出土遺物（土器）①

写真 131　出土遺物（土器）②

表7 出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	B調査区 第5－3・6－1層	土師器　皿	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/2)	精良	
2	B調査区 第5－3・6－1層	土師器　皿	底部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	精良	
3	B調査区 第5－3・6－1層	瓦質土器　甕か	口縁部		①灰黄色(2.5Y7/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)	0.1～3㎜の砂粒を含む	
4	B調査区 第5－3層	土師器　皿	口縁部 ～底部	①(11.6)②(6.4)	①②浅黄色(2.5Y7/3)	精良	
5	B調査区 第5－3層	須恵器　甕	胴部		①②灰色(N6/0)	0.1～1㎜の砂粒を含む	
6	B調査区 第5－3層	須恵器　蓋	口縁部 ～底部		①②灰黄色(2.5Y7/2)	精良	
7	B調査区 第5－3層	瓦質土器　擂鉢	口縁部		①②暗灰色(N5/0)	0.1～3㎜の砂粒を含む	
8	B調査区 第5－3層	瓦質土器　擂鉢	胴部		①灰白色(5Y7/1) ②灰白色(2.5Y8/2)	0.1～1㎜の砂粒を含む	
9	B調査区 第5－3層	瓦質土器　甕	胴部		①灰色(N4/6) ②灰色(10Y5/1)	0.1～1㎜の砂粒を含む	
10	C調査区 第5－2・5－3層	瓦質土器　擂鉢	口縁部		①オリーブ黒色(5Y3/1) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～2㎜の砂粒を含む	
11	C調査区 下段清掃時	弥生土器　甕	口縁部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.1～2㎜の砂粒を含む	
12	C調査区 下段清掃時	須恵器　坏身	底部		①灰色(5Y5/1) ②灰白色(5Y7/1)	0.1～1㎜の砂粒を含む	
13	C調査区 下段清掃時	瓦質土器　擂鉢	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.1～3㎜の砂粒を含む	
14	C調査区 上段清掃時	弥生土器もしくは土師器　甕	口縁部		①にぶい黄褐色(10Y7/3) ②にぶい黄褐色(10Y6/3)	0.1～1㎜の砂粒を含む	山陰系15と同一個体
15	C調査区 上段清掃時	弥生土器もしくは土師器　甕	胴部		①にぶい黄褐色(10Y7/3) ②にぶい黄褐色(10Y6/3)	0.1～1㎜の砂粒を含む	山陰系14と同一個体
16	C調査区 上段清掃時	土師器　皿	口縁部 ～底部		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②浅黄色(2.5Y7/3)	0.1～0.5㎜の砂粒を僅かに含む	

表8 出土遺物(木器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	法量(cm)	備考
17	C調査区 第6－2層	椀	底部　厚0.5 推定底径5.9	内外面漆塗り 漆の色調　黒色(10YR2/1)

今回の調査について、平成25年度第1回埋蔵文化財資料館専門委員会で審議した結果、工事掘削深度内で顕著な遺構・遺物は認められなかったものの、谷の深度を確認できなかったこと及び弥生～古墳時代の遺構面を検出できなかった点が課題として指摘された。今回調査区付近は造成土が厚く、谷埋土からの湧水が顕著であることから、今後の発掘調査にあたっては、矢板による壁面の保護が必要である。

【註】

1）田畑直彦（2011）「教育学部附属山口中学校校舎等改修その他工事に伴う予備発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報5－平成19年度－』,山口

2）河村吉行・杉原和惠（1987）「亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』),山口

3）横山成己（2016）「教育学部附属山口中学校新営植物移植工事に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報10－平成24年度－』,山口

2．教育学部附属山口中学校武道場新営工事に伴う外溝及び渡り廊下取設工事に伴う立会調査

調査地区　白石構内

調査面積　77.6㎡

調査期間　平成26年2月17～20日、3月6・10・11日

調査担当　田畑直彦・川島尚宗

調査結果

（1）調査の経緯（図51）

教育学部附属山口中学校武道場新営工事に伴い、外構工事（防球ネット、フットサルコート、汚水管・集水枡）、渡り廊下取設工事が計画され、立会調査を実施することになった。報告にあたっては、防球ネット新設箇所を1～7地点、フットサルコート新設箇所を8～10地点、渡り廊下新設及び汚水管・集水枡の新設箇所を11～25地点として報告する。1～10地点は田畑による調査記録、11～25地点は川島による調査記録により報告する。本報告は田畑が（1）・（2）・（4）、川島が（3）を分担執筆した。

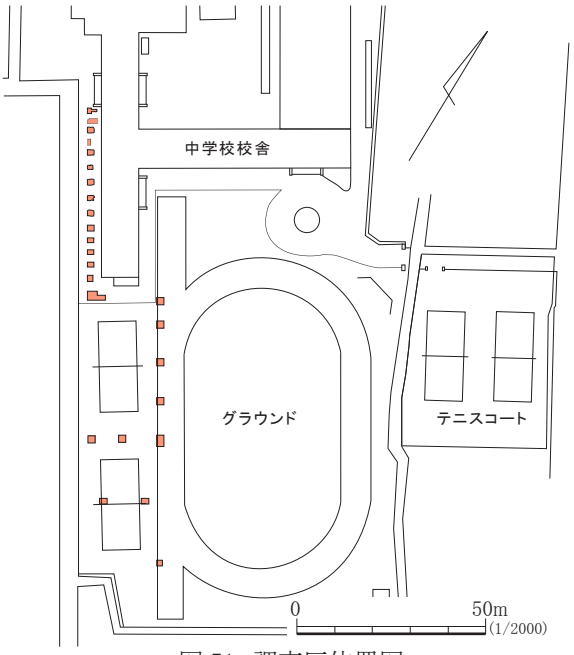


図 51　調査区位置図

（2）層序と遺構(図52～53、写真132～157)

a.1～7地点

1～7地点は防球ネットのポール設置箇所である。ボーリングで現地表下約4～7.2mまで掘削を行った。工事の性格上、層序の確認は困難であった。

写真 132　1～5地点全景（南東から）

1地点は現地表下70㎝附近の掘削土にオリーブ灰色（10Y6/2)シルト、現地表下170～400㎝附近の掘削土に明青灰色（5B7/1)シルトが含まれていることを確認した。

2地点は現地表下170㎝附近の掘削土に明青灰色（5BG7/1)シルト、現地表下4.3m附近の掘削土に明青灰色（10BG7/1）シルトが含まれていることを確認した。

3地点は湧水・崩落が激しく層序を確認できなかった。

写真 133　5～7地点全景（南から）

4地点は、現地表下120㎝附近の掘削土に黄灰色（2.5Y4/1)粗砂、現地表下4m附近の掘削土に灰オリーブ色（5Y5/3)シルトが含まれていることを確認した。

5地点は、現地表下370㎝附近の掘削土に黄灰色（2.5Y5/3)粘土が含まれていることを確認した。

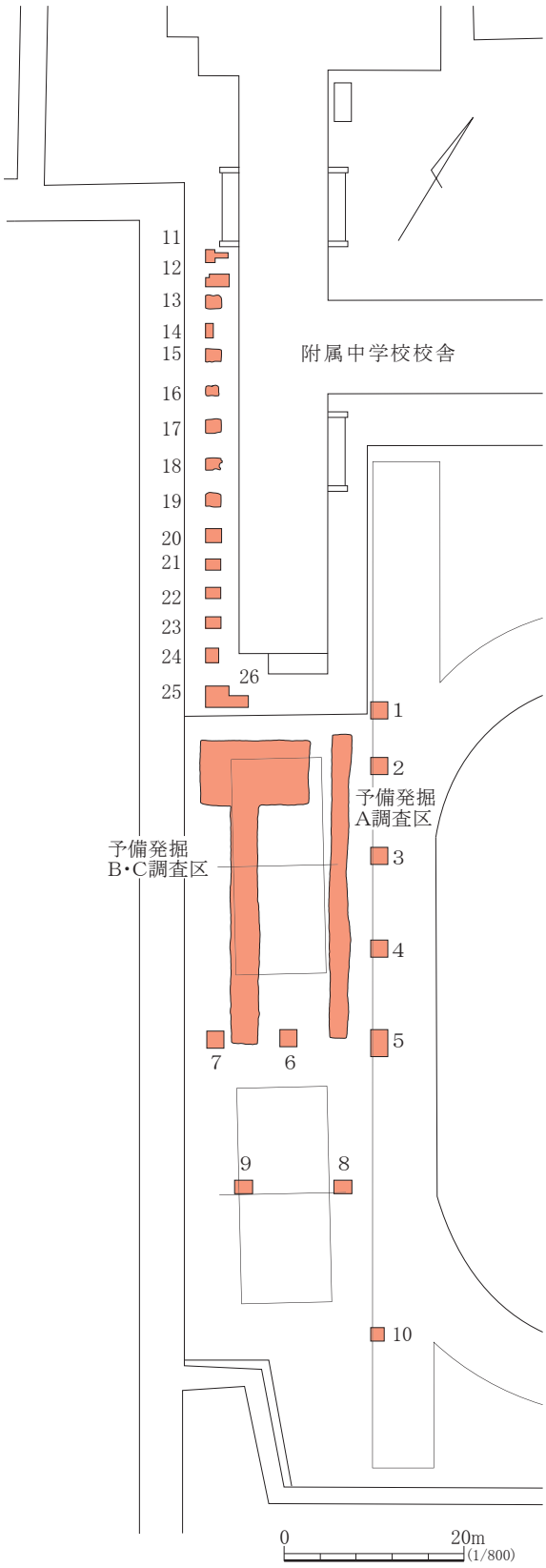


図 52　調査区詳細図

6地点は湧水が激しかったが、現地表下130㎝附近は黄褐色（2.5Y5/3）粗砂及び同色のシルトであることが確認できた。

7地点は昭和61年度の汚水管布設に伴う試掘調査第4トレンチ[註1]と重複する。湧水が激しかったが、現地表下70㎝附近までは確実に造成土であることは確認できた。また、現地表下4.2m附近の掘削土には弥生時代遺構の遺構面形成層と近似する明黄褐色（2.5Y6/6）シルトが含まれていた。

b.8～10地点

8～10地点はフットサルコート整備に伴う集水枡設置箇所である。

8地点では現地表下約90㎝、9地点では現地表下約80㎝まで掘削したが、造成土の範囲内であった。10地点では、現地表下96㎝まで掘削し、底面で旧耕土と考えられる褐灰色（10YR5/1）シルトを検出した。

c.11～25地点

11～25地点は、渡り廊下設置箇所及び汚水管・集水枡設置箇所で、舗装を撤去した状態で調査を行った。攪乱が顕著であったため、層厚のばらつきが大きい。以下では最も良好に残存していた箇所の層位について記載する。

11地点の層序は現地表下28㎝までが①造成土、以下は層厚34㎝の②黒色（10YR2/1）土（粘性あり　遺物包含層）、③層厚7㎝の黒褐色（2.5Y3/2）シルト（遺物包含層）、④層厚23㎝以上の灰オリーブ色（7.5Y5/2）砂（弥生時代以降の遺構面形成層）であり、①造成土には黒色粘質土のブロックと弥生土器・土師器片が多数含まれていた。また、②・③層からも弥生土器・土師器片が出土した。

12地点の層序は現地表下58㎝までが①造成土、以下は層厚25㎝以上の灰オリーブ色（7.5Y4/2）土（粘性なし　弥生時代以降の遺構面形成層）を検出した。①層から弥生土器・土師器片が出土した。

13地点の層序は現地表下36㎝までが①造成土・攪乱、以下は層厚27㎝の②黒褐色（2.5Y3/1）土（粘性あり　遺物包含層）、層厚6㎝の③黒褐色（10YR3/1）土（粘性あり　遺物包含層）、層厚20㎝以上の④オリーブ灰色（10Y5/2）砂礫（弥生時代以降の遺構面形

成層)である。①～③層から弥生土器・土師器片が出土した。④層上面では幅47㎝以上、長さ115㎝以上で西－東に流路方向を持つ溝を検出した。溝の深さは最深部で15㎝で、埋土には植物遺体が含まれていた。

14地点の層序は現地表下95㎝までが①造成土、以下は層厚4㎝以上の②緑灰色(5G5/1)砂礫(弥生時代以降の遺構面形成層)であった。

15地点の層序は現地表下29㎝までが①造成土、以下は層厚13㎝の②オリーブ褐色(2.5Y4/4)土(粘性弱い　旧床土)、層厚21㎝の③黒褐色(2.5Y3/1)土(粘性あり　遺物包含層)、層厚4㎝の④黒褐色(2.5Y3/1)砂礫(河川堆積土)、層厚20㎝の⑤暗灰黄色(2.5Y5/2)砂礫(弥生時代以降の遺構面形成層)、層厚12㎝以上の⑥オリーブ灰色(10Y5/2)砂礫(弥生時代以降の遺構面形成層)であった。②・③層から弥生土器・土師器片が出土した。

16地点の層序は現地表下35㎝までが①造成土、以下は層厚14㎝の②オリーブ褐色(2.5Y4/6)土(粘性弱い　旧床土)、層厚23㎝の③黒色(2.5Y2/1)土(粘性あり　遺物包含層)、層厚4㎝の④灰オリーブ色(7.5Y5/2)砂礫(河川堆積土)、層厚5.5㎝の⑤オリーブ灰色(10Y6/2)砂礫(河川堆積土)、層厚8㎝の⑥黄褐色(10YR5/6)砂礫(河川堆積土)、層厚8㎝以上の⑦黒褐色(2.5Y3/2)砂礫(河川堆積土)であった。ただし、西端部に⑥・⑦層はなく層厚20㎝以上の⑤層であった。③層から弥生土器・土師器片が出土した。

17地点の層序は現地表下30㎝までが①造成土、以下は層厚6㎝の②オリーブ褐色(2.5Y4/4)土(粘性弱い　旧耕土)、層厚20㎝の③オリーブ褐色(2.5Y4/4)土(粘性弱い　旧床土)、層厚12㎝の④黒褐色(2.5Y3/2)土(粘性あり　遺物包含層)、層厚11㎝の⑤暗灰黄色(2.5Y4/2)砂礫(河川堆積土)、層厚8㎝の⑥黒褐色(2.5Y3/2)土(粘性弱い　河川堆積土)、層厚5㎝の⑦黒色(2.5Y2/1)土(粘性あり河川堆積土)、層厚15㎝の⑧黒褐色(2.5Y3/2)砂礫(河川堆積土)、層厚17㎝以上の⑨黒褐色(2.5Y3/1)砂礫(河川堆積土)であった。上記のうち、⑤・⑧層は部分的な堆積である。④層から弥生土器・土師器片が出土した。

18地点の層序は現地表下63㎝までがコンクリート・バラス・①攪乱、以下は層厚23㎝の②黒褐色(2.5Y3/1)土(粘性あり　遺物包含層)、層厚9㎝の③暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂礫(河川堆積土)、層厚8㎝以上の④黒褐色(2.5Y3/2)土(粘性あり　河川堆積土)であった。②～④層から弥生土器・土師器片が出土した。

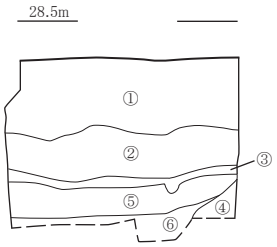
19地点の層序は現地表下36㎝までが①造成土、以下は層厚23㎝の②灰オリーブ色(5Y4/2)土(旧耕土)、層厚21㎝の③暗灰黄色(2.5Y4/2)土(旧床土)、層厚6㎝の④オリーブ黒色(5Y3/2)砂礫(河川堆積土)、層厚7㎝の⑤黒褐色(2.5Y3/2)土(粘性あり、炭を含む　河川堆積土)、層厚1㎝以上の⑥灰オリーブ色(7.5Y3/1)土(粘性なし　弥生時代以降遺構面形成層)であった。③・④層から弥生土器・土師器片、⑤層から縄文土器片が出土した。

20地点の層序は現地表下59㎝までが①造成土、以下は層厚23㎝の②暗灰黄色(2.5Y4/2)土(粘性あり　旧床土)、層厚3㎝の③オリーブ灰色(10Y6/2)シルトであった。

21地点の層序は現地表下76㎝までが①造成土、以下は層厚19㎝の②灰オリーブ色(5Y4/2)土(粘性あり　旧床土)、層厚8㎝の③灰オリーブ色(7.5Y4/2)土(しまりなし　弥生時代遺構の遺構面形成層)であった。

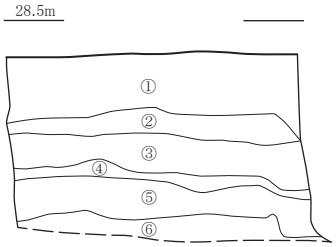
22地点の南東壁の一部における層序は、現地表下74㎝までが①造成土、以下で層厚23㎝の②暗灰黄色(2.5Y4/2)土(粘性あり　旧床土)、97～99㎝で③暗灰黄色(2.5Y4/2)土(粘性あり・1～5㎝大の礫

13 地点北西壁



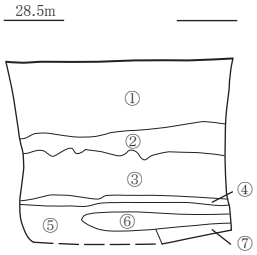
① 造成土
② 遺物包含層 黒褐色（2.5Y3/1）土 粘性あり 0.3～1.2㎝大の礫を少量含む
③ 遺物包含層 黒褐色（10YR3/1）土 粘性あり 1～5㎝大の礫を含む
④ 弥生時代以降遺構面形成層 オリーブ灰色（10Y5/2）砂礫 1～3㎝大の礫を多く含む
⑤ 溝埋土 灰オリーブ色（7.5Y5/2）砂礫 1～3㎝大の礫を多く含む
⑥ 溝埋土 黒（10YR7/1）色土 粘性弱い 植物遺体含む

15 地点北西壁



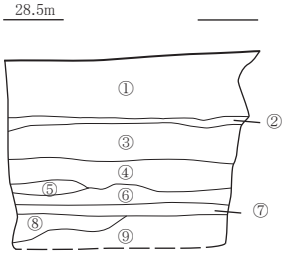
① 造成土・攪乱
② 床土 オリーブ褐色（2.5Y4/4）土 粘性弱い
③ 遺物包含層 黒褐色（2.5Y3/1）土 粘性あり 0.2～0.5㎝大の礫を少量含む
④ 河川堆積土 黒褐色（2.5Y3/1）砂礫 0.5～1㎝大の礫を多く含む
⑤ 河川堆積土２ 暗灰黄色（2.5Y5/2）砂礫 1～5㎝大の礫を多く含む
⑥ 河川堆積土２ オリーブ灰色（10Y5/2）砂礫 1～5㎝大の礫を多く含む

16 地点北西壁



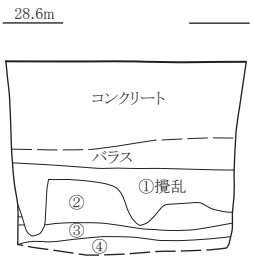
① 造成土
② 床土 オリーブ褐色（2.5Y4/6）土 粘性弱い 0.3～3㎝大の礫を含む
③ 遺物包含層 黒色（2.5Y2/1）土 粘性あり
④ 河川堆積土 黒褐色（10YR2/1）砂礫 0.7～2㎝大の礫を多く含む
⑤ 河川堆積土 オリーブ灰色（10Y6/2）砂礫 0.1～5㎝大の礫を多く含む
⑥ 河川堆積土 黄褐色（10YR5/6）砂礫 0.1～5㎝大の礫を多く含む
⑦ 河川堆積土 黒褐色（2.5Y3/2）砂礫 0.1～5㎝大の礫を多く含む

17 地点北西壁



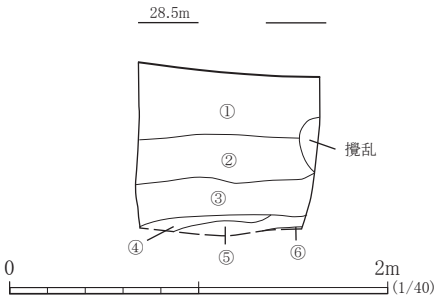
① 造成土
② 耕土 オリーブ褐色（2.5Y4/4）土 粘性弱い
③ 床土 オリーブ褐色（2.5Y4/4）土 粘性弱い
④ 遺物包含層 黒褐色（2.5Y3/2）土 粘性あり 1.5～3㎝大の礫をわずかに含む
⑤ 河川堆積土 暗灰黄色（2.5Y4/2）砂礫 3～10㎝大の礫を多く含む
⑥ 河川堆積土 黒褐色（2.5Y3/2）土 粘性弱い
⑦ 河川堆積土 黒色（2.5Y2/1）土 粘性あり 5～10㎝大の礫をわずかに含む
⑧ 河川堆積土 黒褐色（2.5Y3/2）砂礫 0.7～5㎝大の礫を多く含む
⑨ 河川堆積土 黒褐色（2.5Y3/1）砂礫 0.5～5㎝大の礫を多く含む

18 地点南西壁



② 遺物包含層 黒褐色（2.5Y3/1）土 粘性あり 炭化物をわずかに含む
③ 河川堆積土 暗オリーブ褐色（2.5Y3/3）砂礫 0.5～3㎝大の礫を多く含む
④ 河川堆積土 黒褐色（2.5Y3/2）土 粘性あり 0.5～1.5㎝大の礫を含む

19 地点東南東壁



① 造成土
② 耕土 灰オリーブ色（5Y4/2）土
③ 床土 暗灰黄色（2.5Y4/2）土
④ 河川堆積土 オリーブ黒色（5Y3/2）砂礫 0.5～3.5㎝大の礫を少量含む
⑤ 河川堆積土 黒褐色（2.5Y3/2）土 粘性あり 炭を含む
⑥ 弥生時代以降遺構面形成層 灰オリーブ色（7.5Y3/1）土 粘性なし シルト層

図 53 調査区土層断面図

写真134　1地点南西壁土層断面（北東から）

写真135　4地点南西壁土層断面（北東から）

写真136　5地点南東甕土層断面（北西から）

写真137　6地点南東壁土層断面（北西から）

写真138　7地点南東壁土層断面（北西から）

写真139　8地点北西壁土層断面（南から）

写真140　9地点北西壁土層断面（南東から）

写真141　10地点北東壁土層断面（南西から）

写真142　11～22地点全景（北西から）

写真143　11地点南東壁土層断面（北西から）

写真144　12地点南東壁土層断面（北西から）

写真145　13地点溝状遺構検出状況（西から）

写真146　14地点北東壁土層断面（西から）

写真147　15地点北西壁土層断面（西から）

写真148　16地点北西壁土層断面（西から）

写真149　17地点北西壁土層断面（西から）

写真150　18地点南西壁土層断面（東から）

写真151　19地点南東壁土層断面（北西から）

写真152　20地点南東壁土層断面（北西から）

写真153　21地点南西壁土層断面（北東から）

写真154　22地点南東壁土層断面（北から）

写真155　23地点全景（北東から）

写真156　24地点北東壁土層断面（南西から）

写真157　25地点南東壁土層断面（北西から）

を含む弥生時代以降の遺構面形成層）であった。②層から弥生土器・土師器片が出土した。

23地点は攪乱が著しく、南西壁の一部において現地表下80㎝で第3層を確認するにとどまった。

24地点は現地表下80㎝まですべて造成土の範囲内であった。25地点は渡り廊下の基礎及び汚水管・集水枡新設箇所である。現地表下約125㎝まで掘削を行ったが、すべて造成土の範囲内であった。

【註】

1）河村吉行・杉原和惠（1987）「亀山構内教育学部山口附属学校汚水排水管布設に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅵ』,山口

（3）出土遺物（図54～55・写真158～162）

以下、各地点別に出土した遺物を報告する。38を除き、これらはすべて、弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての土器である。

11地点①～③層

1は甕の口縁部から胴部。胴部外面および口縁部内面にハケを施す。胴部内面にはケズリを施す。2は甕の口縁部から胴部。内外面にハケを施す。3は甕の口縁部から頸部。口唇部に浅い沈線を巡らす。4は甕の頸部から胴部。内外面にハケを施す。5は甕の頸部から胴部。内外ともにハケの後にナデを施す。6は甕の口縁部。外面口唇部にはナデ、胴部にミガキ状の調整を施す。7～9は複合口縁壺の口縁部。どちらも資料下端で剥離している。7は鋸歯文を施す。8は外面に単沈線による波状文、竹管状工具により連続する円形刺突を施す。9は口唇部上面に斜位のキザミを施す。外面の調整はハケである。10は壺の頸部で、胎土・色調より8・9と同一個体の可能性が高い。くびれ部の隆帯に二枚貝腹縁により斜格子文を施す。外面にハケを施す。11は壺の胴部。内面にハケを施し、外面はミガキ状となる。12は高坏の坏部。内外面にミガキを施す。

12地点①層

13は山陰系の甕口縁部。14は壺の口縁部。内外面にミガキを施す。

13地点①層

15は甕の口縁部。

15地点③層

16は甕の頸部。17は壺の頸部。くびれ部隆帯に二枚貝腹縁による斜格子文を、胴部外面にハケを施す。18・19は山陰系の甕口縁部で、18は口縁部から頸部まで残存する。20は高坏の口縁部。

16地点③層

21は甕の頸部から胴部。外面にハケを施す。22は甕の胴部。23は壺の胴部。外面にハケを施した後、粗くミガキを施す。

17地点④層

24は複合口縁壺の口縁部。外面は大きく剥落している。口唇部上面に斜位のキザミ、破片下端付近に斜格子文を施す。内面にミガキを施す。25は高坏の口縁部。

18地点②層

26～28は甕の口縁部。26は外面にハケを施す。27は内外とも、頸部にナデ、胴部にハケを施す。28は内外ともナデを施す。29は甕の胴部。外面にハケを施し、くびれ部下に6～9条の水平沈線を巡らす。30は甕の胴部。外面および内面上半にハケを施し、内面下半にケズリを施す。胴部上半に輪積痕を残す。31は甕の頸部。内外ともくびれ部より下にハケを施す。32は甕の胴部。内外ともナデを施す。33は甕の

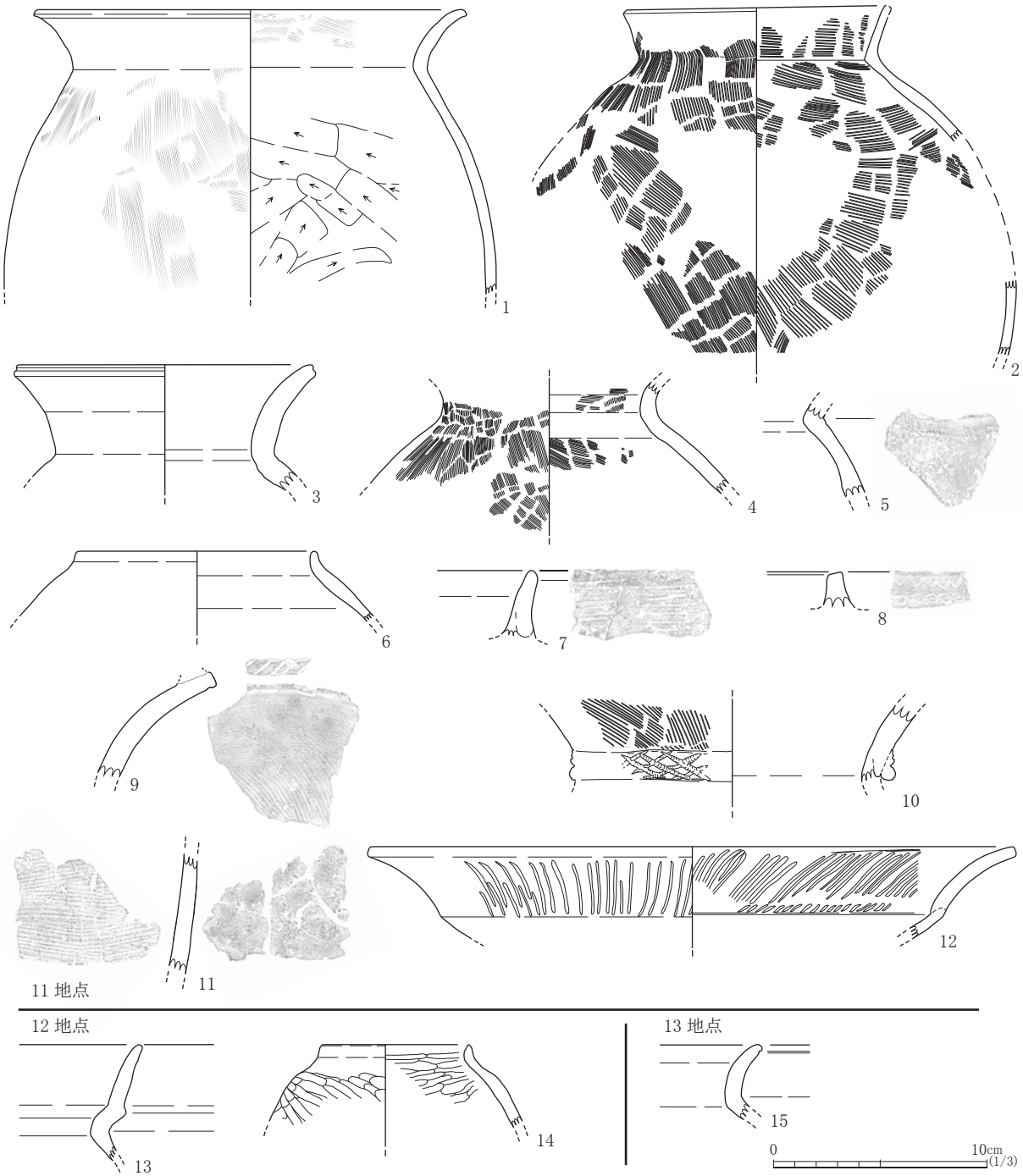


図 54　11 ～ 13 地点出土遺物実測図（土器）

底部。外面にハケを施した後、ナデを施す。34は高坏の口縁部。外面にハケを施す。35は高坏脚部で、坏部との接合部で剥離する。外面にミガキを施す。36・37は山陰系の甕口縁部。

19地点⑤層

38は縄文土器の深鉢。外面に二枚貝条痕、内面にナデを施す。

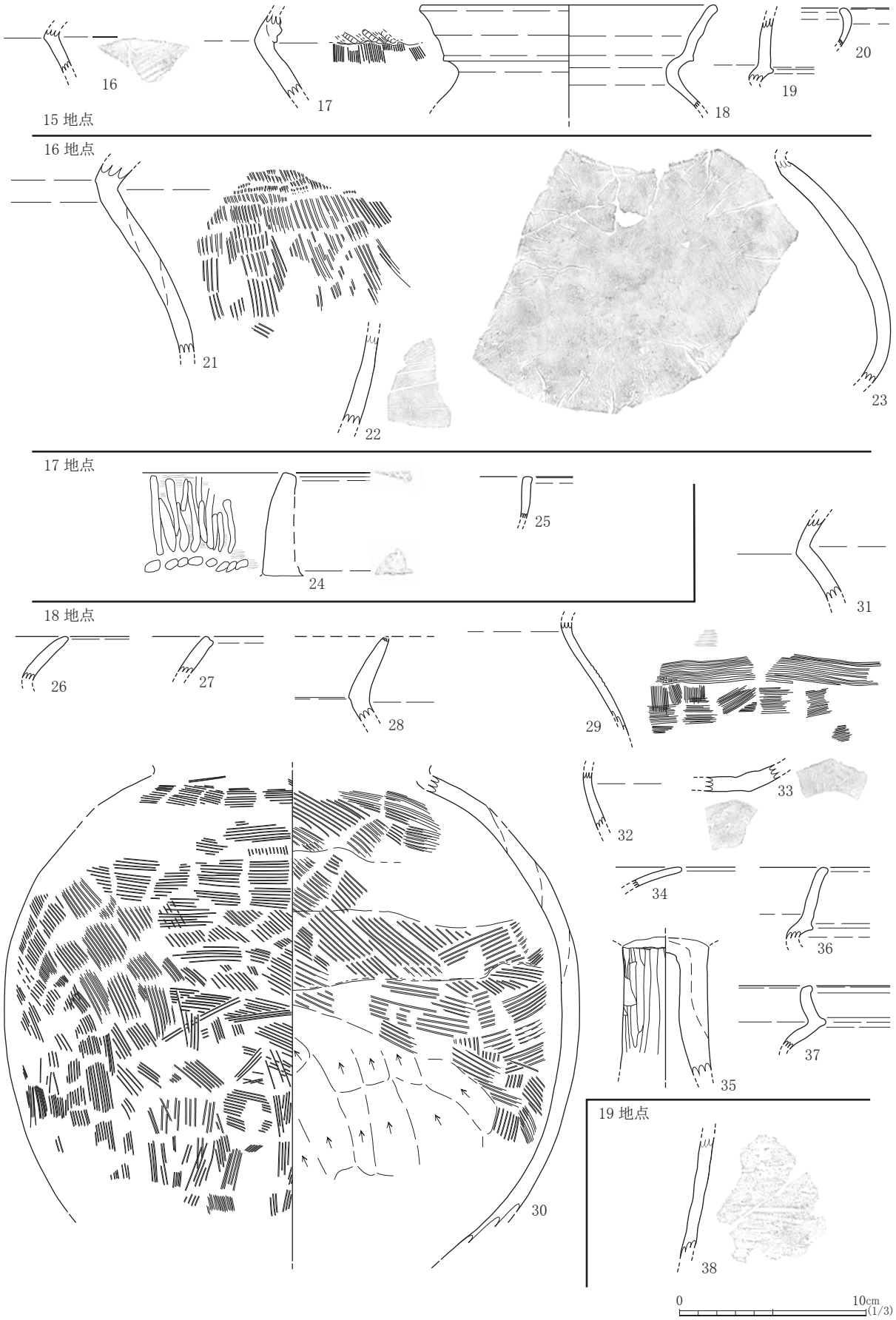


図 55　15 ～ 19 地点出土遺物実測図（土器）

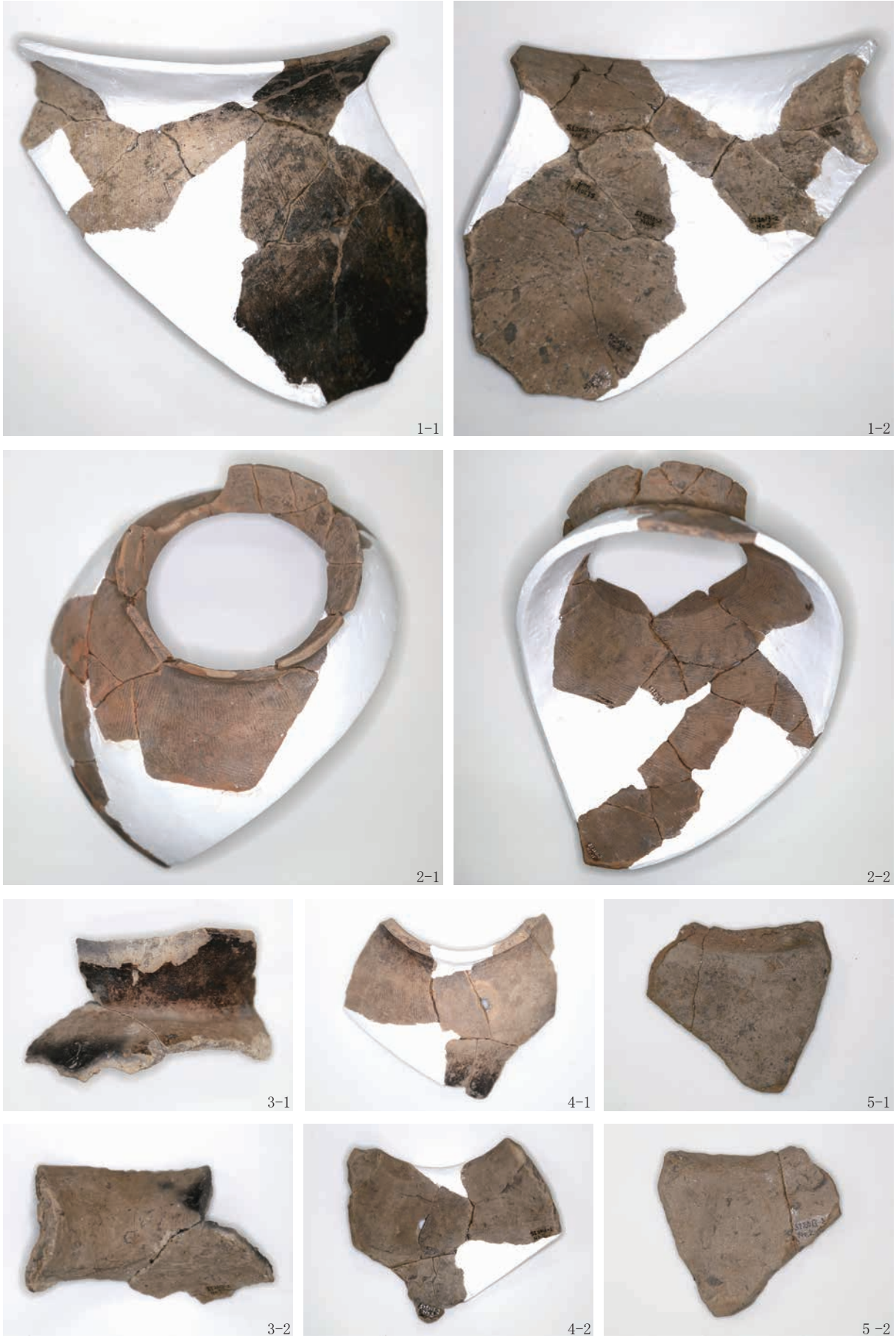


写真 158　出土遺物（土器）①

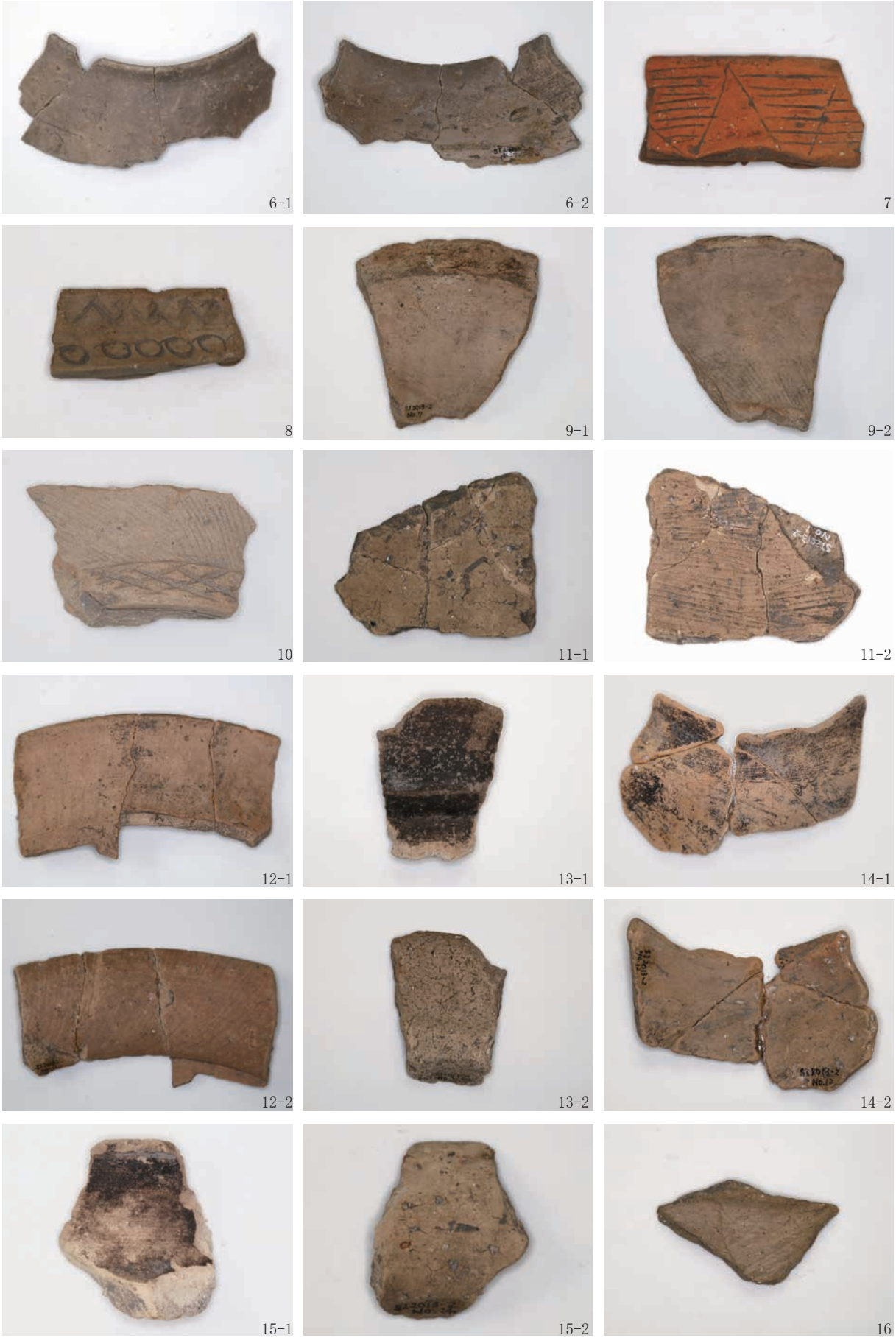


写真 159　出土遺物（土器）②

17-1

18-1

19

17-2

18-2

20

21-1

21-2

22

23-1

23-2

24-1

24-2

25

写真 160　出土遺物（土器）③

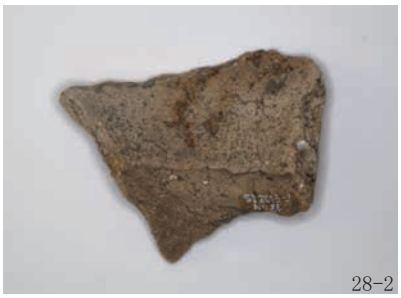
26-1

27-1

28-1

26-2

27-2


28-2

29-1

29-2

30-1

30-2

写真 161　出土遺物（土器）④

31-1

31-2

32

33-1

33-2

34

35-1

35-2

36-1

37-1

38-1

36-2

37-2

38-2

写真 162　出土遺物（土器）⑤

表9　出土遺物(土器)観察表

法量( )は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	11地点 ②・③層	弥生土器/土師器 甕	口縁部 ～胴部	①(20.2)	①浅黄色(2.5Y7/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/4)	0.5～4mmの長石・石英を多く含む	スス付着
2	11地点 ①層 ②・③層	弥生土器/土師器 甕	口縁部 ～胴部	①(12.6)	①灰黄褐色(10YR6/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	0.5～2mmの長石を少量含む	スス付着
3	11地点 ①層	弥生土器/土師器 甕	口縁部 ～胴部	①(14.1)	①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	1～4mmの長石を多く含む	スス付着
4	11地点 ①層・ ②・③層	弥生土器/土師器 甕	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.5～2mmの長石を少量含む	スス付着
5	11地点 ①層	弥生土器/土師器 甕	頸部		①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.3～1.5mmの長石を少量含む　1.5mmの黒褐色砂粒を少量含む	
6	11地点 ①層	弥生土器/土師器壺	口縁部	①(11.4)	①②灰黄色(2.5Y6/2)	0.5～1.5mmの長石・石英を少量含む	
7	11地点 ①層	弥生土器/土師器 壺	口縁部		①明赤褐色(5YR5/8) ②橙色(7.5YR6/6)	0.3～1mmの長石を多く含む　2mmの赤褐色砂粒をわずかに含む	
8	11地点 ①層	弥生土器/土師器 壺	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/4)	0.3～0.5mmの長石をわずかに含む	
9	11地点 ①層	弥生土器/土師器 壺	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.3～1mmの長石を少量含む 1mmの石英をわずかに含む	
10	11地点 ①層	弥生土器/土師器 壺	頸部		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.3～3mmの長石を少量含む　3mmの石英をわずかに含む　1mmの赤褐色砂粒をわずかに含む	
11	11地点 ①層	弥生土器/土師器 壺	胴部		①浅黄色(2.5Y7/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/4)	2～3mmの長石・石英を多く含む	
12	11地点 ②・③層	弥生土器/土師器 高坏	坏部	②(30.4)	①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	1～3mmの長石・石英をやや多く含む	
13	12地点 ①層	弥生土器/土師器 甕	口縁部		①黒褐色(10YR3/1) ②浅黄色(10YR7/4)	0.5～3.5mmの長石・石英を多く含む	山陰系 スス付着
14	12地点 ①層	弥生土器/土師器 壺	口縁部	①(7.8)	①明黄褐色(10YR7/6) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.5～3.5mmの長石・石英をやや多く含む　3mmの赤褐色砂粒をわずかに含む	
15	13地点 ①層	弥生土器/土師器 甕	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.5～3mmの長石・石英をやや多く含む	スス付着
16	15地点 ③層	弥生土器/土師器 壺	頸部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.3～2mmの長石・石英をやや多く含む	
17	15地点 ③層	弥生土器/土師器 壺	頸部		①明黄褐色(2.5Y7/6) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	1～3mmの長石・石英をやや多く含む	
18	15地点 ③層	弥生土器/土師器 甕	口縁部 ～胴部	①(16.0)	①黄褐色(2.5Y5/3) ②浅黄色(2.5Y7/4)	1mmの長石・石英・赤褐色砂粒を多量に含む	山陰系 スス付着
19	15地点 ③層	弥生土器/土師器 甕	頸部		①暗灰黄色(2.5Y4/2) ②にぶい黄橙色(10YR6/4)	0.5～3mmの長石・石英を少量含む	山陰系 スス付着
20	15地点 ③層	弥生土器/土師器 高坏	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②浅黄色(2.5Y6/3)	0.5mmの長石をわずかに含む	
21	16地点 ③層	弥生土器/土師器 甕	頸部～ 胴部		①浅黄色(2.5Y7/4) ②黄褐色(2.5Y5/3)	0.5～1.5mmの長石・石英をやや多く含む	
22	16地点 ③層	弥生土器/土師器 甕	胴部		①浅黄色(2.5Y7/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.5～1.5mmの長石をわずかに含む	
23	16地点 ③層	弥生土器/土師器 壺	胴部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.5～3mmの長石・石英をやや多く含む　2～4mmの赤褐色砂粒をわずかに含む	
24	17地点 ④層	弥生土器/土師器 壺	口縁部		①浅黄色(2.5Y7/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.3～1.5mmのの長石をやや多く含む	
25	17地点 ④層	弥生土器/土師器 高坏	坏部		①②にぶい黄橙色 (10YR7/4)	1.5～2mmの長石・石英をわずかに含む	
26	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	口縁部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②オリーブ黒色(5Y3/2)	0.5～1mmの長石・石英を少量含む	
27	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	口縁部		①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	1～1.5mmの長石・石英を少量含む	
28	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	口縁部 ～頸部		①にぶい黄橙色(10YR7/4) ②浅黄色(2.5Y7/4)	2～4mmの長石・石英を多く含む　9mmの礫をわずかに含む	

法量（ ）は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量（cm）①口径②底径③器高	色調 ①外面 ②内面	胎土	備考
29	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	胴部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.5～2mmの長石・石英を多く含む 1mmの赤褐色砂粒を少量含む	スス付着
30	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	胴部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰オリーブ色(5Y6/2)～灰色(5Y4/1)	0.5～3mmの長石・石英をやや多く含む	
31	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	頸部		①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.5～2mmの長石・石英をやや多く含む	
32	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	胴部		①橙色(5YR6/6) ②橙色(7.5YR7/6)	2～3mmの長石を多く含む 1.5mmの赤褐色砂粒を少量含む	
33	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	底部		①浅黄色(2.5Y8/3) ②黒色(2.5Y2/1)	0.5～3.5mmの長石・石英をやや多く含む	
34	18地点 ②層	弥生土器/土師器 高坏	坏部		①にぶい黄橙色(10YR7/3) ②にぶい黄橙色(10YR7/4)	0.3～1mmの長石を少量含む	
35	18地点 ②層	弥生土器/土師器 高坏	脚部		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.5～3mmの長石・石英を多く含む 1mmの赤褐色砂粒をわずかに含む	
36	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	口縁部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)～にぶい橙色(5YR6/4)	0.3～1mmの長石を少量含む	山陰系 スス付着
37	18地点 ②層	弥生土器/土師器 甕	口縁部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)	0.5～2mmの長石・石英を多く含む 1mmの赤褐色砂粒を少量含む	山陰系
38	19地点 ⑤層	縄文土器 深鉢	胴部		①②にぶい黄褐色(10YR5/3)	1～4mmの長石を多く含む	

（4）小結

今回の調査の結果、予備発掘調査区周辺の1～7地点では明確な層序を確認できなかった。8～10地点における掘削深度は造成土内とどまり、埋蔵文化財に支障はなかった。一方、11～19地点では遺物包含層ないし河川埋土が確認され、弥生時代終末期から古墳時代初頭の土器が出土した。また、19地点の⑤層（河川埋土）から縄文時代晩期と考えられる深鉢胴部片1点が出土した。

11～19地点に隣接する平成2年度に実施した汚水排水管布設に伴う発掘調査区A区・B区[註1]では、弥生時代終末～古墳時代初頭の遺物包含層と縄文時代晩期後半の遺物包含層が確認され、特に同A区では第5・6層から弥生時代終末～古墳時代初頭の土器が多数出土している。今回の調査で土器が多く出土した11～15地点の遺物包含層は同A区第5・6層と一連の遺物包含層と考えられる。一方、縄文時代晩期の土器が出土した19地点⑤層については調査面積が狭小で1点のみの出土であることから、時期の断定は困難である。平成2年度及び今回の調査で出土した弥生時代終末～古墳時代初頭の土器は、摩滅が少なく残存状況が良好である。加えて土器は北西側の調査区で多く出土していることから、今回調査区の北西に位置するプール敷地周辺からの流れ込みと推測される。プール敷地周辺においては、平成2年度に実施した汚水排水管布設に伴う立会調査[註2]で弥生時代終末から古墳時代初頭の遺物包含層が確認されているが詳細は不明な点が多い。プール敷地周辺及び今回調査区周辺では、現地表下約30cmに遺物包含層が分布する箇所もあることから、小規模な掘削工事においても、埋蔵文化財の保護に対する十分な注意が必要である。

【註】

1）古賀真木子（1992）「亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』,山口

2）古賀真木子・河村吉行（1992）「亀山構内教育学部附属山口中学校汚水排水管布設に伴う立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』,山口

1. 教育学部附属光小学校仮設校舎設置工事に伴う立会調査

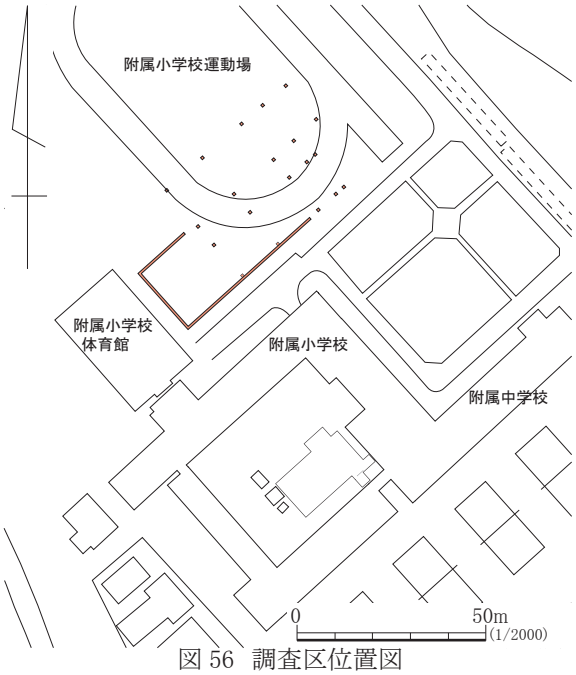


図 56　調査区位置図

写真 163　仮設校舎（北から）

写真 164　2地点（南西から）

調査地区　光構内

調査面積　約57㎡

調査期間　平成25年7月12・13・15～17日

調査担当　田畑直彦

調査結果

（1）調査の経緯（図56、写真163）

教育学部附属光小学校改修工事の決定に伴い、改修工事中は校舎が使用できなくなるため、仮設校舎を設置することになった。仮設校舎については埋蔵文化財の保護を考慮し、掘削深度を現地表下20㎝程度としたため、埋蔵文化財に支障は生じなかったが、設備関係工事については、一定程度の掘削深度が必要となるため、埋蔵文化財が検出される恐れのある掘削箇所について立会調査を実施することになった。

（2）基本層序（写真165～172）

今回調査区の基本層序は下記の通りである。第1層：表土・造成土（層厚31～60㎝）、第2層：褐色（7.5YR4/3）細砂（層厚14～20㎝）、第3層：明黄褐色（10YR6/6）細砂（層厚11～25㎝）、第4層：淡黄色（2.5Y8/4）細砂（層厚13㎝以上）、第5層：暗灰黄色（2.5Y4/2）細砂（層厚15㎝以上）。

第2層は平成2年度附属小学校改修工事に伴う発掘調査[註1]の第1遺構面形成層、平成24年度附属光学校下水道接続工事に伴う発掘調査・立会調査[註2]の第2遺構面形成層、第3層は平成2年度調査の第2遺構面形成層、平成24年度調査の第3遺構面形成層との対応が考えられる。

1～20地点は雨水枡設置箇所である。10地点では現地表下76㎝、その他は現地表下50㎝前後まで掘削が行われた。1地点では現地表下34㎝、6地点では現地表下52㎝、7地点では現地表下45㎝、8地点では現地表下41㎝、11地点では現地表下31㎝、9地点では現地表下54㎝、14地点では現地表下38㎝で第2層を検出した。いずれの地点においても第2層から遺物は出土しなかった。

21地点は排水管埋設箇所である。以下、4つの地点の層序を示す。21－1地点の層序は、現地表下34㎝までが第1層、以下34～59㎝が第2層、59～72㎝が第4層、72～87㎝が第5層で、第3層は認められ

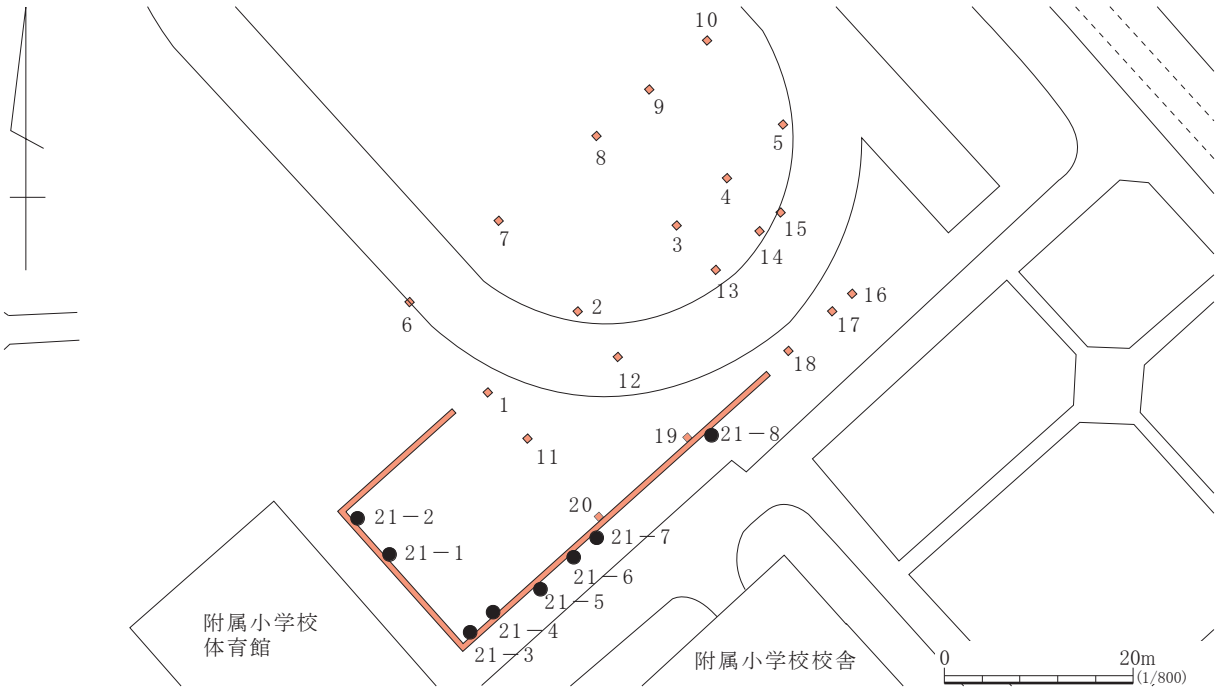


図 57　調査区詳細図

なかった。21－2地点の層序は、現地表下32cmまでが第1層、以下32～50cmが第2層、50～78cmが第4層であった。21－3地点の層序は、現地表下36cmまでが第1層、以下31～45cmまでが第2層、52～70cmまでが第3層、70～97cmが第4層であった。21－8地点の層序は、現地表下55cmまでが第1層で、底面で第2層を検出した。

(3)遺構（写真165～170）

21－2地点で第2層、21－1、3～6地点の壁面において、第3層を検出面とする遺構を各1基検出した。土壙と仮称するが、断面のみの確認であるため、土壙以外の遺構であった可能性もある。

21－2地点で検出した土壙は、幅70cm、深さ50cmであった。埋土は灰黄褐色（10YR4/2）細砂で、15cm大の礫を多数含んでいた。近世～近代の遺構と推測される。

21－1地点で検出した土壙は幅28cm、深さ9cmで埋土は暗灰黄色（2.5Y4/2)細砂であった。21－3地点で検出した土壙は、幅100cm以上、深さ52cmで、埋土は暗灰黄色（2.5Y4/2)細砂で炭を含んでいた。21－4地点で検出した土壙は、幅78cm、深さ60cmで、埋土は灰黄褐色（10YR4/2）細砂であった。21－5地点で検出した土壙は幅66cm、深さ42cmで、埋土は暗灰黄色（2.5Y4/2)細砂で炭を含んでいた。21－6地点で検出した土壙は、幅64cm、深さ17cmで埋土は暗灰黄色（2.5Y5/2）細砂であった。いずれの土壙からも遺物は出土しなかったが、古墳時代の遺構と推測される。

(4)遺物（図58、写真173）

第1層、排土から少量の土器片が出土したほか、21－3・8地点で第2層から土師器片が少量出土した。また、21－7地点では第3層から土師器甕もしくは甑の把手が出土した。

写真165　21－1地点南西壁土層断面（南西から）

写真166　21－2地点南西壁土層断面（南西から）

写真167　21－3地点北西壁土層断面（南東から）

写真168　21－4地点北西壁土層断面（南東から）

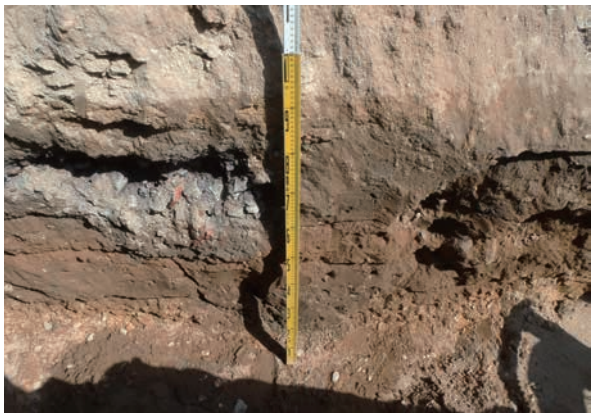


写真169　21－5地点南東壁土層断面（北西から）

写真170　21－6地点南東壁土層断面（北西から）

写真171　21－7地点南東壁土層断面（北西から）

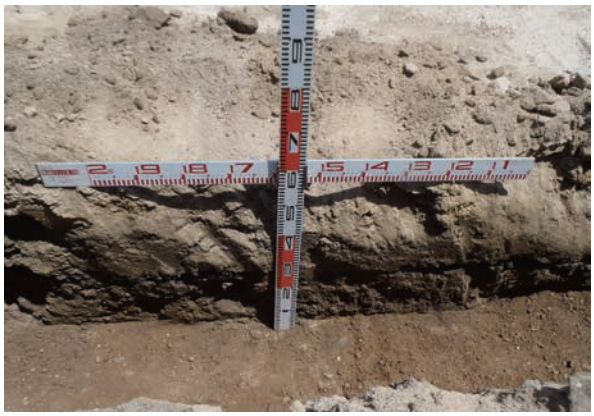


写真172　21－8地点南東壁土層断面（北西から）

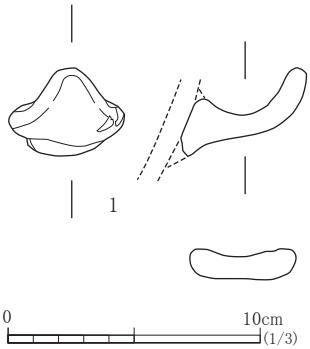


図 58　出土遺物実測図（土器）

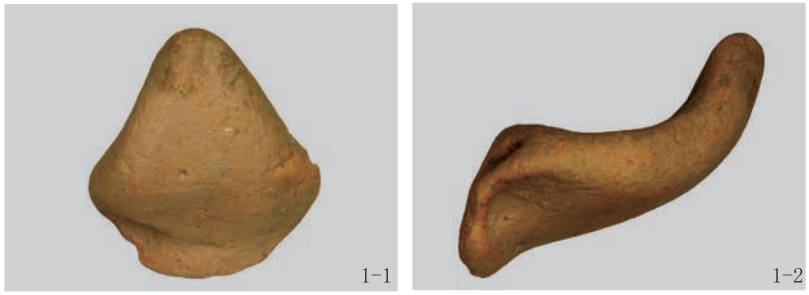


写真 173　出土遺物（土器）

表10　出土遺物（土器）観察表

法量(　)は復元値

遺物番号	遺構・層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
1	21-7地点 第3層	土師器 甕もしくは甑			①②にぶい黄褐色 (10YR7/4)	0.1～3㎜の砂粒を含む	

（5）小結

今回調査区のうち、21地点は平成2年度・24年度調査で遺構が検出された調査区に隣接している。調査の結果、第2・3層から遺構が検出された。特に第3層では5基の土壙が検出された。これらは断面のみの確認であるため、土壙以外の遺構である可能性もあるが、平成2・24年度調査区で確認された古墳時代の遺構がさらに北側に広がっていることがほぼ確実となった。以上から、引き続き、調査区周辺においては埋蔵文化財の保護に注意が必要である。

【註】

1）河村吉行（1992）「光構内教育学部附属光小学校運動場改修に伴う発掘調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅹ』,山口

2）田畑直彦（2016）「教育学部附属光学校下水道接続工事に伴う本発掘調査・立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』,山口

2. 教育学部附属光小学校校舎改修その他工事に伴う立会調査
教育学部附属光小学校校舎機械設備改修その他工事に伴う立会調査
教育学部附属光小学校校舎電気設備改修その他工事に伴う立会調査

図 59　調査区位置図

調査地区　光構内

調査面積　412㎡（改修その他工事［1・2地点］：約337㎡、機械設備改修その他工事［3～9地点］：約47㎡、電気設備改修その他工事［10地点］：約28㎡）

調査期間　改修その他工事：平成25年11月27日・平成26年4月7日、機械設備改修その他工事：平成26年2月12・20・21・24日、電気設備改修その他工事：平成25年12月2・12・13・16日

調査担当　田畑直彦

調査結果

教育学部附属光小学校改修その他工事、同機械設備改修その他工事、同電気設備改修改修その他工事に伴い、立会調査を実施した。

1地点は校舎（旧視聴覚棟）建替箇所である。既設建物の基礎による攪乱が著しかった。1－1地点の層序は、現地表下25㎝までが①表土・造成土、以下、25～45㎝が②褐色（10YR4/4）粗砂、45～57㎝が③明黄褐色（2.5Y7/6）細砂、57～91㎝が④灰白色（2.5Y7/1）細砂、91～237㎝が⑤灰白色（2.5Y7/1）粗砂であった。また、⑤層からは湧水していた。

2地点はスロープ新設箇所で、現地表下40㎝まで掘削を行ったが、全て造成土の範囲内であった。

3～9地点は排水管新設箇所である。3地点の層序は、現地表下35㎝までが①表土、造成土で以下、35～46㎝が、②黒褐色（10YR3/2）細砂と灰黄褐色（10YR4/2）細砂のブロック、46～102㎝が③にぶい黄色（2.5Y6/4）細砂であった。いずれの層からも遺物は出土しなかった。4地点は現地表下90㎝、5地点は77㎝、6地点は87㎝まで掘削を行ったが、全て造成土の範囲内であった。7－1地点は現地表下75㎝までが①表土・造成土で、75～77㎝が②黄褐色（2.5Y5/4）細砂であった。7－2地点は、現地

写真174　1－1地点南東壁土層断面（北西から）

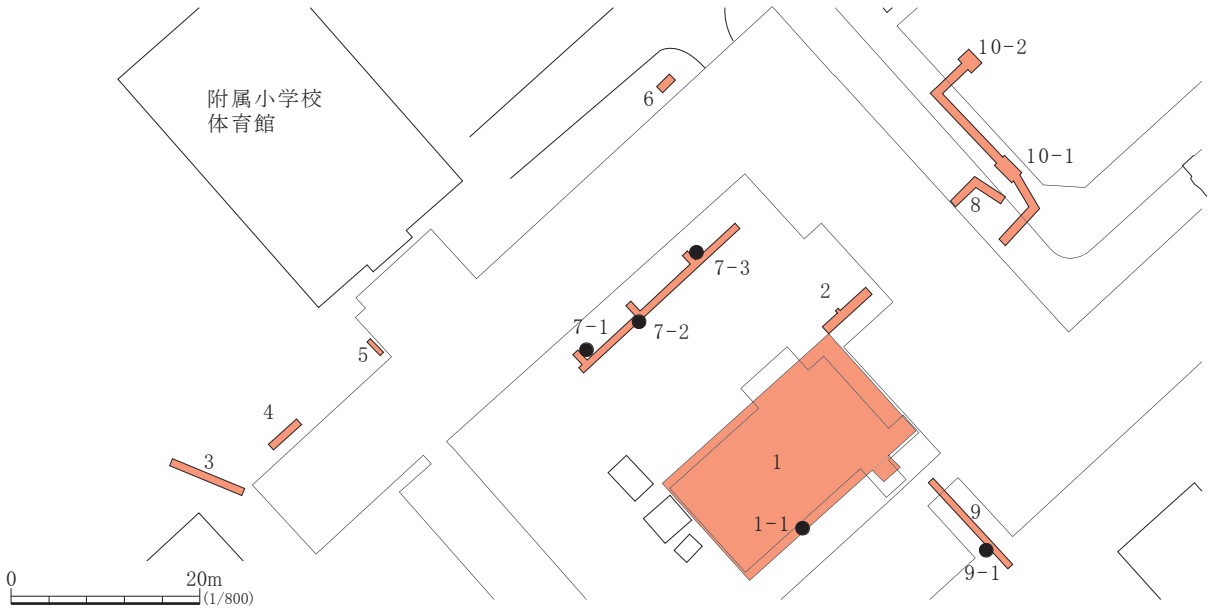


図 60　調査区詳細図

表下56㎝までが①表土・造成土で、以下56～70㎝が②オリーブ褐色（2.5Y4/4)細砂、70～80㎝が③黄褐色（2.5Y5/4）細砂であった。７－３地点は現地表下77㎝までが①表土・造成土で、底面で②オリーブ褐色（2.5Y4/4)細砂を検出した。８地点は現地表下約90㎝まで掘削を行ったが、全て造成土の範囲内であった。９－１地点の層序は、現地表下90㎝までが①表土・造成土で、以下90～124㎝が②オリーブ黄色（5Y6/3）粗砂であった。なお、同地点周辺には工事用の足場があった関係で、調査区壁面に崩落の危険性が生じたため、十分な調査ができなかった。

10地点は電気配線新設箇所である。10－１地点の層序は、現地表下30㎝までが①表土・造成土で、以下、30～43㎝が②にぶい黄褐色（10YR5/4）粗砂、43～72㎝が③黒褐色（10YR3/1)粗砂、72～130㎝が④黒褐色（10YR3/1)粗砂（明黄褐色（10YR6/6)粗砂を少量含む）、130～140㎝が⑤明黄褐色（10YR6/6)粗砂（黒褐色（10YR3/1)粗砂を少量含む）であり、④・⑤層は黄橙色（10YR8/6）粗砂を肩部として落ち込んでいる状況が確認できた。これらは平成24年度附属光学校下水道接続工事に伴う発掘調査・立会調査[註1]D調査区第2・第3遺構面で検出された落ち込みの延長部分である可能性が高い。②層からは須恵器片（甕口縁部か）１点が出土した。10－２地点の層序は、現地表下54㎝までが①表土・造成土で、以下54～99㎝が②オリーブ黒色（7.5Y3/1）粗砂、99～128㎝が③黄色（2.5Y8/8)粗砂で、②層から土器片が2点出土した。

今回の調査の結果、10－1・2地点で遺物包含層もしくは落ち込み埋土と考えられる土層を検出した。これらは調査区北東側に分布していると推測される。以上から、特に10地点周辺では埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。

【註】

1）田畑直彦（2016）「教育学部附属光学校下水道接続工事に伴う本発掘調査・立会調査」，山口大学埋蔵文化財資料館（編）『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成24年度－』,山口

写真175　1地点全景（北から）

写真 176　3地点北東壁土層断面（南西から）

写真 177　7地点全景（南西から）

写真178　7－2地点南東壁土層断面（北西から）

写真179　8地点南東・南西壁土層断面（北東から）

写真180　9－1地点南西壁（北東から）

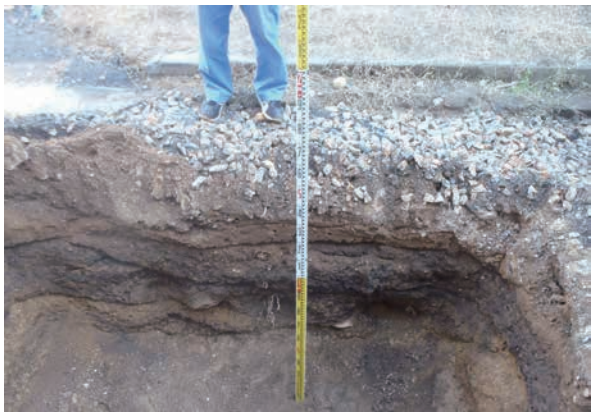


写真181　10－1地点北東壁土層断面（南西から）

写真182　10－2地点南西壁土層断面（北東から）

付節1　平成25年度　山口大学構内遺跡調査要項

山口大学大学情報機構規則

改正　平成18年3月14日規則第27号

（趣旨）

第1条 この規則は、国立大学法人山口大学学則（平成16年規則第1号）第9条第2項の規定に基づき、国立大学法人山口大学（以下「本法人」という。）の大学情報及び情報基盤を総合的に整備する山口大学大学情報機構（以下「機構」という。）に関し必要な事項を定める。

（組織）

第2条 機構は、次の施設をもって組織する。

(1)図書館

(2)メディア基盤センター

(3)埋蔵文化財資料館

2 前項の施設に関し必要な事項は、別に定める。

（業務）

第3条 機構は、次の業務を行う。

(1)大学情報及び情報基盤の戦略的整備計画の策定に関すること。

(2)大学情報及び情報基盤の整備の施策及び実施に関すること。

(3)情報セキュリティの施策及び実施に関すること。

(4)その他機構が必要と認めた事項に関すること。

2 前項の業務を行うため、機構は、各学部、各研究科、全学教育研究施設及び事務組織と相互に連携を図るものとする。

（運営委員会）

第4条 機構に、機構の管理及び運営に関する事項を審議するため、山口大学大学情報機構運営委員会（以下「運営委員会」という。）を置く。

2 運営委員会に関し必要な事項は、別に定める。

（情報セキュリティ委員会）

第5条 機構に、情報セキュリティに関する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報セキュリティ委員会（以下「情報セキュリティ委員会」という。）を置く。

2 情報セキュリティ委員会に関し必要な事項は、別に定める。

（情報基盤整備委員会）

第6条 機構に、情報基盤の整備に関する事項を審議するため、国立大学法人山口大学情報基盤整備委員会（以下「情報基盤整備委員会」という。）を置く。

2 情報基盤整備委員会に関し必要な事項は、別に定める。

（機構長）

第7条 機構に機構長を置き、学術情報担当副学長をもって充てる。

2 機構長は、機構の業務を総括する。

（副機構長）

第8条 機構に副機構長2名を置き、本法人の専任教授のうちから機構長が指名した者をもって充てる。

2 副機構長は、機構長を補佐する。

3 副機構長の担当は、機構長が定める。

4 副機構長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、機構長である副学長の任期の終期を超えることはできない。

5 副機構長に欠員が生じた場合の後任の副機構長の任期は、前任者の残任期間とする

（専任大学教育職員）

第9条 機構に、専任大学教育職員を置く。

2 専任大学教育職員の選考は、運営委員会の議に基づき、学長が行う。

3 専任大学教育職員の選考に関し必要な事項は、別に定める。

（事務）

第10条 機構に関する事務は、情報環境部学術情報課において処理する。

（雑則）

第11条 この規則に定めるもののほか、機構に関し必要な事項は、別に定める。

附　則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

山口大学埋蔵文化財資料館規則

平成16年4月1日規則第148号

改正 平成17年3月24日規則第52号

（趣旨）

第1条 この規則は、山口大学大学情報情報規則（平成16年規則第139号）第2条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

（目的）

第2条 資料館は、文化財保護法（昭和25年法律第214号）に基づき、国立大学法人山口大学（以下「本法人」という。）に所在する遺跡の埋蔵文化財の発掘調査及び研究を行い、出土品を収蔵・公開することを目的とする。

（業務）

第3条 資料館は、次の業務を行う。

(1)本法人構内等から出土した埋蔵文化財の収蔵・展示及び調査研究

(2)本法人構内等における埋蔵文化財の発掘調査及び報告書の刊行

(3)その他埋蔵文化財に関する必要な業務

（職員）

第4条 資料館に、次の職員を置く。

(1)館長

(2)副館長

(3)資料館所属の専任大学教育職員

(4)その他必要な職員

2 埋蔵文化財に関する特別な分野の調査研究を行うため、資料館に特別調査員若干名を置くことができる。

3 特別調査員は、専門委員会の議に基づき、館長が委嘱する。

（館長）

第5条 館長は、大学情報機構長をもって充てる。

2 館長は、資料館の業務を掌理する。

（副館長）

第6条 副館長の選考は、国立大学法人山口大学の専任の教授又は准教授のうちから山口大学大学情報機構運営委員会の議に基づき、学長が行う。

2 副館長の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、副館長に欠員が生じた場合の後任の副館長の任期は、前任者の残任期間とする。

3 副館長は、館長を補佐し、日常的な業務の執行及びこれに必要な意思決定に関し、館長を助けるものとする。

（事務）

第7条 資料館に関する事務は、情報環境部学術情報課において処理する。

（雑則）

第8条 この規則に定めるもののほか、資料館に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この規則は、平成16年4月1日から施行する。

2 第5条第1項の規定にかかわらず、当分の間、館長は、大学情報機構副機構長のうちから大学情報機構長が指名した者をもって充てる。

附 則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会内規

（趣旨）

第1条 この規則は、山口大学大学情報機構運営委員会（平成16年規則第140号）第8条第2項の規定に基づき、山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会（以下「専門委員会」という。）の組織及び運営に関し必要な事項を定める。

（審議事項）

第2条 専門委員会は、山口大学埋蔵文化財資料館（以下「資料館」という。）に関し、次の事項について審議する。

(1)管理及び運営に関する事項

(2)整備充実に関する事項

(3)予算に関する事項

(4)その他資料館に関し必要な事項

（組織）

第3条 専門委員会は、次の委員をもって組織する。

(1)機構長

(2)副機構長

(3)館長

(4)副館長

(5)資料館所属の専任大学教育職員

(6)考古学担当の国立大学法人山口大学専任の大学教育職員

(7)メディア基盤センター所属の専任大学教育職員のうち館長が指名した者1名

(8)施設環境部長

(9)情報環境部長

(10)情報環境部学術情報課長

(11)発掘調査地に関連のある部局の事務部の長

（任期）

第4条 前条第7号の委員の任期は2年とし、再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の後任の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

（委員長）

第5条 専門委員会に委員長を置き、館長をもって充てる。

2 委員長は、専門委員会を招集し、その議長となる。

3 委員長に事故あるときには、副館長がその職務を代行する。

（委員以外の者の出席）

第6条 専門委員会が必要と認めたときは、専門委員以外の者を専門委員会に出席させることができる。

（部会等）

第7条 専門委員会は、必要に応じて部会等を置くことができる。

2 部会等に関し必要な事項は、専門委員会が別に定める。

（事務）

第8条 専門委員会の事務は、情報環境部学術情報課において処理する。

（雑則）

第9条 この内規に定めるもののほか、専門委員会の運営に関し必要な事項は、専門委員会が定める

附　則

この規則は、平成18年4月1日から施行する。

平成25年度　山口大学埋蔵文化財資料館専門委員会

委員長　山内　直樹（大学情報機構長・館長・農学部教授）

委員　　小河原　加久治（大学情報機構副機構長・理工学研究科教授）

田中　晋作（副館長・人文学部教授）　　村田　裕一（人文学部准教授）

小柏香穂理（メディア基盤センター助教）　　蔵田　秀夫（施設環境部長）

石橋　英二（情報環境部長 ※12月31日まで）　瓜生　照久 （情報環境部学術情報課長）

田畑　直彦（埋蔵文化財資料館助教）　　横山　成己（埋蔵文化財資料館助教）

川島　尚宗（埋蔵文化財資料館助教 ※11月1日より）

付節2　山口大学構内の主な調査

表11 山口大学構内の主な調査一覧表

吉田構内

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
昭和41年	第Ⅰ地区A・B区	L～N−15	1	30？	土壙・柱穴	弥生土器、土師器、須恵器	事前	調査担当小野忠熙	年報XI・XXI
	第Ⅱ地区家畜病院新営	R−20・21 S・T−19・20	2	2,000	溝、柱穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、須恵器	〃	〃	年報3
	第Ⅱ地区		3			弥生土器、土師器	試掘	〃	①
	第Ⅳ地区牛舎新営	S・T−10・11	4	300	弥生溝・土壙、古墳竪穴住居、中世住居跡・溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器	事前	〃	
	第Ⅳ地区		5				試掘	〃	
昭和42年	第Ⅲ地区杭列区および陸上競技場	D−19・20 E−17・19～21 F−17・18	6	1,600	杭列、弥生竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、矢板状木杭	事前	〃	
	第Ⅲ地区南区	G−21～23 H−22	7		河川跡、柱穴	縄文土器、弥生土器、木器、石器	〃	〃	
	第Ⅲ地区北区	H−20 I−19～21 J−20・21	8	1,400	竪穴住居、溝、土壙、柱穴		〃	〃	
	第Ⅲ地区東南区	G−23 H−23・24 I・J−24 K−23・24 L−23	9		弥生竪穴住居	弥生土器	〃	〃	
	第Ⅲ地区野球場		10		中世柱穴	瓦質土器	試掘	〃	
	第Ⅴ地区学生食堂	J−20 N−14 P−18	11		弥生溝、古墳土壙	弥生土器、土師器	事前	〃	
	第Ⅴ地区		12		河川跡、柱穴、土壙	弥生土器、土師器	試掘	調査担当山口大学吉田遺跡調査団	
	第Ⅰ地区C区大学本部新営	K・L−14	13	600	竪穴住居、溝、土壙	土師器、須恵器、瓦質土器	事前	〃	
昭和44年	第Ⅴ地区教育学部				河川跡	弥生土器、土師器、須恵器	試掘	〃	
昭和46年	第Ⅰ地区D区第1地点	L−13	14		近世大溝	弥生土器、木炭屑	〃	〃	年報XIII
	第Ⅰ地区D区第2地点	L−13	15			弥生土器、土師器、瓦質土器、石鍋	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第3地点	M−13・14	16		土壙、柱穴	弥生土器、瓦質土器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第4地点	M・N−14	17		土壙、栓穴	弥生土器、土師器、瓦質土器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第5地点	L−12・13	18		弥生溝	弥生土器、土師器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第6地点	M−13	19		柱穴	弥生土器、土師器、石器	〃	〃	
	第Ⅰ地区D区第7地点	M・N−13	20			須恵器	〃	〃	
	第Ⅰ地区E区第2学生食堂新営	M・N−14・15 O−15	21	900	古墳竪穴住居、土壙溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、石器、鉄製品	事前	〃	年報XII
昭和50年	第Ⅱ地区					弥生土器	試掘	〃	①
昭和51年	第Ⅲ地区				竪穴住居	弥生土器、土師器、須恵器	〃	〃	
昭和53年	人文学部校舎新営	M・N−21	22	160			〃	調査担当近藤喬一	年報X
昭和54年	教育学部附属養護学校新営	A−20・21 B−19・20 C−19	23	410	溝、土壙	縄文土器、弥生土器	試掘	山口大学埋蔵文化財資料館 山口市教育委員会	年報IX
	理学部校舎新営	N・O−19・20	24	250			〃		年報X
	農学部動物舎新営	P−19	25	380			〃		
	本部管理棟新営	L−14	26	740	溝、土壙、柱穴、中世井戸、土壙墓、住居跡	弥生土器、土師器、石製品	事前		年報VIII
昭和55年	経済学部校舎新営	K−21	27	66			試掘		年報X
	農学部農業観測実験施設新営	P・Q−15	28	50	溝、土壙		事前		
	本部環境整備	E−14～16 F−15・16	29				立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
昭和55年	農学部環境整備	N−11 O−10・11 P−9・10	30				〃		年報X
昭和56年	教育学部校舎新営	H−19	31		弥生竪穴住居、土壙、溝、柱穴	弥生土器、石製品	事前		年報I
	教育学部音楽棟新営	H−16	32		溝		〃		
	教育学部美術科・技術科実験実習棟新営	J・K−19・20	33		旧河川、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、須恵器、土師器	〃		
	正門橋脚新営	I−11	34				立会		
	時計塔埋設	I−14	35				〃		
	本部構内擁壁取設	K・L−13・14	36				〃		
	教養部構内擁壁取設	I−15〜17 J−17	37				〃	工法等変更	
	構内循環道路舗装	J〜M−15 M・N・16	38				〃		
	農学部中庭整備	N・O−17	39				〃		
	暖房施設改修	O−16	40				〃	工法等変更	
	学生部文化会車庫新営	M−8・9	41				〃	工法等変更	
	学生部馬場整備	M・N−8・9	42				〃		
昭和57年	附属図書館増築	L・M−16	43	600	弥生〜古墳溝、土壙、柱穴、杭列	弥生土器、土師器、須恵器、石器	事前		年報II
	大学会館新営	M・N−14・15	44	130	弥生竪穴住居、溝	弥生土器	試掘		
	教育学部附属養護学校プール新営	A・B−21	45	880			立会		
	放射性同位元素総合実験室排水桝新営	O−18	46	2			〃		
	教養部自転車置場昇降口新営	L−17	47	10			〃		
	教養部中庭環境整備	J・K−16	48	150			〃		
昭和58年	大学会館新営	M・N−12・13	49	2,000	古墳井戸、土壙、柱穴、中世井戸、掘立柱建物	弥生土器、土師器、須恵器、輸入陶磁器、国産陶器、瓦質土器、緑釉陶器、木簡、石器	事前		年報III
	ラグビー場防球ネット新営	G−18・19 H−19・20	50	114	弥生溝、弥生〜古墳竪穴住居、土壙	弥生土器、土師器、石製品	〃	竪穴住居は工法変更により現地保存	
	理学部大学院校舎新営	M・N−20	51	409			立会		
	正門・南門二輪車置場および正門花壇新営	I・J−12・13 H−23	52	183			〃		
	学生部アーチェリー場的台・電柱設置	N−8・9	53	33			〃		
	学生部厩舎整備	M−7・8	54	1.6			〃		
	学生部野球場散水栓取設	I−21 K−22	55	1			立会		
	教養部環境整備	I−15・16 J−15 K−17・18 L−18	56	81			〃		
	学生部テニスコート改修	C−18 D−17 E−15・16 F−16	57	12			〃		
昭和59年	大学会館ケーブル布設	N−12	58	160	弥生土壙、柱穴	弥生土器	事前		年報IV
	大学会館排水管布設	J〜L−13	59	180	弥生〜中世遺物包含層、古墳土壙、古代〜中世土壙、溝、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、青磁、白磁、瓦質土器	〃		
	学生部テニスコートフェンス改修	B−17 C−16・17 D−16 E−15	60	25	古墳以降の遺物包含層	土師器	試掘		
	経済学部樹木移植	K−19・21	61	8			立会		
昭和60年	大学会館環境整備	L−14・15 M・N−15	62	592	弥生〜中世遺物包含層、弥生竪穴住居、貯蔵穴、土壙、古代〜近世土壙、溝、柱穴	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、輸入磁器、国産陶磁器、土製品、石斧、原石、鉄器、窯壁	試掘		年報V
	経済学部環境整備(樹木移植)	K・L−20	63	5			立会		
	農学部附属農場飼料園排水溝修復整備	R−17〜19	64	30	古代末〜中世河川跡	須恵器、土師器、輸入陶磁器、鞴口、石器、鉄滓	〃		
	農学部附属農場農道改修	V−15〜17	65	325			〃		
	教育学部前庭環境整備(樹木移植)	I・J−19	66	430			〃		
	中央ボイラー棟車止設置	O・P−16	67	2.5		須恵器	〃		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
昭和60年	大学会館環境整備(樹木移植)	M−15	68	9		弥生土器、土師器、須恵器、石鍋、砥石、鉄滓	〃		年報V
	交通標識設置	J−20 N−14 P−18	69	3			〃		
	農学部解剖実習棟周辺環境整備(実験動物運動場設置)	Q−18	70	16			〃		
	理学部環境整備(藤棚設置)	N−21	71	4			〃		
	農学部附属家畜病院舗装	S・T−19	72	270			〃		
昭和61年	国際交流会館新営	M−22・23 N−22	73	70	弥生〜古墳河川跡 中世〜近世溝	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質土器、陶磁器、鉄砲玉、加工痕のある剥片	試掘		年報VI
	山口銀行現金自動支払機設営(電線路埋設)	J−19	74	11	包含層(河川跡か)	弥生土器	立会		
	農学部附属農場農道整備	S−20 T・U−19	75	165	中世溝、柱穴	土師器、瓦質土器	〃	工法変更	
	農学部附属農場農道交通規制(施錠ポール設置)	M−10 P−15 Q−15〜17	76	12			〃		
	正門横(水田内)境界杭設置	J−10	77	0.25	包含層か		〃		
	経済学部環境整備(樹木移植・記念碑建立)	L−20	78	3			〃		
昭和61年	吉田構内交通標識設置	G−23 K−9 O−22 S−20 V−17	79	3		須恵器	立会		年報VI
	市道神郷1号線および問田神郷線の送水管埋設	B−17・18 C−18・19 D−19・20 E−20・21 F−21・22 G−22・23 H−23・24 I・J・K−24 L−23・24 M・N−23 O−22・23 P・Q−22 R−21・22 S−21 T−20・21 U−19・20 V−18・19 W・X−18	80	2,100	古墳・弥生溝、古代河川跡、弥生包含層	弥生土器、土師器、須恵器(墨書のあるもの含む)瓦質土器、製塩土器、石斧、板石	立会	山口市教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	教養部自動販売機埋設(屋根設置および観覧席移動)	K・L−18	81	3.5			〃		
	教養部身体障害者用スロープ取設	L−15・16	81	3			〃		
	経済学部散水線取設	L−20	83	4			〃		
	吉田構内水泳プール改修等	E−15 F−15・16 H−15	84	26.5	包含層		〃		
	農学部附属農場水道管埋設	S−12	85	3			〃		
	吉田構内汚水排水管等総改修	M−18 O−15	86	15.5		土師質土器	〃		
	本部身体障害者用スロープ取設	L−14	87	12			〃		
	経済学部身体障害者用スロープ取設	K−18〜20 L−18	88	78			〃	工法等変更	
	附属図書館荷物運搬用スロープ取設	L−16	89	8		弥生土器	〃		
	教養部37番教室改修	K−16	90	1			〃		
昭和62年	教育学部附属教育実践研究指導センター新営	J・K−18・19	91	240		ブランク、削器、植物遺体	事前		年報VII
	教養部複合棟新営	J・K−17	92	35	埋甕土壙、溝、柱穴	土師器、須恵器、土師質土器、石斧	試掘		
	教養部複合棟新営	I・J−16	93	30	溝状遺構	弥生土器	立会		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
昭和62年	教養部複合棟新営	J・K−17・18	94	900	落し穴、河川跡、竪穴住居、土壙、溝、井戸、埋甕土壙、掘立柱建物跡、谷状遺構、柱穴	縄文土器、土師器、須恵器、土師質土器、須恵質土器、陶磁器、石鏃、石斧、木製品	事前		年報Ⅶ
	九田川局部改修	B−16・17 C−16	95	20			立会	山口県教育委員会 山口大学埋蔵文化財資料館	
	国際交流会館新営	M・N−22・23	96	195			〃		
	教育学部附属養護学校自転車置場移設	B−20	97	1			〃		
	農学部附属農場E7圃場排水管埋設及びE6圃場進入路拡幅	L〜N−12	98	55	中世土壙墓か	弥生土器、土師器、須恵器、輸入白磁、国産磁器、敲石	〃		
	農学部植栽	N−17	99	3			〃		
	経済学部集水桝取設	J−20	100	0.5			〃		
昭和63年	教養部複合棟新営に伴う自転車置場移設	I−16	101	1	包含層か		立会		年報Ⅷ
	国際交流会館新営に伴う排水管埋設	N・O−22	102	35	河川跡(溝か)、包含層	弥生土器、須恵器	〃		
	教養部複合棟新営に伴うケーブル埋設	J−18	103	1			〃		
	サッカー・ラグビー場改修	F−19・21 G−18	104	25	性格不明	弥生土器	〃		
	消防用水設置	K〜M−22	105	7.5			〃		
平成元年	水銀灯新営	J・L−15	106	4	古墳溝状遺構柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、六連式製塩土器	事前		年報Ⅸ
	椹野寮ボイラー設備改修	O−20・21	107	25			立会		
	野球場防球ネット新営	H−22 I−21・22 J・K−21	108	7	包含層	弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器	〃		
	防火水槽配管布設	K・−21・22	109	15	柱穴		〃		
	吉田寮ボイラー設備改修	M−8	110	4			〃		
	体育施設系給水管改修	G・H−16	111	50		陶器	〃	工法等変更	
	大学会館前記念植樹	M−13	112	6			〃		
	吉田寮ボイラー棟地下貯油槽設備改修	M−8	113	45	包含層	土師器、須恵器、土師質土器、陶器、剥片、二次加工のある剥片	〃		
	第2武道場排水溝新営	G−15	114	2	溝		〃		
	案内標識設置	I−14 L−18	115	0.5			〃		
	本部車庫給水管改修	L−13	116	6.5		弥生土器	〃		
	大学会館前庭環境整備	N−14・15	117	35	中世溝		〃		
平成2年	大学会館前庭環境整備	M−15	118	2			〃		年報Ⅹ
	第1学生食堂設備改修	I・J−19	119	7			〃		
	教育学部附属養護学校案内板設置	E−20	120	1			〃		
平成3年	農学部連合獣医学科棟新営	O・P−17	121	76	縄文河川	縄文土器、石器	試掘		年報ⅩⅠ
	農学部仮設プレハブ倉庫設置	P−17	122	6		須恵器	立会		
	農学部微生物実験室その他模様替機械設備改修	P−17	123	8			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L・M−15	124	2			〃		
	サークル棟新営	F−14	125	1			〃		
平成4年	農学部連合獣医学科棟新営	O・P−17	126	980	縄文河川	縄文土器、石器	事前		年報ⅩⅡ
	交通規制標識及びバリカー設置	H−22 M−10 O−22 R−19 S−20	127				立会		
	吉田構内道路(南門ロータリー)取設	H−23	128	40			〃		
	ボイラー室給水管漏水補修	O−16	129	4			〃		
	農学部附属農場ガラス室新営	S−14	130	3.5			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L・M−15	131	3			〃		
	泉町平川線緊急地方道路整備工事及び山口大学吉田団地環境整備(正門周辺)	E−11・12	132				〃		
	泉町平川線緊急地方道路整備(信号機設置)	I−11	133	7			〃		
平成5年	本部裏給水管埋設	K〜M−13	134	70	溝、柱穴	弥生土器、土師器、滑石製模造品	事前		年報ⅩⅢ
	人文学部・理学部講義棟新営	M−20	135	4			試掘		

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
平成5年	第2屋内運動場新営	G・H−16	136	144	溝	弥生土器、須恵器、砥石	〃		年報XⅢ
	農学部給水管埋設	N〜P−18	137	9			〃		
	基幹整備 (屋外他給水管改修)	L−15 M−17・18	138	16			立会		
	農学部連合獣医学科棟新営 電気設備	O−16	139	4			〃		
	大学会館前庭バリカー設置	N−14	140	1			〃		
	大学会館前庭記念植樹	L−15	141	1.6			〃		
	九田川河川局部改良	C−16 D−15・16	142	40			〃		
	農学部電柱立替	V−17	143	0.2			〃		
	農学部ガラス室設置	S−14	144	10			〃		
	教育学部給水管埋設	H・J−19	145	15			〃		
	環境整備(大学会館前庭)	L−14 M−13〜15 N−14・15	146	140.9			〃		
	環境整備(遺跡保存地区)	H−20 I−19〜21 J−20・21	147	361			〃		
	環境整備(正門周辺)	G−13 H−12	148	350			〃		
平成6年	グランド屋外照明施設新設	E−20 F−21 G−18・22 H−19・20 I−21	149	600	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生〜古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	事前	工法等変更	年報XⅣ
	第2屋内運動場新営	G・I−15・16	150	726	弥生〜古代溝、貯蔵穴、土坑、近世溝、土坑	弥生土器、土師器、須恵器、砥石、磨石、敲石、剥片、須恵器、瓦質土器、土師質土器、陶器、磁器、瓦、下駄	〃		
	グランド屋外照明施設配線埋設	F−21 G−20・21 H−19・20	151	200	縄文河川、弥生住居、溝、土坑、弥生〜古墳河川、近世溝	縄文土器、弥生土器、土師器、ガラス小玉、砥石、磨石、敲石	〃	工法等変更	
	経済学部商品資料館新営	K・L−21	152	87.5	河川	陶器、磁器	試掘		
	実験廃液処理施設棟新営	H−12・13	153	2	河川		〃		
	体育器具庫及び便所新営	G・H−17	154	60	河川		〃	工法等変更	
	経済学部商品資料館 仮設電柱設置	L−22 M−22・23	155	5			立会		
	人文学部前駐車場整備	K−23 L−22・23	156	6			〃		
	教育学部附属養護学校 生活排水管改修	F−19	157	2			〃		
	テニスコート改修	B−17 C−16・18 D−15〜17 E−15・16	158	15			〃		
	教育学部附属養護学校 生活訓練施設棟新営	B−20〜22 C−20	159	16			〃		
	陸上競技場整備(透水管埋設)	C−18 D−18・19	160	200			〃		
	ハンドボール場改修(プレハブ設置)	K−22	161	30			〃		
	野球場フェンス改修	H−22 I−21・22	162	3			立会		年報XⅣ
	基幹環境整備 (ボイラー室配電盤設置)	O−16	163	4	河川か		〃		
	九田川河川局部改良	D−15 E−14・15	164	100			〃		
	第2屋内運動場電柱仮設	G−14・15	165	0.5			〃		
	教養部水道管破裂修理	I−16	166	2			〃		
	グランド屋外照明施設配線埋設	E−20 F−20〜21 G−18・19・22 H−19・20 I−20・21	167	150			〃		
	公共下水道接続 (教育学部附属養護学校 プール排水施設設置)	A−21	168	4			〃		
	サークル棟給水管埋設	F−14	169	1			〃		
	プール新営給水管埋設	E−15 F−15・16	170	10			〃		
	公共下水道接続 (汚水管雨水排水施設設置)	C−18	171	6	河川	土師器	〃		
	教育学部スロープ設置(音楽棟)	H−17	172	10			〃		

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
平成7年	農学部RI実験研究施設新営	Q・R−17	173	75	近世溝	磁器	試掘		
	農学部RI実験研究施設新営	Q・R−17	174	520	中世井戸、近世溝	石斧、須恵器、磁器、瓦器	事前		
	公共下水道接続	C−18 E−16 G−14	175	70	溝、土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、土師器	試掘		
	公共下水道接続	C・D−18 D・E−17 E・F−16	176	240	土坑、河川跡、柱穴	弥生土器、石器、骨角器	事前		
	農学部附属農場牛舎新営	T−10	177	22			試掘		
	独身宿舎改修	N・O−22	178	25.5	河川		試掘		
	第2学生食堂増築	N・O−15	179	48	柱穴、包含層	石鏃	試掘		
	第2屋内運動場外周照明施設新設	G−15・16	180				立会		
	機器分析センター新営工事用電柱仮設	O−19〜21 P−22	181				〃		
	農学部附属家畜病院バリカー新設	S−20	182				〃		
	吉田寮可燃ゴミ置場新設	N−10	183				〃		
	農学部RI実験研究施設電気・情報ケーブル及びガス・給排水管布設	Q・R−17	184				〃		
	情報処理センタースロープ新設	O−19	185				〃		
	基幹環境整備(ATMネットワークケーブル布設)	E−19・20 F−18・19 G−18	186				〃		
	基幹環境整備(外灯新設)	I−15・16 J−20 K−19 M−10・11 N−12 O−16〜18・20 P−18・19 Q−17・18	187				〃		
平成8年	基幹環境整備(独身宿舎・国際交流会館排水管布設)	M−23 O−22	188	22.5	河川		試掘		年報XVI
	基幹環境整備(外灯新設)	H・I−21・22	189	306	河川	縄文土器、弥生土器、土師器、石器	試掘		年報XVI
	農学部附属農場排水管布設	S−10・11	190	93	包含層、ピット	土師器、須恵器	試掘		
	陸上競技場鉄棒取設	G−18	191	5.5	包含層		立会		
	農学部附属農場排水溝改修	R−11	192	2.2			〃		
	椹野寮バリカー新設	O−20・21	193	7			〃		
	サッカー場給水管取替	H−19・20 I−19	194	12	包含層		〃		
	基幹環境整備(共通教育センタースロープ・テラス新設)	J・K−17	195	14.3	河川	縄文土器、須恵器	〃		
	九田川河川局部改良	E−14	196	18			〃		
	農学部附属農場道路舗装	K−12・13 L−12 M−11	197	27.6	近世用水路、溝状遺構	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器	〃		
	本部裏排水管取替	K−14	198	2			〃		
	農学部附属農場家畜病院患畜舎囲障取設	S・T−19	199	1			〃		
平成9年	農学部附属農場堆肥舎新営	S−10	200	41.5			試掘		年報XVII
	農学部バイオ環境制御施設新営	Q−15・16	201	140	河川、溝	土師器、須恵器、製塩土器、石鏃	試掘		
	カーブミラー新設	M−11 N−21	202	0.8			立会		
	基幹環境整備(外灯新設)	J・K−21 K・L−22 L−23	203	23.5	包含層		〃		
	共通教育棟エレベーター新設	K−16	204	42			〃		
	九田川河川局部改良	E−14	205	48			〃		
	本部2号館西側バリカー新設	L−13	206	0.5			〃		
	教育学部附属養護学校時計塔新設	D−21	207	1.4	包含層	土師器	〃		
	基幹環境整備(教育学部附属養護学校排水管取替)	C・D−21	208	17	河川		〃		
	基幹環境整備(焼却場裏表土すきとり)	O−16	209	40			〃		
平成10年	第2学生食堂増築及び改修	N・O−15	210	730	掘立柱建物、溝、土坑、柱穴	弥生土器、土師器、須恵器、陶器、磁器、石鏃、鉄製品	事前		
	教育学部附属養護学校給食室改修	C−21	211	9	縄文河川、土坑、柱穴	縄文土器、弥生土器	試掘		
	九田川河川局部改良	E・F−14 F−13	212				立会		

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
平成10年	基幹環境整備（バリカー新設）	H−15 I・J−20 O−16・18	213				〃		
	農学部動物用焼却炉改修	Q−18	214				〃		
	基幹環境整備（外灯新設）	L−17〜19 M・N−18	215				〃		
	理学部スロープ新設	M−18	216				〃		
	ステンレス回転モニュメント新設	M−13	217				〃		
平成11年	第2学生食堂増築その他に伴う屋外電力線路施設整備	O−14〜16	218		包含層、柱穴、河川	土師器、須恵器	〃		
	九田川河川局部改良	F・G−13 G・H−12	219				〃		
	第2学生食堂北西擁壁新設	N−14	220				〃		
	サッカー場南側防球ネット新設	G・H−22	221				〃		
	第1体育館・共通教育本館スロープ新設	H−15 K−16	222				〃		
	基幹環境整備（外灯新設）	I−12 K・L−18 L−15 M・N−17	223				〃		
平成12年	総合研究棟新営	Q−18 R−17〜19	224	268	河川	土師器、須恵器	試掘		年報XX
	総合研究棟新営	Q・R−18・19 S−20	225	808	河川、土坑	縄文土器、土師器、須恵器、製塩土器、瓦質土器、石鏃	事前立会		
	厩舎及び周辺施設改修	M−8	226	3.6			立会		
	架空電線取り外し埋設	O−15 P−15・16 Q−14・15・18・19 R−13・14 R・S−19 S−14	227	268	包含層		〃		
	九田川河川局部改良	H−11・12 I−10・11 J−9・10 K・L−9	228	616			〃		
	山口合同ガスガバナー室新設及びガス配管布設	O・P−22	229	313			〃		
	基幹環境整備（バリカー新設）	N−22 M−10 V −17	230	0.4			〃		
	あずまや新設	L−18	231	5			〃		
	共通教育センター空調設備新設	J−16	232	1.4			〃		
	基幹環境整備（外灯新設）	J・K−21 M−10	233	2			〃		
平成13年	経済学部校舎改修（プレハブ校舎新営）	K−21	234	40	河川	縄文土器、土師器、須恵器	試掘		年報XXI
	九田川河川局部改良（平成12年度工事追加分）	K−9 L−8・9	235	42	河川		立会		
	総合研究棟新営（屋外配管布設）	P・Q−18	236	60			〃		
	理学部改修1期（屋外配管布設）	M−18〜20 N−19〜21 O−19	237	76			〃		
	九田川河川局部改良	L−8	238	96			〃		
	基幹環境整備（外灯新設）	I−14・15 J・L−15 M−15 N−16 Q−17・19 R−17・19 S・T・U・V−17	239	15.4	河川		〃		
	理学部校舎改修2期（ポンプ室配管布設）	M−19	240	11			〃		
	理学部校舎改修2期（自転車置場・渡り廊下屋根新設）	M・N−20	241	196			〃		
	第1学生食堂トイレ改修	I・J−19	242	6			〃		
	経済学部校舎改修（プレハブ校舎配管布設）	L−21	243	10			〃		
平成14年	農学部校舎改修（解剖実習棟プレハブ校舎新営）	R・S−19	244	520	掘立柱建物、柱穴、土坑、包含層、河川	土師器、須恵器（墨書土器）、製塩土器、緑釉陶器、瓦、鞴口、鉈尾、銅鉱石	事前		
	農学部附属農場実験圃場整地	O−14	245				立会		
	農学部校舎他改修	N〜Q−17・18	246		河川	縄文土器	〃		
	理学部改修3期工事（薬品庫掲示板・自転車置場新設）	N・O−19 M−19・20	247				〃		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
平成14年	東アジア研究科 プレハブ校舎新営	N−21	248				〃		
	農学部校舎改修（解剖実習棟 プレハブ校舎新営）	R・S−19	249		河川、包含層		〃		
	教育学部トイレ改修	I−18	250				〃		
平成15年	農学部附属農場ガス管漏洩修理	O・P−16 Q−15	251	12	河川		立会		年報1
	教育学部附属養護学校給食調理員専用トイレ新設	C−21	252	1.7			〃		
	農学部環境観測実験棟南側温室	P・Q−15	253	52			〃		
	理学部中庭通路屋根新設	N−19	254	5.8			〃		
	理学部中庭あずまや新設	N−20	255	6.8			〃		
	基幹環境整備（外灯）	F−16、H−14 G-13〜15・18 I−16・19 J−19、L−12 Q−15	256	11.5	河川		〃		
平成17年	教育総合研究センター改修Ⅰ期	J・K-16	257	130	ピット、河川	弥生土器、土師器	予備		年報3
	教育総合研究センター改修Ⅰ期	I・J・K-16 H-12、E-20	258	580	ピット、河川	弥生土器、土師器 須恵器	立会		
	日本ペトロジー学会 水田土壌の断面調査	R-16	259	3.1	河川		〃		
	基幹環境整備（外灯）取設	H-17・22・23	260	7.7			〃		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K・L-16、K-17 J-16・17	261	92	ピット、溝、河川	弥生土器、土師器 石器	予備		
平成18年	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20	262	36	包含層・谷	土師器・須恵器 製塩土器	予備		年報4
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20	263	225	掘立柱建物跡、溝、土壙	土師器、須恵器 緑釉陶器、木製品(柱根)	本		
	農学部附属家畜病院改修Ⅰ期	S-20	264	19	包含層		立会		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	K・L-16	265	84	ピット、河川、杭列	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器	本		
	教育総合研究センター改修Ⅱ期	J・K・L-16 I・J・K・L-17	266	480	ピット、河川、溝	弥生土器、土師器 打製石斧、柱材	立会		
	資料館（東亜経済研究所）新営	L-20・21	267	100	土壙、落ち込み、河川		予備		
	プレハブ倉庫移設	I-16	268	29			立会		
	第一学生食堂改修	J-20	269	75			〃		
	図書館前広場環境整備	L-17・18	270	55			〃		
	プレハブ校舎新営	F-14・15、G-15	271	400			〃		
	人文学部外灯用電源敷設	M-20	272	6			〃		
	テニスコートフェンス改修	B・C-17、C-18	273	10	河川、包含層		〃		
平成19年	農学部附属動物医療センター改修Ⅱ期	T-20	274	48	土壙、ピット	土師器・須恵器 瓦質土器	本		年報5
	駐車場整備工事	J-21	275	10			立会		
	資料館（東亜経済研究所）新営	L-20・21	276	550			〃		
	第一事務局庁舎改修	L-15	277	5			〃		
	吉田寮前配水管敷設	M-11	278	11			〃		
	農学部附属農場内電源敷設	Q-15、S-18	279	0.5	ピット	須恵器	〃		
平成20年	経済学部研究棟改修工事	L・M-19	280	26	河川、落ち込み		予備		年報6
	新教育研究棟新営	M・N-11・12	281	473	谷、ピット、溝	弥生土器、土師器 須恵器、瓦質土器 青磁	〃		
	新教育研究棟設備関連工事	L-12〜14 M-12・13	282	313	ピット、溝、土壙	土師器、須恵器 緑釉陶器、白磁、青磁 国産陶器、砥石	本		
	新教育研究棟新営	M・N-11・12	283	1,333	掘立柱建物、ピット 溝、土壙、井戸、谷	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器、青磁 緑釉陶器、瓦質土器 木製品	〃		
	農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期	T-19　S-20	284	250	掘立柱建物、ピット 溝、谷	弥生土器、土師器 須恵器、製塩土器 青磁、瓦質土器 木製品	〃		
	国際交流会館B棟改修工事	N・O-22　N-23	285	457	河川		立会		
	サッカーグラウンド防球ネット取設	H-21・22　I-21	286	8.5	河川、ピット		〃		
	正門改修等工事	L-13　M-12・13	287	174	ピット、溝、落ち込み	土師器、須恵器 瓦質土器、陶器、磁器	〃		
	教育実践センター廻りフェンス取設	K-19	288	2	土壙	縄文土器	〃		
平成21年	東アジア研究棟・経済学研究科新営	K-21	289	117	溝、河川	弥生土器、土師器 須恵器、木製品	予備		年報7

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
平成21年	野球場防球ネット取設置	H−23 I−24 K−24	290	40	ピット、溝、包含層	弥生土器、砥石	予備		年報7
	教育学部研究実験A棟改修	H・I−17・18 I・K−24	291	35.3			〃		
	里山整備工事	Q−10 O・P・Q−11	292	36.9			〃		
	新教育研究棟新営	L−13・14 M−11・12 N−12	293	340.5			立会		
	ビオトープ周辺雨水配水管取設	H−12	294	60			〃		
	仮設高圧引込工事	L・M−10・11	295	7			〃		
	ため池整備工事	S−8	296	130			〃		
	基幹整備（鋳鉄管改修）	J−14・15	297	156	包含層		〃		
	事務局外灯設置	J−14	298	1			〃		
	第1事務局庁舎東駐車場カーポート設置	L−14	299	1.2	ピット		〃		
	基幹・環境整備（第1体育館周辺排水整備）	H−13	300	300			〃		
	男子学生寮東側丘陵災害復旧	N−8 O−8・9	301	700			〃		
	人文学部外灯設置	N−21	302	10			〃		
	人文学部西側アプローチ改修	M−20	303	750			〃		
	教育学部研究実験棟A棟改修電気設備	K−18	304	40	包含層、河川		〃		
	理学部ソーラー外灯設置	O−20	305	0.3			〃		
	農学部インターロッキング設置	P−17	306	9			〃		
	農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期	S−19・20	307	154	包含層、埋没谷	土師器、須恵器	〃		
	農学部附属農場水田暗渠排水	Q−15・16 R−15 S−15 T−15 U−15 V−15	308	96	包含層、河川	土師器、須恵器	〃		
	農学部植物工場新営	P−15	309	98	包含層	土師器、須恵器	〃		
	男子学生寮新営	M−10・11	310	1350			〃		
	ラグビー場排水整備	E−20 F−21	311	58.6			〃		
	アーチェリー場整備工事	N−7・8 O−7・8	312	750			〃		
	テニスコート改修	C−17 D−16・17	313	18.3			〃		
	共通教育講義棟改修	L−17	314	11.6			〃		
	石彫実習場整備その他	N・O・P−8 Q−9	315	29			〃		
平成22年	教育学部研究実験棟B棟改修工事	H・I・J−18	316	80	落ち込み、溝	弥生土器	予備立会		年報8
	音楽サークル棟新営工事	G−14	317	13.5			予備		
	教育学部研究実験棟G棟改修工事	G−18	318	22			立会		
	吉田寮改修工事	L・M−9	319	1,820			〃		
	基幹整備（鋳鉄管改修）工事	Q−18	320	13.6	河川		〃		
	基幹整備（第1体育館周辺排水整備）工事	G−13	321	8			〃		
	事務局2号館車寄せ取設工事	L−14	322	3.6	土壙		〃		
	里山遊歩道手摺り取設工事	N・O−14	323	15.2			〃		
	人文学部駐輪場外灯設置工事	M−22	324	13.6			〃		
	教育学部附属特別支援学校構内雨水排水補修工事	C・D−21	325	18	包含層、河川		〃		
	農学部附属農場果樹園側溝新設工事	R・S−19	326	10	ピット、溝、土壙		〃		
平成23年	特高受変電設備棟新営工事	P・Q−16 R・S・T・U・V−17	327	380	ピット、杭列、河川	土師器、須恵器、瓦質土器、陶磁器、石鏃	本立会		年報9
	基幹整備（第1体育館周辺排水整備）工事	G−13・14	328	72			立会		
	埋蔵文化財資料館スロープ取設工事	N−16	329	48			〃		
	第2学生食堂西側テーブル・ベンチ取設工事	M−15	330	8			〃		
	農学部植物工場新設工事	P−15	331	224	ピット		〃		
	農学部連合獣医学科棟横倉庫撤去・新設工事	O−17	332	75			〃		
	教育学部附属特別支援学校散水栓増設工事	C・D−21	333	16.8			〃		
平成24年	図書館改修工事及び環境整備（図書館周辺道路迂回）工事	M−16	334	172	河川、杭列	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 緑釉陶器、製塩土器 石器、木器、銙帯丸鞆	本		年報10
	産業動物実験施設新営工事	S・T−10	335	45			予備		
	椹野寮新営工事	O−21・22 P−22	336	48	溝	須恵器	予備		
	第1学生食堂増築工事	I−19・20 J−20	337	66.1	河川、ピット	弥生土器、土師器	予備		
	陸上競技場トラック排水溝改修工事	D−17〜19 E−17・19 F−16〜19 G−16〜18	338	495	河川、溝		立会		
	人文・理学部管理棟EV設置工事	M−20	339	42.75			〃		
	農場本館事務室等改修機械設備工事	R・S−13	340	27			〃		
	図書館改修その他工事（廃棄物プール設置）	K−10	341	25			〃		

山口大学構内の主な調査

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
平成24年	国際交流会館1号館引込給水管改修工事	M･N-22	342	15			立会		年報10
平成25年	獣医学国際教育研究センター棟新営工事	P-17	343	608	縄文時代河川	縄文土器	本		年報11
	第1武道場耐震改修その他工事	F･G-16 G-17	344	692	弥生古墳時代河川溝、土壙	弥生土器、土師器、石器竹製網代編み製品	〃		
	第1武道場耐震改修その他工事	H-15	345	1			立会		
	農場本館研究・実験室改修工事	S-13	346	4			〃		
	農学部本館他電気接地改修工事	R･S-13	347	1			〃		
	椹野寮新営工事	O-20 N･O-21 O･P-22	348	35	落ち込み、ピット、河川		〃		
	陸上競技場外灯設置工事	E-19･20 F-19 G･H-18	349	56			〃		
	自転車置き場設置工事	G･H-15	350	90			〃		
	基幹・環境整備（太陽光発電設備）工事	L･M-18 L-18	351	20			〃		
	交通標識設置工事	J-15 L-11～13 O-18	352	6	包含層		〃		
	学術情報資産の集約管理システム設備工事	K-14	353	22.8			〃		

白石構内

山口大学構内の主な調査

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属山口小学校・幼稚園運動場整備		1	60	古墳竪穴住居、溝状遺構	土師器、須恵器、瓦質土器、瓦、石製品、木製品	試掘		年報Ⅲ
昭和60年	教育学部附属山口小学校散水栓改修		2	1			立会		年報Ⅴ
	教育学部附属山口中学校球技コート整備		3	2			〃		
	教育学部附属幼稚園環境整備（樹木植樹）		4	1			〃		
昭和61年	教育学部山口附属学校	幼稚園・小学校部分	5	57	中世土壙か	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、土師質土器、	試掘		年報Ⅵ
	汚水排水管布設	中学校部分		20	河川跡か杭列	陶磁器、不明鉄製品、石鏃、剥片、植物遺体			
昭和61年	教育学部附属山口小学校電柱移設		6				立会		年報Ⅵ
昭和62年	教育学部附属幼稚園遊戯室拡張		7	40			〃		年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属山口中学校屋内消火栓設備改修		8	35	包含層	土師器、磁器、剥片	〃		年報Ⅷ
平成元年	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水排水管布設		9	260	弥生～古墳竪穴住居、土壙、溝、柱穴、河川跡	縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、須恵質陶器、黒色土器、掻器、二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、石核、砥石	事前		年報Ⅸ
	教育学部附属幼稚園バレーコート支柱設置		10	0.3			立会		
	教育学部附属幼稚園・山口小学校汚水管布設		11	170	弥生溝状遺構	弥生土器、土師器、打製石斧、削器、剥片、石核	〃		
平成2年	教育学部附属山口中学校汚水排水管布設		12	70	溝状遺構	縄文土器、弥生土器、土師器、瓦質土器、不明鉄製品、石鏃、敲石、扁平打製石斧、砥石、剥片	事前		年報Ⅹ
			13	130		弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、瓦質土器、国産陶磁器、扁平打製石斧、砥石	立会		
平成6年	教育学部附属山口小学校プール新営給水管埋設		14	3			〃		年報ⅩⅣ
	教育学部附属山口中学校プール新営給水管埋設		15	7			〃		
平成7年	教育学部附属山口中学校自転車置場新設		16				〃		
平成10年	教育学部附属山口小学校給食室改修		17				試掘		
平成12年	教育学部附属山口中学校防球ネット新設		18				立会		年報ⅩⅩ
平成14年	教育学部附属山口中学校給水設備改修		19				〃		
	教育学部附属幼稚園運動場整備		20		河川、柱穴	土師器	〃		
平成15年	教育学部附属山口幼稚園庇新設山口小学校スロープ新設		21	27.7			立会		年報1
平成16年	白石地区市道歩道改修		22	1	河川		立会		年報2
	教育学部附属山口小学校事務室新営		23	101	河川、土壙または溝		〃		
	教育学部附属山口幼稚園・小学校フェンス・通用門改修		24	11			〃		
平成17年	教育学部附属山口幼稚園・小学校給水管改修		25	10			立会		年報3
平成19年	教育学部附属山口中学校校舎等改修		26	121	河川、落ち込み、ピット	縄文土器、弥生土器	予備		年報5
	教育学部附属山口中学校校舎等改修		27	38	河川、包含層		立会		
平成21年	教育学部附属山口小学校共用棟・教室B棟間渡り廊下屋根取設		28	2.5			〃		年報7

山口大学構内の主な調査

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
平成21年	教育学部附属幼稚園園内中庭池改修整備		29	50	落ち込み		立会		年報7
	教育学部附属山口中学校中庭庇取付		30	1.5			〃		
平成22年	教育学部附属山口小学校渡り廊下設置		31	12			立会		年報8
平成23年	教育学部附属学校園案内板設置工事		32	1			立会		年報9
	教育学部附属幼稚園渡り廊下屋根拡張工事		33	11.5			〃		
平成24年	教育学部附属幼稚園遊具設置工事		34	0.35			立会		年報10
	教育学部附属幼稚園園舎テラス取設工事		35	7.9			〃		
	教育学部附属山口中学校看板表示設置工事		36	0.6			〃		
	教育学部附属山口中学校テニスコート防球ネット嵩上げ工事		37	4.8			〃		
	教育学部附属山口中学校武道場新営植物移植工事		38	3			〃		
平成25年	教育学部附属山口中学校武道場新営工事		39	235.8		弥生土器、土師器、須恵器、瓦質土器、木製品	予備		年報11
	教育学部附属山口中学校武道場新営工事に伴う外溝及び渡り廊下取設工事		40	77.6		縄文土器、弥生土器、土師器	立会		

小串構内

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
昭和58年	医学部体育館新営		1	260		土師器、瓦質土器、石器	試掘		年報Ⅲ
	医学部図書館増築		2	4			立会		
	医学部体育館新営		3	1			〃		
昭和59年	医学部浄化槽新営		4	44	近世溝	土師器、瓦質土器、磁器	事前		年報Ⅳ
	医学部体育館新営		5	65		土師器、瓦質土器、磁器	〃		
	医学部基幹整備(特高受変電設備)		6	28		動物遺体(貝殻)	試掘		
	医学部臨床講義棟病理解剖棟新営		7	38			〃		
昭和60年	医学部附属病院外来診療棟新営		8	390		土師質土器、瓦質土器、陶磁器	〃		年報Ⅴ
	医学部基礎研究棟新営		9	10		近世陶器	〃		
	医学部看護婦宿舎改修		10	25.5		近世陶磁器	立会		
	医学部看護婦宿舎改修		11	20			〃		
	医学部環境整備(樹木移植)		12	40			〃		
昭和61年	医学部附属病院外来診療棟新営		13	5			〃		年報Ⅵ
	医学部附属病院外来診療棟周辺環境整備等(雨水桝埋設)		14	18			〃		
昭和62年	医学部附属病院東駐車場改修		15	6			〃		年報Ⅶ
	医学部附属病院病棟新営		16	104		削器、ナイフ形石器、細石刃核	試掘		
昭和63年	医学部附属病院病棟新営		17	300		二次加工のある剥片、使用痕のある剥片、剥片、敲石、礫、原石、土師器、土師質土器、瓦質土器、陶磁器	立会		年報Ⅷ
	医学部附属病院運動場整備		18	220			〃		
平成元年	医学部附属病院MRI棟新営		19	45		削器、細石刃、二次加工のある剥片、剥片、石核	試掘		年報Ⅸ
平成3年	医学部臨床実験施設新営電気工事		21	0.5			立会		年報ⅩⅠ
平成4年	焼却棟地盤調査		22				〃		年報ⅩⅡ
平成5年	医学部臨床実験施設新営その他		23	9			〃		年報ⅩⅢ
	医学部附属病院基幹設備(焼却棟新営)		24	6			〃		
平成6年	医学部附属病院MRI−CT装置棟新営		25	300			〃		年報ⅩⅣ
平成7年	医学部附属病院看護婦宿舎新営		26	40			試掘		
平成8年	医療技術短期大学部屋外排水管布設		27	6			立会		年報ⅩⅥ
平成9年	医学部慰霊碑・納骨堂新営		28	15.2			試掘		年報ⅩⅦ
	基幹環境整備(看護婦宿舎浄化槽撤去)		29	4			立会		
	医学部剖検棟移設		30	10			〃		
平成10年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線)		31	134	包含層、近世〜近代用水路	剥片、弥生土器、土師器、陶器、磁器	事前	宇部市教育委員会と共同調査	
平成10年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線・医学部敷地西側特殊道路)		32	379	包含層、近世〜近代溝	剥片、縄文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器	〃	宇部市教育委員会と共同調査	
平成11年	宇部市土地区画整理事業(柳ヶ瀬丸河内線)		33	792	近世〜近代用水路、土坑	陶器、磁器、鉄製品	〃	宇部市教育委員会と共同調査	
平成13年	医学部附属病院立体駐車場新営		34	229	包含層	縄文土器、弥生土器、土師器、陶器、磁器鉄釘	試掘		年報XXⅠ
平成14年	医学部附属病院高エネルギー棟新営		35	13.25			〃		
	総合研究棟新営		36	382	包含層	縄文土器、土師器、須恵器、瓦質土器、陶器、磁器	〃		
平成15年	基幹環境整備(煙突)新営		37	76			試掘		年報1

山口大学構内の主な調査

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
平成16年	医学部基幹環境整備（地下オイルタンク他）		38	144		縄文土器、土師器、陶器、磁器、石錘	試掘		年報2
	医学部職員宿舎他公共下水接続		39	400		弥生土器、土師器、瓦質土器、陶器、磁器	〃		
	医学部総合研究棟北側連絡用渡り廊下取設		40	40.6			立会		
平成17年	医学部附属病院基幹環境整備（冷熱源設備他改修）		41	37			〃		年報3
	医学部南側通用門塀取設		42	30			〃		
平成18年	モニュメント設置		43	6.2			〃		年報4
平成19年	医学部総合研究棟改修Ⅰ期		44	6.75			予備		年報5
平成20年	医学部総合研究棟改修Ⅱ期		45	9			〃		年報6
平成21年	小串宿舎B棟埋設ガス管改修		46	58			立会		年報7
平成22年	医学部附属病院患者用・職員用立体駐車場建設		47	125		煙管、陶器、磁器、瓦質土器、土師器	予備立会		年報8
	地域医療教育研修センター新営		48	156	畦畔、溝	磁器、陶器、泥メンコ、土人形、煙管、土錘、土師器、須恵器、弥生土器、縄文土器	予備		
平成23年	地域医療教育研修センター新営工事		49	4			立会		年報9

常盤構内

調査年度	調　査　名	構内地区割	地点	面積（㎡）	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
昭和58年	工学部校舎新営		1	70		須恵器	試掘		年報Ⅲ
	工学部図書館増築		2	70			〃		
昭和59年	工学部尾山宿舎排水管布設			20			立会		年報Ⅳ
昭和60年	工学部尾山宿舎擁壁取設等			65			〃		年報Ⅴ
	工学部受水槽改修		3	1.5			〃		
昭和61年	工学部尾山宿舎排水管改修			6			〃		年報Ⅵ
	工学部身体障害者用スロープ取設		4	29			〃		
	情報処理センター（常盤センター）空調設備取設		5	30			〃		
昭和63年	工学部焼却炉上屋新営		6	225			〃		年報Ⅷ
平成元年	工学部夜間照明装置及び防球ネット設置		7	2			〃		年報Ⅸ
	工学部記念植樹		8	2.5			〃		
平成2年	工学部ガス管改修		9	45			〃		年報Ⅹ
平成3年	大学祭展示物設置		10	7			〃		年報ⅩⅠ
平成4年	工学部プレハブ研究・実験棟新営		11	6			試掘		年報ⅩⅡ
	工学部・工業短期大学部の改組再編・博士課程設置に伴う建築物等の新営		12	40			〃		
	工学部および工業短期大学部職員宿舎取壊		13	9			立会		
	大学祭展示物設置		14	7			〃		
平成5年	工学部プレハブ研究・実験棟新営		15	12			試掘		年報ⅩⅢ
	工学部地域共同研究開発センター新営		16	16			〃		
平成7年	工学部国際交流会館新営		17	8		石鏃	〃		
平成8年	工学部国際交流会館新営		18	352	段状遺構	ナイフ形石器、剥片	事前		年報ⅩⅥ
平成12年	工学部福利厚生棟新営		19	38.5			試掘		年報ⅩⅩ
平成13年	工学部インキュベーションセンター新営		20	60		土師質土器、瓦	〃		年報XXⅠ
平成14年	総合研究棟新営		21	13.5			〃		
平成15年	工学部本館改修		22	428			立会		年報1
平成16年	工学部定歪速度応力腐食割れ実験室新営		23	20			試掘		年報2
	工学部光半導体素子実験室新営		24	52.5			〃		
	工学部雨水幹線工事		25	9			立会		
平成17年	工学部職員宿舎揚水施設改修		26	65			〃		年報3
	工学部会議棟身障者スロープ取設置		27	38			〃		
平成18年	総合研究棟改修工事（Ⅱ期・本館北）		28	280			確認		年報4
平成19年	工学部総合研究棟改修（Ⅲ期・本館）		29	147			〃		年報5
平成20年	工学部女子学生寄宿舎新営その他		30	24			予備		年報6
平成21年	工学部ガス管改修		31	12.5			確認		年報7

光構内

調査年度	調査名	構内地区割	地点	面積(㎡)	遺構	遺物	調査区分	備考	文献
昭和58年	教育学部附属光小学校 自転車置場設置		1	6	近世～近代石垣	瓦質土器、陶磁器、瓦	試掘		年報Ⅲ
昭和59年	教育学部附属光小・中学校 焼却炉新営		2				立会		年報Ⅳ
昭和60年	教育学部附属光中学校 外灯改修		3	1		土師器	〃		年報Ⅴ
昭和61年	教育学部附属光小学校創立 記念事業(ブロンズ像建立)		4	2.5		土師器、須恵器	〃		年報Ⅵ
昭和62年	教育学部附属光中学校 グラウンド防球ネット設置		5	2		弥生土器、土師器、 瓦質土器、 土師質土器、瓦	〃	御手洗湾採集	年報Ⅶ
昭和63年	教育学部附属光小学校 遊器具移設		6	10		土師器、土師質土器、 陶磁器	〃		年報Ⅷ
	教育学部附属光小学校 屋外スピーカー設置		7	0.5		土師器、土師質土器、 須恵器、瓦器、 瓦質土器、陶磁器、 土錘	〃	御手洗湾採集	
平成2年	教育学部附属光小学校 運動場改修		8	15		縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 施釉陶器、磁器、 土錘、剥片、鉱滓	試掘	御手洗湾採集 遺物含む	年報Ⅹ
	教育学部附属光小学校 運動場改修		9	23	土壙	土師器、須恵器、 須恵器模倣土師器	事前		
平成3年	教育学部附属光中学校 武道館新営		10	38	土壙、溝状遺構	土師器、磁器、陶器	試掘		年報ⅩⅠ
	教育学部附属光小学校 屋外施設設置		11	18		土師器、石錘	立会		
	教育学部附属光中学校 バックネット新設		12	0.5		土師器	〃		年報ⅩⅠ
平成4年	教育学部附属光中学校 武道館新営		13	500	土壙、柱穴	縄文土器、須恵器、 土師器、瓦器	事前		年報ⅩⅡ
	教育学部附属光中学校 武道館地盤調査		14				立会		
平成5年	教育学部附属光中学校 武道館新営その他		15	6			〃		年報ⅩⅢ
平成6年	教育医学部附属光小中学校 プール新営給排水管埋設		16	19			〃		年報ⅩⅣ
平成8年	教育学部附属光小・中学校 囲障(外周フェンス・防球ネット)取設		17	7		陶磁器	〃		年報ⅩⅥ
平成10年	教育学部附属光小学校 給食室改修		18	6			〃		
平成11年	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		19	132	古墳包含層、柱穴、 近世～近代土壙	土師器、須恵器、 韓式系土器、 竈形土器、陶器、磁器	試掘 立会		
平成12年	教育学部附属光小・中学校 護岸石積改修		20	173	石垣	陶磁器	立会		年報ⅩⅩ
	教育学部附属光小・中学校 上水道(給水管)改修		21	23			〃		
平成15年	教育学部附属光小学校エレベータ 昇降路等新設		22	169	ピット、土壙、溝	縄文土器、土師器、 須恵器、瓦質土器、 陶器、磁器、石器	試掘 立会		年報1
平成17年	教育学部附属光小学校 体育器具庫新営		23	53		土師器、須恵器 磁器陶	予備		年報3
	教育学部附属光小・中学校護岸改修		24	40	石垣	陶磁器	立会		
平成21年	教育学部附属光中学校校舎改修		25	107	ピット、土壙	須恵器	本		年報7
	教育学部附属光中学校校舎改修工事 に伴う プレハブ建設		26	225			立会		
平成22年	教育学部附属光中学校 防球ネット設備		27	1			立会		年報8
平成23年	教育学部附属光小学校 下水道接続工事		28	19.4		土師器、須恵器、陶磁器	予備		年報9
	教育各部附属光小学校遊具設置工事		29	20			立会		
平成24年	教育学部附属光小学校下水 接続工事		30	125.4	ピット、土壙、溝、 落ち込み、包含層	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 韓式系土器、製塩土器	本		年報10
	教育学部附属光小学校下水 接続工事		31	889	ピット、土壙、溝、 落ち込み、包含層	縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器 韓式系土器、製塩土器	立会		
平成25年	教育学部附属光小学校仮設校舎 設置工事		32	57	土壙	土師器	立会		年報11
	教育学部附属光小学校改修その他工事 教育学部附属光小学校改修その他機械設備工事 教育学部附属光小学校改修その他電気設備工事		33	412	落ち込み、包含層	土師器、須恵器	立会		

その他構内

調査年度	調　査　名	構内地区割	面積(㎡)	遺　構	遺　物	調査区分	備　考	文献
昭和59年	学生部ボート艇庫 合宿研修所整備	宇部市大字小野 字土井	0.5			立会		年報Ⅳ
	学生部ヨット艇庫 合宿研修所整備	吉敷郡秋穂町 東字中道				〃		
昭和60年	熊野荘給湯機器取設	山口市熊野町3―21	7			〃		年報Ⅴ
昭和61年	湯田宿舎給水管改修	山口市湯田温泉 6丁目8―29	35	杭		〃		年報Ⅵ
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市旭通り 2丁目3―32	1		土師質土器	〃	6号宿舎	
		山口市 水の上町6―9	7		瓦	〃	2号宿舎	
昭和63年	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市白石 二丁目8―7	1		須恵器、土師器、 土師質土器、 瓦質土器、陶磁器	〃	7号宿舎採集	年報Ⅷ
平成元年	本部職員宿舎 公共下水道切替	山口市水の上町 6―1	1			〃	1号宿舎	年報Ⅸ
平成2年	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市石観音町 1―25	1.2		陶磁器	〃	7号宿舎	年報Ⅹ
	経済学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市香山町 3―1	0.5			〃	3号宿舎	
平成3年	湯田宿舎A棟給配水 その他改修	山口市湯田温泉 6丁目	30			〃		年報ⅩⅠ
	経済学部6号職員宿舎 電柱設置	山口市旭通り 2丁目3―32	0.5			〃		
	人文・理学部職員宿舎 公共下水道切替	山口市天花 932―2	1			〃		
平成4年	上竪小路共同下水管布設	山口市上竪小路 字久保7―4	7			〃		年報ⅩⅡ
平成6年	湯田宿舎公共下水道接続 及び排水施設改修	山口市湯田温泉 6丁目8―29	44			〃		年報ⅩⅣ
平成15年	ボート部合宿所給排水整備	宇部市大字小野 字土井	80			確認		年報1
平成16年	湯田宿舎B棟自転車置場新営	山口市湯田温泉 6丁目8-29	11			確認		年報2
平成17年	経済学部職員宿舎2号フェンス取替	山口市水の上街6-9	1			確認		年報3
	工学部職員宿舎(尾山) 揚水施設改修	宇部市上野中町 1-33・34	15			確認		
平成21年	秋穂団地(ヨット艇庫)浄化槽改修	山口市秋穂東706-2	4.5			〃		年報7

※文献①　山口大学吉田遺跡調査団『吉田遺跡発掘調査概報』(山口大学、1976年)
※昭和41年以降、吉田構内においては、工事に際し随時継続的に調査を実施しているが、昭和52年以前の吉田遺跡調査団の関与した調査については、調査名をすべて把握しているわけでなく注意が必要である。

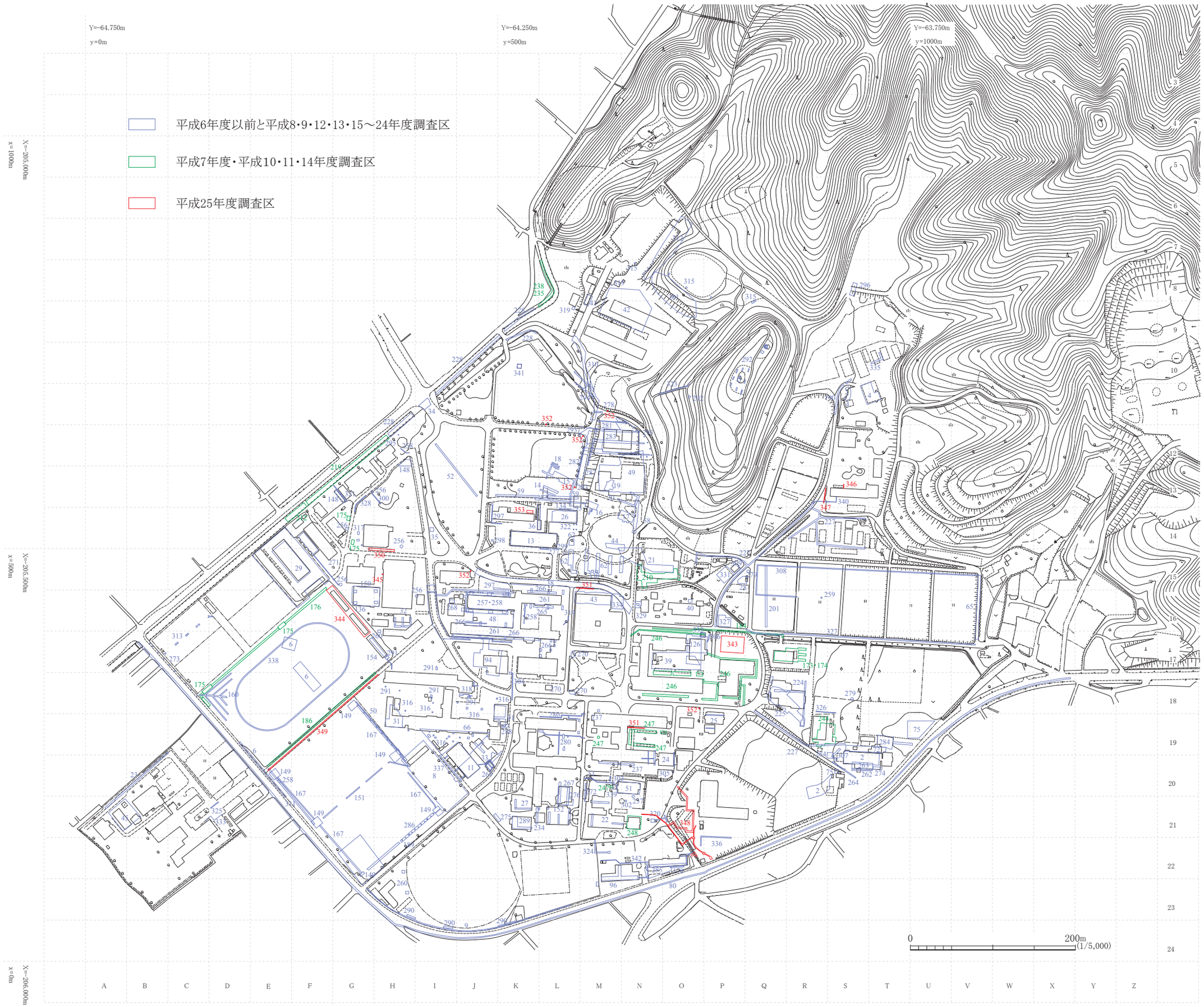


図61　山口大学吉田構内地区割および主な調査区位置図

図 62 山口大学白石構内（幼稚園・小学校）調査区位置図

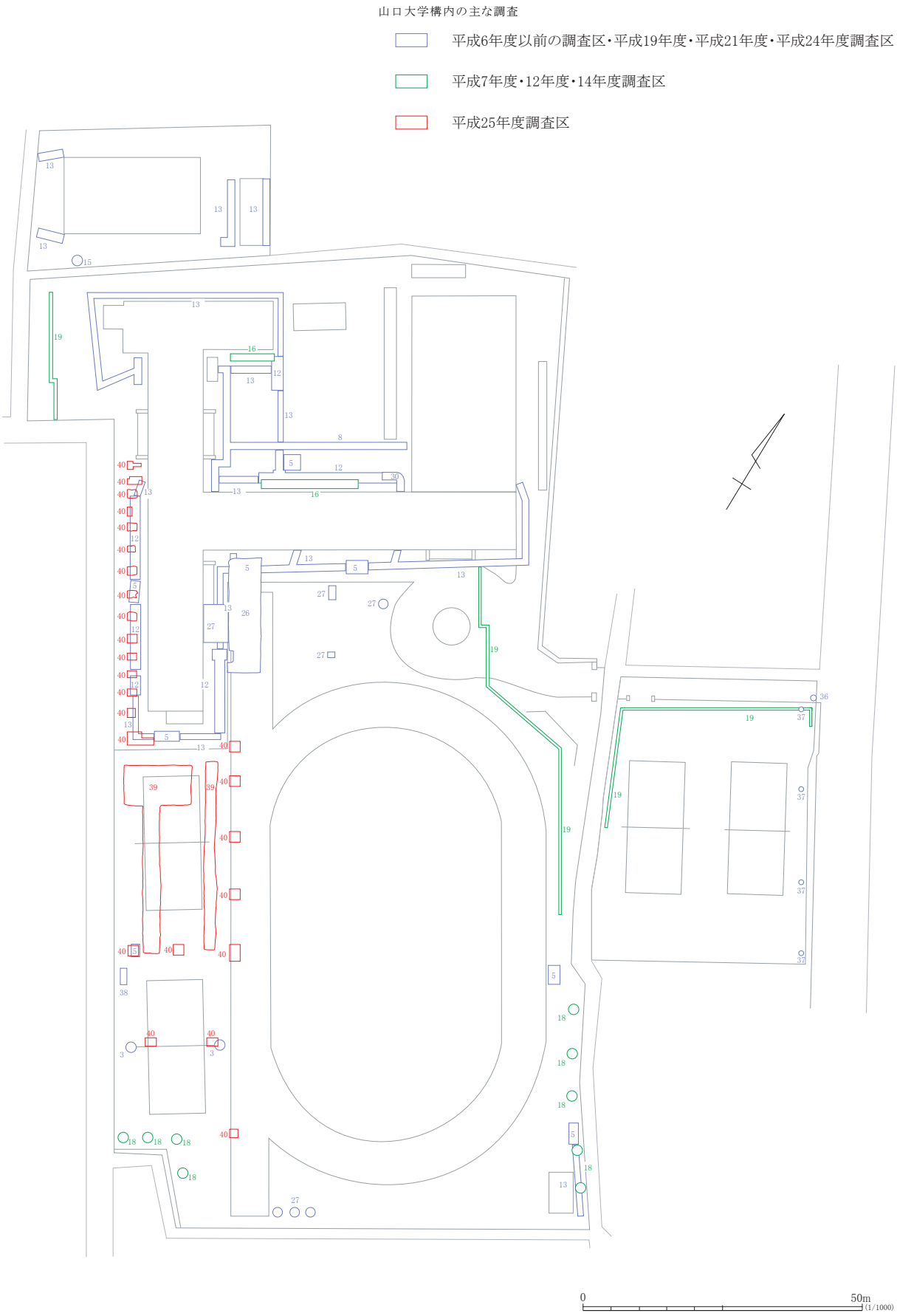


図63 山口大学白石構内（中学校）調査区位置図

図64 山口大学小串構内調査区位置図

図65 山口大学常盤構内調査区位置図

図 66 山口大学光構内調査区位置図

付篇1

吉田遺跡出土の網代編み製品と植物遺体の樹種同定

横山成己　（株）吉田生物研究所

樹種同定試料の概要

平成25年度に吉田構内にて実施した第1武道場耐震改修その他工事に伴う本発掘調査にて、北東から南西に走る溝（SD2）に取設された性格不明土壙状遺構（SX3）が検出された。SX3の中央には、長軸に直交する方向に柵状施設が設けられており、施設の南東側には枝葉層とともに複数の網代編み製品が出土した（本書45頁図17・図59）。このうち、網代編み製品1（試料1：写真185）・2（試料2：写真187）・3（試料3：写真187）、枝葉層1（試料4：写真186）、網代編み製品1下部枝葉層（試料5：写真：185）と、柵状施設および上面に張り付けられていた網代編み製品に対しては、実物を保存するため、取り上げののちの保存処理を（株）吉田生物研究所に委託した。また、試料1～5については樹種同定も委託した。なお、試料1と5は平成25年12月20日に（株）吉田生物研究所が取り上げ作業を実施し（写真188）、試料2～4は12月16日に、柵状施設等は12月19日に横山と発掘作業員にて取り上げ作業を実施した。以下は（株）吉田生物研究所による樹種同定報告である。

試料1～4

1．試料

試料は吉田遺跡SX3から出土した網代編み製品3点と枝葉層1点である。

2．観察方法

剃刀で木口（横断面）、柾目（放射断面）、板目（接線断面）の各切片を採取し、永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

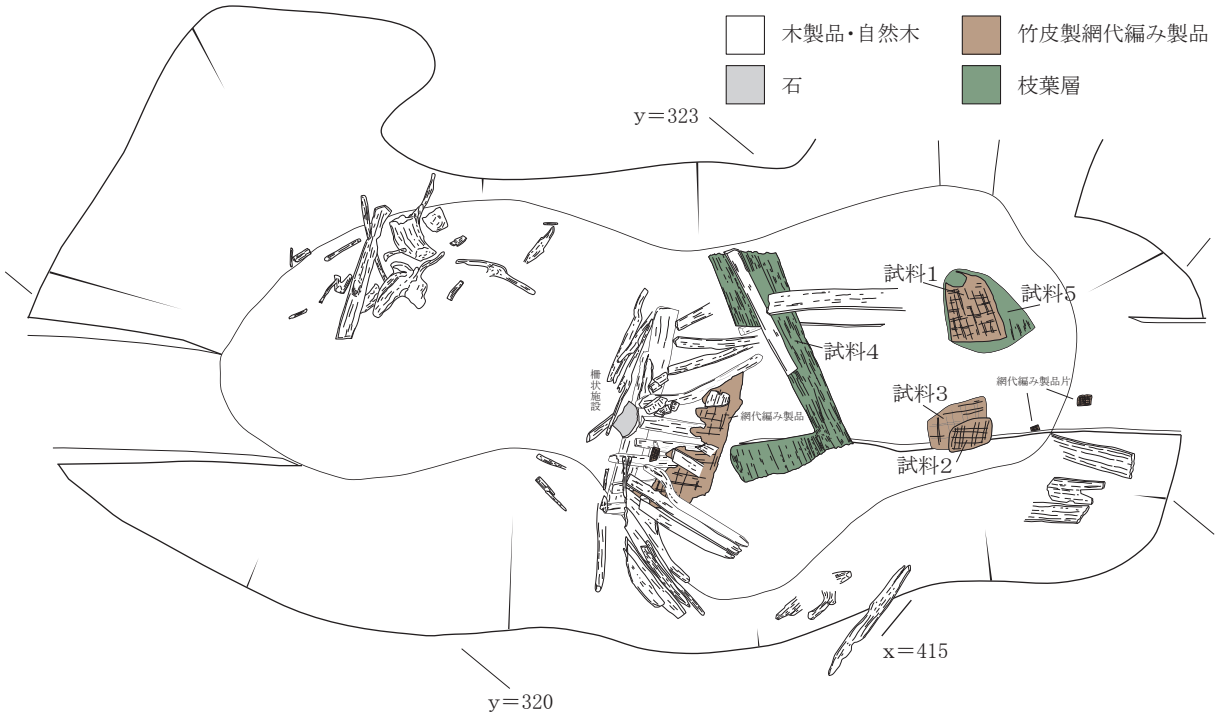


図67　SX3における鑑定資料の位置

３．結果

樹種同定結果（試料１～４：タケ類1種、試料2・4：草本類1種）の表と顕微鏡写真を示し、以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

表12　吉田遺跡出土木製品同定表

NO.	試料名	樹種
1	網代編み製品	イネ科タケ亜科
2	網代編み製品A 〃　　B	イネ科タケ亜科 草本類
3	網代編み製品	イネ科タケ亜科
4	枝葉層A 〃　B	イネ科タケ亜科 草本類

写真 183　試料2サンプリングポイント

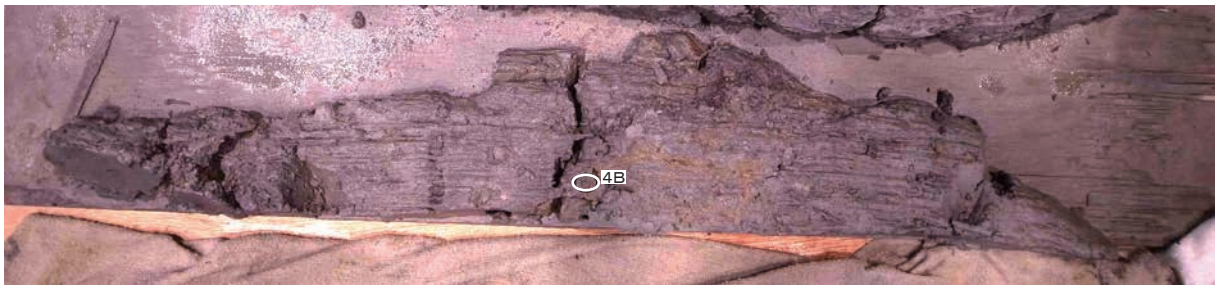


写真 184　試料4サンプリングポイント

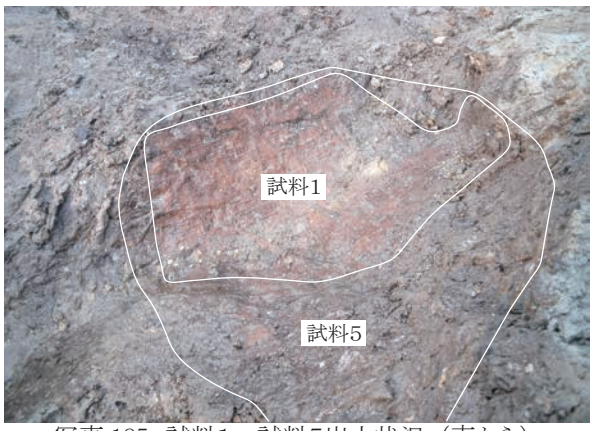


写真 185　試料1・試料5出土状況（南から）

写真 186　試料4出土状況（南から）

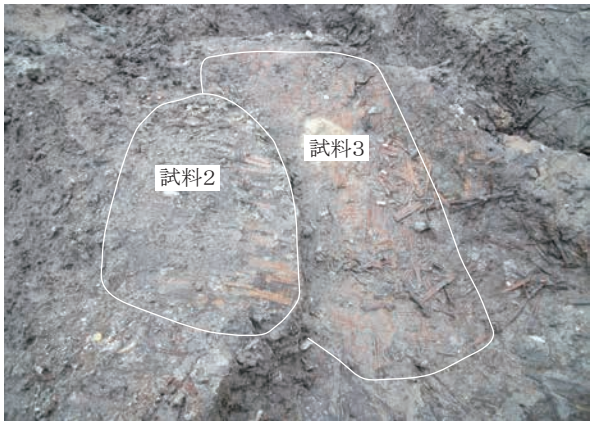


写真 187　試料2・試料3出土状況（南東から）

写真 188　試料1取り上げ作業風景（南から）

1）イネ科タケ亜科（Subfam. Bambusoideae）

（試料1，2A，3，4A）

横断面と接線断面は採取出来なかった。放射断面では厚壁繊維の組織やその他の基本組織の細胞が稈軸方向に配列している。タケ亜科は熱帯から暖帯、一部温帯に分布する。

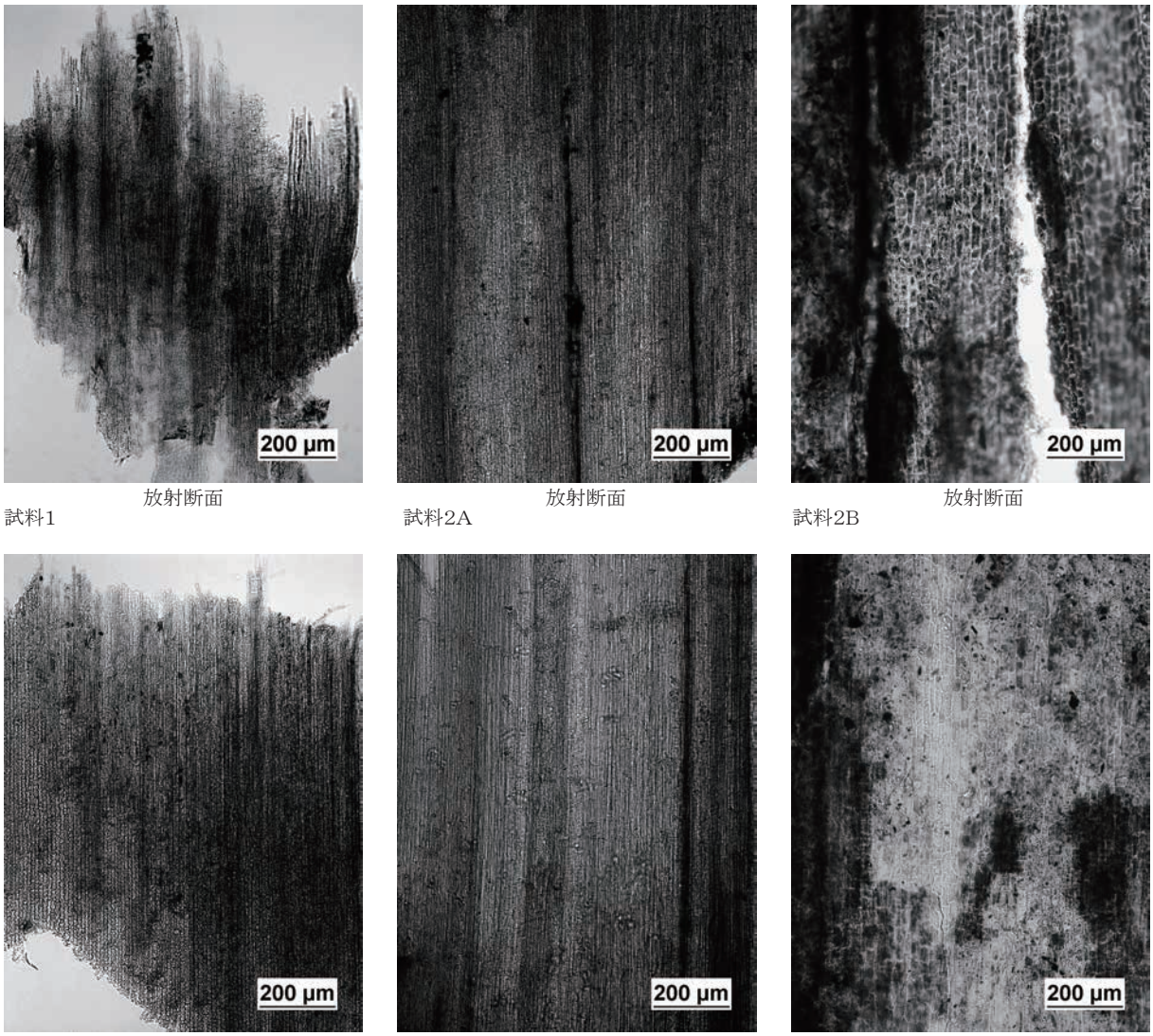
2）草本類

（試料2B，4B：写真183・184）

サンプリングを行おうとした箇所の遺物の厚みが観察が出来る程なく、横断面と接線断面は採取出来なかった。放射断面ではほぼ均質な厚さの厚壁細胞の連なりが見られる。木本類のように様々な厚みの厚壁細胞や著しく変形した細胞（スクレレイド）が確認されないので、草本類の表皮組織と考えられる。

［使用顕微鏡］

Nikon DS-Fi1



試料1 放射断面　試料2A 放射断面　試料2B 放射断面

試料3 放射断面　試料4A 放射断面　試料4B 放射断面

写真 189　試料顕微鏡画像

試料５

１．試料

吉田遺跡SX3から出土した網代編み製品１下に堆積する植物遺体の層から試料を約20点選び出し、これらの同定を行った。

２．調査方法

試料を実体顕微鏡等で観察し、その形態から種の同定を試みた。その際、石川茂雄（1994年）、大井（1978年）、北村・村田（1979年）、中山・井之口・南谷（2000年）を参照した。

３．結果

木本7種の葉と、木本1種の種実類が認められた。写真を示し、同定結果を表に記す。和名の順位、学名は北村・村田（1979年）によった。

表 13　植物遺体同定結果

写真No.	和名	科名	学名	種類	部位
1	ゴヨウツツジ	ツツジ科	*Rhododendron quinquefolium* Bisset et Moore	木本	葉
2	メギ	メギ科	*Berberis Thunbergii* DC.	木本	葉
3	ニワトコ?	スイカズラ科	*Sambucus racemosa* L.	木本	葉
4	ハイノキ属?	ハイノキ科	*Symplocos* sp.	木本	葉
	ノグルミ?	クルミ科	*Platycarya strobilaccea* Sieb. Et Zucc.	木本	葉
5	ブナ属?	ブナ科	*Fagus* sp.	木本	葉
6	ハイノキ属	ハイノキ科	*Symplocos* sp.	木本	葉
	アカガシ	ブナ科	*Quercus acuta* Thunb.	木本	葉
7	アカガシ	ブナ科	*Quercus acuta* Thunb.	木本	葉
8	トチノキ	トチノキ科	*Aesculus turbinata Blume*	木本	種子

写真1　ゴヨウツツジ

写真2　メギ

写真3　ニワトコ？

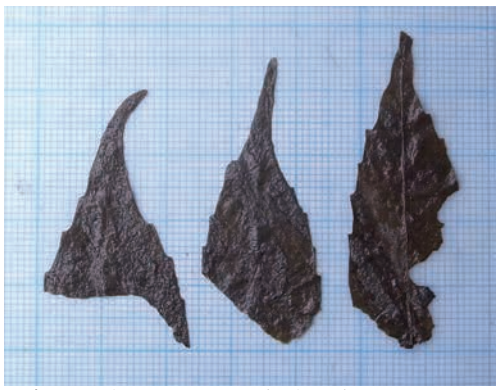


写真4　左2枚ハイノキ属？　右1枚ノグルミ？

写真5　ブナ属？

写真 190　試料画像①

写真6　左1枚ハイノキ　右6枚アカガシ

写真7　アカガシ

写真8 トチノキ

写真 191　試料画像②

【参考文献】

石川茂雄（1994年）『原色日本植物種子写真図鑑』、石川茂雄図鑑刊行委員会

島地　謙・須藤彰司・原田　浩（1976）「木材の組織」森北出版

島地　謙・伊東隆夫（1988）「日本の遺跡出土木製品総覧」雄山閣出版

大井次三郎（1978年）『改訂増補新版日本植物誌　顕花編』、至文堂

北村四郎・村田　源（1964年）『原色日本植物図鑑　草本編』上、中、下保育社

北村四郎・村田　源（1979年）『原色日本植物図鑑　木本編』Ⅰ、Ⅱ保育社

中山至大・井之口希秀・南谷忠志（2000年）『日本植物種子図鑑』、東北大学出版会

奈良国立文化財研究所（1985）「奈良国立文化財研究所　史料第27冊　木器集成図録　近畿古代篇」

奈良国立文化財研究所（1993）「奈良国立文化財研究所　史料第36冊　木器集成図録　近畿原始篇」

付篇2

吉田遺跡出土「千字文」音義木簡略報

横山　成己

はじめに

平成27年度に吉田構内にて実施した動物医療センターリニアック棟新営その他工事（動物医療センター西端部：前室・手術室・覚醒室解体）に伴う立会調査にて、埋没谷の埋土より木簡1点が出土した。本書は平成25年度の調査概報を所収したものであるが、資料の重要性を鑑み略報を掲載する。

調査の経緯（図68、写真192～194）

平成26年度の、吉田構内東南端部にて動物医療センターリニアック棟新営その他工事に伴う本発掘調査を実施することとなった。構内空閑地の不足により、当地周辺は平成12年度以降に開発が頻発している状況にあるが、それに伴う既往調査の概略を記すると

平成12年度：総合研究棟新営に伴う発掘調査（田畑2017）

8世紀前半から9世紀中ごろの須恵器を中心に、円面硯を包含する埋没谷を検出。周囲に古代官衙関連遺構が分布する可能性が高まる。

平成14年度：農学部解剖実習棟新営に伴う発掘調査（田畑2004）

埋没谷右岸の緩傾斜地に3棟の総柱建物等を検出。谷埋土より墨書須恵器「官」、銅製蛇尾未製品、銅鉱石、鞴羽口などが出土。鋳造工房関連の官衙が存在した可能性が高まる。

平成18年度：動物医療センター改修Ⅰ期工事に伴う発掘調査（横山2010）

埋没谷右岸の緩傾斜地に柱根の遺存する大型掘立柱建物等を確認（平成18年度）。谷埋土より7世紀後半から8世紀中ごろの須恵器を主体とする多量の土器とともに、木製品が多数出土。少なくとも世紀後半には官衙もしくは首長居館的施設が当地に存在したことが明らかとなる。

平成20年度：動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う発掘調査（横山2012）

埋没谷の左岸を初めて確認。左岸には護岸のための杭・矢板列が設けられており、人為的に谷筋を維持していたことが判明。谷埋土からは8世紀代の須恵器を主体とする土器とともに木製品が多数出土（写真194）。須恵器中に墨書「卅（主）」「主・井」「安」を確認。

この他、本学吉田地区への統合移転時である昭和41年度に実施された吉田遺跡第Ⅱ地区の調査では、埋没谷の南西に隣接する現農学部附属農場牧草地調査区にて、柱穴や溝など古代または中世と見られる多数の遺構を確認したほか、現動物医療センター敷地調査区にて西端部に谷埋土と見られる「遺物包含層ライン」が記録されているが、調査の詳細は定かではない（小野1976・横山2007）。

これら既往の調査により、動物医療センターリニアック棟新営予定地は、埋没谷の検出が確実視されることから、平成26年11月17日から翌27年2月7日にかけて本発掘調査を実施した。

調査の結果、北東端部を除く調査区のほぼ全域が埋没谷であることが判明し、平成20年度調査にて谷左岸が確認されていることから、当地点での谷幅が約12mであることが確認された。谷埋土からは7世紀後半から8世紀代を中心とする夥しい数の土器類が出土しており、未だ整理作業中であるが、墨書土器「□少カ 殿」「田」のほか、鱗状文様の墨書のある土器片も発見されている。

平成20年度調査同様に木製品も多量に出土しているが、谷の最深部にあたる調査区南端部に集中してた（写真193）。木製品に関しては、谷の下流部にて平成14年度に実施した農学部解剖実習棟調査区

や、平成12年度に実施した総合研究棟調査区にでは顕著な出土を見ていないことから、当調査区周辺の谷右岸部に木製廃棄物を生じさせる工房等の施設が存在したと推定される。

本発掘調査で問題となったのは、動物医療センター西端部に増築されている既設施設（前室・手術室・覚醒室）の存在であった（写真192右上建物）。工事計画では、この施設を解体ののちリニアック棟を建設する予定となっていたが、平成26年度中は施設を講義に使用するため、本発掘調査時に敷地を調査対象とすることができず、平成27年度に工事立会として調査を実施する運びとなった。

調査の経過

平成27年度に至り、動物医療センター西端増築施設が撤去された4月22日より、約50㎡（7m×7m）を対象範囲として立会調査に着手した。工事施工業者に依頼し、重機にて造成土を除去したところ、増築施設の基礎は浅く、谷埋土が完全に遺存しており、部分的に上位の遺物包含層も残存していることが明らかとなった。翌23日より資料館員3名（横山・川島・山田）にて人力掘削に着手したが、ゴールデンウィーク明けの5月7日より工事着工というスケジュールを鑑み、3名での完掘は不可能と判断し、翌24日より作業員5名を研究補助員として雇用し、人力掘削を実施した。

27日、谷埋土3上層掘削中に複数の木製品を確認した。木簡状の板製品を取り上げ直後に洗浄したところ、明確に文字が確認されたことから、本学人文学部教授橋本義則氏に実見調査を依頼した。以降も谷埋土掘削を続け、翌28日に掘削を終了し、5月1日に写真撮影・測量等諸記録作業を行い、立会調査を終了した。

調査成果（図69、写真195～197）

調査区内において、東から西に走る谷筋を検出した。谷の落ち込みは調査区北東端部よりはじまり、南方に緩やかに傾斜したのち、急勾配で谷底に落ち込んでいる。谷の深さは最深部で約1mを測る。緩傾斜部にピット状の落ち込み2基を確認しているが、埋土は谷埋土2上層と同一である。その他、谷の緩傾斜部、急傾斜部、谷底に杭を検出しているものの、規則性は見出せない。

基本層序は、平成26年度に実施した本発掘調査と完全に一致しており、谷の堆積土は①谷埋土1（黄灰色強粘質土）、②谷埋土2上層（黒褐色弱粘質土）、③谷埋土3下層（黒褐色弱粘質土に礫が多量に混ざる）、④谷埋土3上層（黒褐色泥土）、⑤谷埋土3下層（黒色泥土）、⑥谷埋土4（灰色砂礫）となっている。この内、谷埋土3下層は有機物が密に堆積し、部分的に腐葉土層となっている。谷埋土4は水流堆積層である。

谷埋土に包含されていた資料に関しては、未だ整理作業中であり全貌を把握し得ていないが、谷埋土1および2上下層からは円面硯3点を含む多量の土器片が出土している。谷埋土3上層は本調査区南端部にて多量の木製品を検出した層であり（写真193）、当立会調査においても複数の木製品を確認した。その内の1点が本稿にて報告する「千字文」音義木簡である。

木簡調査の経過

4月27日の木簡出土を受け、前述の通り翌28日に橋本氏に実見調査いただき、その後も継続して釈読に協力いただくこととなった。5月13日に美祢市長登銅山文化交流館にて赤外線カメラによる調査を実施し、7月28日には奈良文化財研究所都城発掘調査部史料研究室にて渡辺晃宏氏をはじめ室員各氏とともに音義木簡であることを確認し、8月12日に山口大学にて記者発表を行った。

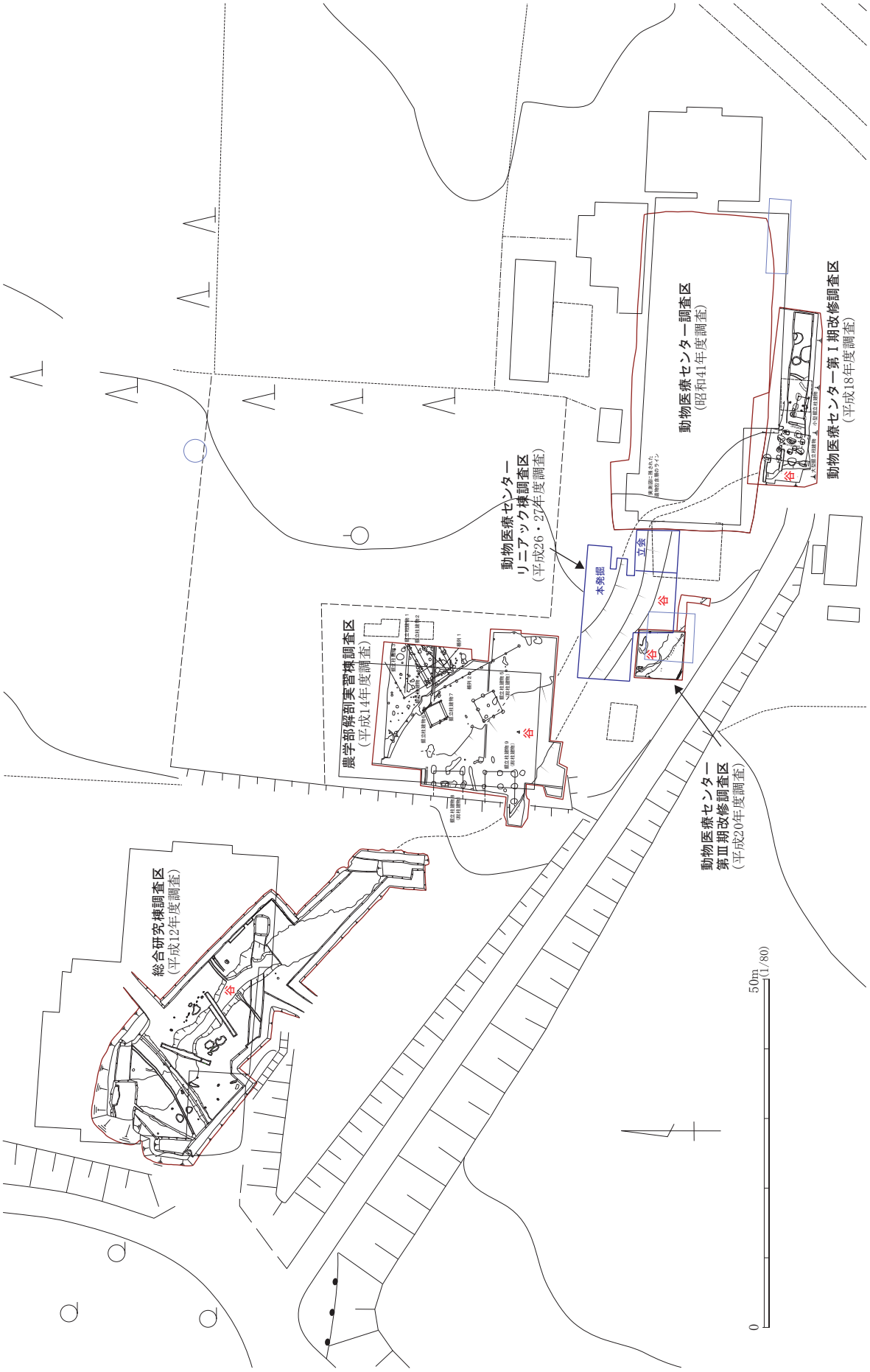
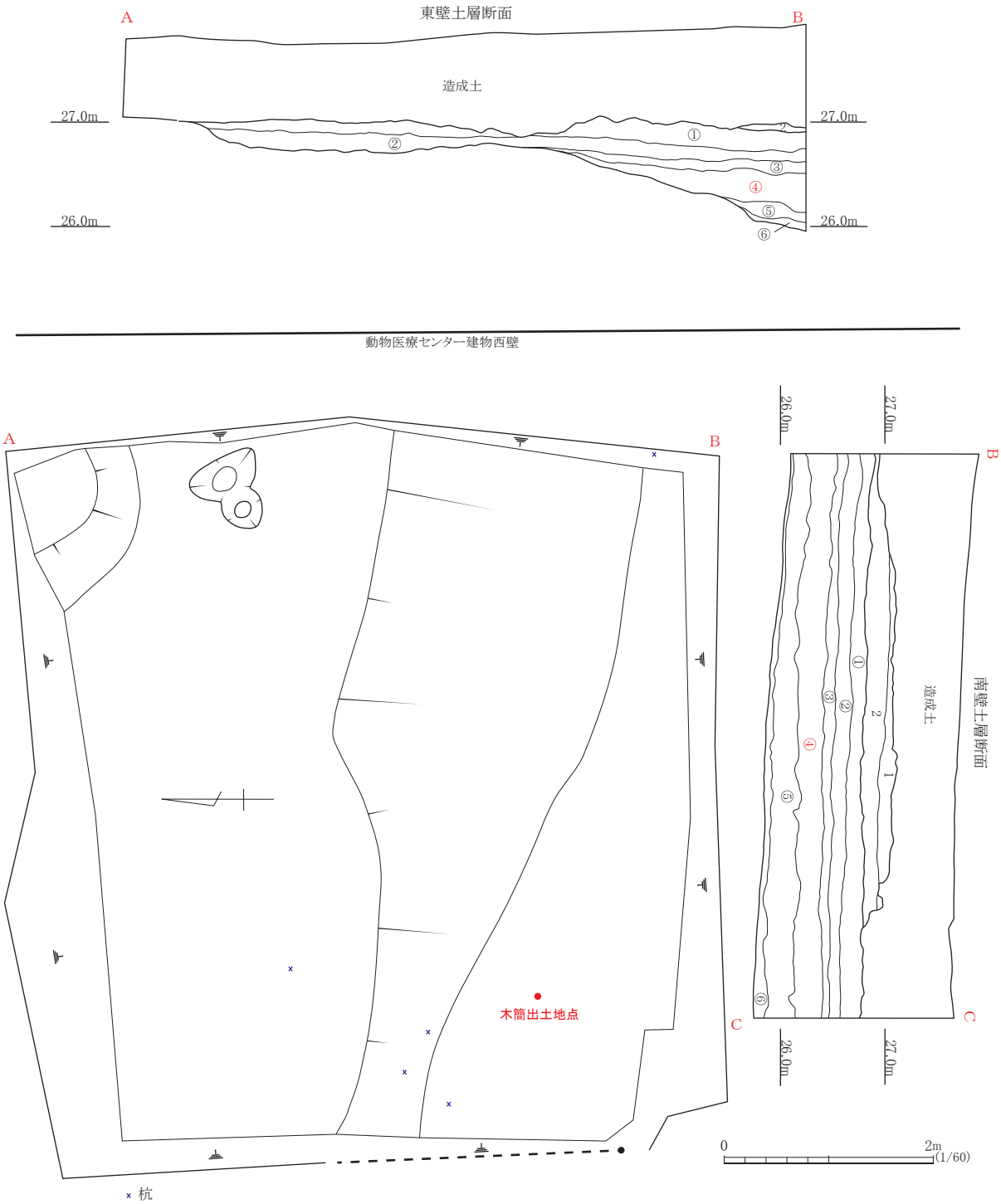

総合研究棟調査区
（平成12年度調査）
農学部解剖実習棟調査区
（平成14年度調査）
動物医療センター
リニアック棟調査区
（平成26・27年度調査）
動物医療センター調査区
（昭和41年度調査）
動物医療センター第Ⅰ期改修調査区
（平成18年度調査）
動物医療センター
第Ⅲ期改修調査区
（平成20年度調査）
本発掘
立会
谷
0
50m
(1/80)

図68　調査区位置図



1：遺物包含層1（黄褐色弱粘質土） 2：包含層2（褐灰色に褐色が混ざる強粘質土）

①谷埋土1（黄灰色強粘質土） ②谷埋土2上層（黒褐色弱粘質土） ③谷埋土2下層（黒褐色弱粘質土に礫が多量に混ざる）

④谷埋土3上層（黒褐色泥土※木簡出土層） ⑤谷埋土3下層（黒色泥土） ⑥谷埋土4（灰色砂礫）

図 69　動物医療センターリニアック棟新営その他工事に伴う立会調査区平面図・断面図

写真 192　本発掘調査区南端部完掘状況（西から）

写真 193　本発掘調査区南端部木製品出土状況（南から）

写真 194　平成20年度調査区木製品出土状況（南西から）

写真 195　平成27年度立会調査区作業着手状況（南西から）

写真 196　平成27年度立会調査区作業状況（西から）

写真 197　平成27年度立会調査南壁土層断面（北から）

その後、12月5・6日に奈良文化財研究所平城宮跡資料館講堂にて開催された木簡学会研究集会にて資料報告を行った際、質疑応答時に参加者より「『千字文』の一部である」との指摘を受け、再度橋本、渡辺両氏に検討いただき、未解読の文字も含めてご教示を得た。以下に木簡に関する調査成果を報告する。

木簡について（写真198）

木簡は、谷埋土3上層中に複数の木製品とともに発見された。文字面を下に、ほぼ水平の状態で出土している。

木簡の上端は折損しており、左右側面と下端は削って整形している。残存長280㎜、最大幅37㎜、最大厚6㎜を測る。樹種はヒノキ科ヒノキ属である[註1]。木簡下部はやや幅が狭まり、表面が荒れているが、これは使用による摩耗と推測される。

文字は片面のみに確認され、釈文は以下の通りである。

１字目　文字：折損　　訓：□［田ヵ］
２字目　文字：雨　　訓：不　路
３字目　文字：露　　訓：ツ　由
４字目　文字：□［結ヵ］　訓：□［亡ヵ］　須　ム
５字目　文字：霜　　訓：之　母
６字目　文字：金　　訓：□［久ヵ］　加　□

2字目「雨」を「フル」と動詞で訓んでいること、本来であれば5字目に入るべき「爲」が欠落することなど、多少の疑問点も残るが、内容から、梁の周興嗣『千字文』第9句から11句にかけての「雲騰致雨　露結爲霜　金生麗水」傍点字に万葉仮名によって訓みを記した音義木簡と見て良いようである。

音義木簡は、これまで飛鳥池遺跡（奈良国立文化財研究所1998）、平城京二条大路跡（奈良国立文化財研究所1995）、北大津遺跡（濱・山本2011）、観音寺遺跡（和田ほか2002）から出土しており、吉田遺跡出土品で5例目となる。前例はいずれも都跡や国営工房跡、国府遺跡であり、地方小官衙からの初例として注目される。また、記された文字の原典が判明した音義木簡としても初例であり、その学術的価値は極めて高い。

なお、木簡に共伴する谷埋土3上層出土土器に関しては、平成26年度実施本発掘調査出土品と合わせ調査中であるが、9世紀に下るものは見当たらないことから、8世紀代を投棄時期と見なしている。

謝辞

木簡の釈読に当たり、下記の方々に多大なるご教示、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。

池田善文　桑田訓也　橋本義則　馬場基　山本崇　渡辺晃宏　（50音順、敬称略）
木簡学会第37回研究集会参加者各位

【註】

1）樹種鑑定は（株）吉田生物研究所に依頼した。

（奈良文化財研究所　中村一郎氏撮影）

0　5　10cm (1/2)

写真 198　平成 27 年度出土「千字文」音義木簡

釈文

□田カ

雨

路　不

露

由　ツ

□結カ

ム　□亡カ

須

霜

母　之

金

□　□久カ

加

【文献】

小野忠熙(1976)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』, 山口大学吉田遺跡調査団(編), 山口

田畑直彦(2004)「平成7・10～14年度山口大学構内遺跡の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅥ・ⅩⅦ』, 山口

田畑直彦(2017)「吉田構内総合研究棟新営に伴う発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡遺跡調査研究年報ＸＸ』, 山口

奈良国立文化財研究所(1995)『平城宮発掘調査出土木簡概報(三十)二条大路木簡四』,奈良

奈良国立文化財研究所(1998)『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報(十三)』, 奈良

濱修・山本崇(2011)「志賀・北大津遺跡」, 木簡学会(編)『木簡研究』第33号, 奈良

横山成己(2007)「吉田遺跡第Ⅱ地区の調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成17年度－』, 山口

横山成己(2010)「農学部附属家畜病院改修工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』, 山口

横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」, 山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成18年度－』, 山口

和田萃ほか(2002)『観音寺遺跡Ⅰ(観音寺遺跡木簡篇)』, 徳島県埋蔵文化財センター(編), 徳島

付篇3

山口県宇部市月崎遺跡出土資料について

川島　尚宗

1．遺跡の位置と環境

月崎遺跡は宇部市大字東岐波字月崎に所在し、瀬戸内海に面する標高約4～8mの砂堆・砂丘上に立地する。遺跡の範囲は東西約100m、南北約80mとされる。現在、遺跡の西側に砂浜が広がっているが、縄文海進期には湾が大きく入り込んだ地形をなしていたと考えられている（潮見1968a、中越1985・2000）。月崎遺跡は縄文時代前期から後期にかけて占地されたと考えられるので、各時期によって周辺の海岸線が変化しており、遺跡形成初期には岬の先端部付近に位置していたこととなる。背後に標高146mの日ノ山があり丘陵状の地形が広がることから、狩猟・採集もおこなわれたと考えられるものの、出土遺物・立地からみると海産資源を積極的に利用する生業形態をとっていたものと推測される。

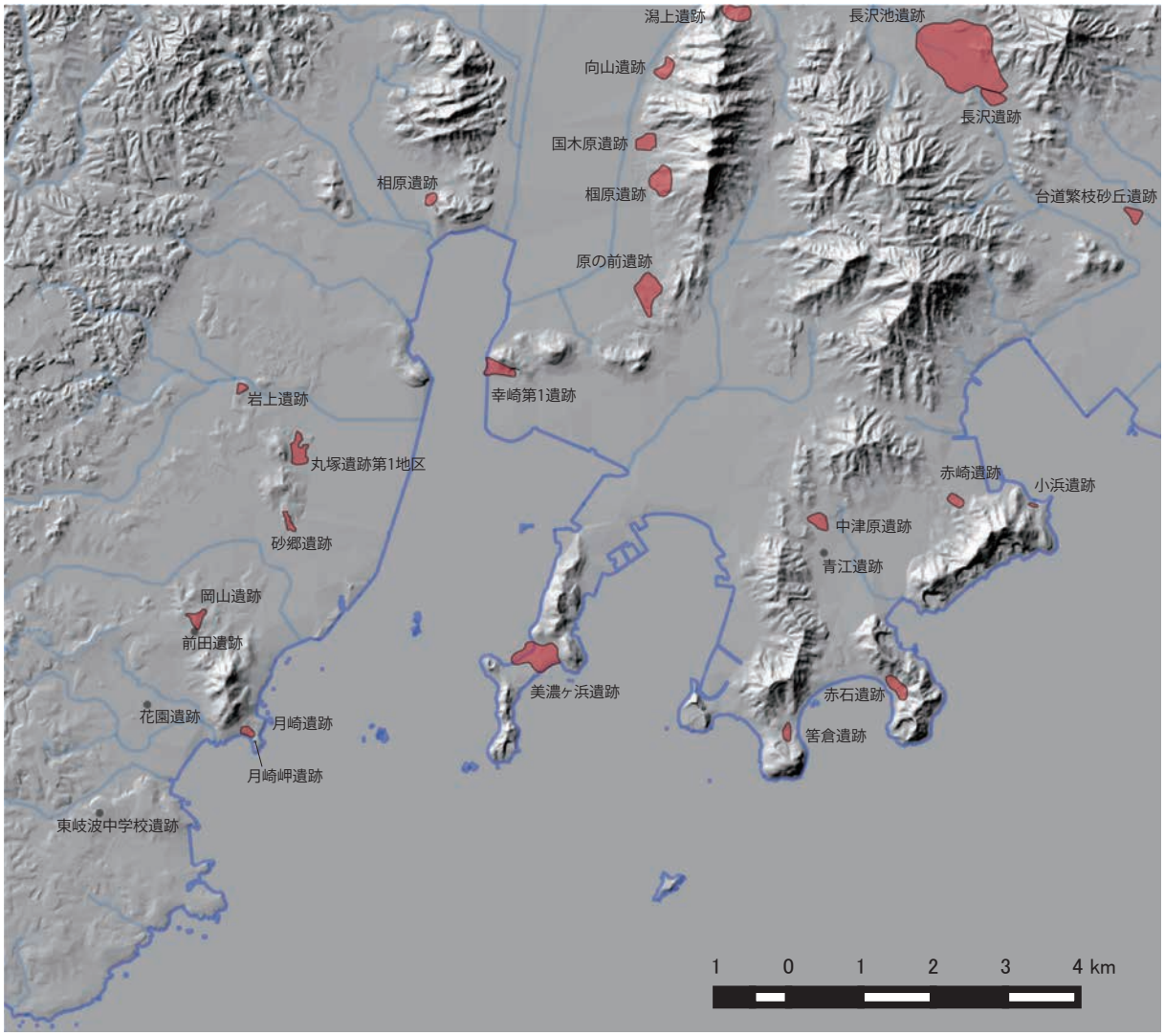


図 70　月崎遺跡周辺縄文時代遺跡分布図
（国土地理院発行基盤地図情報数値標高モデル、国土交通省国土政策局国土数値情報（海岸線・河川データ）、山口県文化財地図情報システムより作成）

月崎遺跡の周辺では、少ないながらも月崎遺跡のように海岸部に立地する遺跡がいくつか分布している（図70）。美濃ヶ浜遺跡では、縄文時代前期から晩期にかけての遺物が出土している。遺跡は砂堆上に立地し、2つに分層された遺物包含層のうち、下層は前期・中期の遺物を含み、上層からは後期・晩期の遺物が出土している（小野1961a、幸泉2005、澤下2000）。出土土器の傾向は、月崎遺跡と共通する部分が多いようである。美濃ヶ浜遺跡における土器以外の遺物では、石斧・石鏃・石錐などが少量出土している。当時島であった状況からは、美濃ヶ浜遺跡における生業は漁撈が主体であったと考えられよう。

美濃ヶ浜遺跡の東側には、筈倉遺跡・赤崎遺跡・赤石遺跡・小浜遺跡が海岸付近に立地しており、周辺地域に臨海性遺跡が展開していたことがわかる。月崎遺跡の立地する岬の先端部には、月崎岬遺跡が所在し、縄文時代後期の土器とともに石錘が発見されており（潮見1968b）、集落とはいえないものの小規模な臨海性遺跡はほかにも点在している可能性がある。

月崎遺跡周辺では、海岸から離れた地点でも縄文時代の遺跡が確認されている。日ノ山北麓には縄文時代中期末～後期前葉とみられる砂郷遺跡（冨士埜1999）が立地し、さらに岡山遺跡（冨士埜1996）、花園遺跡（三浦1968）、前田遺跡（小野1968、河村2000）など縄文時代の遺跡が分布している。これらの遺跡の中には、遺跡形成時には海岸付近に立地していたものも含まれると考えられ、さらに山口湾奥部にも丘陵裾部に展開する遺跡が認められる。少なくとも、岡山遺跡・東岐波中学校遺跡などは、海産資源への依存度の低い生業形態をとっていたと考えられよう。月崎遺跡周辺の縄文時代遺跡すべてが定住集落とは考えにくく、季節的移動の結果として残された可能性を考慮しなければならない。遺物量が豊富であり、複数の遺構が確認されている月崎遺跡は、周辺地域の中で比較的拠点的な居住地として機能していたと考えられる。

2．月崎遺跡の調査

第1・2次調査

山口大学埋蔵資料館には月崎遺跡出土資料が収蔵されており[註1]、ラベルに記載されたトレンチ名から、第1・2次調査時に出土したものと考えられる。第1次調査は、1961年4月3日から7日まで、第2次調査は1962年7月28日から8月3日までそれぞれおこなわれた（潮見1968a）。両調査は、宇部市市政40周年記念事業としておこなわれたもので、山口大学・広島大学を中心とするメンバーが発掘調査にあたった。これまでに調査の概要が数度報告されているが、詳細は明らかではない。ここでは、既報告資料をもとに情報を整理しておきたい[註2]。A・Bトレンチは第1次調査、C・Dトレンチは第2次調査の際に設定された。

遺跡の基本的な層序は、第1層：耕作土、第2層：茶褐色風成砂層、第3層：黄白色風成砂層、第4層礫混じり赤褐色粘土層、第5層赤褐色粘土の洪積層となっている（中越2000:140頁）。第2層は遺物包含層上層とされ、縄文時代後期の遺物を主体としつつ、上半部では縄文時代晩期の遺物も出土している。第3層は包含層下層とされ、主体となる前期の遺物のほかに中期の遺物を含んでいる。第1次・第2次調査においては、遺跡の中央部において、第2層の下端部に縄文時代後期の土器が集中して出土する傾向がみられた。第3層のうち、上端部の20～30cmからは条痕が施された土器が、A1・A2・A6・A7、D1～3トレンチにおいて集中的に出土している。

第1次・第2次調査では明確な遺構は検出されなかったものの、いくつか居住の可能性を示す痕跡が確認された。焼石・木炭・縄文後期土器の集中がいくつかみられ、焼石の単独出土も多かったとされる。

図 71　月崎遺跡トレンチ配置図（中越 2000 図 1、潮見 1968a 第 20 図より作成）

焼石は、A1区の中央から西半にかけて、A4区の中央部で数個がまとまった状態で出土した。ただ、これらは二次堆積の結果とみられている。A4区の西半で、厚さ5cmの層として検出されたが、遺構とは認定されていない。A1・A2区の間（A1’）において、焼石4個・木炭・土器・石斧・石錘がまとまって出土しており、生活面の状況を示すとされた。D6トレンチにおいて焼石・土器のほか焼土（木炭）が集中して確認されている（図71）。C5・6区では長軸1.8m×0.4m、深さ15～30cmの落ち込みが検出されているが、性格は明らかにされていない。

第2層に相当する遺物包含層上層下端のレベルをみると、A8・A9区に分布の中心があり、第3層の最高点付近が活動の中心地点であったと考えられている（潮見1968a）。基盤層となる赤褐色粘土層は、山側から海側へ全体的に傾斜していることを考えると、遺物包含層上層下端に遺物が多数みられることから考えると、遺物包含層上層の堆積開始時には遺物包含層下層の最高点付近を中心に居住活動が展開されたと考えられる。

当遺跡での出土土器は、包含層上層・下層の出土層位によって、2つに大別されている。さらに、土

器の器形・文様・調整などから細別がおこなわれ、地域的特色をもつ月崎下層Ⅱ類など、西部瀬戸内地域の土器編年上重要な遺跡となっている。

下層Ⅰ類は二枚貝の貝殻条痕を多用する土器で、九州の轟B式の影響を受けている。下層Ⅱ類は押引刺突文が文様の中心をなし、羽島下層式の影響を受けているとされる。下層Ⅲ類は綾杉状・平行沈線文を主体とする土器であり、この土器群も九州の影響が強いと考えられる。下層Ⅳ類は瀬戸内海縄文中期船元式の影響を受けた土器である。

上層Ⅰa・b類は、縄文後期の中津式・福田KⅡ式・鐘崎式に併行する土器である。上層Ⅰa類は、磨消縄文を主体とする中津式・福田KⅡ式併行の土器で、曲線文の間に縄文を施文するもの、縄文が施された三本沈線で文様を描くものがある。上層Ⅰb類は中津式・鐘崎式に相当し、沈線文を主体とする土器である。上層1c式は口縁部に貝殻・竹管状工具を用いて施文する土器であり、Ⅰd類は口唇部に刻目を施すもの、1e類は無文・巻貝条痕のものが分類されている。

上層Ⅱ類は、口縁部に平行沈線をめぐらし、磨消縄文を施しており、西平式に相当する。上層Ⅲ類は黒褐色磨研土器および貝殻条痕の施された粗製土器からなり、晩期前半に比定される。上層Ⅳ類は突帯文土器の時期である。

石器は、石鏃25点、石錐1点、二次調整をもつ剥片7点、石斧7点、磨石、石錘などが、土製品は、土錘、耳飾（耳栓）が出土している（潮見1968a）。

第3・4次調査

第3・4次調査は遺跡の範囲確認を目的として、第1次・第2次調査区の東西に調査区が設定され、縄文時代前期から晩期までの遺物包含層が確認された（中越2000）。

東地区では、曽畑式にともなう焼石を含む礫群が5基検出されている。約6m四方の範囲で密集しており、それぞれ径0.8m～1.5mの不整円形を呈している。各礫群は30～70個、多いものは100個以上の、径3～4および5～10cm程度の礫で構成されている。礫の中には500℃以上の熱を受けたものも含まれており、意図的に集められたと考えられることから、生活面の可能性が高いとされる（中越1985・2000）。礫群が集中する位置を考慮すると、第1・2次調査地点と同様に、小丘の頂点付近が居住または生活の中心となっていたと考えられる。

西地区北西部のE6・7区において、柱穴および木炭集中地点が検出されている（中越2000）。E7区では、縄文時代後期とされる柱穴6基（径15～25cm、深さ10～40cm）、木炭集中部（長径50cm×短径20cm）、土坑1基（長径35cm×短径20cm）が検出された。E6区では、同じく後期に属すると考えられる柱穴7基（径10～20cm、深さ10～30cm）、木炭集中部2ヶ所（長径75cm×短径50cmおよび径30cm）が検出された。この遺構面より20～30cmの深さで、後期の柱穴6基（径10～20cm、深さ10～20cm）が検出されている。さらに、前期の柱穴状遺構2基（直径15cm、深さ25～40cm）が、40cm下部の基盤層を掘り込むように形成されていた（前掲:141頁）。

東地区でみられたように、西地区においても、小丘状となるやや高まった地点が居住区として占地されていたと考えられる。第3・4次調査で出土した土器の全容は明らかではないが、土器のほか、石器類として石鏃68点、尖頭器状石器1点、石錐3点、石匙1点、削器13点、楔形石器2点、二次加工のある剥片22点、石錐104点、石斧11点、石皿1点、磨石（または敲石）16点が挙げられている（前掲:142頁）。これらと、第1・2次調査出土遺物との重複は不明であるが、石鏃68点のうち76.5％にあたる52点が姫島産黒曜石で製作されている。装身具類では、縄文時代前期の玦状耳飾4点、後期のサメ歯状石製品1点、土製垂飾1点が出土している。

3. 山口大学埋蔵資料館所蔵月崎遺跡出土資料

土器

山口大学埋蔵資料館が所蔵する月崎貝塚の資料は、発掘調査の際の出土資料と表採資料がある。本稿では、発掘調査出土資料と判断される資料を報告する。土器は小片ばかりであるが、時期の判別がある程度可能なものを図化した。未報告の土器を含めた注記をみると、「月崎」・「月崎1」・「月崎3」・「月崎5」・「月崎7」が確認され、上層式に分類される土器が多数を占めている。上層・下層が混在していることも考えられるが、主に包含層上層出土の土器であると判断される。

図72のTZ1・2は月崎下層Ⅲ類である。TZ1には鋭い施文具で深めのキザミを施し、下部に二枚貝条痕を施す。内面にも二枚貝条痕を施す。TZ2は内面にナデ、外面に二枚貝条痕を施す。3～6は月崎上層Ⅰaである。TZ3は口縁部に沈線を施し、口唇部外面に無節Lを施す。波状口縁となる可能性がある。TZ4は口縁部に幅広の水平沈線を施し、口唇部に巻貝条痕を施す。一部擬縄文のように巻貝圧痕が残る。内面は口唇直下にナデ、その下部に巻貝によると思われる条痕を施す。TZ5は胴部片で、沈線による区画内にRL縄文を施す。TZ6は口唇が肥厚する口縁部片である。口唇部上面に沈線をめぐらし、外面口唇直下の水平沈線との間にRL縄文を施す。縄文帯は下方へのびる。内面は丁寧なナデである。TZ7・8は月崎上層Ⅰc類に相当する。TZ7は波状口縁を呈し、低い隆帯上に巻貝の押圧を斜め方

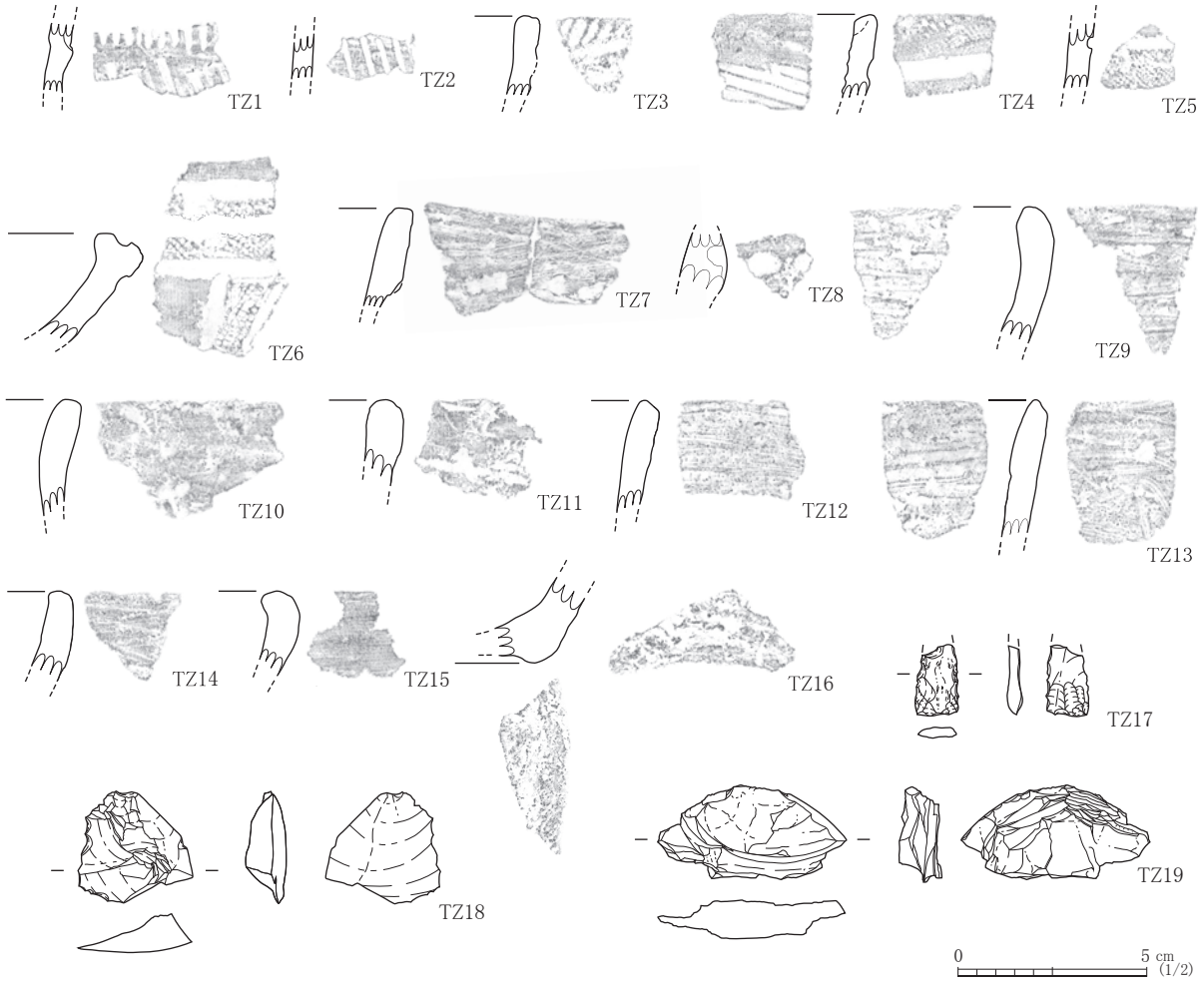


図 72 月崎遺跡出土遺物実測図（1）

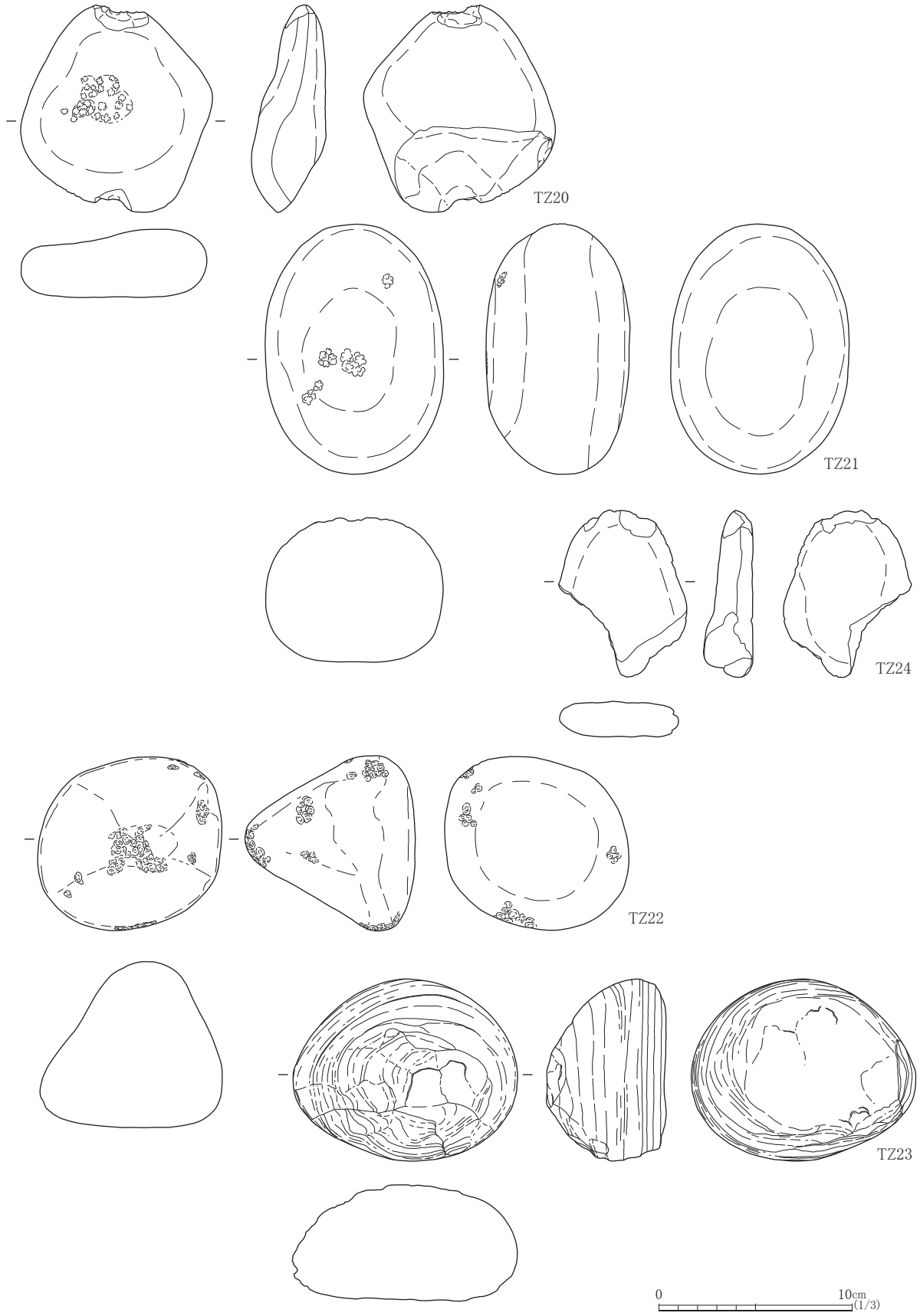


図 73　月崎遺跡出土遺物実測図（2）

写真 199　月崎遺跡出土遺物①

写真 200　月崎遺跡出土遺物②

TZ20a

TZ20b

TZ21a

TZ21b

TZ22a

TZ22b

写真 201　月崎遺跡出土遺物③

写真 202　月崎遺跡出土遺物④

向に連続して加える。内外面の調整は巻貝条痕である。TZ8は口縁部付近の破片であろう。巻貝先端により円形刺突を連続して施す。TZ9～14は月崎上層Ⅰe類である。いずれも巻貝による調整を主体とする破片である。TZ14・15は内面ナデ。16はやや上げ底となる底部である。上層Ⅰにともなうものであろう。内外面とも巻貝条痕を施す。

石器

石器は磨石類、石錘、剥片である。これらの資料には出土トレンチ名が記されたものがあり、いずれもA1～2拡張トレンチである。このうち、図73のTZ20には「下層」と注記がある。「4．9」は日付かと考えられるが、第1次調査は1961年4月3日～7日までおこわれたので（潮見1968:38頁）、誤記または「4．7」とみるべきかもしれない。

図72のTZ17は、月崎遺跡出土石鏃と比べ小型であるが、石鏃の未製品と考えられる。先端部を欠損する。姫島産黒曜石を使用し、正面には自然面が残る。TZ18は姫島産黒曜石の剥片である。TZ19は安山岩製の剥片である。TZ20は石錘である。打ち欠き部を欠損する。正面中央に敲打痕が残る。TZ21

表14 出土遺物（土器）観察表

法量（ ）は復元値

遺物番号	注記	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調 ①外面　②内面	胎土	備考
TZ1	月崎7	縄文　深鉢	胴部		①褐色(7.5YR4/3) ②にぶい褐色(7.5YR5/4)	0.3～1mmの石英をやや多く含む	
TZ2	月崎3	縄文　深鉢	胴部		①②橙色(5YR6/6)	0.5～2mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ3	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②浅黄色(2.5Y7/3)	0.5～3.5mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ4	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.5～4mmの長石・石英を少量含む	
TZ5	月崎	縄文　深鉢	胴部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②浅黄色(2.5Y7/4)	0.5～2mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ6	月崎	縄文　深鉢/鉢	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.5～1.5mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ7	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②にぶい赤褐色(5YR5/4)	0.5～3mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ8	月崎	縄文　深鉢	胴部		①②浅黄色(2.5Y7/4)	0.5～3mmの長石・石英を少量含む	
TZ9	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR6/4) ②黄褐色(2.5Y5/3)	1～2mmの長石・石英を多く含む	
TZ10	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.3～2.5mmの長石をやや多く含む	
TZ11	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②にぶい褐色(7.5YR5/4)	0.5～4mmの長石・石英を多く含む	
TZ12	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②にぶい黄色(2.5Y6/4)	0.5～2mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ13	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①②灰オリーブ色(2.5Y5/2)	0.5～1mmの長石・石英を少量含む	
TZ14	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/3)	0.5～1mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ15	月崎	縄文　深鉢	口縁部		①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	0.5～2.5mmの長石・石英をやや多く含む	
TZ16	月崎	縄文　深鉢	底部		①にぶい黄色(2.5Y6/4) ②黄褐色(2.5Y5/3)	1～3mmの長石・石英を多く含む	

表15 出土遺物（石器）観察表

法量（ ）は残存値

遺物番号	注記	器種	法量(mm) ①長さ②幅③厚さ④重量(g)	石材	備考
TZ17	月崎	石鏃未製品か	①(18.7)　②11.3　③3.4　④0.77	黒曜石	姫島産
TZ18		剥片	①29.3　②29.9　③9.9　④6.28	黒曜石	姫島産
TZ19		剥片	①26.0　②49.9　③11.2　④11.86	安山岩	
TZ20	4.9 月崎 A1～2拡張 下層	石錘	①(110.1)　②99.5　③(38.5)　④418.85	砂岩	
TZ21	月サキ A1～2拡張(2')	磨石	①129.4　②91.5　③74.3　④1343.6	花崗岩か	
TZ22	A1～2拡 月サキ	磨石/敲石	①89.5　②93.5　③86.6　④818.1	安山岩か	
TZ23	A1～2拡張 月サキ	磨石か	①94.7　②115.6　③62.1　④923.8	結晶片岩	
TZ24	月サキ	用途不明石製品	①(86.2)　②65.5　③24.5　④106.33	砂岩か	

は磨石である。正面に敲打痕がみられるが、各面ともよく研磨されており、磨石として用いられたと判断される。TZ22は磨石または敲石である。背面中央部は研磨され、敲打痕はみられない。正面の頂部をはじめとして各所に敲打痕が残る。TZ23は形状が磨石に類似しているが、結晶片岩製で風化が激しく、研磨面や敲打痕は確認できない。背面は剥離したものと考えられる。TZ24は用途不明石製品である。砂岩と思われる柔らかい石材を用いており、石材の硬度から石斧のような道具ではないと考えられる。石錘の可能性はあるが、下半部のほか上端を欠損しており断定は難しい。

土器・石器のうち、石器については、注記より第1次調査で出土した資料が含まれているとわかった。土器の注記には数字が含まれているものの、「月崎」のみの注記をもつ資料が大部分であり、アルファベットは全く記されていない。調査時のトレンチ名をみると、A区は11まで、C区は7までの番号がふられているため、土器の注記からA区またはC区のトレンチ名を特定することはできない。ただ、当資料館に収蔵されている土器小片ばかりがおさめられた遺物袋には、「4/5 A6 月崎上層部 □器小□（土器小片か）」と書かれた新聞紙が入っていた。報告した土器が、A6区の資料や石器と同時に収蔵されたとすれば、第1次調査の際のA区から出土した資料であると考えることができる。

4．周辺遺跡との比較からみた月崎遺跡

月崎遺跡の遺物・遺構の分布についてみてみると、まず第1次・第2次調査区の中央付近にて遺物包含層下層・上層ともに遺物の集中が認められている（潮見1968:42頁）。

まず下層式については、第1次・第2次調査において、下層はA1・A2・A6・A7・D1～3区から遺物が集中的に出土し、その他のトレンチからの出土は微量であったとされる。第3次・第4次調査では東地区から曽畑式期の礫群が検出されている（中越2000）。両遺物集中地点間の距離は約50mをはかるが、その間には現状ではやや浅い谷状となっていることから、両地点間に広く遺物が分布するかどうかについては明らかではない。第1次・第2次調査地点では基盤層となる赤褐色粘土層が比較的平坦に堆積しているため（潮見1968a:42頁）、居住活動の中心地点となったのであろう。E6区では前期とされる柱穴が2基確認されており、前期の居住範囲は遺跡西側まで点在していたようである。

後期以降の遺物包含層上層は、A8・A9区を中心に南北に広がっており、汀線側のA5・A6区では確認されていない（前掲:42-43頁）。上層Ⅰ類の出土量については表にまとめられており（前掲第1表）、A1～4区、A6・7区、B6区、C3区、D3～6区からの出土量が多い。B1～3区およびA8区以北ではほとんど上層Ⅰが出土しておらず、上層Ⅰ類の出土範囲が明確になっている。焼石・木炭の集中部は、A1区西半・A1’区（A1・2区間）・A4区中央・D6区であり、A1’区・D6区では土器・石器もまとまって出土している（前掲:44頁）。西区のE6・7区でも、後期の柱穴・土坑・木炭集中部が検出されており（中越2000）、遺物包含層下層と同様に西地区北側にかけて居住域が推定される。ただ、上述のように、上層Ⅰの時期に関しては中央部と西地区の間に一部遺物分布のない地点が存在する。

以上のように、砂堆上の遺跡であるため、時期によって占地条件は異なっているものの、基本的には基盤層が平坦な場所に遺物・遺構が密に分布しているようである。本稿で報告した資料は、調査区の中でも遺跡の中心部と考えられる部分から出土したものであるといえる。月崎遺跡で長期にわたって居住が繰り返されたのは、少なくとも前期および後期に関しては、汀線に近いというだけでなく居住に適した地形を維持していたからであると考えられる。

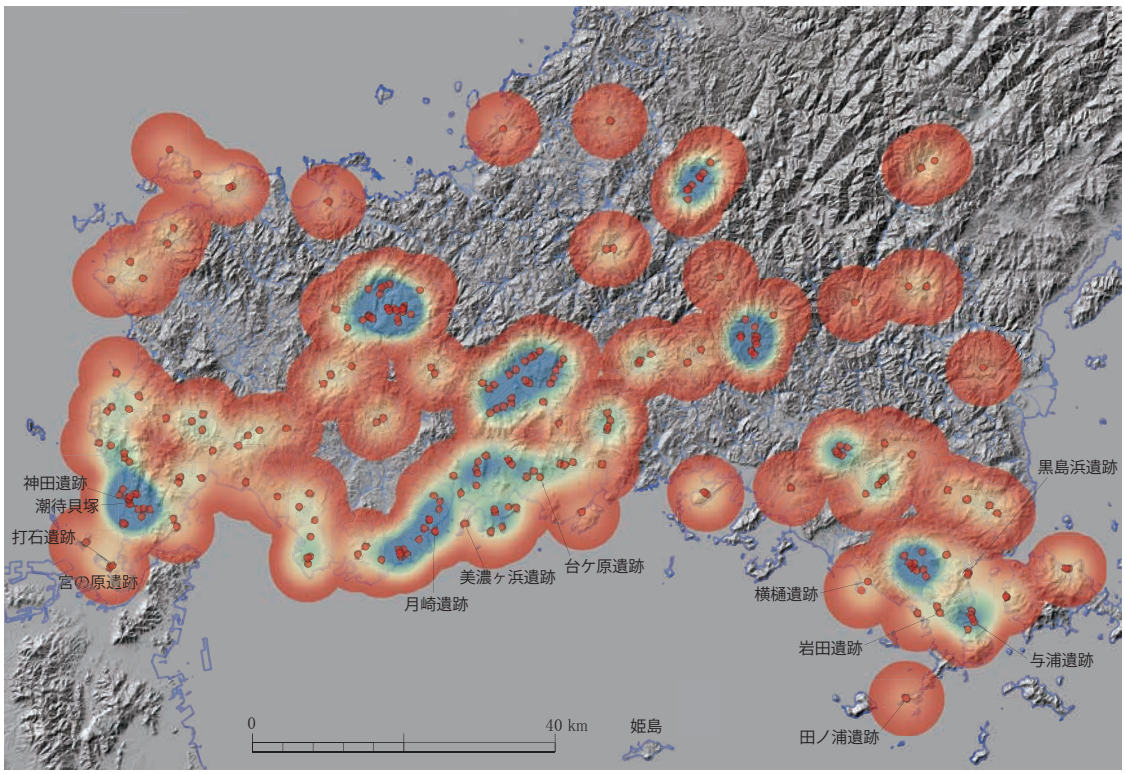


図 74　山口県縄文時代遺跡分布図

（国土地理院発行基盤地図情報数値標高モデル、国土交通省国土政策局国土数値情報（海岸線・河川データ）、山口県文化財地図情報システムより作成）

山口県域の臨海性集落としては、瀬戸内海沿岸・響灘沿岸においていくつかの重要な遺跡が知られている。月崎遺跡はその中のひとつであり、調査の概要報告はなされているものの、遺跡全容は明らかとなっていない。以下、今回報告した遺物をふまえ、周辺遺跡との比較を通じて、月崎遺跡のもつ意義について検討をおこないたい。

『山口県文化財地図情報システム（2008年）』からは、244の縄文時代遺跡[註3]を抽出することができた（図74）。時期ごとに分類できていないが、山口県における縄文時代遺跡の分布によると、いくつか核となる遺跡分布の集中地域が存在している。図中では、青で示された部分が遺跡分布の密な地域となる。調査や開発の規模・頻度に影響を受けているであろうが、現在のところ、関門地域、秋吉台周辺、宇部台地から佐波川河口にかけての沿岸部、山口盆地、徳佐盆地、鹿野盆地、八代盆地、島田川中流域、熊毛半島の9地域に遺跡の集中が認められる。このうち、沿岸部での集中が認められるのは、関門地域、宇部台地から佐波川河口にかけての沿岸部、熊毛半島の3地域となり、月崎遺跡はこうした地域内において中心部に位置している。潮待貝塚・神田遺跡で検討したように（川島2015・2016）、海岸部の遺跡では前期および後期前半を中心とした遺物包含層が形成されることが多く、月崎遺跡も同様の傾向を示している。山口県東南部においては、黒島浜遺跡・与浦遺跡・横樋遺跡など縄文時代後期を中心とする傾向が強いが、岩田遺跡・田ノ浦遺跡のように晩期に至るまで利用された遺跡が海岸部に点在する。

山口県域においては中期を主体とする遺跡が少ないが、宮の原遺跡では縄文時代中期の遺物がまとまって出土している（小野1961b、濱﨑2003）。当遺跡では、前期を主体とするA地点と、中期を主体とするB・C地点および第2次調査地点が60～70mほど離れている。時期ごとに居住地点が異なることを考慮すると、海岸部の遺跡において前期と中期では居住地の選択が異なっていた可能性があり、調査面積

の少ない遺跡では中期の居住地点が存在していることも考えられる。やや離れるものの、宮の原遺跡B地点から北東に約320mに位置する打石遺跡では、後期初頭～晩期の土器が出土しており（東2007）、近接する遺跡を含めて居住地点の問題に取り組む必要があると考えられる。

類型化は難しいが、臨海性の遺跡では、縄文時代前期から晩期にかけて数十mから数百m位置を違えつつも、繰り返し居住がおこなわれていた可能性を考慮しなければならないだろう。現状では、明確な生活面が確認できるのは、以前より指摘されてきたように前期と後期が中心となる。その背景には、従来より指摘されてきた砂堆という遺跡の立地条件のほか、海水面の変動が影響していたと推定される。特に山口県の東南部では、後期の遺物が偏在する傾向にあるとともに、海水面以下に遺物包含層が存在することが知られている。中期を主体とする遺跡が少ないことは、こうした理由に求められるのかもしれない。ただ、宮の原遺跡が良好な状況で残されており、山口県中央部の各遺跡で中期の土器がわずかであるが出土しているため、中期においても前期・後期の居住地点と比較的近い場所で居住活動がおこなわれたと予測される。

居住地点がある程度固定的であるとすれば、山口県域における縄文時代社会が小規模・遊動的であるとしても（山田2002）、このような遺跡を起点として交換などの交流がおこなわれたようである。石材の流通に着目すると、田ノ浦遺跡から姫島産黒曜石・サヌカイトの原石が大量に出土している（石井ほか2007）。月崎遺跡では原石の大量保有は確認されていないが、石鏃に使用された石材のうち、姫島産黒曜石は76.5％を占める（小南2016、中越2000）。これは、田ノ浦遺跡・岩田遺跡でそれぞれ石鏃の約1/3に姫島産黒曜石が用いられている状況と比較すると（小南2016）、月崎遺跡は姫島産黒曜石の比率が高くなっている。月崎遺跡の北東約15kmに所在する台ケ原遺跡でも、62点のうち姫島産黒曜石が大部分を占めるとされる（森田2000）。月崎遺跡では、石鏃より大型の剥片に安山岩が用いられる傾向は認められている（潮見1968:63頁）。田ノ浦遺跡・岩田遺跡と比べ、安山岩の産地から離れていることで姫島産黒曜石への依存度が高くなっていると考えられ、月崎遺跡からの活動範囲を示していると推定される。

5．まとめ

月崎遺跡では、前期から晩期までの土器が出土しているが、前期と後期を中心に居住痕跡が残されている。調査範囲中央部では、両時期の遺物が濃密に分布し、さらに東西の調査区にも遺構が分布している。本稿で報告した資料は、第1次調査における遺跡中央部の遺物包含層上層から出土した可能性が高いと考えられる。当資料館収蔵資料は月崎遺跡出土資料のごく一部であり、情報量は少ないが、出土資料が分散保管されている現状を考えると、月崎遺跡の再評価につながる契機となれば幸いである。層位的な発掘がおこなわれ、遺構も検出されていることから、月崎遺跡は山口県中央部における縄文研究に重要な情報を提供するものと考えられる。

月崎遺跡出土資料実見にあたっては、宇部市学びの森くすのきの石川健氏に大変お世話になりました。小南裕一氏からは有益なご教示をいただきました。末筆ではありますが、記して感謝申し上げます。

【註】

1）月崎遺跡出土資料は、当資料館のほか、広島大学考古学研究室、山口県立山口博物館、宇部市立学びの森くすのきなどに収蔵されている（中越2000）。

2）図71には、潮見（1968a）・中越（2000）掲載の図にしたがってトレンチ名を記載してあるが、第1次・第2次調査報告の記載（潮見

1968a:40-41頁）によるとトレンチ名が異なる可能性があり、一部修正を加えてある。本文中のみに記載のあるトレンチ名もある。

3）時代区分が縄文時代となっている遺跡のほか、時代区分が縄文時代となっていないが縄文土器が出土した遺跡の合計（2017年3月末現在）。これらの遺跡分布図をもとに、検索半径を5kmに設定し遺跡の分布密度を求めた。

【引用文献】

石井龍彦・安村隆博・児玉　勉　2007　『田ノ浦遺跡』山口県埋蔵文化財センター

小野忠熙　1961a　「美濃ヶ浜遺跡」『山口県文化財概要』第4集　山口県教育委員会　25-30頁

小野忠熙　1961b　「宮ノ原遺跡」『山口県文化財概要』第4集　山口県教育委員会　42-46頁

小野忠熙　1968　「第11章第6節2 東岐波前田発見の握斧」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会　193-194頁

川島尚宗　2015　「山口県の貝塚について」『第26回中四国縄文研究会高知大会　中四国の縄文貝塚　発表・集成資料』中四国縄文研究会高知大会事務局　21-26頁

川島尚宗　2016　「第Ⅱ章 潮待貝塚出土資料調査報告」『見島ジーコンボ古墳群 第124号墳 潮待貝塚 出土資料調査報告』山口大学埋蔵文化財資料館　29-47頁

河村吉行　2000　「前田遺跡」『山口県史 資料編 考古1』山口県　149頁

幸泉満夫　2005　「県立博物館収蔵の美濃ヶ浜遺跡資料Ⅰ」『山口県立山口博物館研究報告』第31号　71-81頁

小南裕一　2016　「西部瀬戸内における姫島産黒曜石の流通―主に後・晩期を中心として―」『山口考古』第36号　7-16頁

澤下孝信　2000　「美濃ヶ浜遺跡」『山口県史 資料編 考古1』山口県　135-136頁

潮見　浩　1968a　「第3章 月崎遺跡」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会　37-70頁

潮見　浩　1968b　「第11章第6節1 東岐波月崎岬発見の縄文式土器と石錘」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会　192-193頁

中越利夫　1985　「山口県月崎遺跡」『探訪 縄文の遺跡 西日本編』有斐閣　275-281頁

中越利夫　2000　「月崎遺跡」『山口県史 資料編 考古1』山口県　140-148頁

濱﨑真二　2003　『宮の原遺跡 山口県下関市彦島迫町五丁目地内 宮の原遺跡発掘調査（第2次）調査報告書』下関市教育委員会

東　哲志　2007　『打石遺跡 山口県下関市彦島迫町六丁目地内 打石遺跡発掘調査報告書』下関市教育委員会

冨士埜勇　1996　『岡山遺跡発掘調査概報』阿知須町教育委員会

冨士埜勇　1999　『砂郷遺跡発掘調査報告』阿知須町教育委員会

三浦　肇　1968　「第11章第2節 花園遺跡」『宇部の遺跡』宇部市教育委員会　184-185頁

森田孝一　2000　「台ヶ原遺跡」『山口県史 資料編 考古1』山口県　125頁

山田康弘　2002　「中国地方の縄文時代集落」『島根県考古学会誌』第19集　1-32頁

報告書抄録

ふりがな	やまぐちだいがくまいぞうぶんかざいしりょうかんねんぽう
書名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
副書名	－平成25年度－
巻次	
シリーズ名	山口大学埋蔵文化財資料館年報
シリーズ番号	11
編著者名	田畑直彦　横山成己　川島尚宗
編集機関	山口大学埋蔵文化財資料館
所在地	〒753-8511 山口県山口市吉田1677-1 TEL083-933-5035
発行年月日	西暦2018年（平成30年）3月30日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 51秒	131度 28分 14秒	20130805- 20131007	608㎡	獣医学国際教育研究センター 棟新営工事
吉田遺跡	山口県山口市 吉田1677-1	35203		34度 08分 52秒	131度 27分 56秒	20131010- 20131227	692㎡	第1武道場耐震改修その他 工事
白石遺跡	山口県山口市 白石一丁目9－1	35203		34度 10分 38秒	131度 28分 17秒	20130603- 20130618	235.8㎡	教育学部附属山口中学校 武道場新営工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
吉田遺跡	集落跡	縄文～古代	河川・落ち込み	縄文土器・須恵器	
吉田遺跡	集落跡	弥生～古墳	河川・溝・土壙状遺構	縄文土器・弥生土器 須恵器・土師器・石器	竹製網代 編み製品
白石遺跡	集落跡	中世	谷	弥生土器・土師器 須恵器・瓦質土器	

山口大学埋蔵文化財資料館年報
－平成25年度－

平成30年3月30日

編集　山口大学埋蔵文化財資料館
発行　山口大学
〒753－8511　山口市吉田1677－1
印刷　(有)三共印刷
〒759－0204　宇部市大字妻崎開作1953－8

YAMAGUCHI UNIVERSITY
ARCHAEOLOGICAL MUSEUM REPORT Vol.11

CONTENTS

Chapter Ⅰ Report of the Yamaguchi University Archaeological Museum activities ····· 1

Section 1 Exhibition activities ····· 1

Section 2 Social education activities ····· 6

Chapter Ⅱ The project on the Yamaguchi University campus in the 2013 fiscal year ····· 9

Section 1 General outline of the project on the Yamaguchi University campus in the 2013 fiscal year ····· 9

Section 2 Excavation on the Yoshida campus "Yoshida site" ····· 13

Section 3 Excavation on the Shiraishi campus "Shiraishi site" ····· 77

Section 4 Excavation on the Hikari campus "Mitarai site and Tsukimachiyama site" ····· 104

Appendix 1 The gist of researches and studies at Yamaguchi University in the 2013 fiscal year ··· 111

Appendix 2 List of researches in Yamaguchi University campus ····· 114

Appendix 1 Wood identification research of wickerworks and other plant remains found at the Yoshida site ····· 138

Appendix 2 A wooden tablet with ink writing, "Senjimon" , found at the Yoshida site ····· 143

Appendix 3 Report of excavated remains at the Tsukizaki site, Ube, Japan ····· 150

Published by

Yamaguchi University Archaeological Museum

Yamaguchi, 2018